博多 30

— 博多遺跡群第60次発掘調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集

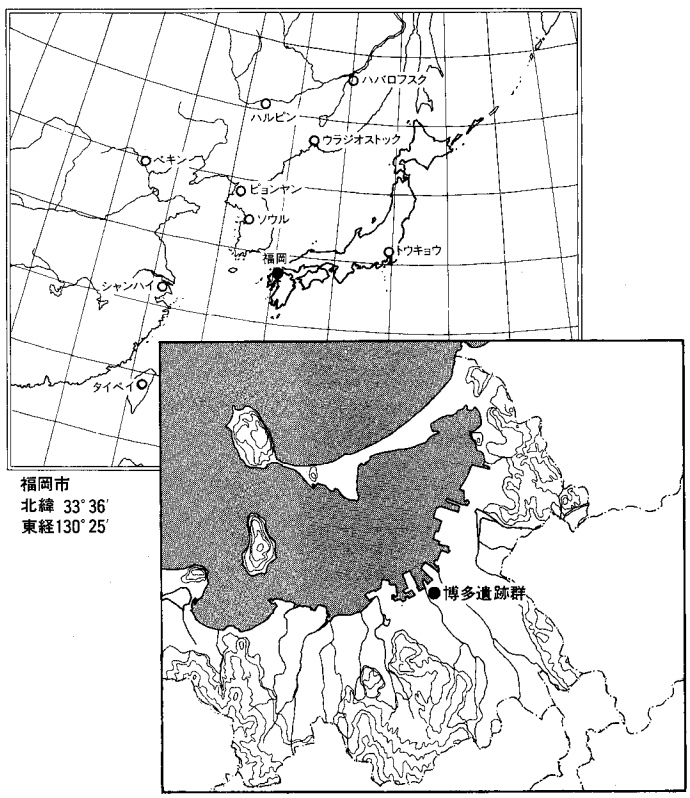
1992

福岡市教育委員会

博多 30

— 博多遺跡群第60次発掘調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集



福岡市
北緯 33°36′
東経130°25′

調査記号HKT-60

調査番号 8959

1992

福 岡 市 教 育 委 員 会

(1)　焼土層A

(2)　16世紀の陶磁器群

(3) タイ産陶磁器

(4) 伊万里色絵・綿絵磁器

序

昭和52年の地下鉄開業に伴います調査以来、博多遺跡群の調査も今年で15年目をむかえ、その件数も90件を越えております。これも一重に市民の皆様方の御協力の賜物と感謝しております。

これまでの調査では、弥生時代以来の博多の発展の様子を教えてくれます貴重な発見が相次ぎ、その歴史解明に大きく貢献しているところであります。とくに中世博多は、我が国のみならず東アジア世界の中でとても大きな役割を果たしています。これは、博多遺跡群から出土しますおびただしい量の貿易陶磁器が示しています。また、当時の人々の生活ぶりを示す生の遺物や遺構は、文献史学の立場だけでは解明できない新たな事実を教えてくれるだけでなく、当時の技術や生活の知恵に対する私たちの驚きと感動を呼び起こしてくれております。

さて、今回の調査では、室町時代から近世初期にかけての蔵や町家の跡が発見され、それとともにタイやベトナムをはじめとする東南アジアの陶磁器や李朝の陶磁器などが豊富に出土しました。また、博多商人の活躍を示す分銅の発見など、これまであまり注目されてこなかった戦国時代から近世初期にかけての博多の様子を物語る貴重な発見がありました。この時代は博多の豪商神屋宗湛らの活躍した博多の黄金の日々と呼べる時代でもあります。

本書が市民の皆様の地域の文化財に対する御理解を深めるとともに、学術研究の分野で活用されることを望みます。最後になりましたが、今回調査にあたり御協力いただいた朝日生命ならびに竹中工務店、調査から整理にいたるまで御指導・御協力いただいた指導委員の諸先生や関係各位の皆様に感謝申し上げます。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会
教育長　井　口　雄　哉

例　　言

1．本書は、事務所用ビル建設に先立ち、福岡市教育委員会が実施した、博多遺跡群の第60次調査（福岡市博多区綱場町115 外）の報告書である。

2．本書の編集・執筆は、小畑弘己が行った。一部他の協力者の報告・記述部分がある。

3．本書に使用した遺構実測図は、小畑・川上洋一・中村啓太郎・榎本義嗣・仁田坂聡・木島みどり・大和優子・木下節子・高橋二郎・田中善郎・長友洋典が、遺物実測図は、小畑・撫養久美子・上塘貴代子・吉田雅子・白井和子・原千帆・仁田坂が作成した。また、製図には、小畑・撫養・上塘・吉田・中村元子があたった。

4．本書に使用した遺構写真は、小畑が撮影した。遺物写真は小畑・二宮忠司が撮影した。

5．遺物の整理にあたっては、岩田重雄・宮本佐知子（分銅）、森本朝子・小野正敏・亀井明徳・續伸一郎・佐久間貴士・尾崎直人・アンディーマスキ（陶磁器）、佐伯弘次（歴史文献）、櫻木晋一（銅銭）、山崎一雄（化学分析）、本田光子（金属処理）、大庭康時（刀）の各氏から有益なご助言をいただいた。なお、山崎一雄、本田光子、大庭康時の三氏にはそれぞれの報告・説明をいただいたので掲載させていただいた。

6．本書で用いた遺構番号は調査時に用いた通し番号（略号M）を用いている。

7．本書に用いた方位は、実測図・本文ともに真北を用いている。なお、その座標基準は福岡市道路台帳「福岡110－24」（1986．1．43測量）を用い、それから換算した。その偏差はN－47°12′－Wである。

8．本調査報告書に関するすべての記録類・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

遺跡調査番号	8959		遺跡略号	ＨＫＴ－60	
調査地地番	福岡市博多区綱場町115		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,233.40㎡	調査対象面積	1,233.40㎡	調査実施面積	730㎡
調査期間	1990年11月24日～1991年５月２日				

本　文　目　次

第一章　調査に至る経緯と調査経過…… 1

1．発掘調査に至るまで…… 1

2．発掘調査の組織と構成…… 1

3．遺跡の立地と歴史的環境…… 3

第二章　発掘調査の記録…… 5

1．発掘調査の経過と調査法…… 5

2．調査地点の基本層序…… 7

3．各遺構検出面の概要…… 9

(1)　第　Ⅰ　面…… 9

(2)　第　Ⅱ　面…… 10

(3)　第　Ⅲ　面…… 10

(4)　第　Ⅳ　面…… 11

(5)　第　Ⅴ　面…… 12

4．検出遺構と出土遺物…… 13

(1)　1期の遺構と遺物…… 13

(2)　2期の遺構と遺物…… 23

(3)　3期の遺構と遺物…… 36

(4)　4期の遺構と遺物…… 65

(5)　5期の遺構と遺物…… 74

(6)　6期の遺構と遺物…… 82

(7)　7・8期の遺構と遺物…… 89

(8)　9・10・11期の遺構と遺物…… 95

(9)　包含層・その他の遺構出土陶磁器…… 98

(10)　瓦……112

(11)　銅　　銭……115

(12)　金属製品……117

(13)　鍛造・鋳造関係遺物……121

(14)　石　製　品……122

(15)　土　製　品……131

(16)　角製品・ガラス製品・布・木製品……133

(17) 自然遺物……134
第三章 分析報告……135
福岡市博多区綱場町博多遺跡群第60次調査出土の彩色土器破片の花文
・材質・産地などについて……135
博多遺跡群第60次調査出土の金属器の保存処理……137
第四章 まとめ……140
(1) 東南アジア産の陶磁器について……140
(2) 焼土層について……141
(3) 石積土壙・石基礎について……143
(4) 息浜の町割とその変遷……143

表目次

表1 出土銅銭数一覧……116
表2 蛍光X線分析の結果……139

挿　図　目　次

Fig. 1　博多遺跡群と調査区位置図（1/9,000）…… 2
Fig. 2　調査区周辺とグリッド位置図（1/1,000）…… 6
Fig. 3　東壁写真(1)…… 8
Fig. 4　東壁写真(2)…… 8
Fig. 5　東壁写真(3)…… 8
Fig. 6　東壁土層断面図（1/200）……折り込み
Fig. 7　土層堆積状況模式図（1/200）……折り込み
Fig. 8　各遺構検出面実測図（1/250）……折り込み
Fig. 9　Ⅰ区Ⅰ面遺構検出状況写真（南から）…… 9
Fig. 10　Ⅱ区Ⅰ面遺構検出状況写真（東から）…… 9
Fig. 11　Ⅰ区Ⅱ面遺構検出状況写真（南から）…… 10
Fig. 12　Ⅱ区Ⅱ面遺構検出状況写真（東から）…… 10
Fig. 13　Ⅰ区Ⅲ面遺構検出状況写真（南から）…… 11
Fig. 14　Ⅱ区Ⅲ面遺構検出状況写真（東から）…… 11
Fig. 15　Ⅰ区Ⅳ面遺構検出状況写真（南から）…… 12
Fig. 16　Ⅰ区Ⅴ面遺構検出状況写真（南から）…… 12
Fig. 17　Ⅱ区Ⅴ面遺構検出状況写真（東から）…… 12
Fig. 18　130号溝・1号石積土壙・9号石組遺構実測図（1/40）…… 14
Fig. 19　1号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 15
Fig. 20　6・11・18・43・59号土壙・13号遺構実測図（1/40）…… 16
Fig. 21　6・11・14・43・59号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 17
Fig. 22　27号土壙出土青花実測図（1/4）…… 18
Fig. 23　2号土壙出土陶磁器実測図（1/4・1/6）…… 19
Fig. 24　13号遺構出土陶磁器実測図（1/4）…… 20
Fig. 25　36号井戸実測図（1/50）…… 21
Fig. 26　7・16・36・67号井戸出土陶磁器実測図（1/4）…… 22
Fig. 27　17号溝・60号石積土壙・103号石組遺構・50・104・109号土壙実測図（1/40）…… 24
Fig. 28　17号溝出土陶磁器実測図（1/4）…… 25
Fig. 29　60号石積土壙・103号石組遺構出土陶磁器実測図（1/4）…… 26
Fig. 30　3・19・28石積土壙・24号土壙実測図（1/40）…… 28

Fig. 31　3号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 29
Fig. 32　3号石積土壙出土擂鉢実測図（1/4）…… 30
Fig. 33　19号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 31
Fig. 34　28号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 32
Fig. 35　24・50・69・104号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 34
Fig. 36　108号井戸出土陶磁器実測図（1/4）…… 35
Fig. 37　355・360号石基礎実測図（1/60）…… 37
Fig. 38　111号溝・83・141号石組遺構・79・114号石積土壙実測図（1/40）…… 38
Fig. 39　72・73・102・380号石積土壙実測図（1/40）…… 40
Fig. 40　71・73・75・79号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 41
Fig. 41　75・81・93・101号石積土壙実測図（1/40）…… 43
Fig. 42　71・133・350・390号石積土壙実測図（1/40）…… 45
Fig. 43　81・93・101・350・380・390号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 46
Fig. 44　23・26・31・33・35号土壙実測図（1/40）…… 47
Fig. 45　54・88・100・117・118号土壙実測図（1/40）…… 49
Fig. 46　23・26・29・31・33・35・54号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 50
Fig. 47　54号土壙出土白磁碗実測図（1/4）…… 51
Fig. 48　66号土壙出土備前壺実測図（1/4）…… 51
Fig. 49　63・66・84・88・100・110・115号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 52
Fig. 50　116・117号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 54
Fig. 51　116・118・123・128・145号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 56
Fig. 52　84・145・156・157号土壙・368号墓実測図（1/40）…… 57
Fig. 53　156・340・366・373号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 58
Fig. 54　368号墓副葬品実測図（1/2・1/4）…… 59
Fig. 55　52・205号井戸実測図（1/50）…… 61
Fig. 56　52号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 62
Fig. 57　119号井戸出土陶磁器実測図（1/4）…… 63
Fig. 58　119・138・205号井戸出土陶磁器実測図（1/4）…… 64
Fig. 59　175・176号石積土壙実測図（1/40）…… 66
Fig. 60　122・176・365・370号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 68
Fig. 61　365・370号石積土壙実測図（1/40）…… 69
Fig. 62　122号石積土壙・152号方形竪穴実測図（1/40）…… 70
Fig. 63　55・139・152・203・223・280・281号土壙・177号石基礎出土陶磁器実測図（1/4）…… 71

Fig. 64　139・281号井戸実測図（1/50）…… 72
Fig. 65　136号石基礎実測図（1/60）…… 75
Fig. 66　285号溝・150・383号土壙・134号石積土壙・406号遺構実測図（1/40・1/100）… 76
Fig. 67　384号土壙・285号溝・134号石積土壙・136号石基礎出土陶磁器実測図（1/4）… 77
Fig. 68　269・271・321・410号木室実測図（1/40）…… 79
Fig. 69　271号木室出土陶磁器実測図（1/4）…… 80
Fig. 70　383号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 81
Fig. 71　430号石基礎・300号土壙実測図（1/60・1/40）…… 82
Fig. 72　137・178・180・385号土壙実測図（1/40）…… 84
Fig. 73　137・149・178・198号土壙出土陶磁器実測図（1/4）…… 85
Fig. 74　258・309・385・431号土壙・282号井戸出土陶磁器実測図（1/4）…… 87
Fig. 75　282・530号井戸実測図（1/50）…… 88
Fig. 76　187・200・256・257・289・301・529号土壙実測図（1/40）…… 90
Fig. 77　277・428・432号土壙実測図（1/40）…… 91
Fig. 78　302・304・532・533号井戸実測図（1/50）…… 93
Fig. 79　434号ピット・184・520号土壙・215・531・532・533号井戸出土陶磁器実測図（1/4）… 94
Fig. 80　160・169・186・188・267・313号土壙・493号ピット・265・315号墓実測図（1/40・1/20）… 96
Fig. 81　313号土壙・493・498号ピット・265・315号墓出土陶磁器実測図（1/4）…… 97
Fig. 82　国産陶器・天目・青花実測図（1/4）…… 99
Fig. 83　青花実測図（1/4）……101
Fig. 84　青花・白磁・赤絵実測図（1/4）……102
Fig. 85　李朝白磁・陶器・緑褐釉陶器実測図（1/4）……104
Fig. 86　李朝緑褐釉陶器・備前焼実測図（1/4）……105
Fig. 87　備前焼・瓦質土器実測図（1/4）……106
Fig. 88　タイ・ベトナム陶磁器実測図（1/4）……109
Fig. 89　タイ・華南陶器壺実測図（1/4）……110
Fig. 90　墨書土器・その他の陶磁器実測図（1/4）……111
Fig. 91　瓦実測図・拓影 (1)（1/4）……113
Fig. 92　瓦実測図・拓影 (2)（1/4）……114
Fig. 93　銅銭拓影（1/4）……115
Fig. 94　金属製品実測図 (1)（1/2）……118
Fig. 95　金属製品実測図 (2)（1/2）……119
Fig. 96　鋳造関係遺物時期別出土数グラフ……121

Fig. 97　茶臼実測図（1/4）……123
Fig. 98　挽臼実測図 (1)（1/4）……124
Fig. 99　挽臼実測図 (2)（1/4）……125
Fig. 100　石製容器実測図（1/4）……126
Fig. 101　硯実測図（1/3）……127
Fig. 102　砥石実測図（1/3）……128
Fig. 103　石錘・その他の石製品実測図（1/3）……129
Fig. 104　墓石・板碑実測図（1/4）……130
Fig. 105　土錘実測図（1/3）……132
Fig. 106　土錘計測グラフ……133
Fig. 107　骨製品実測図（1/2）……133

図　版　目　次

巻頭図版１ (1) 焼土層Ａ
(2) 16世紀の陶磁器群
巻頭図版２ (3) タイ産陶磁器
(4) 伊万里色絵・錦絵磁器
図版　1　1 Ⅰ区Ⅰ面全景（北から）
2 13号遺構（東から）
3 12号遺構（南から）
4 9号石組遺構（東から）
5 1号石積土壙（北から）
図版　2　6 5号石積土壙（北から）
7 2・43号土壙（東から）
8 6号土壙（西から）
9 18号集石土壙（北から）
10 15号井戸（北西から）
11 16号井戸（南西から）
12 7号井戸（西から）
13 36号井戸（北から）
図版　3　14 Ⅰ区Ⅱ面全景（南から）
15 Ⅰ面全景南半分（南から）
図版　4　16 17号溝（南から）
17 60号石積土壙（南から）
18 3号石積土壙（南から）
19 19号石積土壙（東から）
20 28号石積土壙（西から）
21 103号石組遺構（西から）
22 24号土壙（北から）
23 104号土壙（西から）
図版　5　24 355・360号石基礎（北から）
25 355号石基礎土層断面（北東から）
26 71号石積土壙（東から）
27 72号石積土壙（西から）
28 73号石積土壙（南から）
29 79号石積土壙（北から）
30 75・81号石積土壙（東から）
31 28・75・81号石積土壙（西から）
図版　6　32 75・81号石積土壙（北から）
33 83号石組遺構（北から）
34 93号石積土壙（北から）
35 101号石積土壙（西から）
36 102号石積土壙（南から）
37 114号石積土壙（南から）
38 133号石積土壙（南から）
39 141号石組遺構（北東から）
図版　7　40 350号石積土壙（東から）
41 380・390号石積土壙（西から）
42 390号石積土壙（南から）
43 23号土壙（西から）
44 33号土壙（南から）
45 26号土壙（西から）
46 35号土壙（北西から）
47 84号土壙（南東から）
図版　8　48 121号土壙鮑貝出土状況（北から）
49 115号土壙（西から）
50 117・118号土壙（北から）
51 145号土壙（南から）
52 156・157号土壙（南東から）
53 364・366号土壙・367号石組遺構（北西から）
54 368号墓青花・白磁皿出土状況

（北から）
55 368号墓鉄斧・分銅出土状況（北から）
図版 9 56 368号墓（西から）
57 52号井戸（東から）
58 119号井戸（西から）
59 205号井戸（北から）
60 175・176号石積土壙・177号土壙（南から）
図版 10 61 175号石積土壙（東から）
62 365号石積土壙（南から）
63 370号石積土壙（北から）
64 152号方形竪穴（西から）
65 223号土壙（西から）
66 139号井戸（西から）
67 140号井戸（西から）
68 281号井戸（北から）
図版 11 69 136号石基礎（西から）
70 136号石基礎断面（北から）
71 134号石積土壙（南から）
72 285号溝（北から）
73 285号溝礎石・柱痕検出状況b・c（北から）
74 285号溝礎石・柱痕検出状況d（北から）
75 269号木室（南から）
76 271号木室（南から）
図版 12 77 321号木室（西から）
78 410号木室（西から）
79 150号土壙（東から）
80 383号土壙（北から）
81 406号土師皿集中（南西から）
82 430号石基礎（南から）
83 430号石基礎断面（北から）
84 137号土壙（北から）
図版 13 85 180・226号土壙（東南から）
86 180号土壙（東から）
87 270号土壙（南から）
88 300号土壙（東から）
89 300号土壙懸仏出土状況（北東から）
90 282号井戸（北から）
91 530号井戸（南から）
92 187号土壙（南東から）
図版 14 93 184号土壙（北から）
94 428号土壙（東から）
95 432号土壙（南から）
96 529号土壙（北から）
97 302号井戸（北東から）
98 304号井戸（北東から）
99 532号井戸（西から）
100 533号井戸（北から）
図版 15 101 160号土壙（東から）
102 169号土壙（南から）
103 186号土壙（東から）
104 313号土壙（南から）
105 493号ピット（北西から）
106 265号墓（東から）
107 315号墓（北から）
108 井戸と井戸掘り職人達（東から）
図版 16 109 伊万里青磁
110 肥前系陶器甕
111 伊万里色絵油壺
112 伊万里色絵皿
113 伊万里色絵皿

114 唐津皿
115 唐津皿
116 唐津皿
117 古高取皿
118 古高取碗
119 絵唐津香炉
120 唐津碗
121 唐津碗
122 絵唐津碗
123 絵唐津片口
124 焼塩壺
125 唐津徳利
126 刷毛目唐津大皿
127 焼塩壺
128 唐津擂鉢
129 産地不明陶器壺
図版 17 130 青花碗
131 青花碗
132 青花碗
133 青花高坏
134 青花碗
135 青花碗
136 青花碗
137 青花皿
138 青花皿
139 青花皿
140 青花皿
141 青花皿
142 青花皿
143 青花皿
144 青磁碗
145 青磁碗
146 青磁碗
147 白磁皿
148 白磁皿
149 白磁坏
150 白磁坏
151 白磁皿
152 白磁皿
153 青磁皿
154 青磁皿
図版 18 155 古高取・志野陶片
156 絵唐津陶片
157 伊万里色絵・錦絵碗・皿・人形
158 青花皿E群
159 青花皿B群
160 青花皿C群
161 青花碗
162 同裏面
図版 19 163 青花皿
164 同裏面
165 青花碗B群
166 同裏面
167 青花碗C群
168 青花碗D群
169 青花碗E群
170 同裏面
図版 20 171 青花皿B群
172 青花皿C群
173 青花皿E群
174 青花芙蓉手兜碗
175 青花瓶・水注・坏・合子
176 華南系青花
177 赤絵碗・皿
178 線彫白磁碗
図版 21 179 青磁皿

	180	白磁皿
	181	灰白磁皿
	182	李朝白磁碗
	183	李朝白磁碗・皿
	184	李朝陶器碗・皿
	185	高麗青磁・李朝粉青沙器
	186	李朝緑褐釉陶器徳利・壺
図版 22	187	李朝白磁碗
	188	李朝白磁碗
	189	李朝白磁皿
	190	李朝白磁皿
	191	李朝白磁皿
	192	李朝陶器壺
	193	李朝白磁碗
	194	李朝白磁碗
	195	李朝陶器碗
	196	李朝刷毛目碗
	197	李朝刷毛目碗
	198	李朝陶器碗
	199	李朝刷毛目皿
	200	李朝印花皿
	201	李朝緑褐釉陶器片口
	202	李朝緑褐釉陶器徳利
	203	美濃天目茶碗
	204	美濃天目茶碗
図版 23	205	李朝緑褐釉陶器壺・甕
	206	李朝緑褐釉陶器鉢
	207	タイ焼締陶器壺（破片）
	208	タイ焼締陶器壺（復元後）
	209	ベトナム陶磁器
	210	タイ陶器
	211	タイ陶器壺
	212	華南三彩・ソーダ釉皿
図版 24	213	華南系陶器壺
	214	天目茶碗
	215	瀬戸・美濃陶器
	216	備前擂鉢
	217	備前鉢・蓋
	218	備前徳利・壺
	219	瓦質蓋・茶釜
	220	瓦質火鉢
図版 25	221	美濃皿
	222	美濃皿
	223	美濃皿
	224	白磁多角坏
	225	白磁皿
	226	美濃皿
	227	口禿白磁碗
	228	褐釉小壺
	229	白磁碗
	230	土師器碗
	231	三耳壺
	232	瓦質甕
	233	備前壺
	234	瓦質香炉
	235	瓦質香炉
	236	瓦質火鉢
	237	土　鍋
	238	備前擂鉢
	239	備前擂鉢
	240	備前擂鉢
	241	備前擂鉢
図版 26	242	瓦質火鉢
	243	瓦質風炉・香炉
	244	368号墓副葬品
	245	銅製品

246　陶磁製人形
247　土　錘
248　鬼　瓦
249　焼け落ちた壁土
図版　27　250　墨書白磁坏
251　墨書白磁皿
252　墨書白磁皿
253　墨書白磁皿
254　墨書白磁坏
255　墨書白磁皿
256　墨書白磁碗
257　墨書白磁碗
258　墨書皿
259　墨書陶器
260　墨書白磁碗
261　墨書白磁碗
262　墨書白磁碗
263　墨書陶器
264　墨書皿
265　墨書皿
266　鉛　棒
267　分銅「五匁」
268　分銅「壱両」
269　分銅「参両」
270　分銅「肆両」
271　短　刀
272　火　箸
図版　28　273　挽臼上
274　挽臼上
275　挽臼上
276　茶臼下
277　茶臼下
278　茶臼下
279　石製容器
280　備前焼薬研
281　懸　仏
282　ガラス玉
283　滑石製香炉
284　骨製品
図版　29　285　硯
286　砥　石
287　石　鍋
288　石　碑
289　滑石製品
290　石　錘
291　毬杖球
292　焼け焦げた米
図版　30　293　坩　堝
294　鞴羽口
295　麻布片
296　刃物傷のある骨・角
297　魚・獣骨
298　イルカの骨（180号土壙出土）
299　16世紀代の各種容器

第一章　調査に至る経緯と調査経過

1．発掘調査に至るまで

1989年１月30日、朝日生命保険相互会社は、福岡市博多区綱場町115他において、事務所およびテナント用ビルの建設予定のため、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、当該地の埋蔵文化財の有無の照会を行った。この結果、該地は博多遺跡群（福岡市埋蔵文化財分布地図　天神49）に入り、隣接地や周辺でも数回の調査が実施されていることから、埋蔵文化財課では、建設にあたって事前の発掘調査が必要な旨を答申した。とくに隣接地の博多第42次調査地点（1988年12月16日～1989年６月１日調査）では、10世紀中頃から近世にかけての町家の遺構が検出され、息の浜地域において良好な遺構が存在することが初めて実証されており、本地点でも多くの成果が期待された。このため、朝日生命保険相互会社および施工業者である株式会社竹中工務店と協議のうえ、1990年11月より開発面積1,233㎡のほぼ全域の発掘調査を行う運びとなった。

発掘調査は、竹中工務店による調査地の養生・現地表面下約1.3～1.5ｍまで攪乱層および表土の除去の後、同年11月24日から翌1991年５月２日までの128日間実施され、多大な成果を収めて、無事終了した。なお、隣接地（博多42次調査地点）において、駐車場ビルが建設中で、その工事用事務所（後に調査事務所として使用）が調査予定地内に設置されていること、この部分が前の建物の基礎で破壊が著しいなどの理由で、実際の調査面積は730㎡におちている。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	朝日生命保険相互会社		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎（前任）
調査総括	文化部埋蔵文化財課	課　長	柳田純孝（前任）
		第一係長	柳沢一男（前任）
調査担当		第一係	小畑弘己（前任）
事務担当		第一係	松延好文（前任）

調査作業　青木佐智子、有満紀子、石松晋、出雲義住、伊藤由紀子、今田歩、上野龍夫、上野ミヤ子、内山和子、榎本義嗣、麻植康太郎、大津圭祐、大村芳雄、小笠原浦太、奥田弘子、海雲賢司、金子元、金子信男、亀井聡子、川上すぎえ、川上洋一、木島みどり、木下節子、久良木シズエ、黒木美代子、権田かず子、坂本利彦、崎山潔、佐々木幸子、佐藤摂子、下村徳郎、菅野シゲ、柴田秀明、高石ヤス子、高田茂、高橋二郎、高浜栄一、橘友克、田中善郎、田中展史、田中ひろみ、舎川キチエ、仲田忠孝、長友洋典、中村啓太郎、中道秀雄、西村和子、西野悦

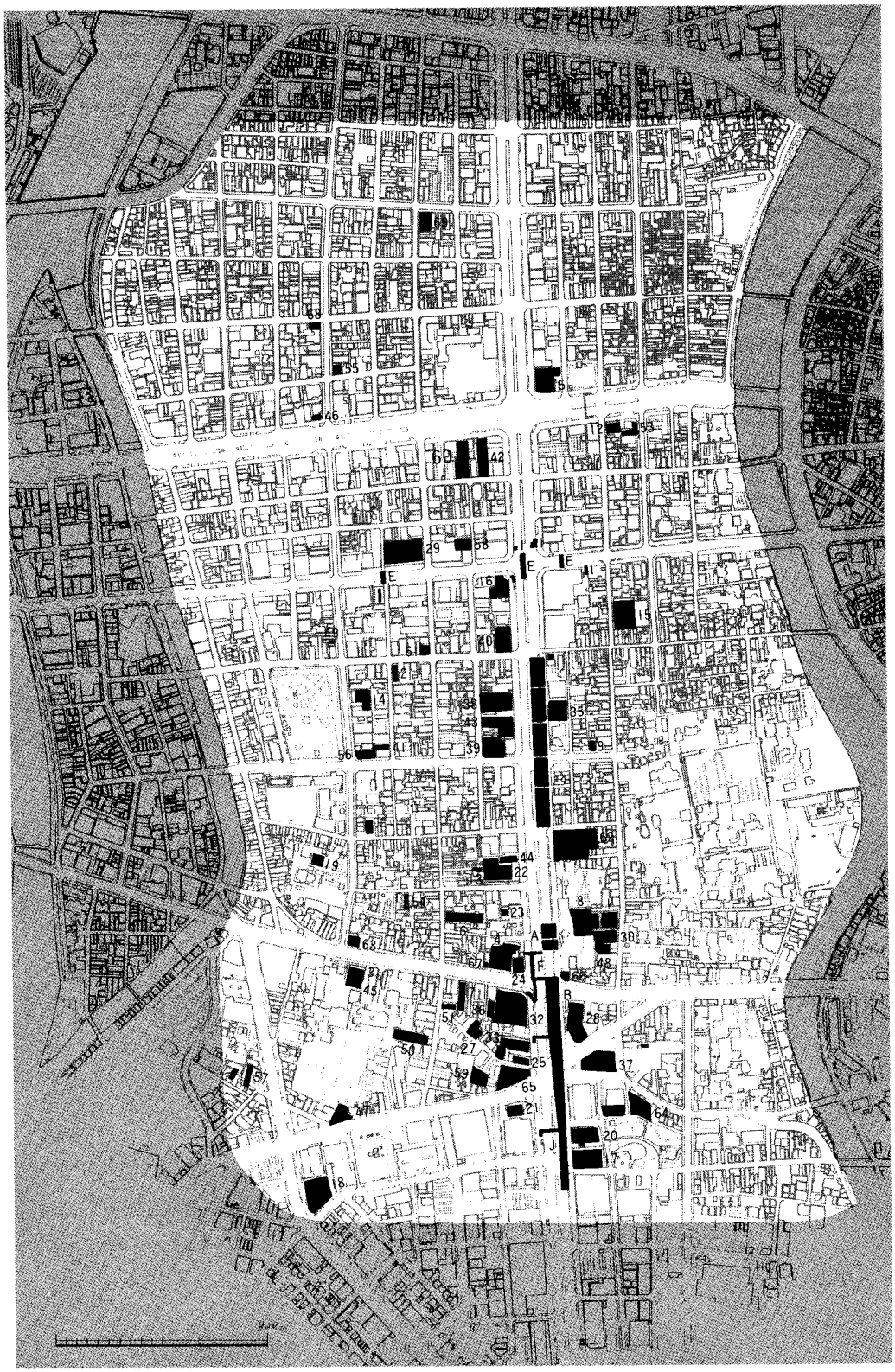


Fig. 1　博多遺跡群と調査区位置図（1/9,000）

子、仁田坂聡、浜田寿朗、浜地京子、浜地富男、原英子、深川昌弥、福澤山次郎、船越恒人、松井良子、松隈清治、松永武士、三浦力、水原美地、光安利津江、宮崎康彦、宮崎ヨシ子、村上エミカ、村上エミ子、村田トモヨ、山口亮、山下智子、大和優子、山部増人、米倉久子、脇坂レイコ

整理作業　井上真由美、今井民代、今任奏子、大西佐智子、上塘貴代子、河野明美、栗崎弘美、佐野八州枝、白井和子、多田律子、仲上文子、中原尚美、中村元子、長橋厚子、原千帆、原田真知子、松尾詩穂子、松永友紀子、森友昭子、吉田雅子

整理協力　阿部国江、石津満寿美、石松悦子、甲斐田嘉子、木村絹子、木村良子、桑野正子、佐々木涼子、藤信子、萩尾朱美、濱田登志枝、宮坂環、森千賀子

なお、調査期間中には、佐伯弘次（福岡大学）、中橋孝博（九州大学）の各氏から調査にあったってご指導をいただいた。また、発掘調査に関する種々の条件整備、便宜については、朝日生命、竹中工務店にお世話をいただいた。この他、事務所の使用および、写真撮影時のビルの使用などに際して隣接地の大石ゴム株式会社、株式会社辻組にご協力をいただいた。あわせて御礼を申し上げます。なお、報告書の作成にあたっては、大庭康時、二宮忠司、松村道博（福岡市教育委員会）の各氏から多大な御協力を得た。

3．遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は地理的にみると、博多湾に面した砂丘列の上に立地している。西を博多川、東を石堂川に、南は那珂川に流れ込む旧比恵川に挟まれ、地形的にも独立した一角を成していた。この砂丘列は縄文海進以後に形成されたもので、３つの列からなり、内陸部からⅠ～Ⅲと称されている。本調査地点のある砂丘Ⅲは、「息浜」と呼ばれ、その南側に展開する砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」と呼ばれる。今回の調査地点は、この息浜と博多浜との境をなす旧湾部にかけて傾斜する南斜面上に位置する。

博多は、古来より対外交渉の門戸として発展してきた町であるが、その中心は海岸線の後退（砂丘の発達）や人工的な干拓によって、博多浜から次第に息浜へ移ったことが、これまでの発掘調査によって判明している。博多遺跡群における人々の生活の痕跡は、弥生時代の中期ないしは前期の後半まで遡ることができる。弥生時代中期中頃からは、竪穴住居址や甕棺墓などが営まれており、古墳時代前期には住居や方形周溝墓が作られた。古墳時代中期には70m級の前方後円墳さえ築造されている。しかし、これらの時期の遺構の広がりは、博多浜に限られ、息浜では認められていない。古代の遺構に関しても同じで、溝や建物跡、井戸などの構造物は、息浜では発見されていない。息浜において最も古い遺構は、11世紀になってからで、それも掘立柱建物の柱穴くらいのもので、井戸や溝などの遺構が出現するのは、12世紀も後半になってからである。

この息浜の浜が文献上に登場するのは、13世紀の「蒙古襲来絵詞」であるが、15世紀の後半に

なるとこの地は博多全体の戸数１万戸の六割を占める都市が成立していたという。これは発掘調査から得られた息浜の遺構の変遷ともよく一致している。

1333年の鎮西探題襲撃はまさに博多浜を焼きつくす大惨事となったようで、博多浜では発掘調査によって14世紀の初めに廃絶された溝やこの時期の焼土層が発見されている。この年大友貞宗が、この乱の鎮圧の恩賞として建武政権から息浜を与えられている。この時点から大友氏の息浜支配が始まるが、この息浜が本格的に発展するのは、九州探題の支配を経て、1429年大友氏が再びこの息の浜の支配権を認められて以降のことである。大友氏はこの息浜を舞台に朝鮮との貿易を積極的に繰り広げ、莫大な利益を得た。しかし、この頃の博多の入港公事に関する権利は依然として大内氏がもっていた。16世紀の初頭になると、その権利は大友氏に移っている。このように筑前守護代の大内氏とは、この利権をめぐって度々対立した。1532年、大内氏と大友氏は戦火を交え、大内氏が息浜を奪っている。これは、室町時代の息浜が勘合貿易によってかなりの利潤を産み出す地域であったためで、戦国時代になると諸大名の争奪の的となった。1551年の大内氏滅亡後、博多の二元支配は終焉を迎え、大友氏は宗麟の時代になると博多支配を一層強化した。当時の博多は商人たちによる自治都市が形成され、繁栄を極めたと伝えられる。しかし、度重なる戦火の末、戦国時代末の1586年立花城を責めあぐねた島津氏は、博多の町を焼き払ってしまったのである。

この博多の町が復興するのは、翌年豊臣秀吉による九州制圧の後、博多商人神屋宗湛、島井宗室らの手によって新しい町割りが作られてからである。近世都市博多はここに登場する。このように中世後期の博多の政治史は息浜を巡る利権争いのドラマといっても過言ではない。

今回の調査地点は、この息浜のほぼ南西部にあたる。標高は5.5mで、息浜の最高位から南へ傾斜する部分に相当する。この一帯は秀吉の太閤町割が実施された範囲の中央付近にあたり、現在は綱場町に入るが、江戸の絵図によれば中間町もしくは市小路町のいずれかに入る。周辺には、神屋宗湛の屋敷跡と推定されている豊国神社や菅原道真が筑前上陸の第一歩を記したと伝えられる綱輪天神がある。

第二章　発掘調査の記録

1．　発掘調査の経過と調査法

発掘調査は表土掘削終了後の平成元年11月24日に事務所の引越しを終え、翌日より開始した。排土搬出の関係から、北側Ⅰ区（約530㎡）と南側Ⅱ区（約200㎡）に分け、最初にⅠ区から実施した。隣接地（博多第42次）の調査結果から、遺構・遺物の埋蔵される面が6面存在することが予想されたが、時間的制約から上部のⅠ面をカットして、地表下1.3～1.5mのところから調査を開始した。よって隣接地の第Ⅰ面は本調査区には存在しない。

調査は、古代から続く都市遺跡の性格とはいいながら、数多くの重複する遺構や深い大型の井戸などの遺構に難渋させられた。とくにⅠ面からⅢ面にかけて多数検出した石積土壙や石基礎は、その記録に多くの時間と労力を費やす結果となり、調査の進行に支障を来たす原因となった。そのしわ寄せは調査の終盤に来て、調査面積を縮小したり、生活面の駄目押しを割愛せざるを得なかった。

しかし、このような石材による構築物は、土壙などの遺構に比べて構築面や構造が把握しやすいという利点をもっており、その切り合いや埋蔵物などの関係からその構築の時期や順序を推定するのに好条件を具えている。またⅡ区を中心に検出された焼土との係わりから構築と廃絶の関係が捉えられたことは、今回の調査の大きな収穫のひとつであった。

以下、調査の経過状況は以下のとおりである。

1990年11月25日～12月23日	Ⅰ区第Ⅰ面調査
12月24日～1991年２月20日	Ⅰ区第Ⅱ面調査
1991年２月21日～３月15日	Ⅰ区第Ⅲ面調査
３月16日～３月26日	Ⅰ区第Ⅳ面調査
３月27日～４月７日	Ⅰ区第Ⅴ面調査
４月８日～４月30日	Ⅱ区（第Ⅰ～Ⅴ面）調査

調査は４月30日をもって無事終了し、５月１・２日に事務所の撤収を行った。

調査は、機械力による表土の除去後、人力による掘削を行った。また、次の面への掘り下げには、時間的制約から機械力を使用した。

グリッドは３m×３mを一区画とし、調査区の長軸に合わせて設定した。呼称は、北東－南西軸をA～F、北西－南東軸を１～18に分け、その組み合わせで呼称している（Fig. ２）。なお、座標の長軸は、真北との角度がN－47°12′－Eであるが、調査時は北西方向を北、南東方向を南、北東方向を東、南西方向を西と仮称した。このため、写真の撮影方向の記録には、この調査時の呼称を使用している。本文・図版中で使用する方位はこの仮称によるものである。

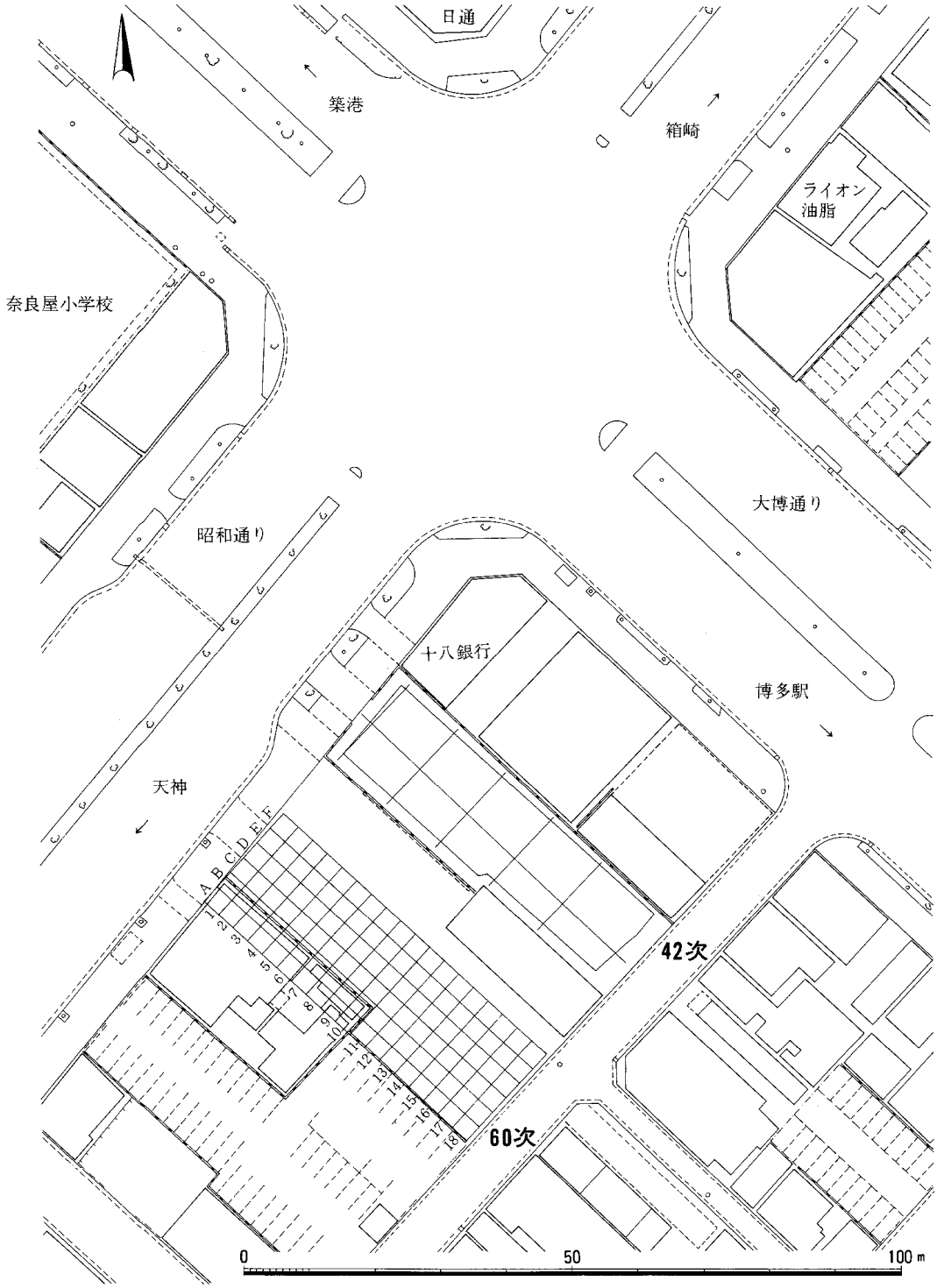


Fig. 2　調査区周辺とグリッド位置図（1/1,000）

2．調査地点の基本層序

博多遺跡群は前章で述べたとおり、砂丘上に営まれている。このため、遺跡の基盤層は、黄色の風成の砂層であり、この上に各時代の人工層が堆積している。その厚さはこの調査地点で約2.1mである。調査地点は砂丘列の南斜面にあたり、北西から南東方向に傾斜している。その差は調査区の両端で、1m近くもある。しかし、この傾斜は土層の上部にいくに従い少なくなる。これは、生活面として盛土や削平などの整地が行われた結果で、現代の客土の下ではその傾斜は現代の傾斜と均しくなる。

調査区の南東面の土層をもとに、基本層序について述べる。なお、調査区の北と南では上部層の欠落など、若干堆積状況が異なるので堆積状況が安定している南部分（F-12～18区）の土層を基本にして述べたい。この部分は砂丘が内湾に向かって急激に傾斜しはじめるところにあたり、埋立がかなり施されている。このため層は細かく細分されるが、その成因によってひとまとめにした。それを模式化したのがFig．7である。

1層　現代の客土（厚さ1.2m）

2層　焼土A層（厚さ10cm）。北側では削平されて、存在しない。

3層　焼土塊（壁土）を含む層。調査区全体に拡がる。土壌化の進んだ層（厚さ50cm）。

4層　焼土B層（厚さ8cm）。D～F－12～18区に存在する。

5層　粘土と砂の互層（整地層）（厚さ25cm）。

6層　焼土C層（厚さ35cm）。最も厚い焼土層で、E・F－14～18区にかけて拡がる。

7層　粘土と砂の互層（整地層）（厚さ60cm）。

8層　黒色砂層（厚さ45cm）。

9層　茶褐色砂層（厚さ30cm）。

10層　黄色砂層。

焼土層は遺構面を覆って均等に分布するのでなく、南にいくに従い厚く堆積している。石積土壙や井戸などもこの焼土によって埋められており、南にあった浅い谷状の斜面を埋めるために掻き集められ、整地されたものと考えられる。

42次調査の土層と比較すると、1層がB層、10層がC層に対応する。なお、最上部のA（第2次世界大戦の空襲による焼土層）とD層以下の層は本調査地点では確認していない。この42地点のB層とC層の間には、標高4.5～3.5mの間に二ないし三枚の焼土が堆積しており、本調査地点の焼土A～C層に対応される可能性がある。

遺構検出面との関係は、Ⅰ面がほぼ2層（焼土A）上面、Ⅱ面が3層上面、Ⅲ面が4層（焼土B）下面、Ⅳ面が7層中、Ⅴ面が10層上面となる。なお、調査区の北半分では土層が少なく、これとは対応しない。Ⅳ面で10層上面に至る。

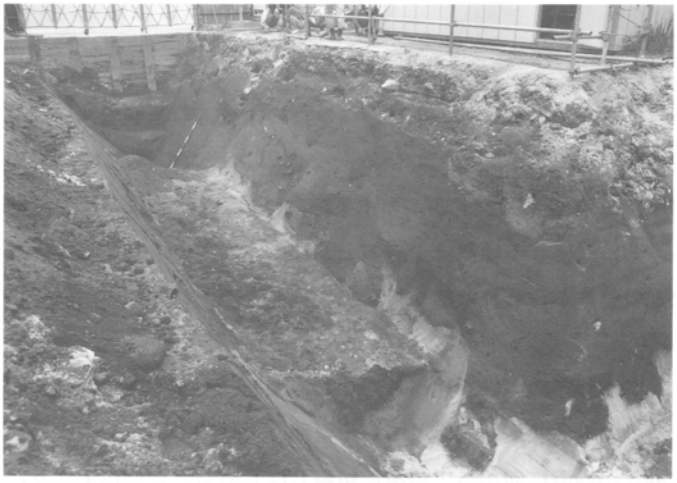
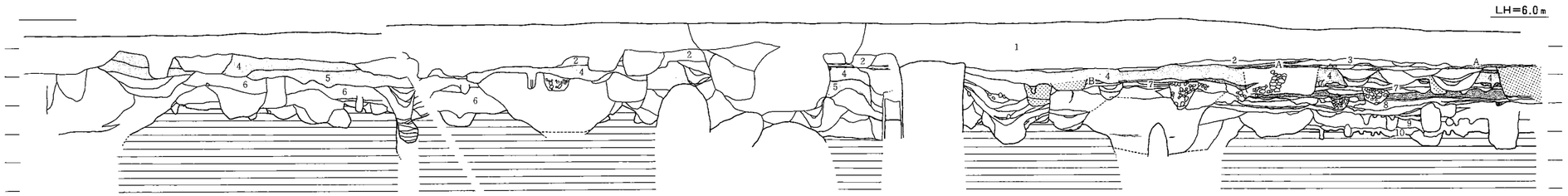


Fig. 3　東　壁　写　真 (1)

Fig. 4　東　壁　写　真 (2)

Fig. 5　東　壁　写　真 (3)



1. 客　　土
2. 明茶褐色土
3. 茶褐色土
4. 明茶褐色土(焼土塊多く含む)
5. 暗茶褐色土(焼土塊含む)
6. 茶褐色土(わずかに焼土塊を含む)
7. 黒色土・黄灰色砂・白灰色粘土の互層
8. 黒褐色土・炭層・黄灰色粘土の互層
9. 黒色砂層
10. 茶褐色砂層

Fig. 6　東壁土層断面図（1/200）

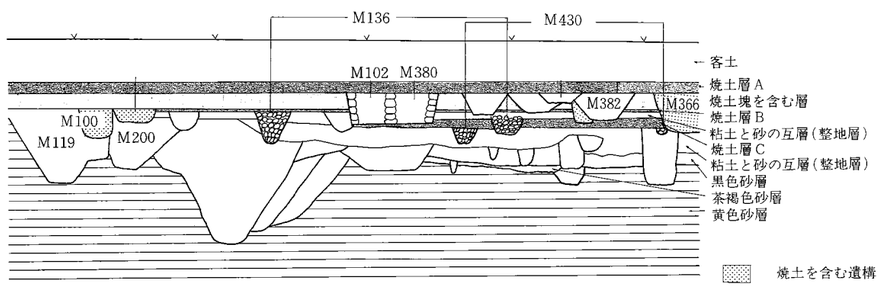


Fig. 7　土層堆積状況模式図（1/200）

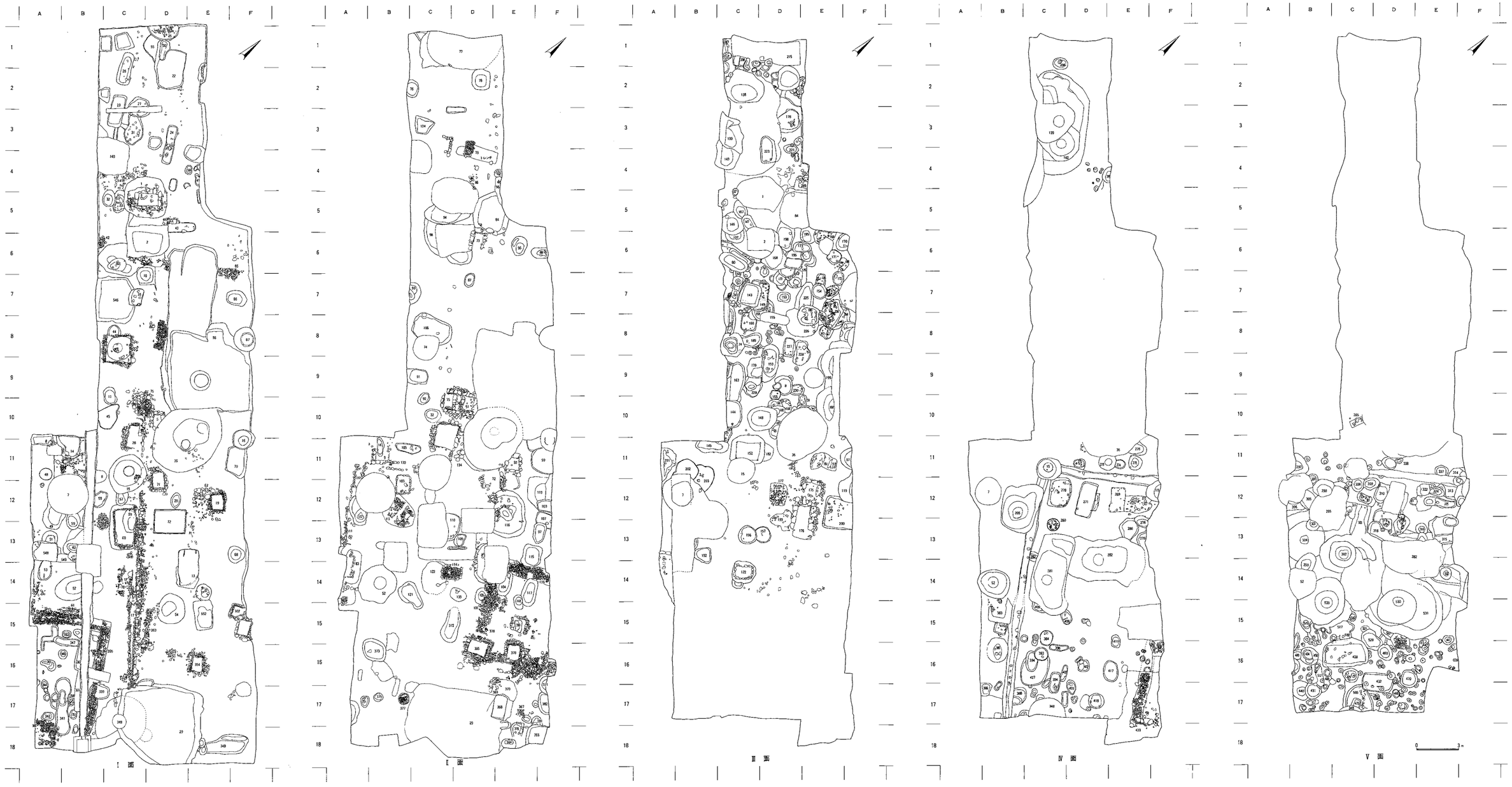


Fig. 8 各遺構検出面実測図(1/250)

3．各遺構検出面の概要

(1) 第 Ⅰ 面

第Ⅰ面目は地表下約1.5m程の高さで、標高約3.8～3.6mにあたる。この面で、厚さ5㎝ほどの焼土層（A）を確認した。この層は調査区南東部に広がっている。北半分ではすでに3層面に達している。

この層を切り込むように、江戸時代以降の廃棄物処理土壙や石積土壙、壁と床に漆喰を塗り固めた方形の土壙、溝（下水施設）、井戸（コンクリート、愛宕石、瓦製）などが検出されている。江戸期以前のものとしては、石積土壙、土壙、溝、石基礎（集石）、井戸などの遺構がある。とくに石積土壙は数が多く、その規模や形態にもさまざまなものがる。溝は調査区南半分の中程に設けられている17号の石組のものがあり、60号石積土壙とつながるもので、排水施設と考えられる。石基礎や石積土壙などにも方向の異なるものが存在し、時期の異なることを窺わせている。調査区の北半分で真っ赤に焼けた壁土や焼土を含む土壙（26・23・33など）が検出された。このような土壙（以後、焼土壙と称する）は、調査区の南側では、Ⅱ面になって検出されており、3層下部もしく焼土B面から掘り込まれている。

近代から近世にかけても、かなりの時期幅がありそうであるが、18世紀代の土壙が多い。焼土層や焼土を含む土壙からは16世紀後半代の明の染付（青花）や赤絵が出土しており、島津氏の博多の焼き打ち（1586年）に相当する戦火によるものと推定される。

これにより、第Ⅰ面目はおよそ16世紀後半から19世紀代の時期の遺構を含むが、面としては、16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

Fig. 9　Ⅰ区Ⅰ面遺構検出状況写真（南から）

Fig. 10　Ⅱ区Ⅰ面遺構検出状況写真（東から）

(2) 第 Ⅱ 面

第Ⅱ面は、第Ⅰ面より30cmほど下の面で、南部分で3層上面にあたる。標高3.2～3.1mである。調査区の北半部では16世紀前半の面として捉えられるが、南側は第Ⅰ面目で検出した焼土を除去した段階で、16世紀後半の遺構を中心としている。一部近世の遺構も残存している。

遺構としては、第Ⅰ面とほぼ同じで、石積土壙、焼土壙、廃棄物焼却穴、井戸、溝などがある。調査区の南半では、方形の石基礎（136）と石積土壙（365・370・390）が焼土の下から検出されている。これらは、下の焼土Cを切り込んで構築されたものである。溝には、現在の町割よりやや東に振れる石組の溝（111）があり、石桝状の石積土壙（83）をともなっている。特異なものとしては粉砕した軽石（？）を充塡した隅丸長方形の土壙（84）がある。壁や底面がかなりの高い熱をうけて変色しており、鍛治に関する施設と考えられる。

調査区南端で検出した墓（368）は、16世紀中頃の明の青花・白磁Ⅲとともに分銅・銅製飾り金具・鉄製手斧を副葬していた。

よってⅡ面の時期は、16世紀代の前半を中心としている。この16世紀（戦国時代）になると遺構の主軸方向が近世（現代の町割と同じ）に比べて15～20度ほど東に振れている。このⅡ面からⅠ面へかけての遺構の主軸方向の変化は、太閤町割り（1857年）によって戦災を蒙った町が再編成される様子を示している。町割りの変遷を知るうえで興味深い。

Fig. 11　Ⅰ区Ⅱ面遺構検出状況写真（南から）

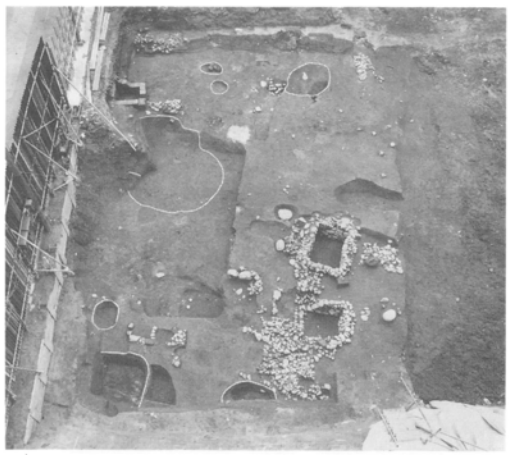


Fig. 12　Ⅱ区Ⅱ面遺構検出状況写真（東から）

(3) 第 Ⅲ 面

調査区の北半分（1～10区）はすでに10層の黄色砂層上面に達している。この地点では16世紀代の深い土壙や井戸の掘り残しが残存しているが、13世紀後半から15世紀代を中心とした廃棄物

の処理用の土壙が多数検出された。古いところでは、11世紀代の遺構も存在する。この北半分を中心に鉄滓や土師皿を多量に投棄した土壙には、多量の刃物の切り傷のあるイルカ（歯クジラ）の骨が混じっていた。

調査区の南半分では、16世紀前半の方形竪穴遺構（152）や土壙（148）、石積土壙（122・175・176）などがある。調査区の南半分は、E・F－16～18区において4層（焼土B）を除去した段階で遺構を検出した部分を残して、より下まで一気に下げている。このためA～D－15～18区にかけては、この面に相当する遺構が存在しない。すでにⅣ面に達している。

よって、このⅢ面の標高はおよそ、3.0～2.8mで、生活面としては13～16世紀と幅をもたせざるを得ない。

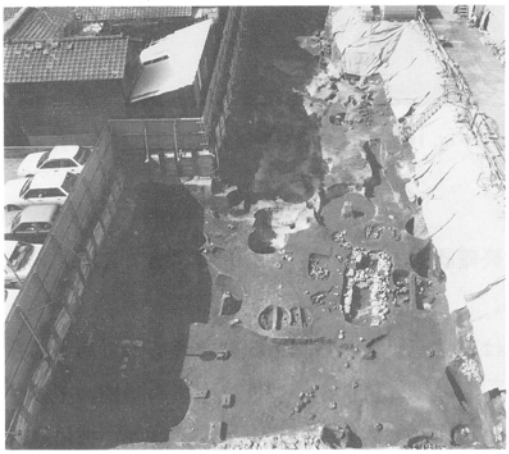


Fig. 13　Ⅰ区Ⅲ面遺構検出状況写真（南から）

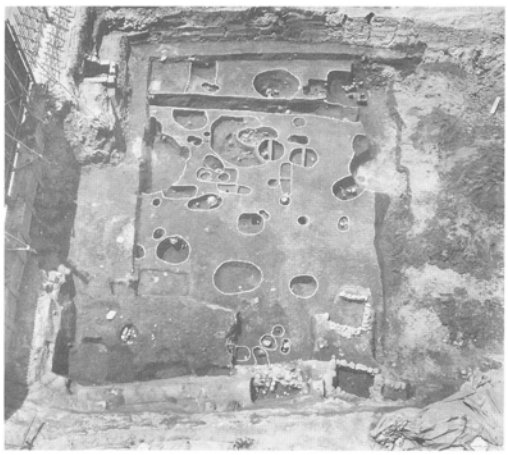


Fig. 14　Ⅱ区Ⅲ面遺構検出状況写真（東から）

(4) 第 Ⅳ 面

7層中で確認した生活面で、調査区の南半分（11～18）にしか存在しない。標高2.6～2.2mである。

東南隅のE・F－16～18区は、6層（焼土C）を除去した面でとどめ、430号石基礎を検出した。11～14区においてはすでに9層などの砂の面が露出していた。Ⅰ区とⅡ区は検出レベルが異なり、上からの面数も異なるため、図上で合成した。このため遺構の接点に不自然な箇所がある。

主な遺構としては、町家の境を示す溝（285）を検出している。この溝は、内部に礫を礎石にして、その上に木を立てた痕跡があり、土塀などの地下事業の可能性がある。その内側には板でまわりを囲った長方形の木室（269・271）などがある。南半には土壙・柱穴などが多数検出されて

いる。16世紀前半の井戸なども残るが、ほぼ15世紀後半の生活面に近い。同じ面にはこの時期以前の遺構も多数存在する。

Fig. 15　Ⅰ区Ⅳ面遺構検出状況写真（南から）

Fig. 16　Ⅰ区Ⅴ面遺構検出状況写真（南から）

(5) 第　Ⅴ　面

基盤の黄色砂層10層上面で検出したもので、最終確認面である。標高2.0～1.4mである。調査区の南半分（11～18区）にのみ限られる。

15世紀前半の井戸や土壙があるが、遺構の主体は13世紀後半から14世紀初頭のものである。井戸はこの時期以前のものは確認できなかった。古いものでは11世紀～12世紀中頃の時期の土壙、柱穴、墓などがある。この一帯での最も古い時期の生活址であり、これより古い時期の遺構はない。土壙（300）の内より、銅製の懸仏が出土している。

Fig. 17　Ⅱ区Ⅴ面遺構検出状況写真（東から）

4．検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、547という膨大な数にのぼる。その内訳は溝５、井戸31、石基礎８、石積土壙25、木室４、土壙（焼土壙を含む）250、柱穴198、その他26である。これらの遺構の紹介にあたっては、前５者を中心に行い、その他については重要なものに限った。この遺構の紹介は、便宜的に時期ごとに分けて行う。時期分けは、青花や青磁などの中国製陶磁器の編年観に基づいておおまかに行い、これに備前や美濃などの国産陶器の編年や遺構の切り合い関係、接合や個体別資料の共有関係などによって、修正した。以下の11期に分けた。

１期…17世紀後半以降、２期…16世紀末～17世紀前半、３期…16世紀後半、４期…16世紀前半、５期…15世紀後半、６期…15世紀前半、７期…14世紀後半、８期…13世紀後半～14世紀初頭、９期…12世紀後半～13世紀前半、10期…11世紀後半～12世紀前半、11期…11世紀前半以前。

なお、この時期分けは、１期から７期についての博多における編年がまだ確定しておらず、おおまかな目安として使用する。また、遺構の切り合いは一時期に二回ある場合があり、生活面の改変はより細かいオーダーのものである。後の分析をまって検討を加えたい。

今回の調査では、パンコンテナで525箱の遺物が出土した。陶磁器、土器、各種の石製品、土製品、金属製品、ガラス製品、骨製品などの生活用具・武具・玩具、鉄滓・銅滓などの鋳造関係遺物、骨・貝、木炭などの自然遺物、瓦・釘や壁土などの建築材、布・漆器などの脆弱遺物など、その種類と性格には多様なものがある。しかも、11世紀から近世までの長期におよぶもので、そのすべてを網羅して紹介するには限界がある。このため遺物の図化は遺構の最も多い16世紀代を中心に行った。この節では時期を示す陶磁器のみを提示し、そのほかの遺物については、後の節でその材質や性格ごとにまとめて示すことにした。

なお、遺構の説明のみで出土遺物を図示していないものもある。重要なものは次節にまとめて示している。

(1)　１期の遺構と遺物

この時期は井戸と大きな土壙（ごみ穴）、地下室などが多い。時期的には長いもので、細別も可能である。およそ18世紀から19世紀にかけての遺構が多い。

130号溝（Fig. 18）

Ⅱ面のＢ・Ｃ－11区にある幅0.6m、長さ2.2mの東西にのびる溝である。方向はＮ－51°－Ｅである。20cmほどの礫を並べており、深さはこの礫の一段分しか残存していない。東は近代の瓦井戸に破壊されている。西端で石桝状の９号石積土壙と接しており、水溜めとその排水溝として機能していた可能性もある。

出土遺物には、唐津の鉄絵瓶、明の青花皿などの破片があり、17世紀代であろうか。

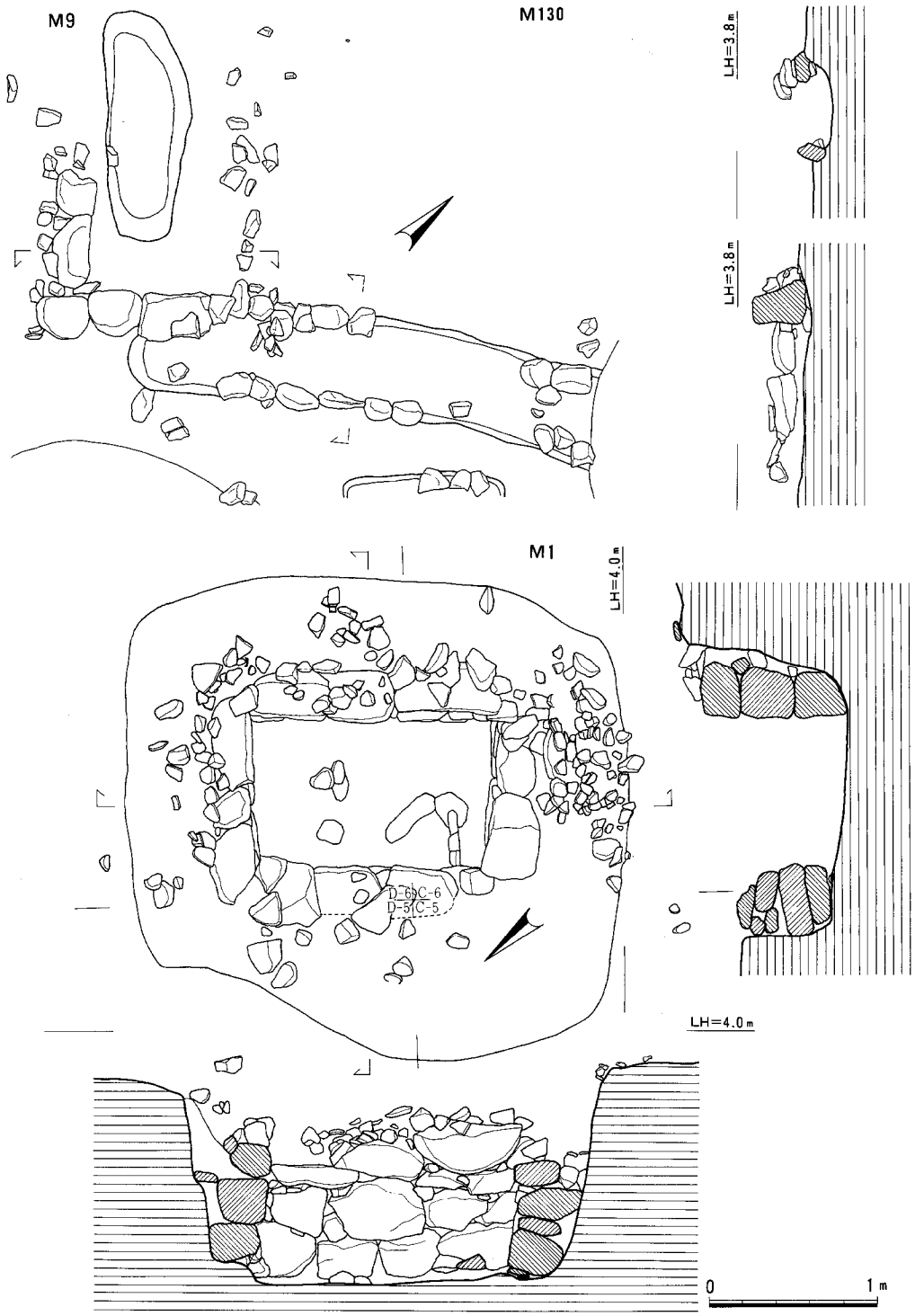


Fig. 18　130号溝・1号石積土壙・9号石組遺構実測図（1/40）

9号石組遺構（Fig. 18，図版１－４）

Ⅱ面のＢ－11区で検出した長さ1.3m、幅1.16mの方形の石桝状の遺構である、Ⅰ面の14号土壙とほぼ重なり、同一の遺構の可能性がある。南と西側の面は野面積み（一段しか残存していない）の大きな自然石が残るが、東面は小礫を並べただけである。北面は破壊されたのであろうか、残存していない。遺構の方向は調査区の座標軸にほぼ一致する。出土遺物には、肥前磁器、唐津、備前甕などがある。17世紀後半には埋められている。

1号石積土壙（Fig. 18，図版１－５）

Ⅰ面のＣ・Ｄ－４・５区で検出した石積土壙である。一抱えもある切り石を三段以上積み上げて、その上は瓦や小礫を積み上げている。現存部で長さ1.36m、幅0.88m、深さ1.32mである。掘り方の大きさは2.5×2.8mである。最下の石の下には幅10cm、厚さ３cmほどの木が敷かれており、石を積み上げる際の基準の木枠である可能性が高い。内部は灰や砂、練炭、陶磁器、瓦などが層を成して堆積しており、廃棄後はごみの処理穴として利用されている。基底付近には、木質と白砂混じりの橙色の粘土がわずかに残っていたが、これは、構造の一部でなく、後に廃棄されたか、上部の構造物が崩落したものであろう。床はそのまま砂の面で、石敷などは認められない。その深さと大きさから、地下の穴蔵として使用されたと考えられる。遺構の軸線の方向は調

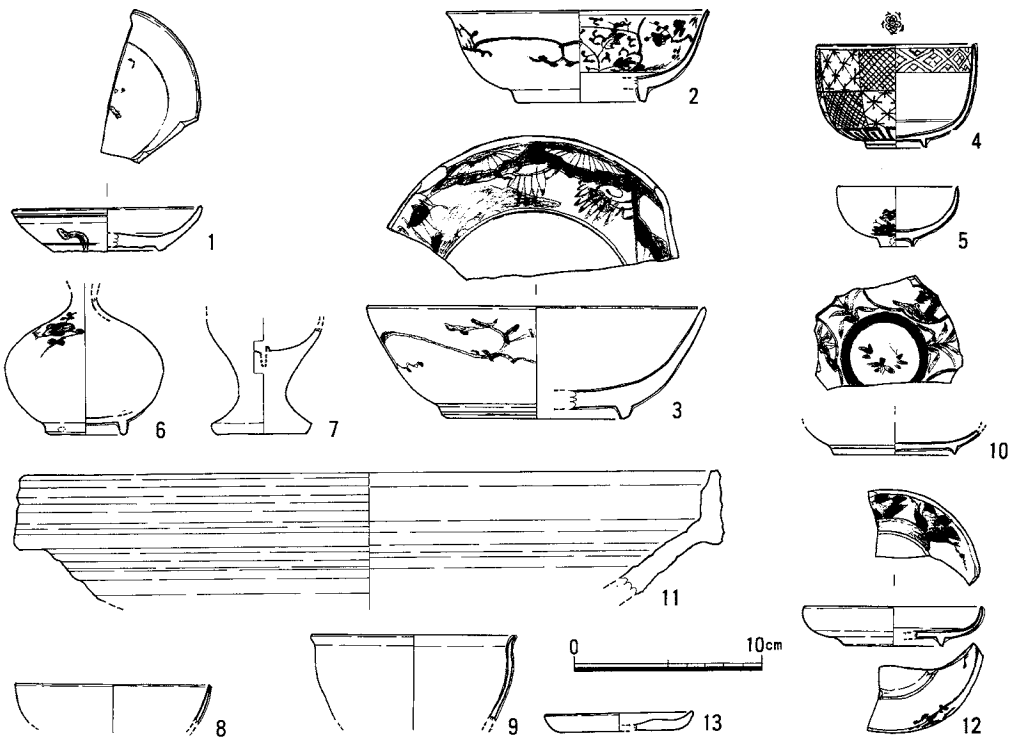


Fig. 19　1号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

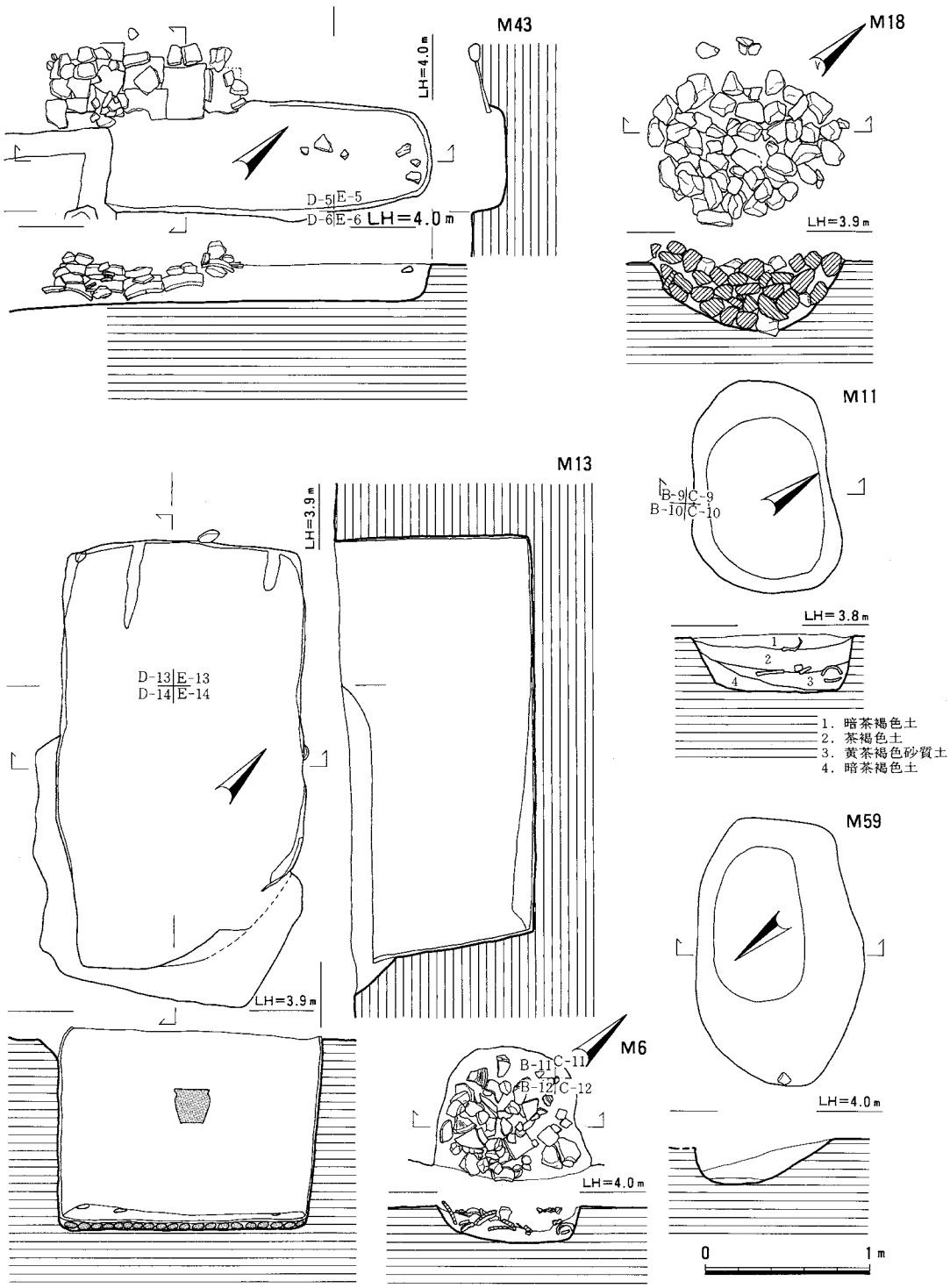


Fig. 20　6・11・18・43・59号土壙・13号遺構実測図（1/40）

査区の座標軸にほぼ一致している。

出土遺物（Fig. 19.1～13）　1は碁笥底の青花皿である。見込に寿の変化した模様を描く。2～6・8・10・12は伊万里の染付である。9は唐津系の陶器碗の破片である。11は備前焼の擂鉢である。V期に属する。13は土師皿である。遺物からみて、18世紀代の遺構であろう。

5号石積土壙（図版2－6）

I面のD－10区、81号石積土壙の南辺と28号石積土壙の北東角に接するように作られた長さ1.4m、幅0.98m、深さ0.5mの石積土壙である。36号井戸によって南東角を壊されている。北と西辺は三段の石積が残る。石は長いもので40cmはある。主軸は調査区の座標軸とほぼ一致する。石室内からは土師皿六枚と伊万里の碗が出土した。

43号土壙（Fig. 20，図版2－7）

I面のD・E－5区にある土壙で、北西隅に瓦と偏平な小礫を積み上げている。土壙の大きさはは、長さ1.96m、幅0.72m、深さ0.25mである。この瓦積みと浅い土壙が一連のものか否かは不明である。

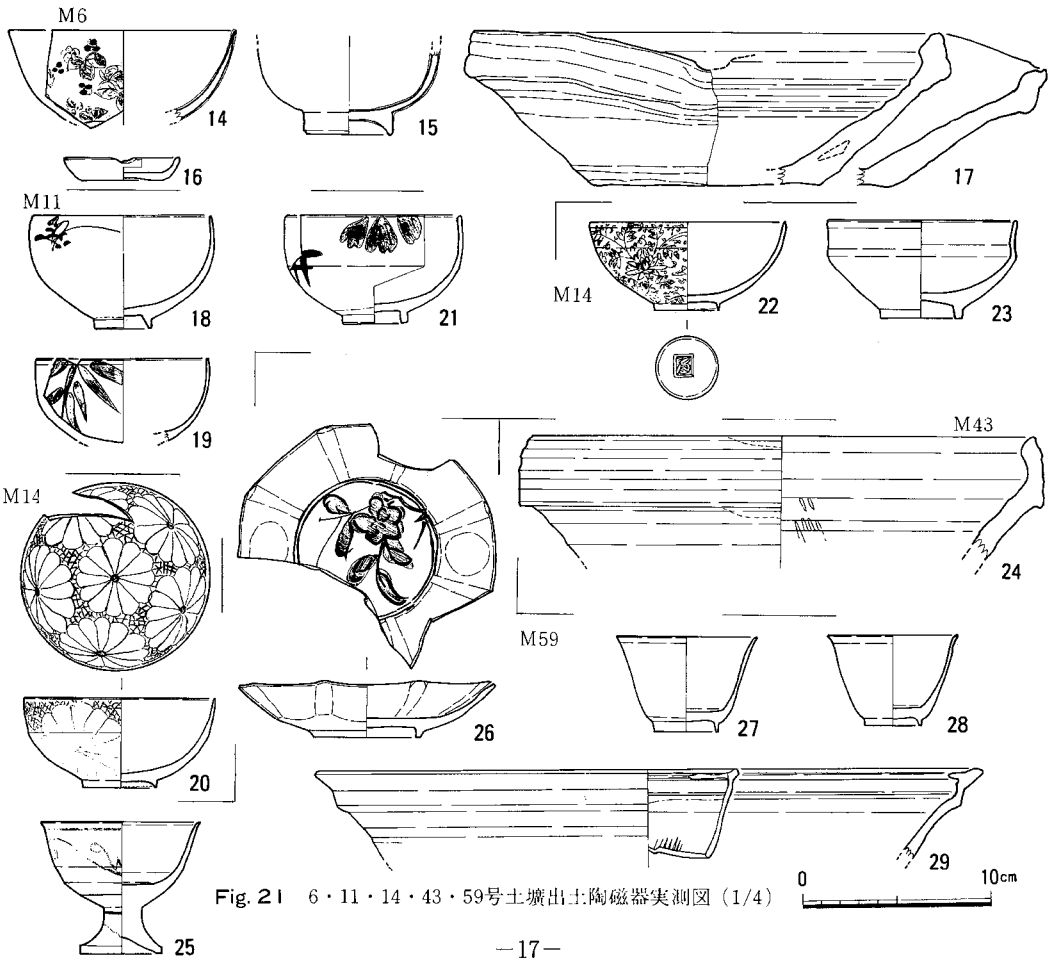


Fig. 21　6・11・14・43・59号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

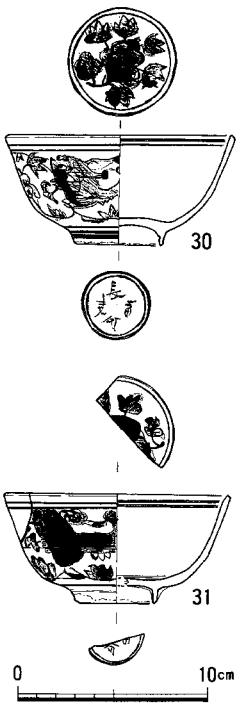


Fig. 22　27号土壙出土青花実測図(1/4)

出土遺物には土壙内から肥前磁器の染付碗の破片が出土しているが、瓦積からは青花の破片が出土している。Fig. 21. 24は瓦積内から出土した備前のⅤ期の擂鉢である。時期は18世紀頃であろう。

18号土壙（Fig. 20，図版２－９）

Ⅰ面のＢ・Ｃ－12・13区で検出した集石遺構である。長さ1.2m、幅1.12m、深さ0.52mの穴に拳大の礫を充塡している。建物の基礎の一部であろうか。

６号土壙（Fig. 20，図版２－８）

Ⅰ面のＢ・Ｃ－11・12区で検出した土壙である。長さ0.8m、幅0.92m、深さ0.2mである。西端を下水溝（547）に切られる。内部には小礫に混じって丸瓦や平瓦、陶磁器などが廃棄されていた。

出土遺物（Fig. 21. 14～17）　14・15は伊万里の染付磁器碗である。16は土師皿である。17は備前の擂鉢である。Ⅴ期のものであろう。この他銅製の板状の製品が出土している。これにより遺構の時期は18世紀頃と考えられる。

11号土壙（Fig. 20）

Ⅰ面のＣ－９・10区で検出した。長さ1.3m、幅1.02m、深さ0.26mのごみの焼却穴である。内部には木炭や貝殻などが層をなしていた。瓦、壁土などとともに陶磁器が廃棄されている。

出土遺物（Fig. 21. 18～20）　18は京焼風の肥前陶器の碗である。やわらかい白黄色の胎土をもち、台形の高台部まで施釉する。口縁部外面に呉須で樹枝文を描く。19・21は薄手の陶器の碗で、白黄色の胎土に透明の釉をかける。口部外面に赤と緑の釉で、笹の葉文を描いている。17世紀後半から18世紀前半頃と考えられる。

59号土壙（Fig. 20）

Ⅰ面のＣ－12・13区で検出した土壙で、長さ1.64m、幅1.02m、深さ0.26mを測る。60号石積土壙の上部に位置し、その形状からみて、石積土壙の窪みを埋めたレンズ状の堆積層の可能性がある。中からは肥前磁器の染付、京焼風の陶器などが出土している。

出土遺物（Fig. 21. 25～29）　25は染付の仏飯器である。二次的に火を受けている。26は輪花状の染付皿である。27・28は白磁の猪口である。29は擂鉢で、口縁部に鉄釉をかけている。17世紀後半から18世紀くらいの時期が考えられる。

27号土壙

Ⅰ面のＣ－２・３区で検出した白色の粘土を覆土にもつ土壙である。長さ1.4m、幅1.6m、深さ0.4mである。整地の際の埋め土であろうか。

出土遺物（Fig. 22. 30・31）　30・31ともに明の青花の碗である。30は外面に龍と唐草をあ

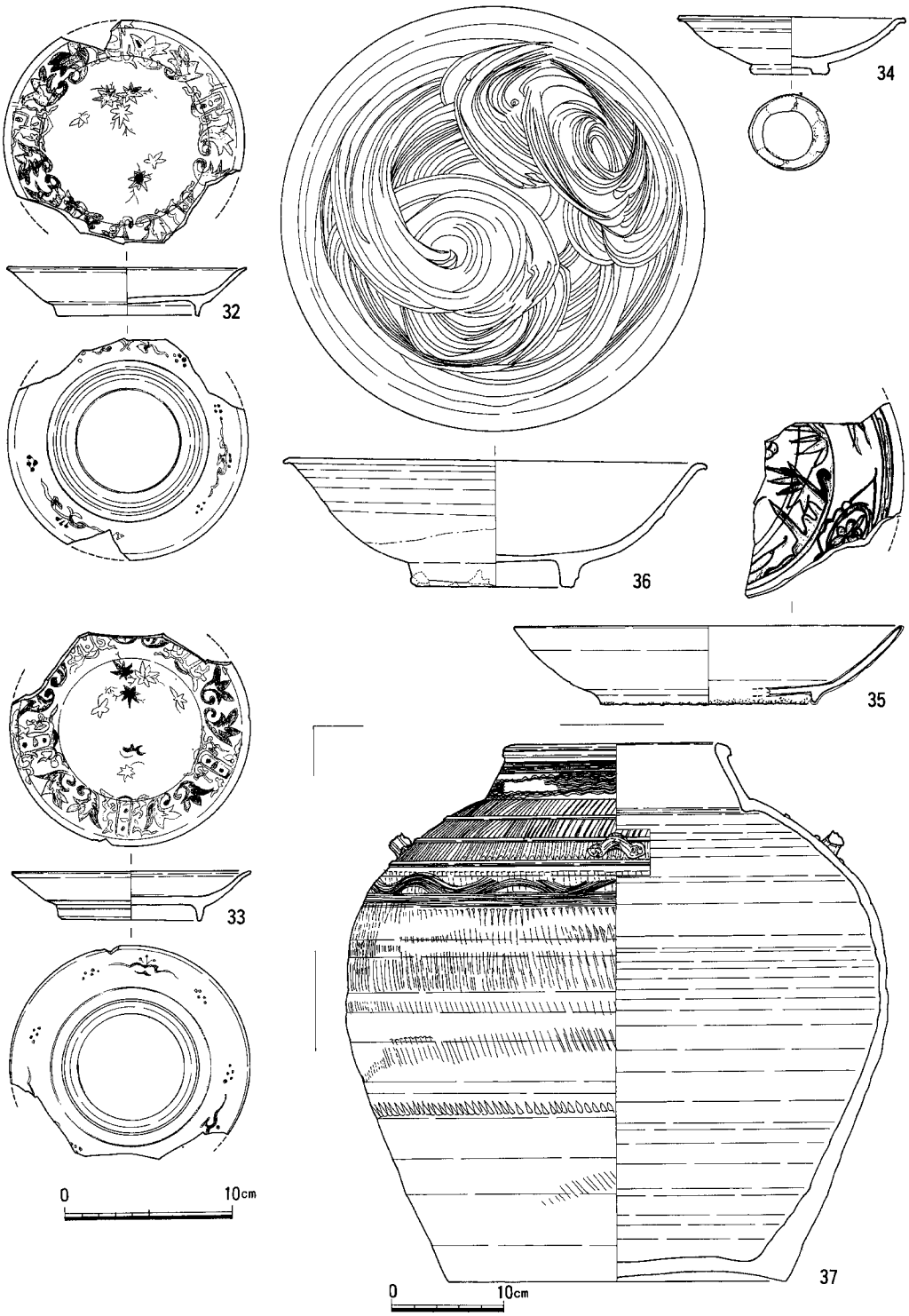


Fig. 23　2号土壙出土陶磁器実測図（1/4・1/6）

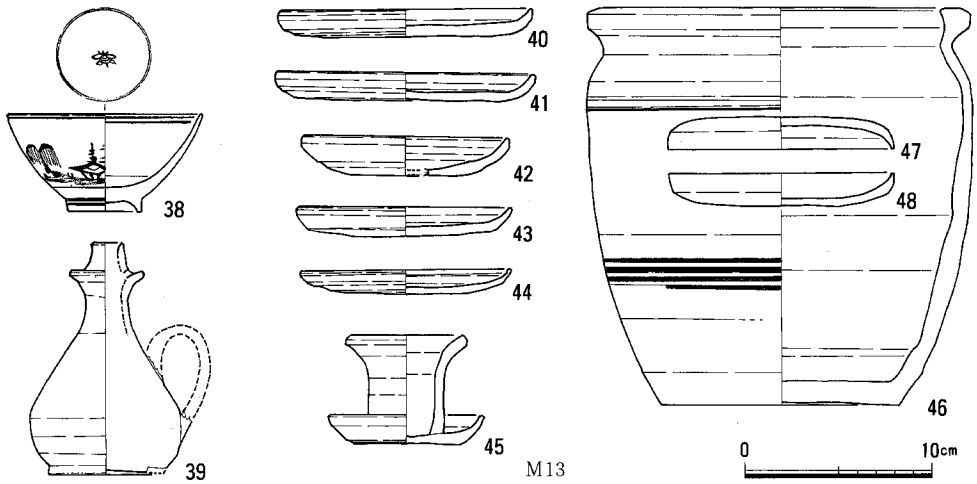


Fig. 24　13号遺構出土陶磁器実測図（1/4）

しらった文様を描く。31は同じく外面に唐草と龍を描く。見込は花文。外底に「長命冨貴」の銘がある。いずれも小野分類のＥ群に属する。肥前時期も出土しているが、詳しい時期は不明。

２号土壙（図版２－７）

Ｉ面のＣ・Ｄ－５・６で検出した長方形を呈する大型の廃棄物処理穴である。長さ3.0ｍ、幅2.2ｍ、深さ1.4ｍで、当初は地下蔵などであった可能性もある。覆土は炭や貝などを含む層が幾重にも堆積していた。

出土遺物（Fig. 23, 32～37）32・33は同じタイプの肥前磁器の色絵の皿である。黒で花の文様を描いた後、赤、黄、青で彩色している。火を受け、変色している。34は唐津の皿であろう。見込に砂目痕がある。李朝の可能性もある。火を受けている。35はスワトータイプの青花皿である。やわらかい白橙色の胎土に厚めの釉をかける。高台には砂が付着している。36は肥前陶器の大皿である。灰青色に発色している。内面には刷毛目で丸文を描き、貝の目痕がある。釉は半がけ。37は暗赤紫の堅くしまった胎土をもつ陶器の四耳壺である。肩から胴部上半にかけて３本の凸帯を貼付し、その間に櫛による平行沈線や波状文を描いている。産地不明。遺構の時期は17世紀後半である。

13号遺構（Fig. 20, 図版１－２）

Ｉ面のＤ・Ｅ－13・14区で検出した地下室のような遺構である。長さ2.84ｍ、幅1.62ｍ、深さ1.18ｍを測る。図面上に模式的に表現したが、床には瓦や小礫を敷き詰めその上に褐色の漆喰（粘土）を塗っていた。形は南面にむけて狭くなる長方形を呈する。北面付近の床に二か所杭の痕跡らしき穴がある。覆土はしまりの悪いフカフカの土で、この覆土の途中にFig. 24の46の甕が埋納してあった。この甕の中には47と48のかわらけが口を重ねるようにして入れてあった。この

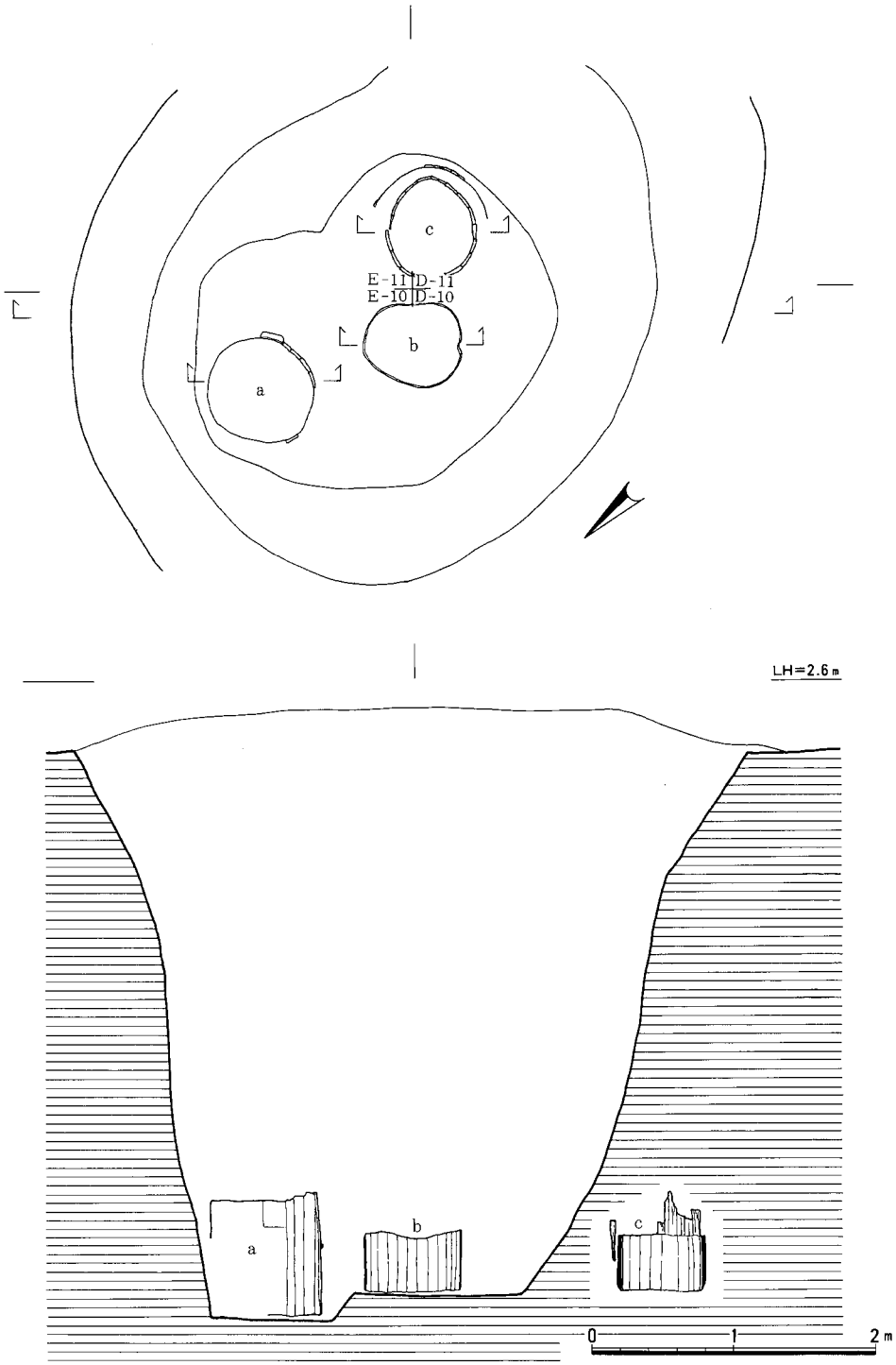


Fig. 25　36号井戸実測図（1/50）

中には何も入ってはいなかったが、胞衣壺であろう。遺構の性格は便漕の可能性もある。

出土遺物（Fig. 24. 38～46）　38は肥前磁器の染付碗である。見込に昆虫文がある。39は褐色の釉をかける陶器の油注である。40～44は土師質の皿である。45も土師質で無釉の灯明皿である。46は粗い黄灰色の胎土に茶褐色の釉をかける。底部には輪状に砂目が残っている。この他に肥前系の青磁の花瓶が出土しており、19世紀初めころの遺構と考えられる。

7号井戸（図版２－12）

Ⅰ面のＡ・Ｂ－11・12にある瓦井戸である。掘り方の直径は３ｍを測る。

出土遺物（Fig. 26. 49～54）　49は薄手の染付皿である。50・51は肥前磁器の染付の仏飯器、碗である。52は陶器碗、53は灯明皿である。54は備前のＶ期の擂鉢である。

16号井戸（図版２－11）

Ⅰ面のＦ－10・11区にある瓦質の井戸枠を使用した井戸である。直径1.6m。

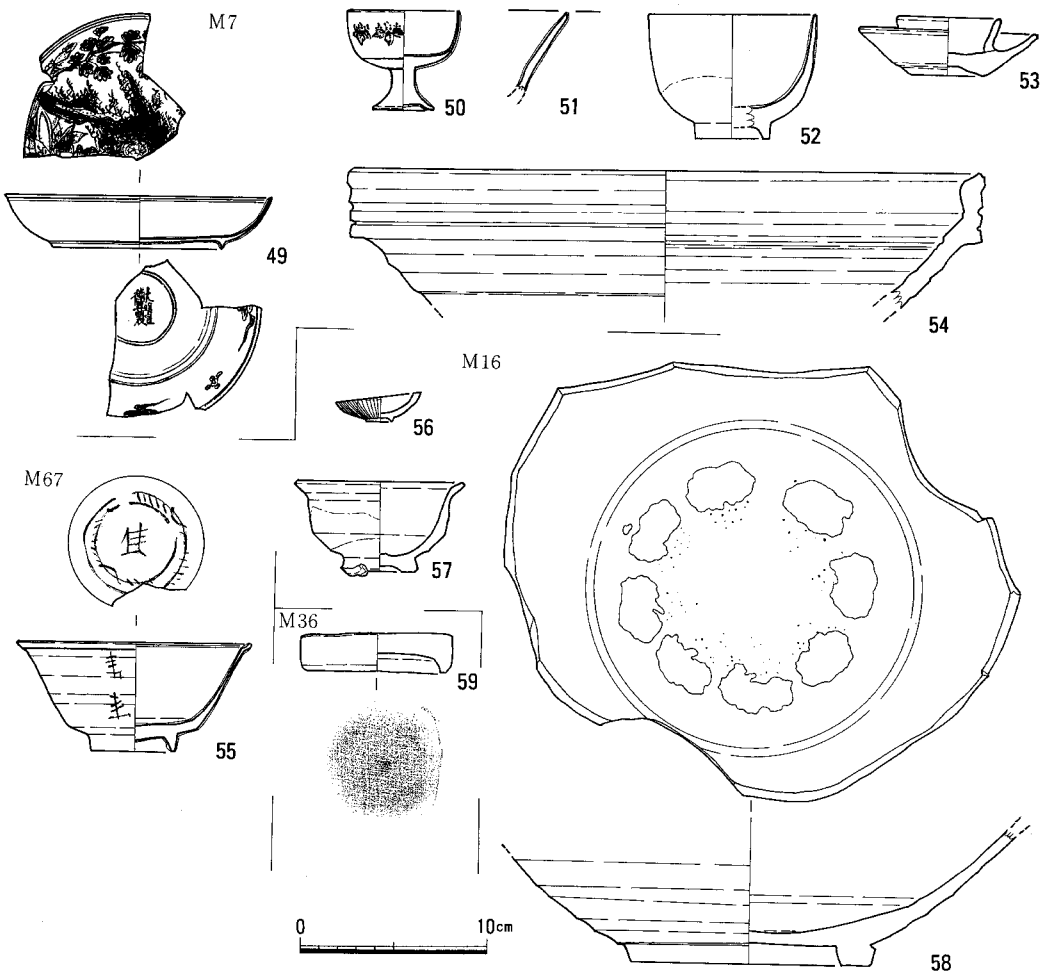


Fig. 26　7・16・36・67号井戸出土陶磁器実測図（1/4）

出土遺物（Fig. 26. 56～58）　56は磁器の紅皿、57は唐津の陶器の小碗である。オリーブ色の釉がかかり、見込と高台には胎土目が残る。58は唐津の刷毛目の大皿である。見込に砂目が残る。

67号井戸

Ⅰ面のＦ－８区にある井戸で、井戸枠に愛宕石を使用している。同じ井戸は隣接する42次調査でも検出されている。直径1.8m。

出土遺物（Fig. 26. 55）　55は青花碗である。古伊万里か。見込と外面の２個所に「寿」の略文字を描いている。砂高台である。遺構の時期は明治時代以降である。

36号井戸（Fig. 25，図版２－13）

Ⅰ面のＤ・Ｅ－10・11区で検出した井戸で、三つの井戸が重複していた。井戸枠はいずれも木桶を使用しているが、ａとｃについては上部に瓦があった可能性が高い。ｂがこの両者よりも古いと考えられる。出土遺物には肥前陶器、磁器の各種容器などがある。Fig. 26. 59は焼塩壺の蓋である。18世紀くらいであろうか。

(2)　２期の遺構と遺物

この時期に属する遺構は、溝２基、石基礎１基、石積土壙４基、石組遺構１基、土壙12基、井戸２基である。

17号溝（Fig. 27，図版４－16）

Ⅰ面のＣ－12～16区にある石組の溝である。長さ1.44m、幅0.7m、深さ0.28mを測る。東側の側面は、角礫を三段組み上げているが、西側は一段である。西側の敷地が一段低くなるような整地がなされていたのであろうか。溝の方向はＮ－45°－Ｗで、調査区の座標軸とほぼ一致する。Ｃ－12・13区では60号石積土壙がこの溝に付設している。また、現代の攪乱に破壊されているが、溝の南端に三個の石がならんで配置してある。これは石桝の遺構と考えられ、17号溝に連結していた可能性が高い。この二つの桝と溝の配置の関係は、この溝の西側にある下水用の土管の排水管とコンクリートの溜桝の位置関係とその長さや配置がよく似ている。町家の配置間隔を示す好例であろう。28号石積土壙を壊すように設けられている。この同じ２期に属する遺構は主軸方向が異なることからも、細かい時期区分ができそうである。

出土遺物（Fig. 28. 60～76）　60は青花の皿で、内面見込の釉を輪状に掻き取る。外面には唐草の文様を描く。胎土は灰色、高台は台形で、砂が付着している。61は青花Ｃ群の碗で、外面に芭焦葉文を描く。62は青磁の端反りの小皿である。63は明青磁の端反りの皿の破片で、非常に薄いつくりである。64は青磁の碗の破片である。65～67は李朝の皿と甕である。65は李朝の軟質の白

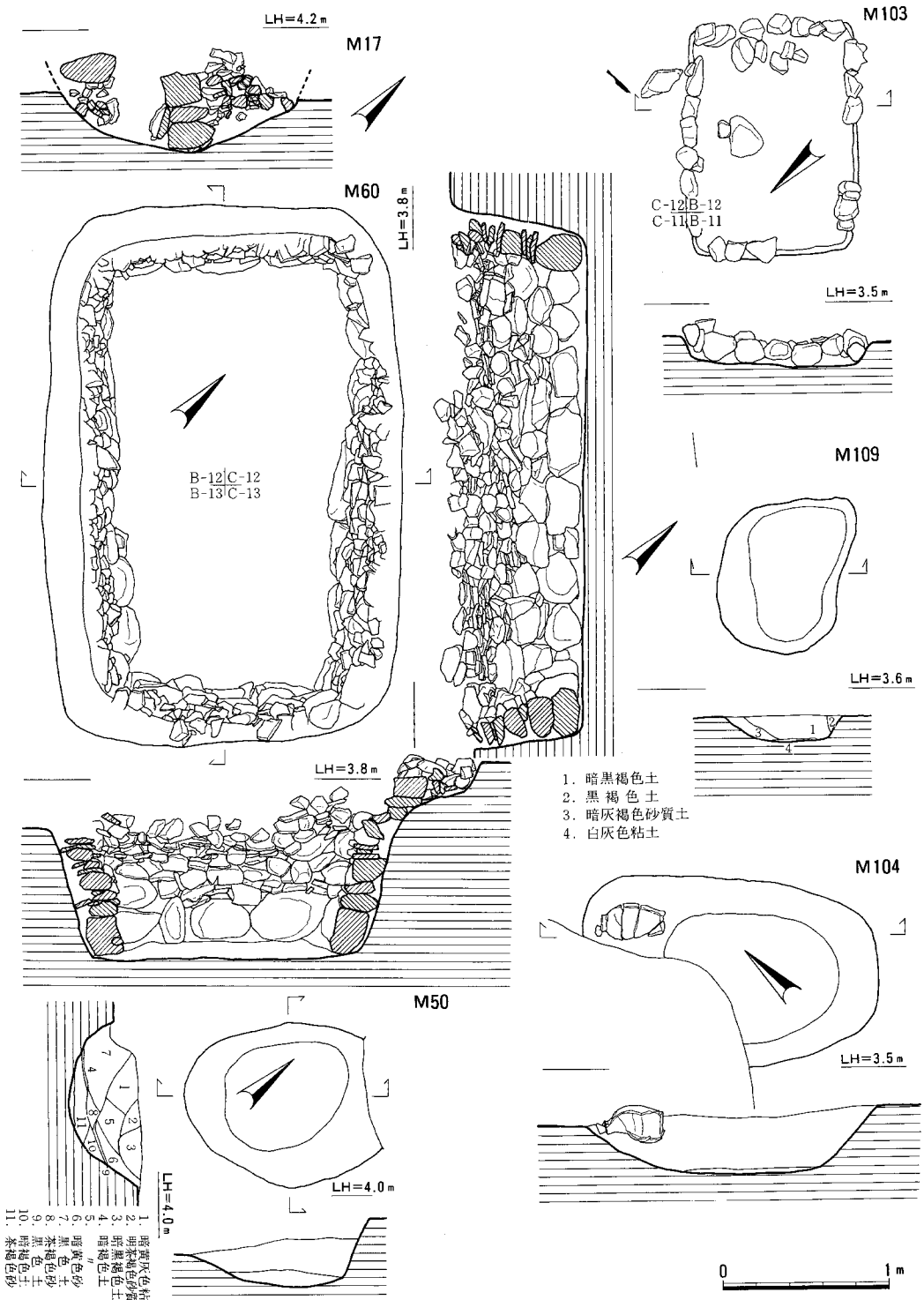


Fig. 27　17号溝・60号石積土壙・103号石組遺構・50・104・109号土壙実測図（1/40）

磁皿である。細かい精錬された胎土に淡水色の釉を施す。66は皿である。肌色の粗い胎土に淡緑灰色の釉をかける。胎土目の目痕が残る。67は緑釉をかける甕で、逆L字形に折れた口縁部の上部面には貝の目痕が残っていいる。この部分は焼成前に釉をふき取っている。68・70・71は美濃の皿である。いずれも灰釉をかける。70は縁折皿である。69は高取焼の皿で、飴色の釉をかけたものである。72は土師皿である。73は国産の陶器の壺である。74は備前のV期の擂鉢である。75・76は瓦質の火鉢である。75は口が内へおれ、外面に木の葉状のスタンプを押す。76はやや肥厚

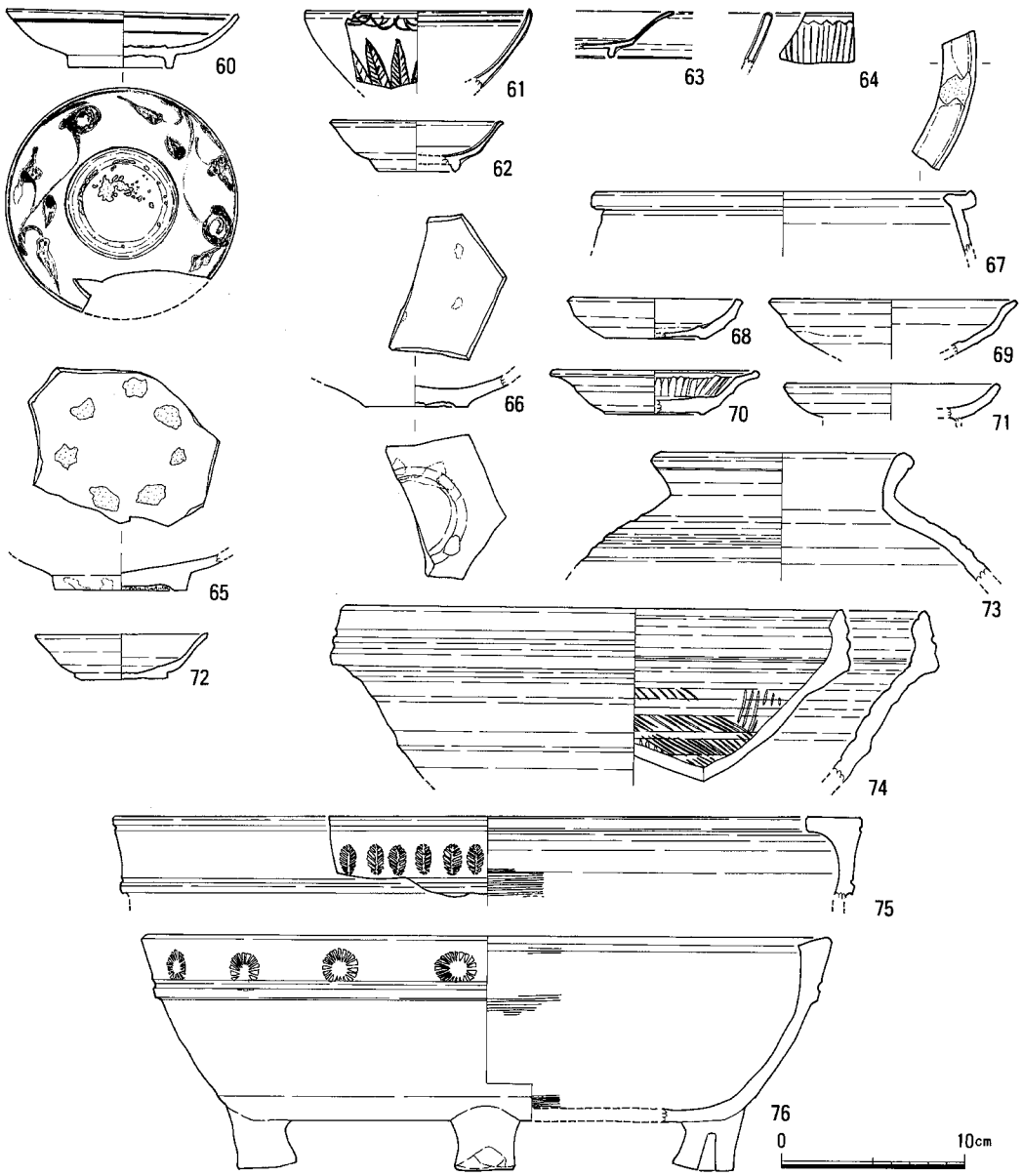


Fig. 28　17号溝出土陶磁器実測図（1/4）

する口縁部をもち、外面上部に菊花のスタンプを押している。脚は中空で、その本数は不明。遺物のほとんどは16世紀の後半代の様相を示している。69の高取の皿は内ケ磯窯のもので17世紀の初頭（1614年以降）の時期が与えられよう。これは溝の中から出土しており、その構築時期はより遡る可能性が高い。

60号石積土壙（Fig. 27，図版４－17）

17号溝に付設された水溜めの石積土壙である。長さ2.4m、幅1.6m、深さ0.84mを測る。下の一ないし二段は大振りの礫を使用し、そのうえに瓦や板状の礫を積み上げている。埋土の中にはわずかに近世陶磁器が混じる。

出土遺物（Fig. 29. 77～84）　77は青花E群の碗である。78は青花の皿である。B類の皿で、台形のしっかりした高台をもつ。胎土は白黄色の軟質で、見込は輪状に釉をふき取る。79は白磁の菊皿で、外底に二本の圏線「大明年造」の銘を呉須で描いている。80は口折の青花皿で、口縁内面には窓の中に花文、その間に青海波文を描いている。81は軟質の白い胎土に透明の長石釉をかけた李朝の白磁皿である。口がわずかに反る。82は李朝の陶器の片口である。器壁が３㎜と非常に薄い。口は外にかえして丸く仕上げる。上面は釉を削っている。83は青磁の碗である。外面に蓮弁の退化した沈線があり、見込は花状のスタンプがある。84は肥前陶器の碗である。覆土の

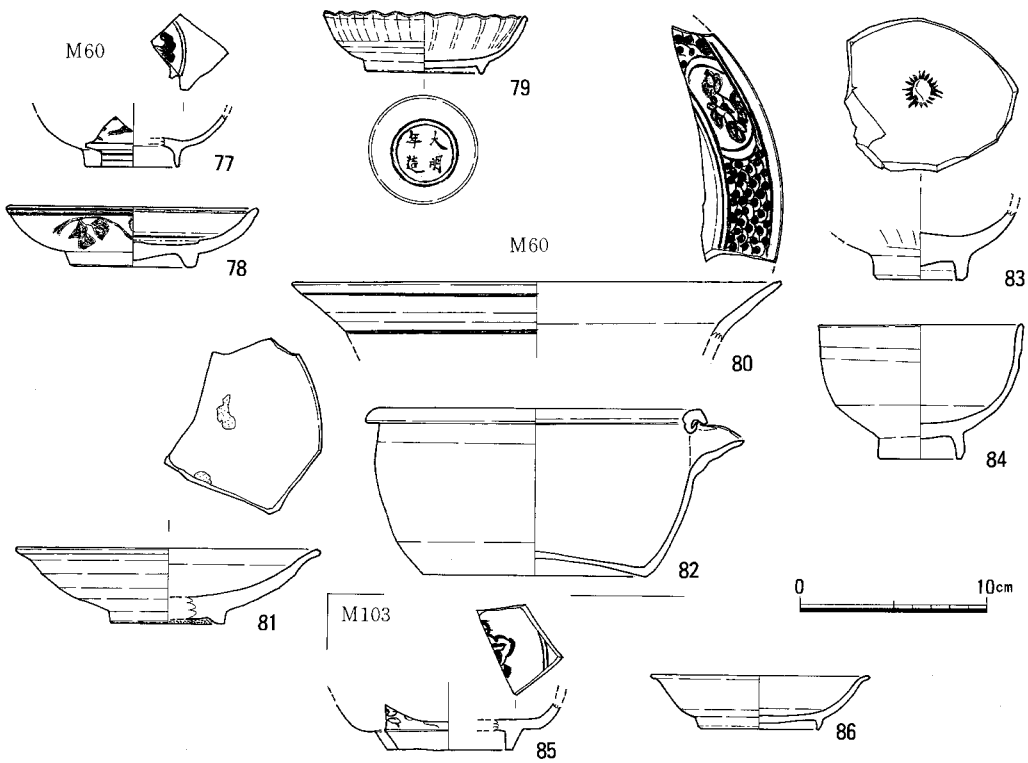


Fig. 29　60号石積土壙・103号石組遺構出土陶磁器実測図（1/4）

上部から出土している。これにより、17号溝と60号石積土壙は、17世紀の前半には埋められ、機能していないことがわかる。

103号石組遺構（Fig. 27，図版４－21）

Ⅱ面のＢ－11・12区にある長方形の桝状の遺構である。長さ1.5m、幅1.14m、深さ0.28mである。礫を長方形に一段並べている。この上にさらに石が積んであったかは不明である。主軸の方向は調査区の座標軸とほぼ一致している。同時期の133号土壙の上に築かれている。埋土には瓦や焼土を含む。

出土遺物（Fig. 29. 85・86）　86は白磁の端反りの皿、85は青花Ｅ群の碗である。このほか青花Ｃ類碗や芙蓉手の波状口縁の薄い型押しで作られた青花碗（図版20－174）がある。

３号石積土壙（Fig. 30，図版４－18）

Ⅰ面のＣ－８区で検出した大型の石積土壙である。長さ2.0m、幅2.0m、深さ0.8mを測る。40cm大の角礫を腰石に用い、その上に10～20cm大の円礫もしくは角礫を四ないし五段くらい積み上げている。北側の面は、大型の腰石は部分的に両端に用いられている。板状の石を立てて使用している個所もある。下部にロート状の74号土壙があり、ほぼ同じ時期の遺物を含んでいる。

出土遺物（Fig. 31. 87～101，Fig. 32. 102・103）　87・88は青花Ｅ群の皿である。文様は獅子を見込に描く。89は青花の小碗で、外面は茶褐色である。90は李朝の白磁皿である。60号石積土壙出土の81の皿と接合する。91は同じく李朝の白磁の碗で、深いタイプである。堅手で、胎土も洗練されており、器壁も薄く丁寧に作られている。92～96は李朝の鉢、甕、徳利である。鉢と甕は外反折り曲げの口縁の上端は釉をふき取るか焼成後削っている。96の徳利は内面に同心円文のタタキの痕跡をとどめ、非常に薄い器壁をもつ。釉調は緑から茶褐色で光沢がある。99・100は美濃の灰釉の皿である。外底に重ね焼きの目痕がある。97は白く柔らかい土に藁灰釉を半がけにした内ケ磯窯の碗である。畳付は目跡をすって滑らかにしてある。98・101は絵唐津の碗と香炉である。102・103は備前の擂鉢である。口の形がⅤ期の特徴と若干異なる。また擦り目も斜に全面に施され新しい様相である。口縁の上端と下端に重ね焼きの痕跡が明瞭に残っている。この他、志野焼の破片（図版18－155）が出土している。これにより、本遺構は17世紀前半には機能を失い、埋められている。60号石積土壙と接合関係があることから同時に埋められた可能性がある。

19号石積土壙（Fig. 30，図版４－19）

Ⅰ面のＥ－12区で検出した石積土壙である。長さ1.2m、幅0.84m、深さ0.68mである。偏平な角礫を中心としてそれに瓦を加えて積み上げている。北東部に偏平な円礫や角礫を敷く80×140cmの方形の石敷遺構である。西側に石敷の遺構（62号）があるが、構造上同じ施設なのか別のものなのか判定できない。別のものであれば新しい時期のものである。主軸の方向は調査区の座標軸とほぼ一致している。覆土の上半分からは近世陶磁器の出土があり、下部からは土師器の坏や皿が多量に出土した。

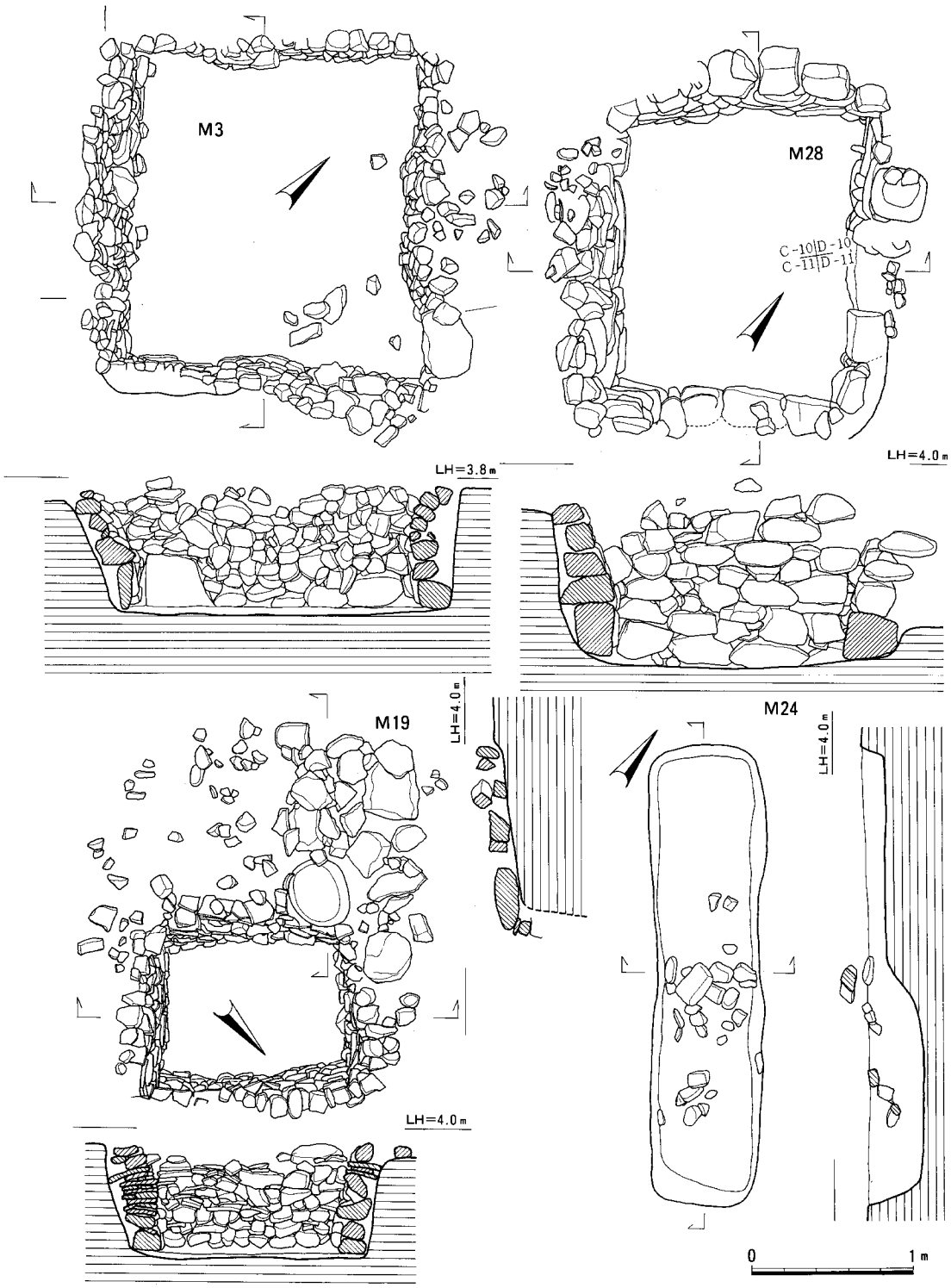


Fig. 30　3・19・28石積土壙・24号土壙実測図（1/40）

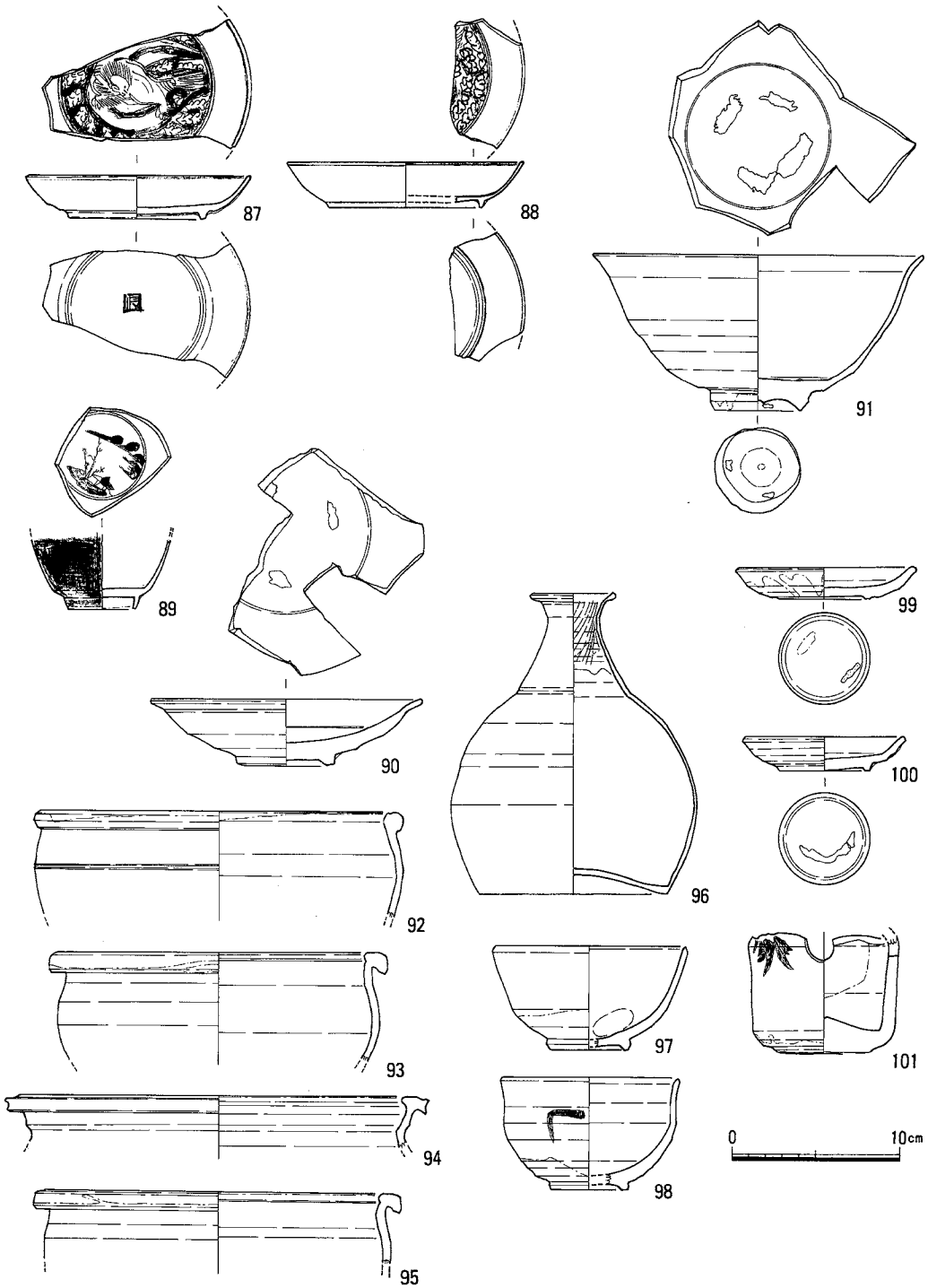


Fig. 31　3号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

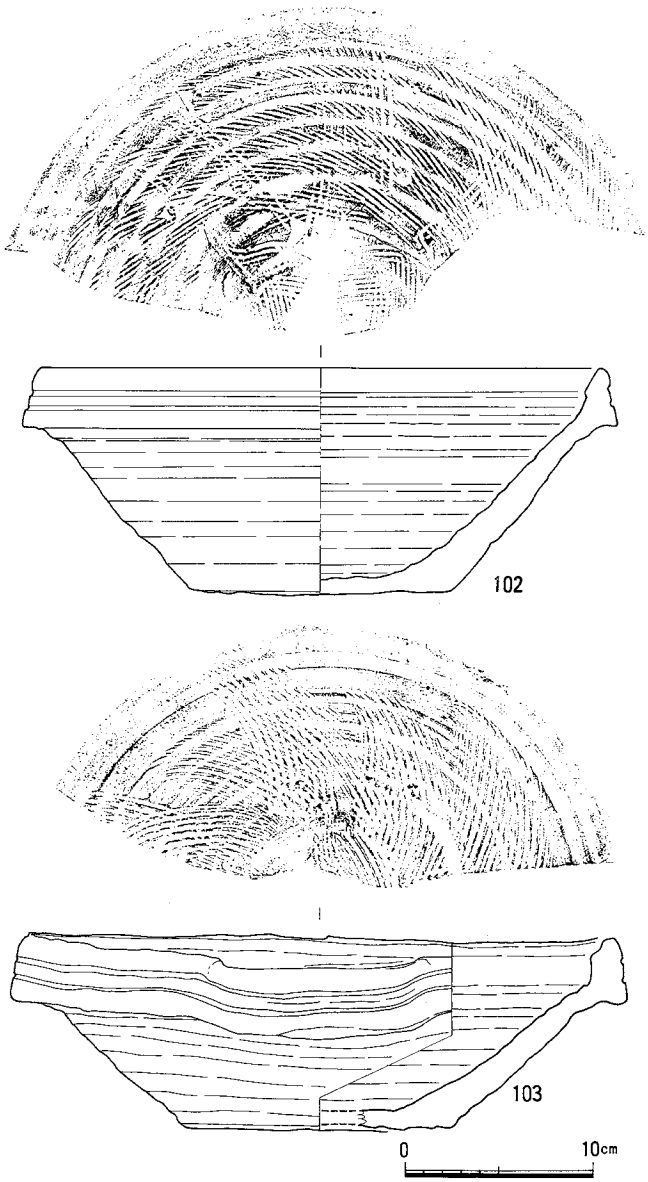


Fig. 32　3号石積土壙出土擂鉢実測図（1/4）

出土遺物（Fig. 33. 104～120）

104は青花の碗の破片である。外面と見込に唐草の略化した文様を描く。C群に属する。105は青磁の碗である。106は唐津の大皿の底部である。淡い緑釉をかける。107～111は土師の坏、112～117は土師皿である。110・111は薄く直に外に開くもので、外来のものであろう。118は李朝の碗である。灰色の堅い胎土に黄色の釉を反がけにする。竹節高台である。119は備前の大甕の口縁部である。120は備前の水屋甕の上半部の破片である。106・118は埋め土の上部、104・105・108・112・114・117は覆土下部、107・113・119・120は掘り方および石積みの中から出土した。これにより、17世紀の前半ころに埋められていることがわかる。

28号石積土壙（Fig. 30, 図版4－20）

Ⅰ面C－10・11区にある石積土壙である。長さ1.8m、幅1.8m、深さ1.2mを測る。全体に大振りの角礫を使用している。40×50cmほどの大石を腰石に用い、その上に四段ほど積み上げている。南側および東端の上四段は他の遺構で破壊されている。内部には、上から1.暗灰色土、2.瓦や壁土などを多く含む灰色の粘土、3.炭を多量に含む暗灰色土、4.暗黒褐色土が落ち込むように層をなして堆積していた。遺構の主軸は、調査区の座標軸より、東に振れており、N－36°20″－Wである。下部を中心に青花、白磁、青磁、色絵などが出土した。

出土遺物（Fig. 34. 121～147）　121は青花の碗である。やや端反りする口縁部をもつ。丸い窓の中に呉須で龍と鳳凰を描き、口縁部下に雷文帯、高台付近に圏線を赤で描くものである。122は外面に雷文帯、その下に如意雲と円い窓の中に算木を描く青花碗である。見込にはアラベスク

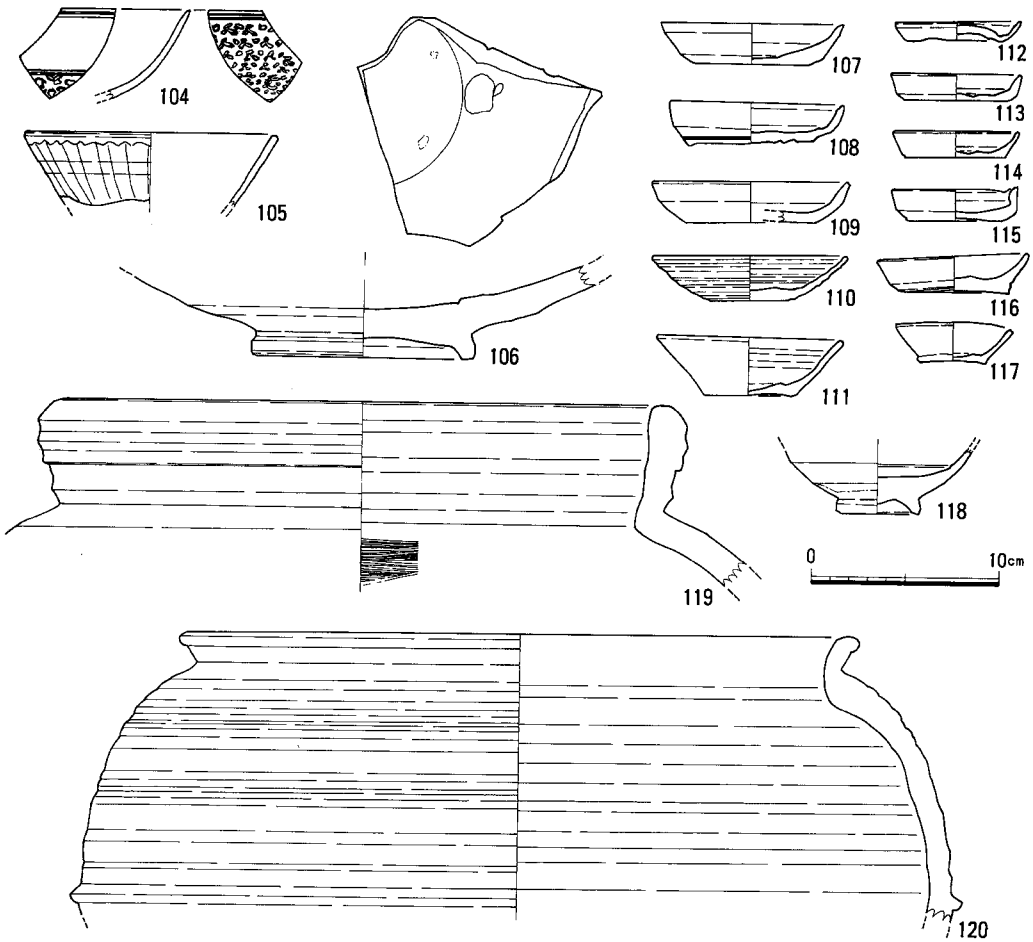


Fig. 33　19号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

文様を描く。123はB群の青花皿で、外面は牡丹唐草文、内面は十字花文を描く。124はC群の青花碗で、外面に唐草文を描く。125は色絵の碗である。内面に牡丹唐草、外面に童子を描く。126は高台のつくりのしっかりしたC類の黄白色の胎土の碗である。内面に蓮華文、外面に芭焦葉文を描く。砂高台である。127はC群の青花皿である。胎土が軟質の白黄色で、底部には砂が付着している。128～133は白磁である。128～130は端反りの皿、131は口折れの、輪花状の体部をもつ大皿、132は碁笥底の皿、133は小碗である。いずれも中国製である。134～138は中国製の青磁である。134は龍泉の碗Ⅵ類で、見込に花の中に「福」字をアレンジしたスタンプ文がある。135は龍泉の碗である。136～138は皿である。すべて輪花であるが、137と138は端反りで、区画部に水色の絵の具で白堆線を描いている。非常に薄いつくりである。139～141は李朝の陶器である。139は白磁の碗、140は緑色の釉のかかる徳利、141は粉青沙器の印花文の碗である。142・143は土師皿である。144は備前のⅤ期の擂鉢、145は壺である。146は瓦質の方形の脚付の容器で、香炉であろ

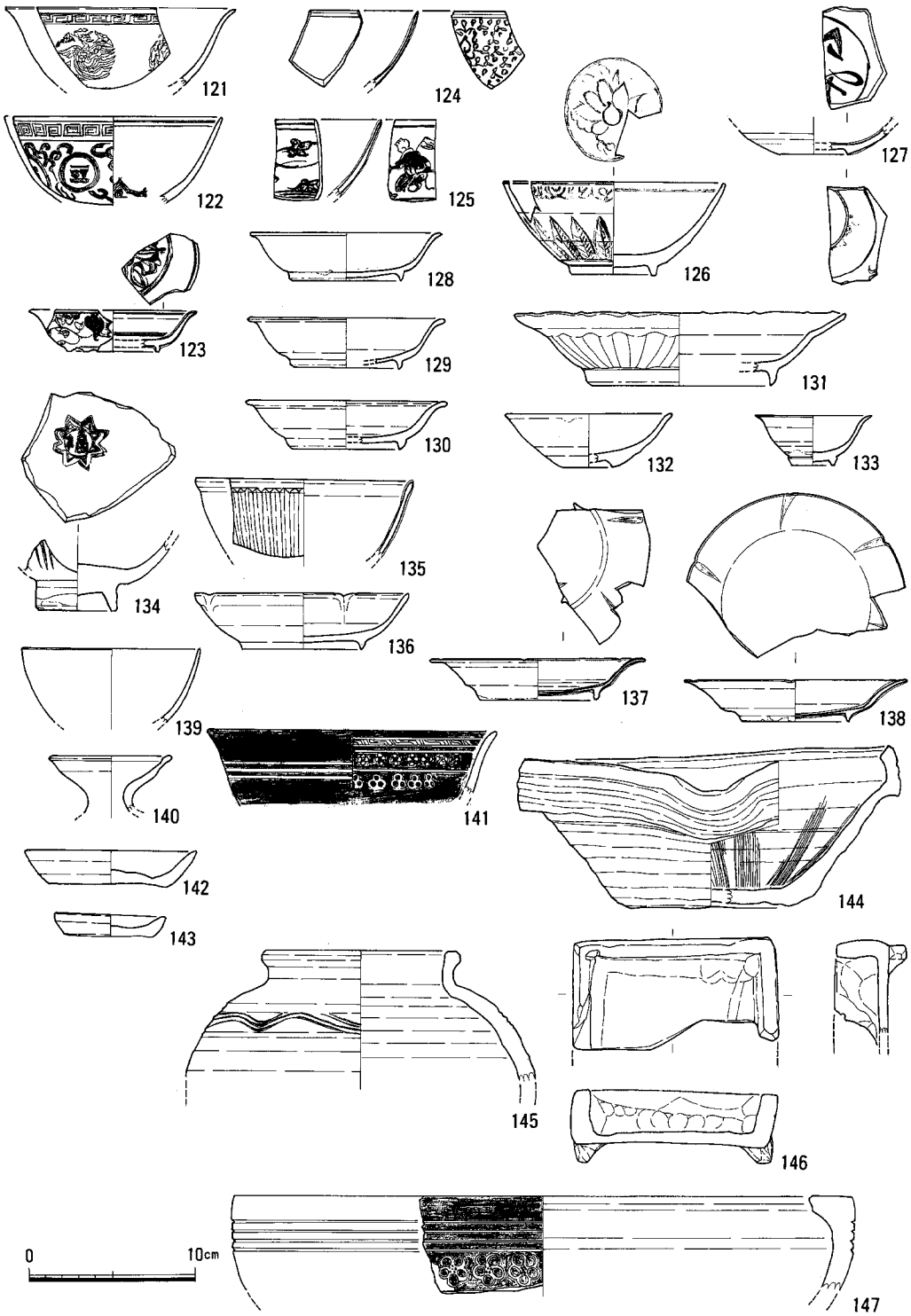


Fig. 34　28号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

うか。147は瓦質の火鉢である。梅花のスタンプ文がある。覆土の上部から出土したものは、121・122・128・129・131～134・136で、掘り方から出土したもは140・147で、他は下部から出土した。上部には唐津の破片が入っており、17世紀まで窪みが残っていたか、この時期に埋められた可能性がある。

24号土壙（Fig. 30，図版４－22）

Ⅰ面のＤ－３・４区で検出した長方形の土壙である。長さ2.84m、幅0.72m、深さ0.34mである。覆土には赤く焼けた壁土や炭が混じっていた。中程に礫が散らばっていた。遺構の主軸は調査区の座標軸よりも東に振れ、Ｎ－35°－Ｗである。

出土遺物（Fig. 35. 148～151）　148は青花Ｂ群の皿である。内外面に唐草文を描く。149は李朝の深い身をもつ白磁碗である。白灰色の堅緻な胎土をもつ。見込には目痕はない。150はタイの壺の破片である。二点出土しているが接合しない。紫色の砂混じりの胎土に白濁した釉がかかる。胴部に沈線が認められる。151もタイのサワンカロークの茶入れの双耳壺である。黒い鉱物の混じる堅緻な灰色の胎土に褐釉がかかる。内面は淡い橙色に発色している。

50号土壙（Fig. 27）

Ⅰ面のＢ－12・13区で検出した土壙である。長さ1.2m、幅1.0mの楕円形を呈し、深さ0.42mを測る。７号井戸に切られる。覆土は炭や砂・土層が堆積しており、廃棄物の処理穴である。ほぼ完形に近い青花の皿（Fig. 35. 152）が出土した。内面に山水文を描く。断面台形の丈夫なつくりの高台とやや腰折れの体部が特徴で、畳付には硅砂が付着している。

69号土壙

Ⅰ面のＥ－14区で検出した長さ1.2m、幅1.1m、深さ0.26mの円形の土壙である。壁土や焼土がレンズ状に堆積していた。

出土遺物（Fig. 35. 153～157）　153は青花の鐔皿である。堅緻な胎土である。内面にアラベスク文を描く。154は白磁の稜花皿である。やや軟質の胎土である。155は美濃の灰釉皿である。156は備前の鉢である。157は瓦質の脚付の鉢である。香炉であろうか。

104号土壙（Fig. 27，図版４－23）

Ⅱ面のＥ－14区にある長楕円形の焼土壙である。長さ1.8m、幅1.14m、深さ0.34mである。焼けた壁土が覆土中にかなり多量に含まれていた。13号遺構に壊され、136号石基礎を壊している。遺構の主軸の方向は、調査区の座標軸より東に振れ、Ｎ－42°30″－Ｗである。土壙の北端から灰紫色の砂粒を含む無釉の三耳壺（Fig. 35. 158）が横たわって出土した。胴から底部にかけて壊れている。

108号井戸

Ⅲ面のＥ・Ｆ－10区にある井戸の掘り方と考えられる円形土壙である。大半は調査区外にでる。井戸枠は確認していない。

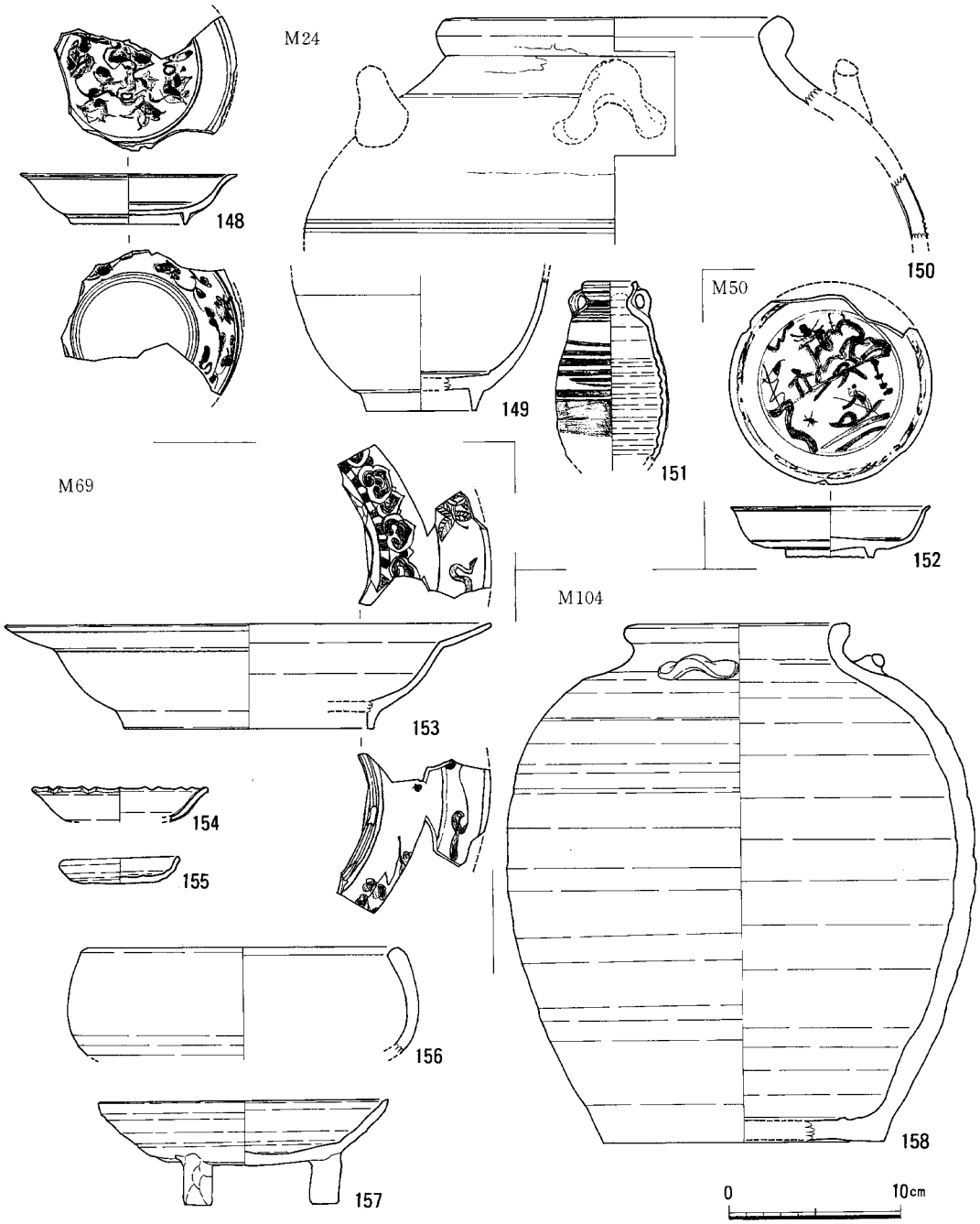


Fig. 35　24・50・69・104号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

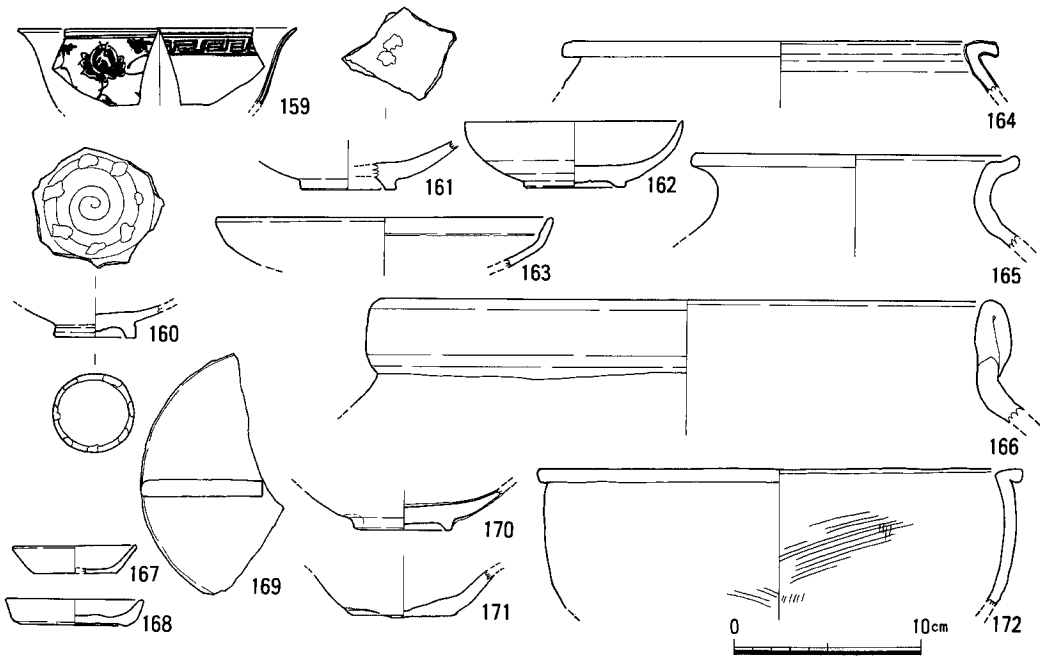


Fig. 36　108号井戸出土陶磁器実測図（1/4）

出土遺物（Fig. 36. 159～172）　159は青花の碗である。外面に牡丹唐草文、内面口縁に雷文帯を描く。160はやや水色に似た発色をする釉をかけた李朝の白磁の皿である。見込にはカンナの痕がある。161は李朝の白磁皿である。軟質の胎土である。162・170は白橙色の軟質の胎土をもつ陶器の皿である。緑色に発色している。唐津であろう。163は広い口の白磁の皿である。口が内に折れており、その部分に圏線を入れる。164は緑褐釉の甕である。165は須恵質の国産の壺、166は備前の甕である。167・168は土師皿である。171は身の深い土師器の坏で、底に比べ口がかなり大きい。169は瓦質の蓋の破片である。内面には調整の刷毛目が残る。172は土鍋である。

この他、この時期に属する遺構は以下のとおりである。

〈Ⅰ面検出〉

348号井戸、4号石基礎、44・361号土壙

〈Ⅱ面検出〉

131号溝、94・98・109・112・113号土壙

(3) 3期の遺構と遺物

この時期に属する遺構は、溝1基、石基礎3基、石組遺構5基、石積土壙14基、集石5基、土壙59基、井戸7基、柱穴7個、墓1基である。

111号溝（Fig. 38）

Ⅱ面のA－11～13区にある溝である。長さ6m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。130号溝に構造がよく似ており、礫を一段ないし二段一列に並べている。上部に何段積み上げられていたかは不明である。112号土壙や7号井戸によって破壊されている。北部は破壊されており、このまま延びるものか、終結するのか不明である。A－13・14区に完全に連結はしないが、板石で囲まれた桝状の遺構（83号）があり、関連する施設の可能性が高い。溝の方向は、調査区の主軸より東に振れて、N－37°23′－Wである。

355・360号石基礎（Fig. 37，図版5－24・25）

Ⅰ面のA～C－15～18区にある建物の基礎である。355号の南端を切るように360号の北東角が位置している。350号は長方形のプランをもち、長辺の長さは8.8m、短辺の長さは5.5m。調査区外へ続くため不明である。残存部の長さからすると6m前後と推定される。構造は、U字形に掘った溝（幅60cm、深さ54cm）の中に10cm～20cm前後の河原礫を充填して、固めたものである。断面を観察すると、この内部には、厚さ20cmほどの白色の粘土が貼られており、床を作っている。しかし、基礎の上にもこの粘土は貼られているため、この基礎石の上にのせられたと考えられる土台の角材の痕跡は確認できなかった。主軸の方向は、N－36°53′－Wで、これも東へ振れるグループである。

83号石組遺構（Fig. 38，図版6－33）

Ⅱ面のA－13・14区検出の板石と瓦を立てて、方形に区画した桝状の遺構である。調査区外へでるため、全体の構造や規模は不明である。111号溝と関連する水溜めの施設とも考えられる。主軸の方位はN－40°47′－Eである。暗灰色土が覆土である。備前、青花、土師皿などが出土した。

141号石組遺構（Fig. 38，図版6－33）

Ⅰ面のC－4区にある方形の石組遺構で、20cm角の礫を一段方形に並べている。中にもやや小ぶりの礫が散乱していた。近世の土壙と石積土壙に角を破壊されている。復元すると長さ1.3m、幅1.3m、深さ0.2mである。主軸方向はN－24°34′－Wで、座標軸より東に振れる。出土遺物には、瓦質の捏鉢、青花のB類（軟質）のC群皿、E群皿がある。

71号石積土壙（Fig. 42，図版5－26）

Ⅰ面のD－12・13区にある石積土壙である。20cm角の礫を積み上げている。五段ほど残っている。主軸は調査区の座標軸にほぼ一致している。長さ1.44m、幅1.06m、深さ0.72mである。内部からは、青花C群の碗、美濃の皿などが出土している。

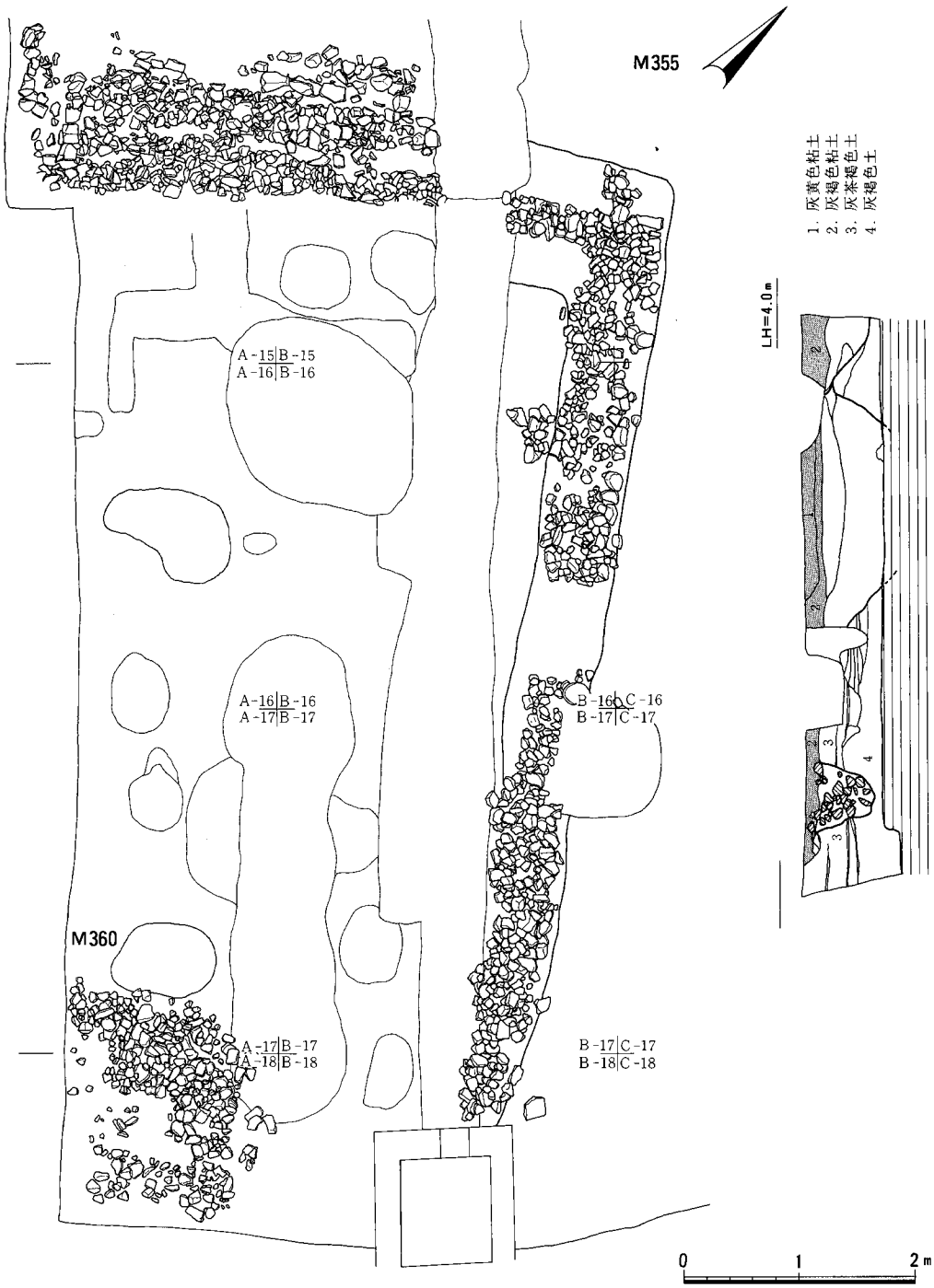


Fig. 37　355・360号石基礎実測図（1/60）

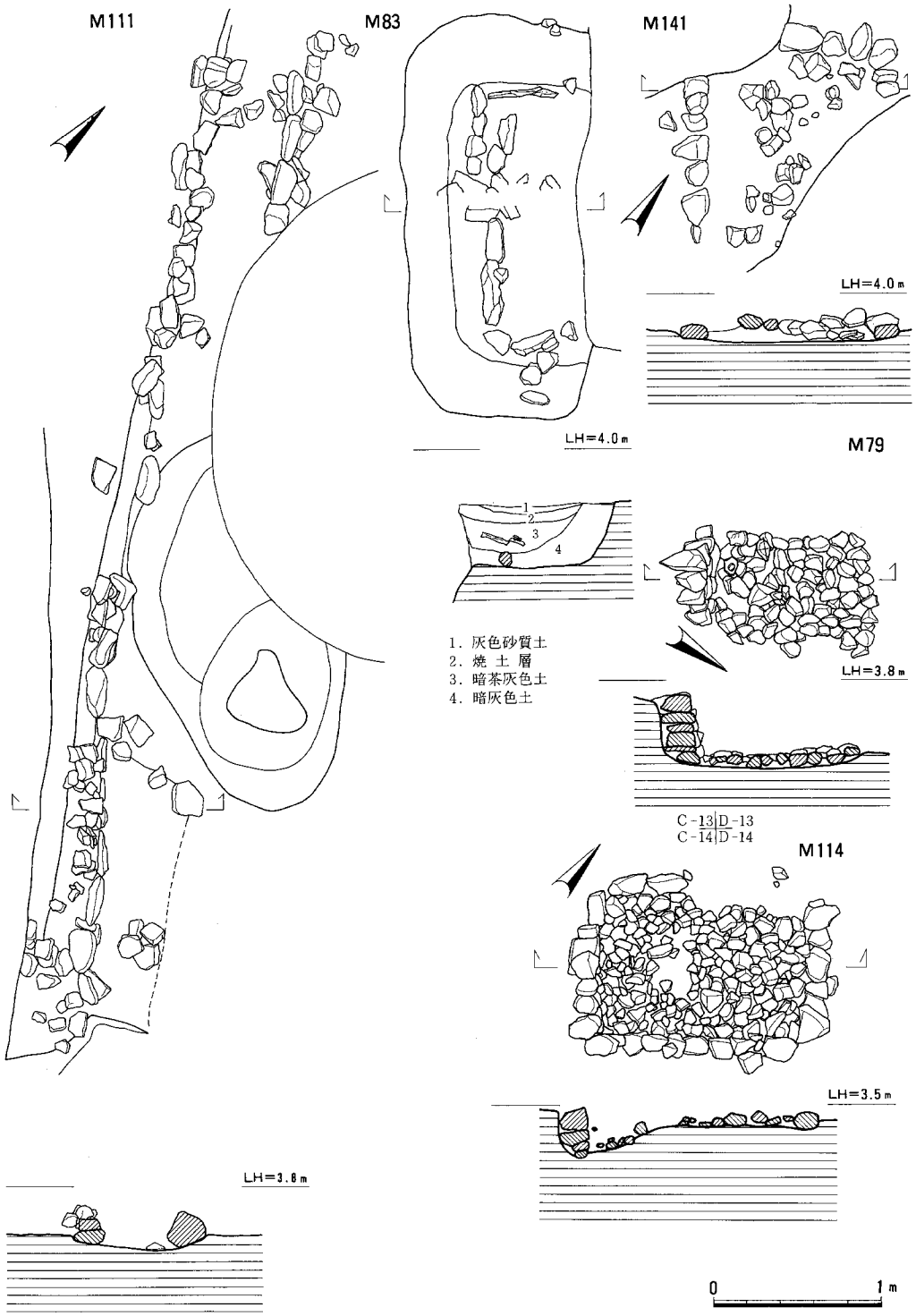


Fig. 38　111号溝・83・141号石組遺構・79・114号石積土壙実測図（1/40）

出土遺物（Fig. 40. 173～178）　173は青花の皿である。内面に花文を描く。外面に他の皿の口縁部が熔着している。灰色の胎土で、畳付から外底は露胎である。174はE類の青花皿である。口縁内面に四方襷文を描くが、見込の文様は不明である。175はC群の碗である。外面の文様は波濤文その下は芭蕉葉文を描く。176は堅緻な明白色の胎土をもつ堅手の白磁皿である。見込と畳付に胎土目の痕がある。李朝である。177は備前の徳利である。赤橙に発色している。178は瓦質の風炉である。89号井戸出土品と接合している。176と177以外は掘り方出土品である。

72号石積土壙（Fig. 39，図版5－27）

Ⅰ面D・E－11・12区で検出した石と瓦積みの遺構である。北辺と南辺、西辺の一部が破壊されている。東辺の面がきれいにそろえてあり、石積土壙の破壊されたものと考えた。残存部の長さは2.02m、高さ0.74mを測る。東辺は北部に70×40cmほどの大きな礫を使用し、南半は高さ40cmほどの角礫を据えた後、瓦もしくは板石を面をそろえて積み上げている。最下部の一段は板石や瓦を立てて貼り付けている。西辺は東に比べて石の組み方が粗雑で、破壊されて基底部のみが残ったのであろう。掘り方は判然としなかった。主軸方向は調査区の座標軸に対してほぼ一致する。出土遺物には青花、白磁、天目、李朝陶器、瓦質土器の甕などがある。

73号石積土壙（Fig. 39，図版5－28）

Ⅱ面のD－6区で検出した長さ1.72m、幅1.94m、深さ1.04mの石積土壙である。大きいもので70×50×40cmほどの礫を使用している。北辺の石積みは、最も下の段よりもその上二段の礫が大きい。石室の中程の東よりから石を積み上げ仕切っており、最初大型のものであったものを二分もしくは規模を小さくして使用している。この仕切用の石積みの南端の石の間には、備前の擂鉢の破片が入っていた。東の辺は北側の石列の東端と東南角にある四個ほどの石積みを結んだラインであろう。南側については破壊されており、規模は不明である。主軸の方向は座標軸より東に振れ、N－34°－Wである。

出土遺物（Fig. 40. 179～184）　179は青花の碁笥底の皿である。内面には波文、外面に唐草文を描く。180は青磁の皿で、内面見込に丸文の中に「井」の字をあしらったスタンプがある。181は外面に細蓮弁を線彫りした青磁の碗である。見込に花弁の中に「寿」字のスタンプがある。182は李朝の陶器皿である。灰色の胎土に透明の釉をかける。183は直口の土鍋である。内面に刷毛目が残る。184は瓦質の火鉢である。外面に梅花のスタンプを押す。この他にⅢ期とⅤ期に属する備前擂鉢の破片が出土している。

75・81号石積土壙（Fig. 41，図版5－30・31，6－32）

Ⅱ面のC・D－9・10区で検出した石積土壙である。75号と81号は本来大型の石室であったものを二分したものである。本来の大型の石積土壙の大きさは長さ2.1m、幅1.2m、深さ1.0mである。40×30×50cmほどの大きな石を六段ほど積み重ねている。西辺は玄武岩の板石を四枚立てて、その上を角礫で押さえている。真中に据えられた板石が最も大きく、100×70×9cmほどであ

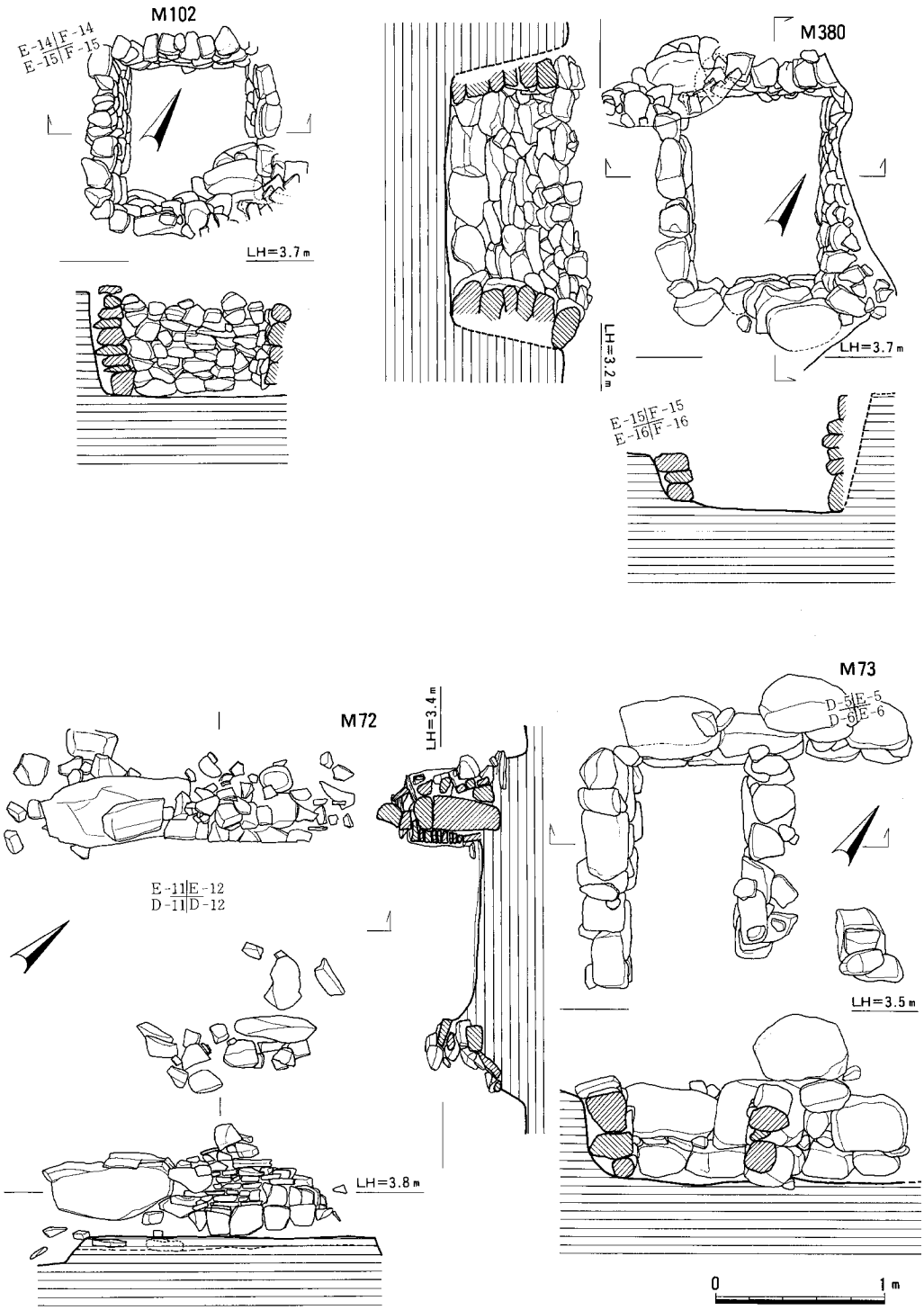


Fig. 39　72・73・102・380号石積土壙実測図（1/40）

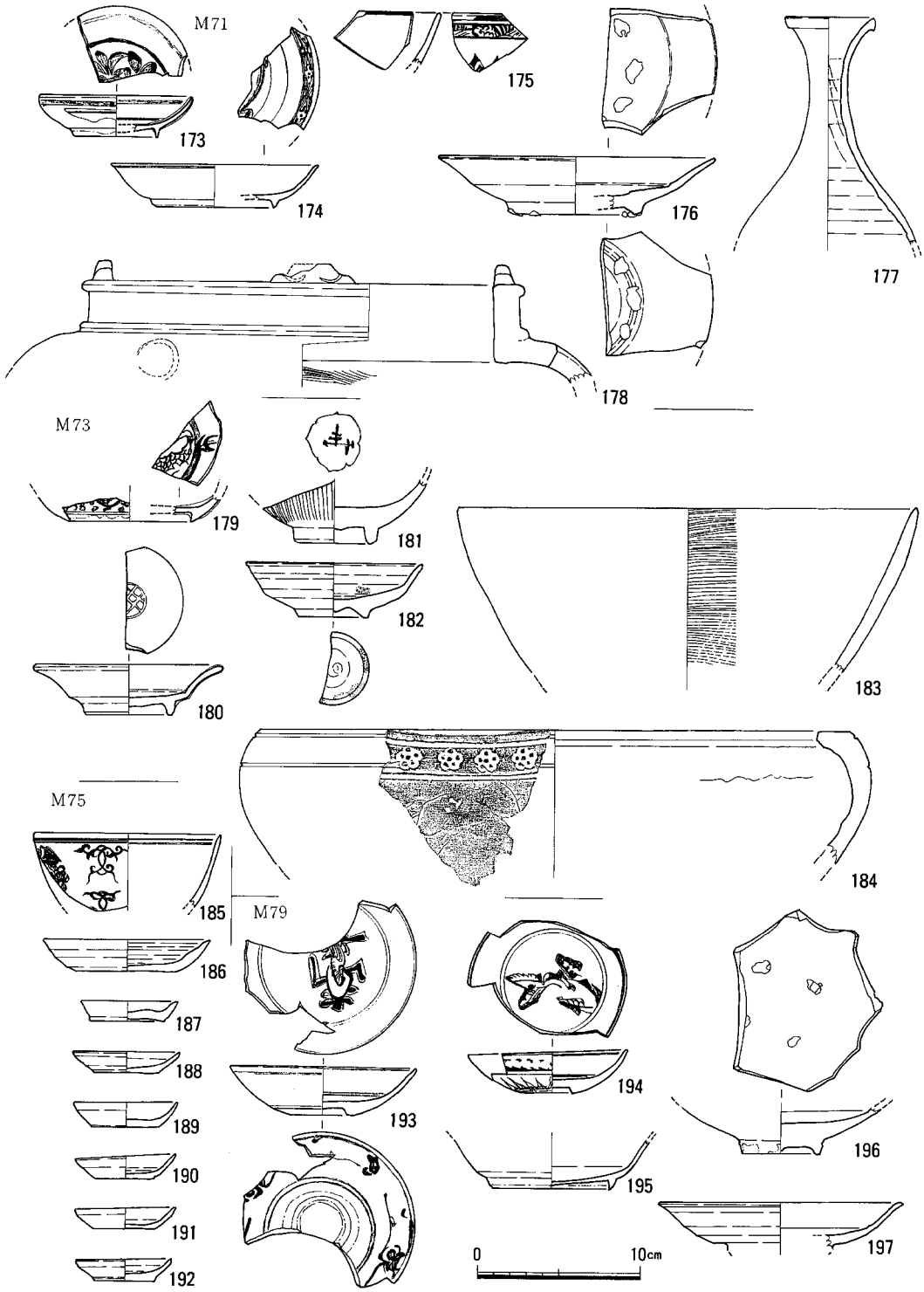


Fig. 40　71・73・75・79号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

る。東辺は最下の一段を残して、その上は破壊されている。石室の内部には、最下層に炭や焼けた魚の骨などを含む黒褐色の土が厚さ20cmほど堆積し、その上に炭や焼土を含む暗灰色の灰の層が同じく20cmほど堆積していた。この二枚の層は西（75号側）から東（81号側）へ次第に薄くなっている。この層が堆積した後、この石室は二つに区分けされている。30～40cm大の板石を二列積み上げ、上を一枚の石で押さえている。間には土も充塡してあった。この仕切の板石の下には土師皿を二枚挟んであり、再建設にあたっての咒と考えられる。どちらの石積土壙の覆土中にも土師皿が数枚入れてあった。廃絶の際に入れられたものであろう。遺構の主軸の方向は、調査区の座標軸より東に振れ、N－52°48′－Eである。

75号出土遺物（Fig. 40. 185～192）　185は青花の碗である。外面に唐草文を描く。186は土師の坏である。186～192は土師皿である。すべて石室内から出土した。

81号出土遺物（Fig. 43. 198～200）　198～200は石室内から出土した土師皿である。198は外方へラッパ状に開く口縁部をもつ身の深い皿である。

79号石積土壙（Fig. 38，図版5－29）

Ⅱ面のD－3・4区にある石積土壙である。長さ1.0m、幅0.74m、深さ0.46mを測る。掘り方は不明で、石敷と石積みのみが残っていた。西辺の石積みは角礫を主体に用いて六段積み上げている。底面に礫を敷き詰めている。南24号土壙中央にある石列は、この遺構の北辺の石積みの可能性がある。主軸は調査区の座標軸より東に振れ、N－38°06′－Wである。

出土遺物（Fig. 40，193～197）　193と194は青花のC群の皿である。193は外面に梵字、内面に寿の人形化した文様を、194は外面に波濤文と芭蕉葉文、内面にねじ花文を描く。195は端反の堅手の白磁皿である。196は李朝の白磁皿である。内面見込に胎土目が四個付く。胎土は白色で、青味を帯びた灰色の釉をかける。外底は桃色に発色している。197も李朝の堅手の白磁皿である。灰白色の胎土に水色の釉をかける。

93号石積土壙（Fig. 41，図版6－34）

Ⅱ面のE－11区、72号石積土壙の北東部に隣接している石積土壙である。長さ0.88m、幅0.74m、深さ0.54mを測る。大きいもので40×20×30cmほどの礫を使用し、二段ほど残っている。方形に近いプランをもつ。72号石積土壙はこの93号石積土壙を破壊して、構築されている。主軸の方向は、座標軸よりわずかに東に振れ、N－41°48′－Wである。

出土遺物（Fig. 43. 201～207）　201は青花の碗である。台形の高台をもつB類に属する。見込に花文を描く。202は青花の碗である。小野分類D群。外面にアラベスク風の文様、見込に花文を描く。203はC群の碗である。外面、見込とも略化した唐草文を描く。204は白磁の坏である。205・206は瓦質の火鉢である。205は巴文、206は梅花のスタンプを押す。205は薄いつくりである。207は李朝の白磁碗である。黄白色の胎土に透明の釉をかける。

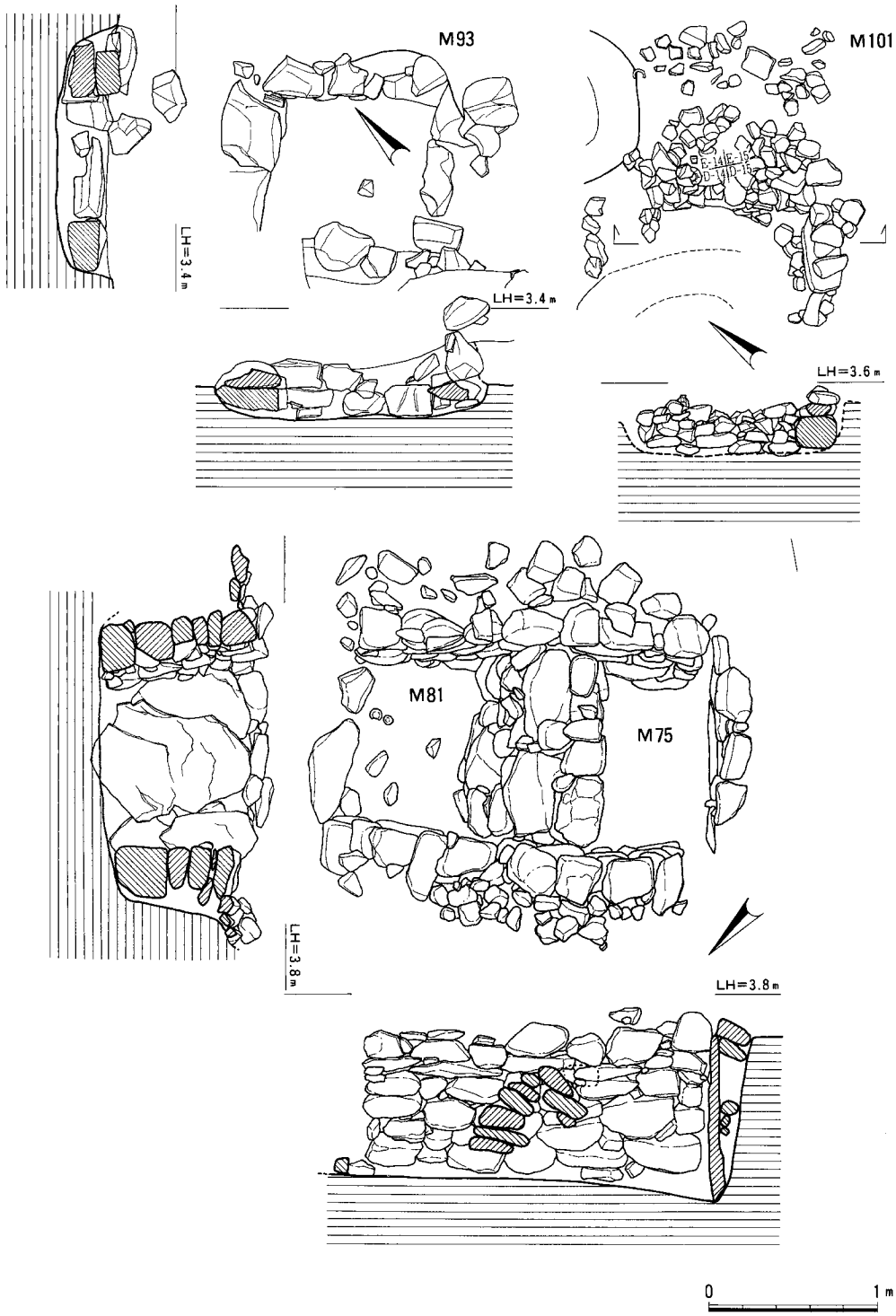


Fig. 41　75・81・93・101号石積土壙実測図（1/40）

101号石積土壙（Fig. 41，図版６－35）

Ⅱ面のＤ－14・15区で検出した石積土壙である。128号土壙でその大半を壊されている。136号石基礎を破壊している。復元プランの規模は長さ0.94m、幅0.7m以上である。15cmほどの角礫を主体に積み上げている。三段ほど残るが、掘り方は不明。主軸の方向は座標軸より東に振れ、Ｎ－36°24′－Ｗである。

出土遺物（Fig. 43. 208～210）　208は青花のＢ群の皿である。外面に牡丹唐草文を描く。209・210は白磁の菊皿である。外底に呉須で、209は「　□年製」、210は「天下太平」の銘を描く。

102号石積土壙（Fig. 39，図版６－36）

Ⅰ面のＦ－14・15区で検出した石積土壙である。長さ0.9m、幅0.88m、深さ0.66mを測る。380号石積土壙と南東角で接する。380号の後に作られた可能性が高い。10～15cm角の礫を四から九段積み上げている。主軸の方向は座標軸より東に振れる。Ｎ－27°48′－Ｗである。細蓮弁の青磁碗、青花碗・皿、備前壺などが出土している。この備前壺は後述の118号土壙出土品（Fig. 51. 298）と同一個体である。

114号石積土壙（Fig. 38，図版６－37）

Ⅱ面のＣ－14区にある床に礫を敷き詰めた長さ1.24m、幅0.84m、深さ0.1mの石積土壙である。15～20cm大の角礫を積み上げているが、西辺のみ三段で、他は一段しか残っていない。掘り方は確認できない。床の西半分が15cmほど低く、下にある122号石積土壙のため沈下したのであろう。主軸方向は座標軸より東に振れる。Ｎ－45°－Ｅである。

133号石積土壙（Fig. 42，図版６－38）

Ⅱ面のＣ－３・４区にある石積土壙である。西半分を壊されている。20×40×30cmほどの大きな石を腰石に用い、小ぶりの角礫をその上に積み上げている。掘り方は不明。長さは1.52mである。主軸の方向は座標軸より東に振れ、Ｎ－34°－Ｗである。

350号石積土壙（Fig. 42，図版７－40）

Ⅰ面のＥ－16区で検出した長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.76mの石積土壙である。15～20cm大の角礫を主体に積み上げている。主軸の方向は座標軸より東にわずかに振れ、Ｎ－36°30′－Ｗである。出土遺物には、青花、備前壺（Fig. 43. 211）・大甕などがあるが、これらは壁土などの焼土とともに埋められたものである。

380号石積土壙（Fig. 39，図版７－41）

Ⅰ面のＦ－15区で検出した石積土壙である。長さ1.12m、幅0.8m、深さ0.8mを測る。102号石積土壙と接する。腰石には40×20×20cmほどの大きな石を用い、その上に五段ほど積み上げている。主軸方向は座標軸より東に振れ、Ｎ－28°36′－Ｗである。出土遺物には、青花、色絵、李朝堅手白磁、同陶器、備前大甕、土師皿（Fig. 43. 212）がある。

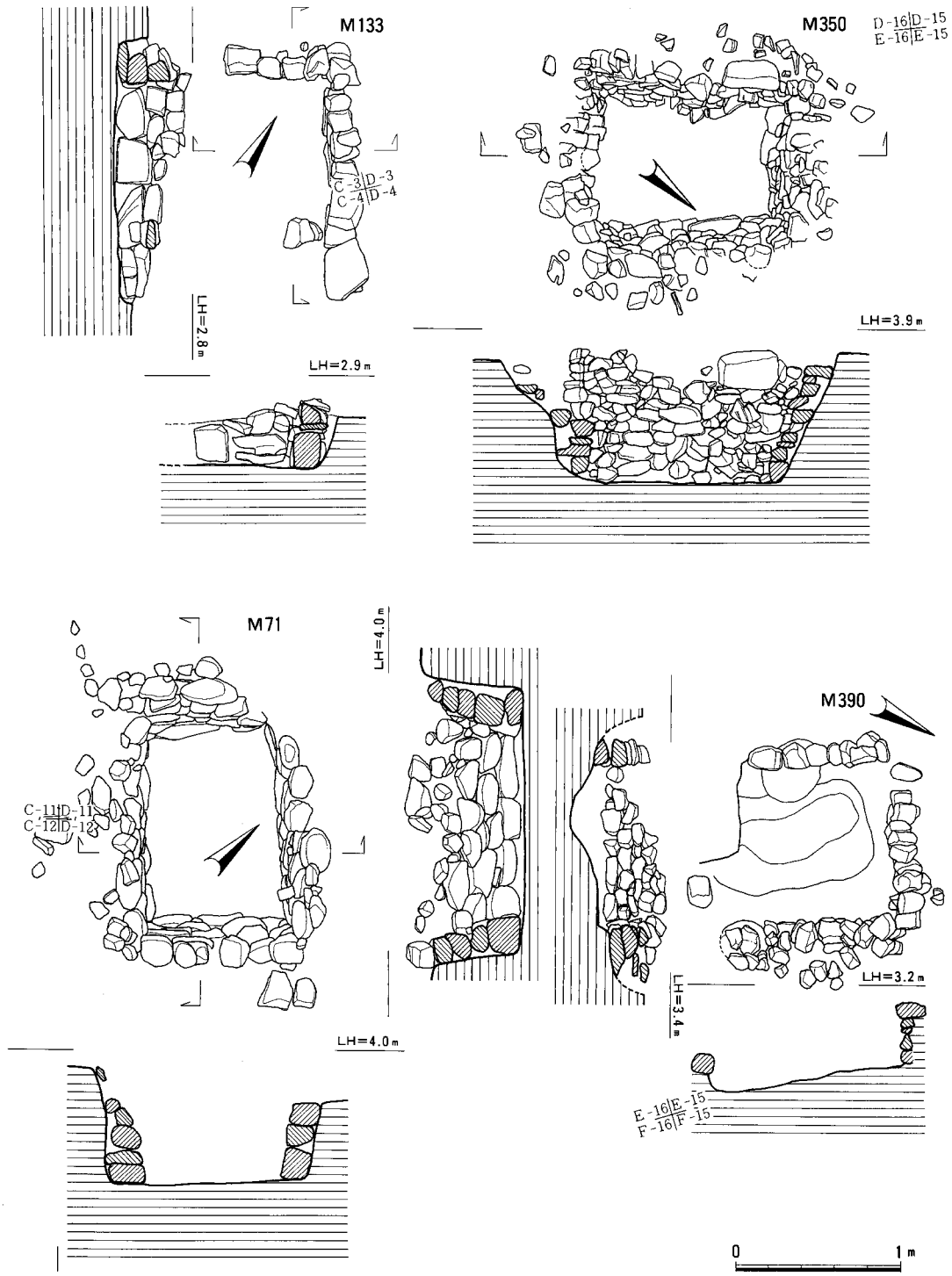


Fig. 42　71・133・350・390号石積土壙実測図（1/40）

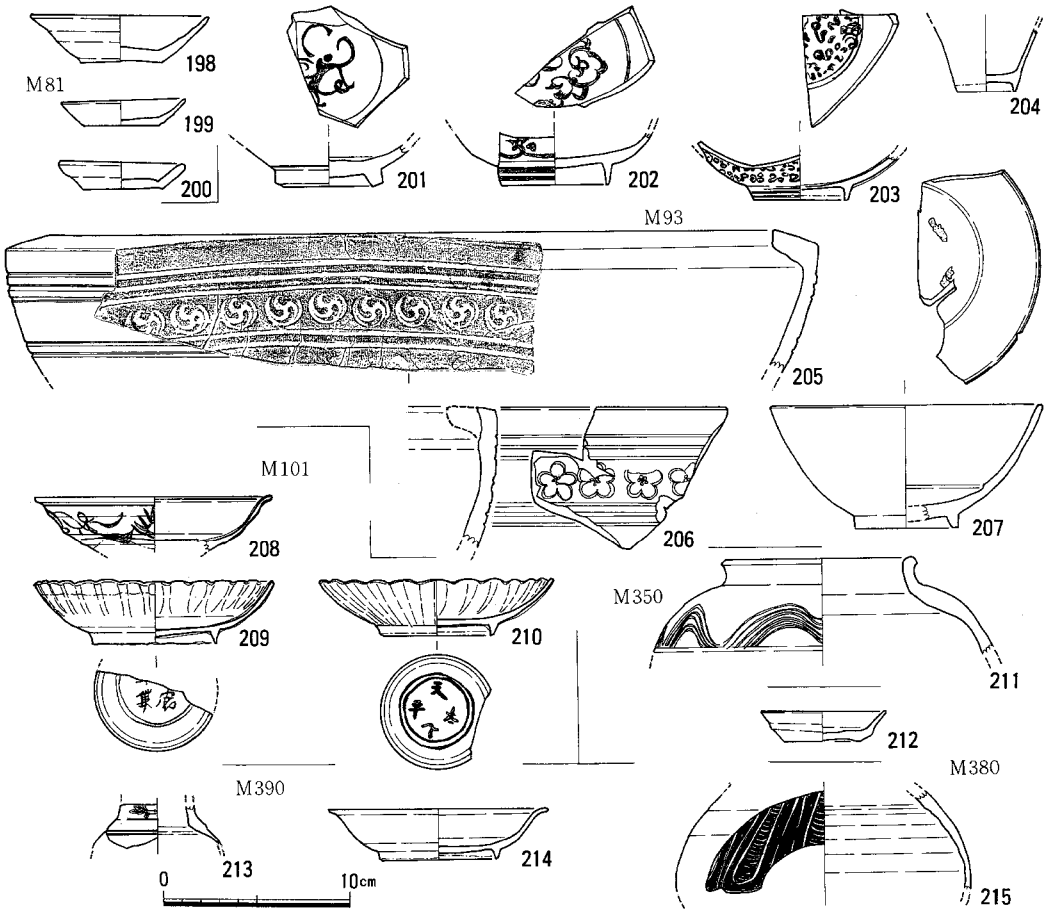


Fig. 43　81・93・101・350・380・390号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

390号石積土壙（Fig. 42，図版７－41・42）

Ⅱ面のＥ－15区で検出した石積土壙である。Ⅲ面への掘り下げ時に発見したため、南辺を破壊してしまった。残り部分で15～20cmほどの角礫を四段ほど積み上げている。主軸方向は座標軸より東に振れ、Ｎ－56°23′－Ｗである。

出土遺物（Fig. 43. 213～215）　213は青花の小型の袋物である。214は端反りの白磁の皿である。215は李朝の象嵌の梅瓶である。176号石積土壙と391号ピット出土品と接合および同一個体がある。

23号土壙（Fig. 44，図版７－43）

Ⅰ面のＣ－２・３区にある長方形の焼土壙である。長さ2.4m、幅1.02m、深さ0.6mである。中には真っ赤に焼けた壁土がぎっしりと詰められていた。主軸の方向は座標軸より、東に振れており、Ｎ－37°24′－Ｗである。

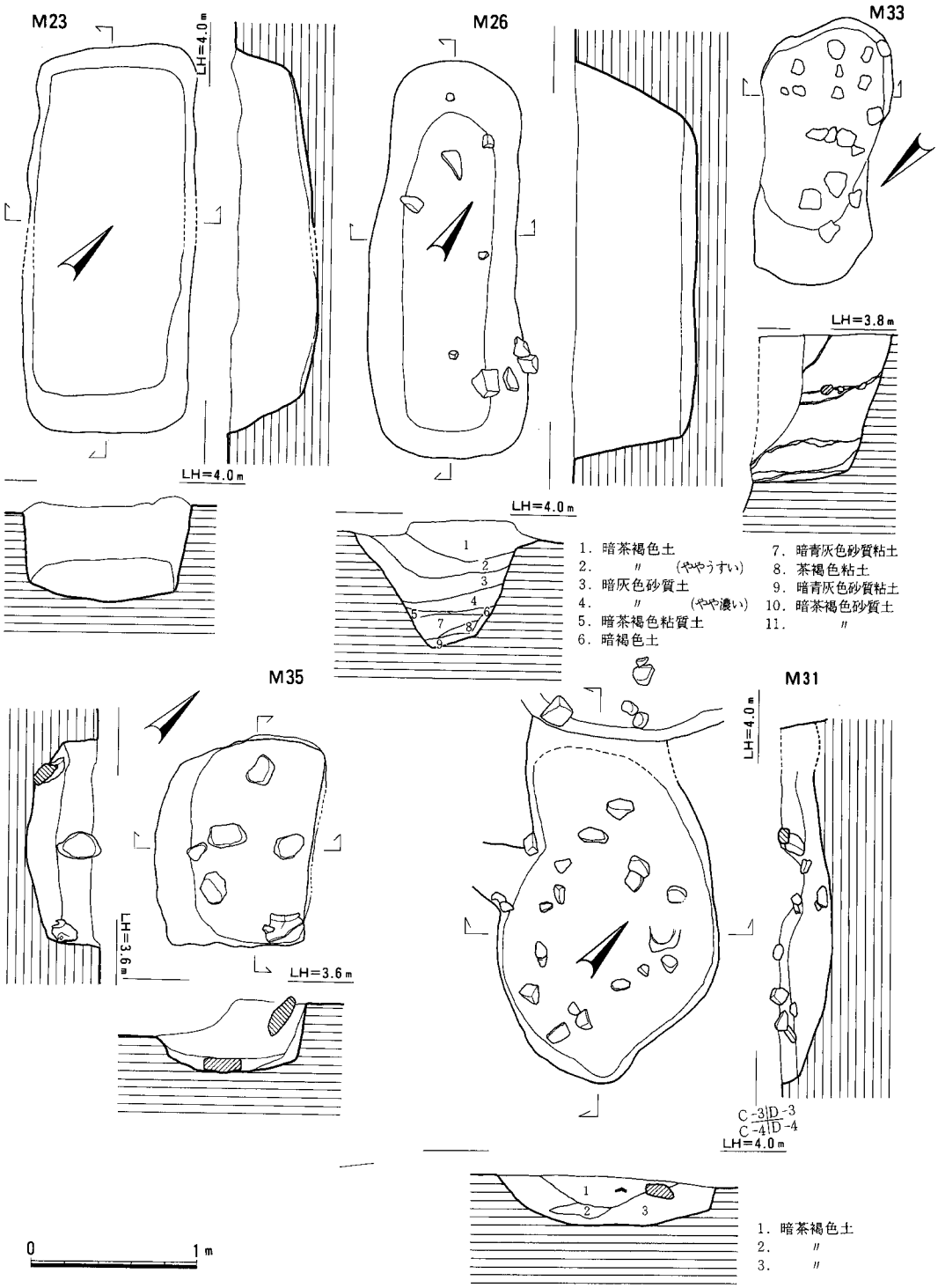


Fig. 44 23・26・31・33・35号土壙実測図（1/40）

出土遺物（Fig．46．216・217）　216は青花のＣ群の碗である。外面は腰に蓮弁帯、その上に唐草文を、見込に花文を描く。217は青花の坏である。この他李朝陶器、土師皿などがある。

26号土壙（Fig．44，図版７－45）

Ｉ面のＣ－１・２区、23号土壙の北に位置する隅丸の長方形の焼土壙である。長さ2.44m、幅0.96m、深さ0.74mを測る。覆土には木炭や焼土を含む。主軸方向は23号土壙とほぼ同じである。

出土遺物（Fig．46．218～227）　218は青花の坏である。器壁はきわめて薄い。219は青花の皿である。見込に十字花文を描く。220は李朝の陶器の皿である。221は高坏形の青花である。外面に唐草文を描く。223～225は土師器の皿、226・227は坏である。

31号土壙（Fig．44）

Ｉ面のＣ－３区にある不整楕円形の土壙である。長さ2.3m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。覆土の上部に焼土・木炭混じりの暗茶褐色土がある。出土遺物には明青花、青磁、白磁、李朝陶器、瓦質擂鉢、備前擂鉢などがある。Fig．46．229は青花の碗で、外面に波濤文、花樹を描く。230は青磁の大皿である。

33号土壙（Fig．44，図版７－44）

Ｉ面のＣ－５区で検出した土壙である。長さ1.66m、幅0.8m、深さ0.9mを測る楕円形を呈する。最上部40cmくらいに焼けた壁土を多量に含んでいた。その下は小礫が20個ほど散乱していており、その下は灰色砂質土の中に炭の層と焼土が薄い層をなしている。Ｖ期の備前擂鉢が出土した。

35号土壙（Fig．44，図版７－46）

Ｉ面のＣ－７区にある長方形に近い土壙で、長さ1.26m、幅0.94m、深さ0.46mである。覆土は黄白色の粘土であり、単なる廃棄物の処理穴とは考えられない。中からタイ産の壺の破片が出土した。

出土遺物（Fig．46．233・234）　233は青花の碗の破片である。界線は呉須で描くが、他は線彫りで花文を描いている。234はタイの四耳壺である。断面が丸に近い口縁部から直接撫で肩の肩部に繋がり、その部分に馬蹄形の太い把手を付ける。数本の沈線がある。赤褐色の軟質の胎土に白濁した釉をかける。他にＶ期の備前擂鉢がある。

54号土壙（Fig．48）

Ｉ面のＤ－14・15区にある円形の土壙である。長さ2.2m、幅2.0m、深さ0.7mを測る。

出土遺物（Fig．46．235～242・Fig．47．243）　235は青花の碗である。見込には囲花状の唐草文を描く。外底には「大明年造」の銘がある。236はＥ群の青花碗である。同じような文様を見込に描く。外底に囲いに字を入れた銘がある。237も青花の碗である。外面に唐草文を描く。238は端反りの白磁皿である。239は大甕の口縁の破片である。暗灰色の粗い胎土である。240は瓦質の壺である。241は備前の甕、242は擂鉢である。Ｖ期に属する。243は饅頭心型の端反のわずか

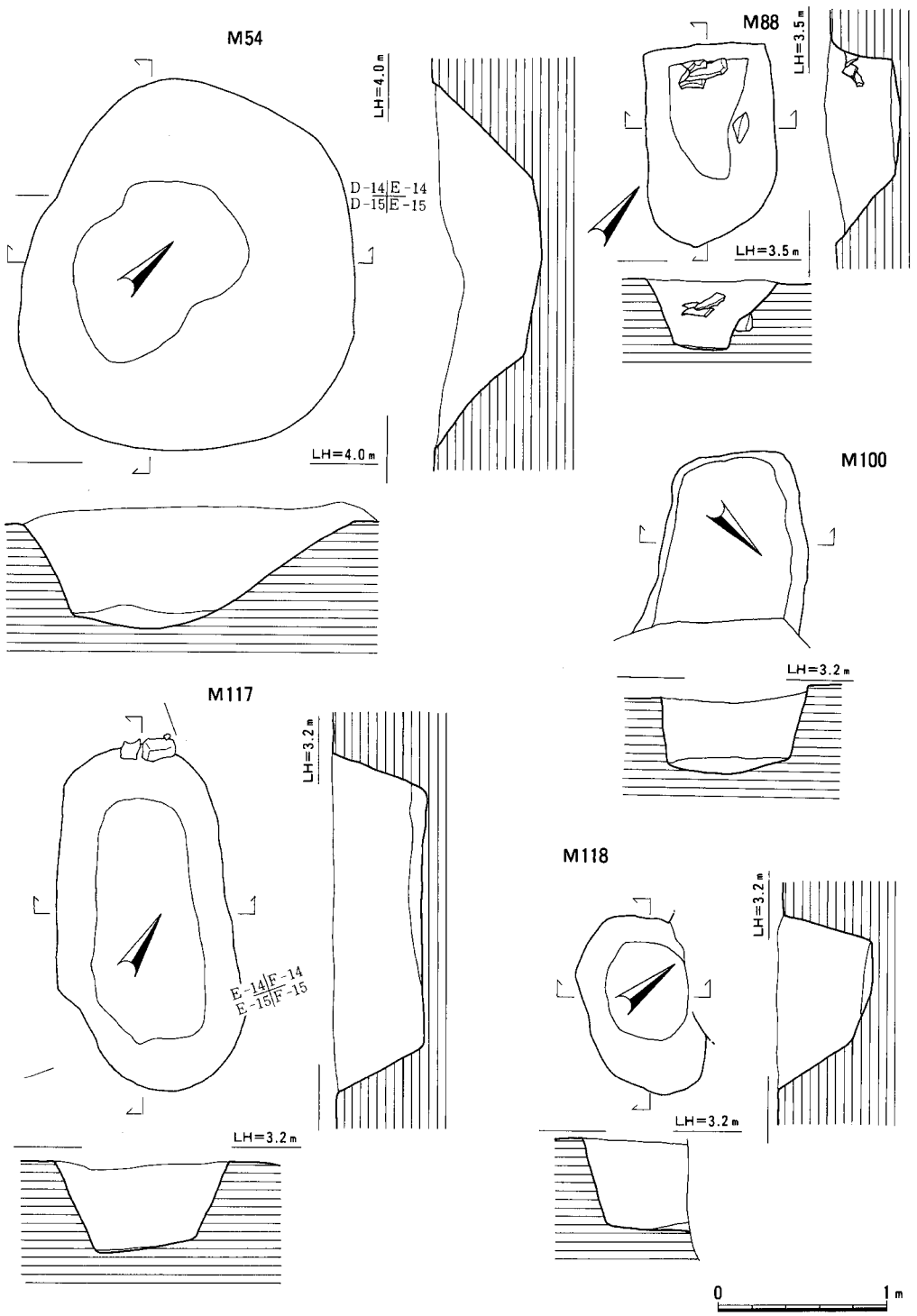


Fig. 45　54・88・100・117・118号土壙実測図（1/40）

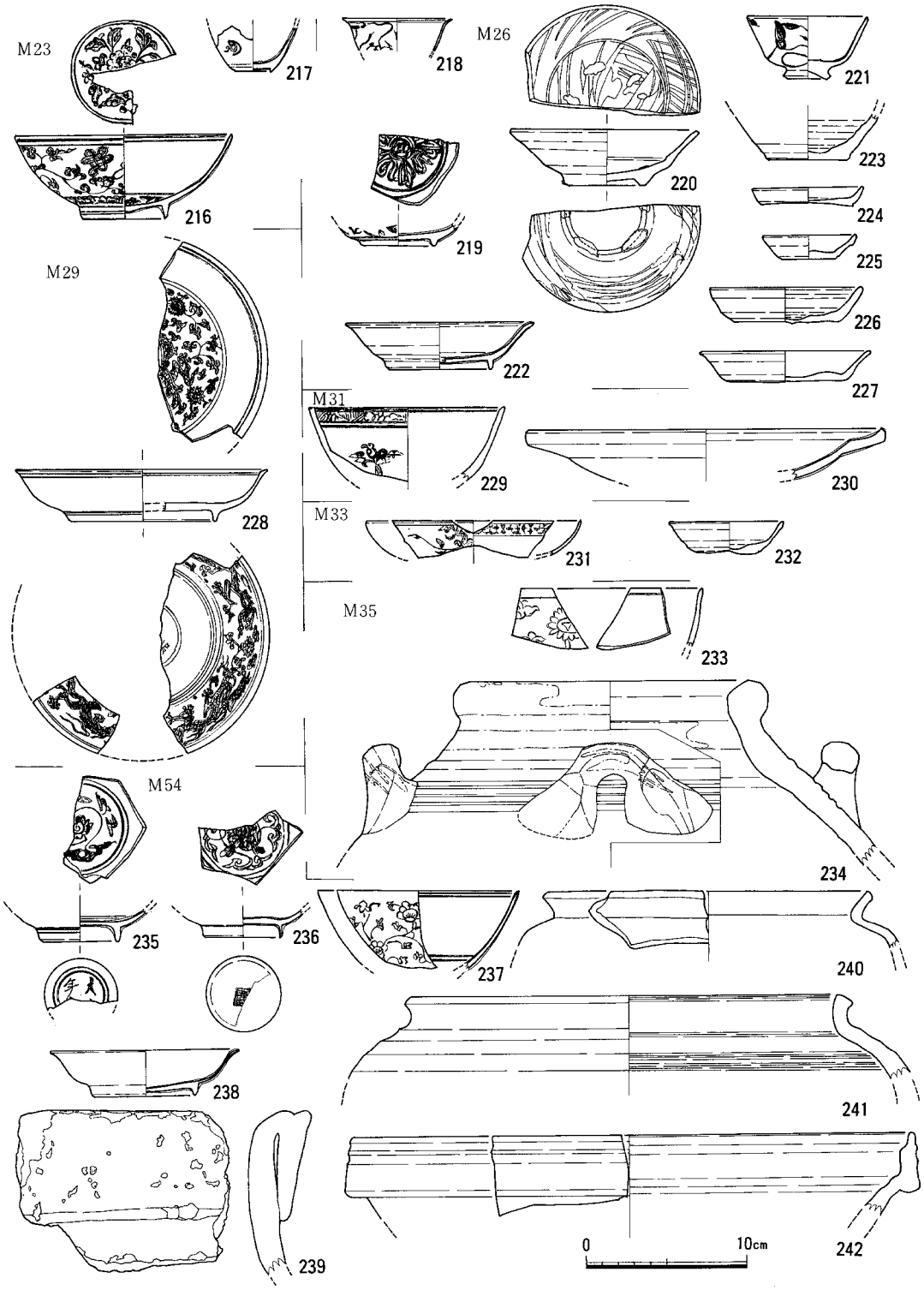


Fig. 46　23・26・29・31・33・35・54号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

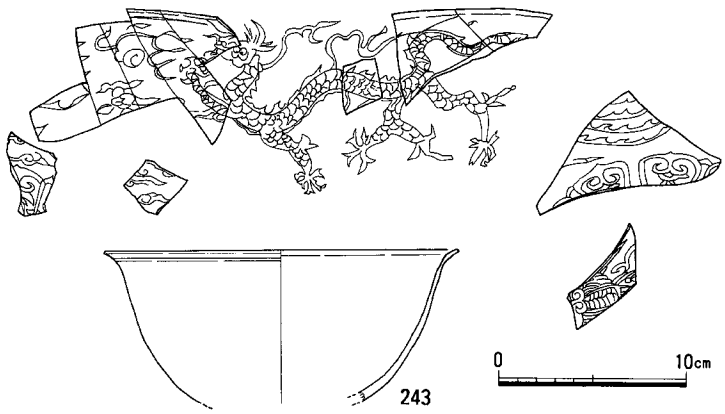


Fig. 47　54号土壙出土白磁碗実測図（1/4）

に青みを帯びた白磁の碗である。外面には腰部にラマ式蓮弁、その上には龍と鳳凰を線彫りで表現している。ほとんどの破片が包含層出土で、焼土BとCの間や焼土C上部から出土している。この他土師皿、土鍋、李朝陶器、黒褐釉・黄褐釉の壺片などが出土した。

63号土壙

Ⅰ面のB－13区で検出した楕円形を呈する土壙である。東半分を破壊されている。現存部で長さ0.94m、幅0.82m、深さ0.2mである。出土遺物には李朝の緑褐釉の陶器（Fig. 49. 245）がある。丸みを帯びた口縁部をもつやや深めの鉢である。口縁部には釉はかからない。底面に貝の目痕が認められる。

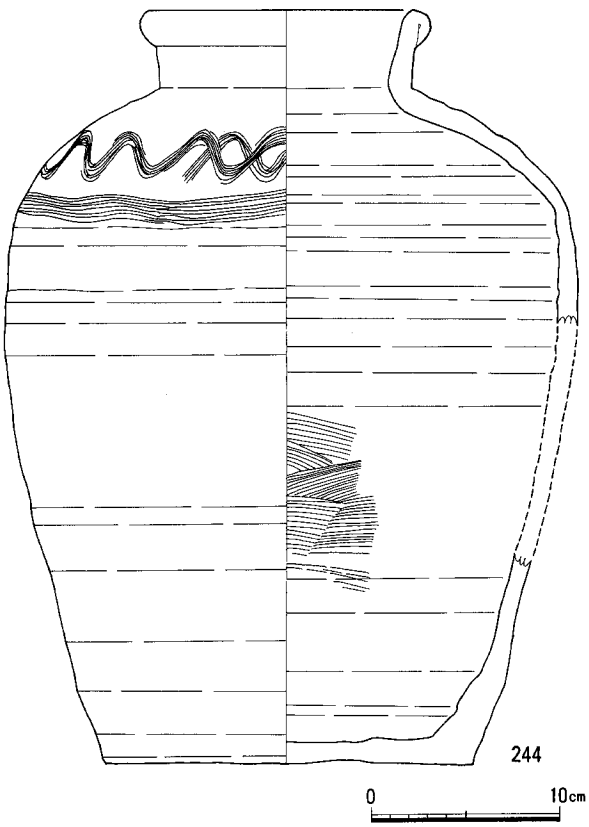


Fig. 48　66号土壙出土備前壺実測図（1/4）

66号土壙

Ⅰ面のF－7区にある楕円形の土壙である。長さ1.48m、幅1.04m、深さ0.73mを測る。出土遺物には備前の壺（Fig. 47. 244）や李朝と思われる灰緑釉の陶器の小壺（Fig. 49. 246）がある。

84号土壙（Fig. 52, 図版7－47）

Ⅱ面のD・E－5・6にある大型の円形の土壙である。覆土には白く焼けたような軽石が入っていた。底面は基盤の砂の層まで達しており、その部分が焼けて黒変もしくは白色化している。北部には礫や鞴の羽口が散乱し、同じような軽石があり、鍛治の遺構である可能性が高い。炉を据えるための防湿の下部施設と考えられる。上部の土からは、李朝の緑

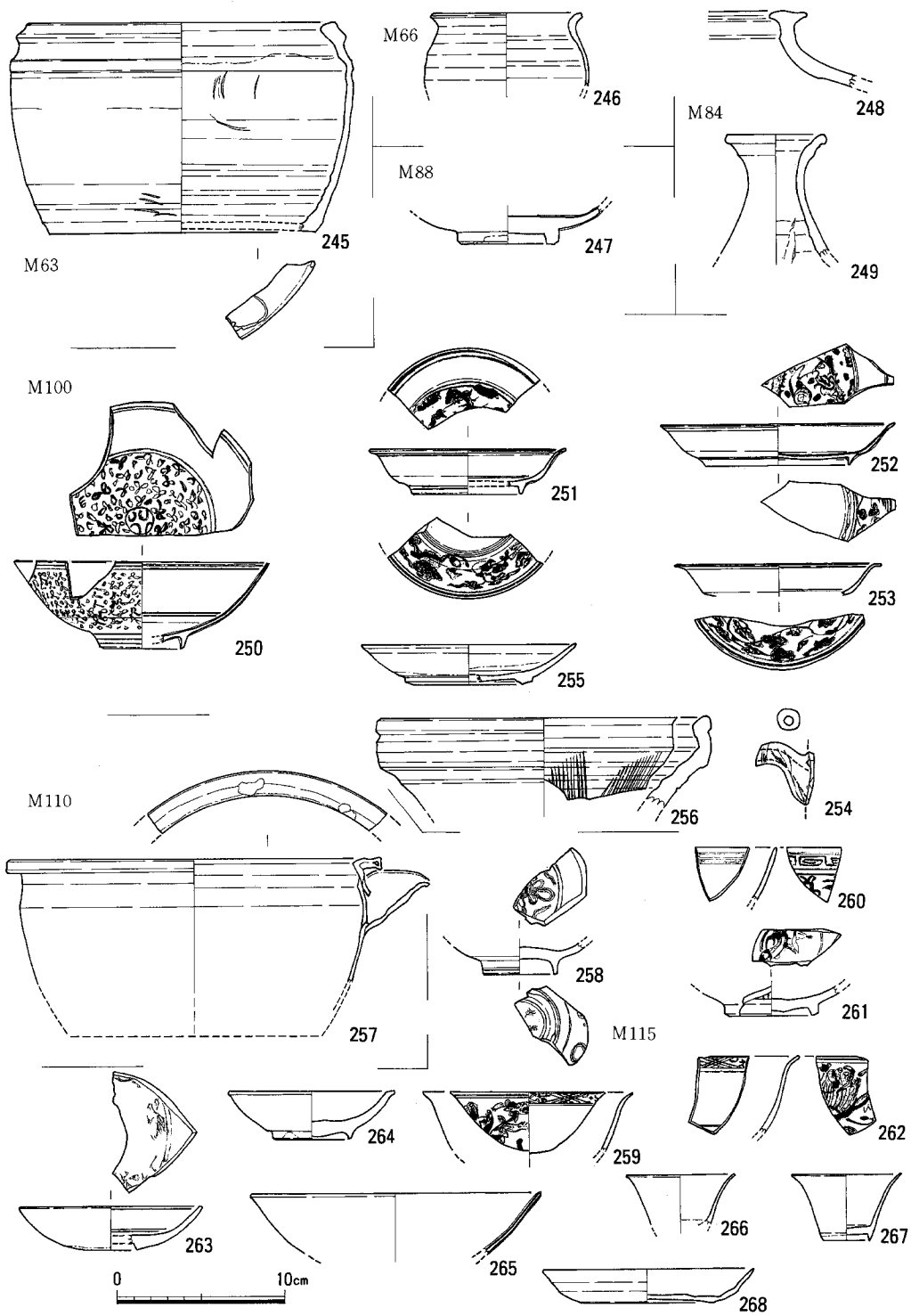


Fig. 49　63・66・84・88・100・110・115号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

褐釉陶器の壺や徳利の破片（Fig．49．248・249）が出土した。この他、底面の南端に臥せた状態で土師の坏が一枚出土した。

88号土壙（Fig．48）

Ⅱ面のＦ－６区にある長楕円形の土壙で、東端は調査区外へ続く。

青磁（Fig．49．247）などが出土した。

100号土壙（Fig．48）

Ⅱ面のＦ－12区にある長方形を呈する焼土壙で、内部には真っ赤に焼けた壁土や木炭が入っていた。東端は調査区外へ続く。

出土遺物（Fig．49．250～254）　250はＣ群の青花碗である。外面と見込に唐草文を描く。251・252はＢ群の青花皿である。251は内外面に牡丹唐草文を描き、252は外面に唐草文、内面は不明である。254は青花の水注の口である。255は白磁の皿である。台形の低い高台と半がけの釉が特徴である。胎土は軟質。256は備前のＶ期の擂鉢である。

110号土壙

Ⅱ面のＣ・Ｄ－12・13区にある大型の土壙であるが、60号石積土壙に半分を切られる。李朝の陶器の片口（Fig．49．257）が出土している。

115号土壙

Ⅱ面のＥ・Ｆ－13・14で検出した隅丸方形の土壙である。長さ1.8m、幅1.6m、深さ0.6mを測る。壁土を多く含んでいた。

出土遺物（Fig．49．258～268）　258は青花Ｅ群の碗である。見込に花文、外底に「蔓福攸同」の銘を書いている。259と262は端反りの青花碗である。内面に四方襷文、外面に龍を描く。260は青花の碗で、外面に雷文帯、その下に花文を描く。261は台形の高台をもつ青花Ｂ－Ⅱ類？の碗である。263は碁笥底の青花皿である。内面に唐草文を描いている。264は端反りの白磁の皿である。265は白磁の碗である。266・267は白磁の外反タイプの坏である。268は土師器の坏である。

116号土壙

Ⅱ面のＥ－12・13区にある大型の土壙で、長さ3.4m、幅2.3m、深さ0.3mを測る。この遺構の下部に176号石積土壙があるため、この窪みを埋めた遺構であろう。藁の焼けたような層や壁土、粘土、焼土が層をなしてレンズ状に堆積していた。

出土遺物（Fig．50．269・Fig．51．278～290）　269の青花の大皿は、破片が118号土壙や28号石積土壙内の下部からも出土している。内外面に牡丹唐草文を描く。278は青花のＣ群碗である。外面に芭焦葉文、見込に蓮華文を描く。280は端反りの白磁の皿である。高台内に呉須で方形の裏銘がある。字は不明。279は碁笥底の白磁皿である。淡いオリーブ色を呈する。281は李朝の堅手の白磁である。282は灰色の柔らかい胎土をもつ李朝の碗である。腰が折れる。283は灰色で軟質

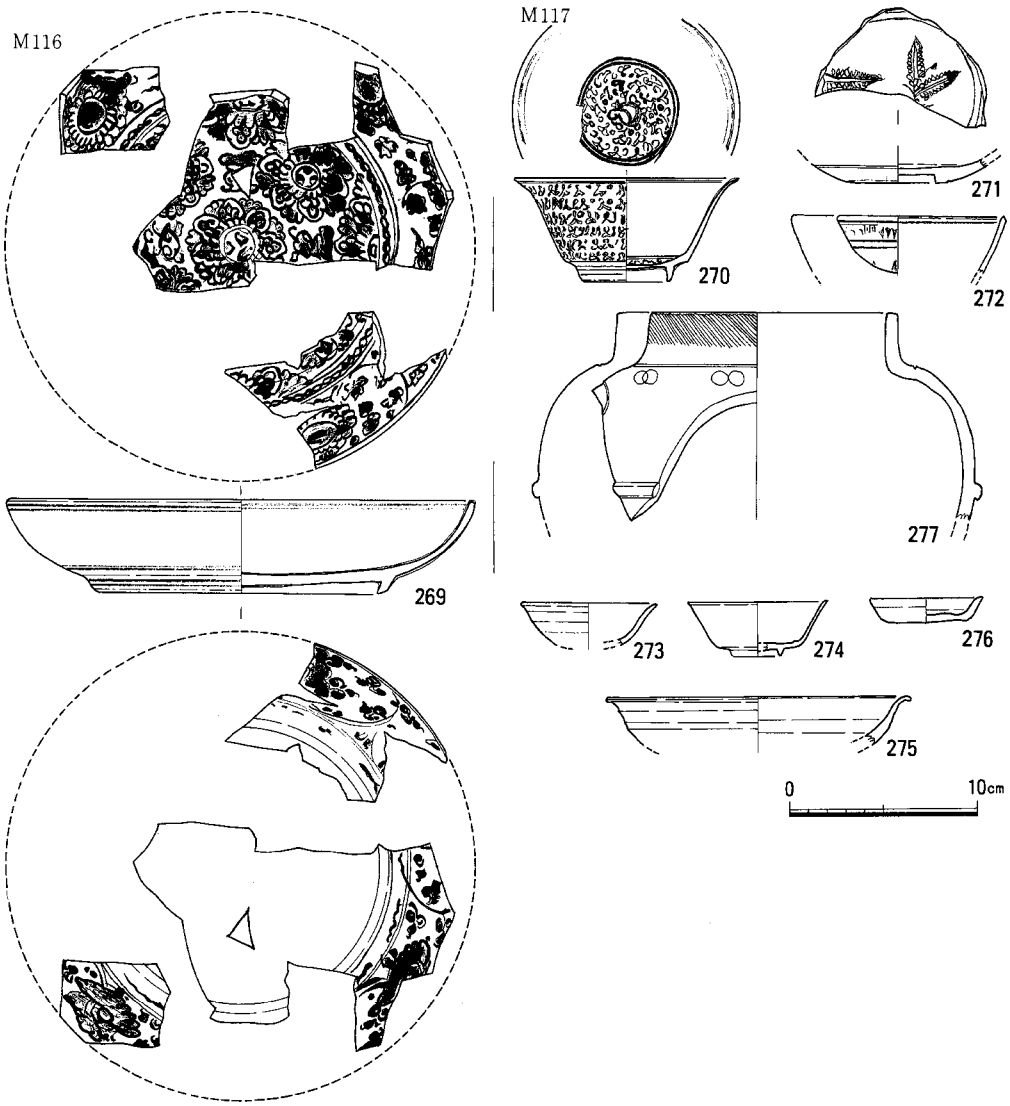


Fig. 50　116・117号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

の胎土をもつ李朝の陶器皿である。284は備前の甕、285は土師の坏、286は土師皿である。287～290は瓦質の茶釜、火鉢、香炉、火鉢か風炉の脚である。スタンプは、287が梅花、288は菊花、290は同心円文である。

117号土壙（Fig. 48，図版８－50）

Ⅱ面のＥ－14区にある壁土の詰まった焼土壙である。平面形は隅丸の長方形である。長さ2.08m、幅1.08m、深さ0.56mを測る。118号土壙と接する。主軸の方向はＮ－27°24′－Ｗである。

出土遺物（Fig. 50. 270～277）　270は端反りの口縁部をもつ青花碗である。外面と見込に唐

草の略化文を描く。271はC群の青花の皿である。見込にねじ花文を描く。272は波濤文と芭蕉葉文を描くC群の青花碗である。273・274は白磁の小碗である。274の見込は輪状に釉をかき取る。275は中国製の白磁の皿である。276は土師皿。277は瓦質の茶釜である。肩部に二連の丸文のスタンプを押す。116号土壙や118号土壙との接合例がある。また、覆土の中位から炭化した米の塊が出土している。

118号土壙（Fig. 48，図版8－50）

Ⅱ面のE－14・15区にある焼土壙である。長さ1.1m、幅0.64m、深さ0.56mを測る。壁土や焼土が詰まる。

出土遺物（Fig. 51. 294～298）　294はC群の青花の碁笥底をもつ皿である。外面に梵字、見込に寿字を描く。295は青花B群の皿である。外面に牡丹唐草文を描く。296は青花のC群の皿である。外面に波濤文と芭蕉葉文を描く。297は李朝の堅手の白磁の破片である。298は備前の壺である。

145号土壙（Fig. 52，図版8－51）

Ⅲ面のB－11区にある長さ2.36m、幅0.84m、深さ0.4mの焼土壙である。長楕円形を呈する。粘土や砂、炭が層をなしていた。

出土遺物（Fig. 51. 299～304）　299は青花のC類の碗である。見込に蓮華文を描く。300は青花のE群の碗である。内外面に花文を描く。301は青花の碗である。302は青磁の皿である。胴部は菊花弁の彫り込みがある。303は白磁の端反りの皿である。304は土師器の坏である。

156・157号土壙（Fig. 52，図版8－52）

Ⅲ面のC・D－13区で検出した円形の浅い土壙である。それぞれ長さ1.3m、幅1.3m、深さ0.28m、長さ1.04m、幅1.16m、深さ0.18mである。内部には炭化物を含む粘土が堆積している。鹿の尺骨などが出土している。

156号出土遺物（Fig. 53. 305～311）　305は青花C群の碗である。外面に唐草文、見込に牡丹唐草文を描く。306は端反りの白磁の皿である。307は軟質の胎土をもつ李朝の皿である。308は灰色の胎土に茶褐色の釉をかける小壺である。二次的に火を受けている。309は外方に直線的に開く口縁部をもつ土師器の坏である。310は土師器の坏、311は皿である。

340号土壙

Ⅰ面のE－18区にある小さな土壙である。長さ0.8m、幅0.56m、深さ0.15mを測る。壁土を多く含んでいる。青花や白磁、瓦質の茶釜（Fig. 53. 312）などが出土した。

366号土壙（図版8－53）

Ⅱ面のE・F－18区にある大型の焼土壙である。調査区外へ続いている。真っ赤に焼けた壁土、焼土で埋められていた。中からは備前Ⅴ期の擂鉢、青花C群碗、李朝陶器、白磁皿、青磁菊皿、色絵大皿（Fig. 53. 313)、青花の鉢（314）などが出土した。313は内面に赤、黄、緑などの

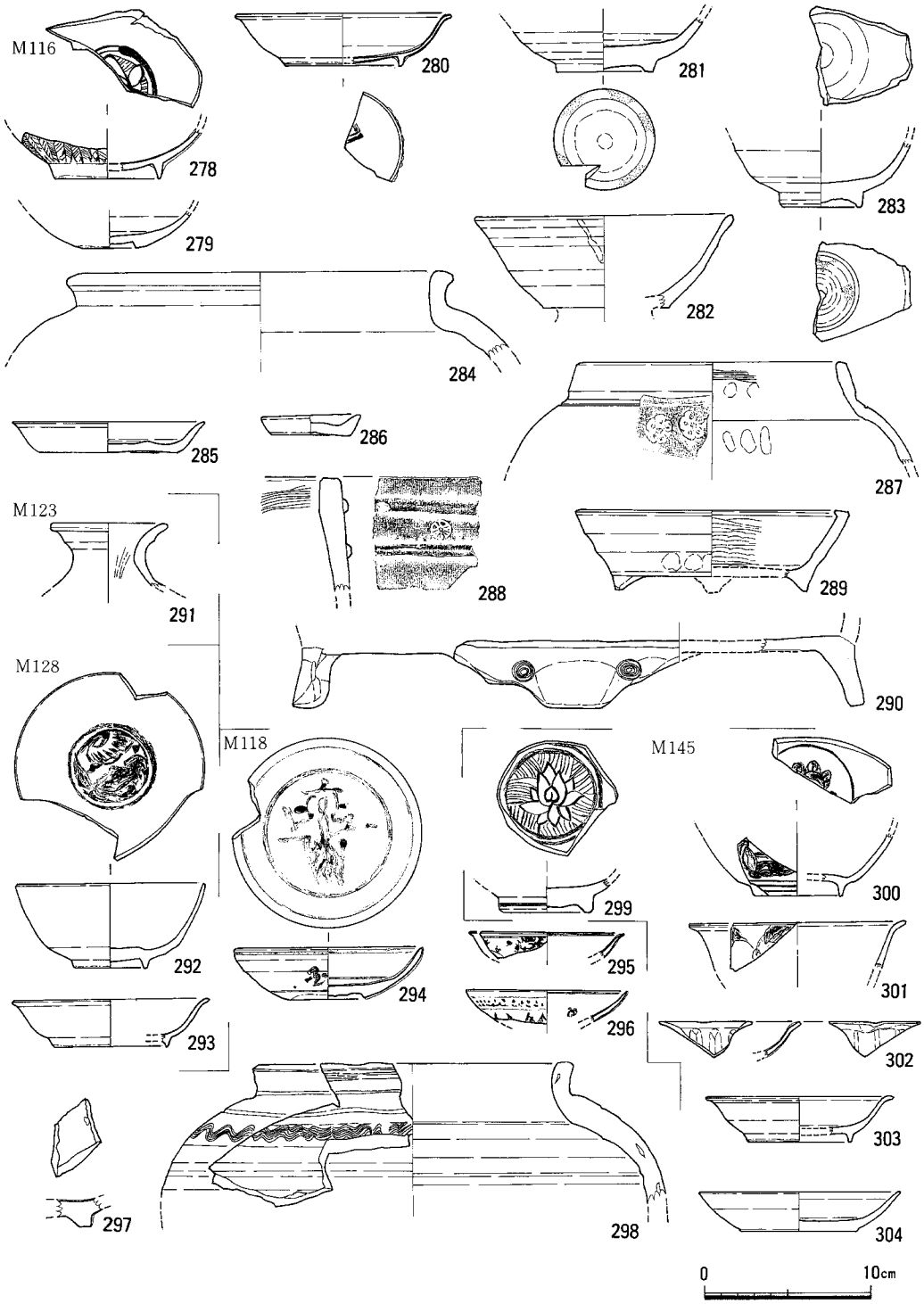


Fig. 51　116・118・123・128・145号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

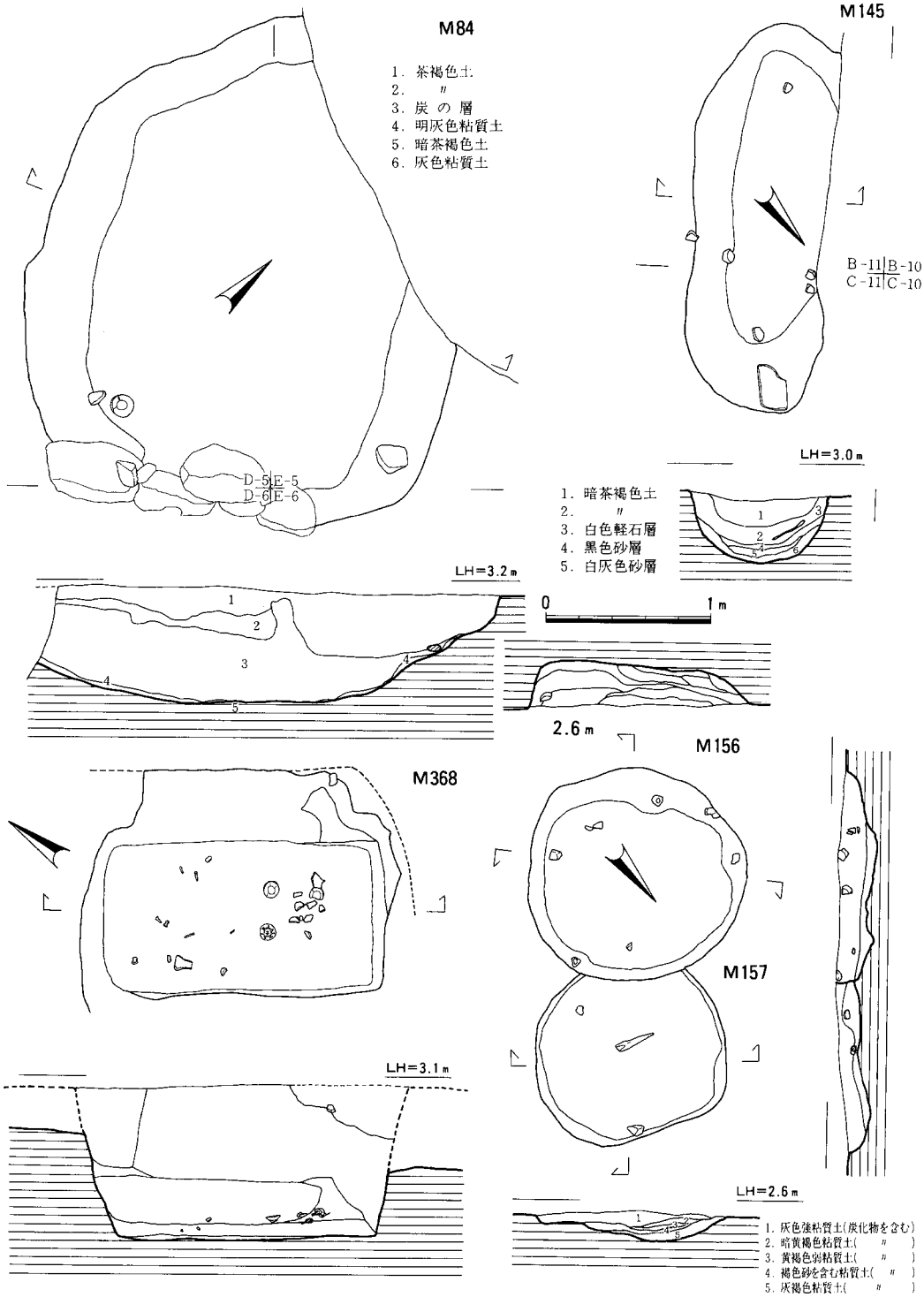


Fig. 52　84・145・156・157号土壙・368号墓実測図（1/40）

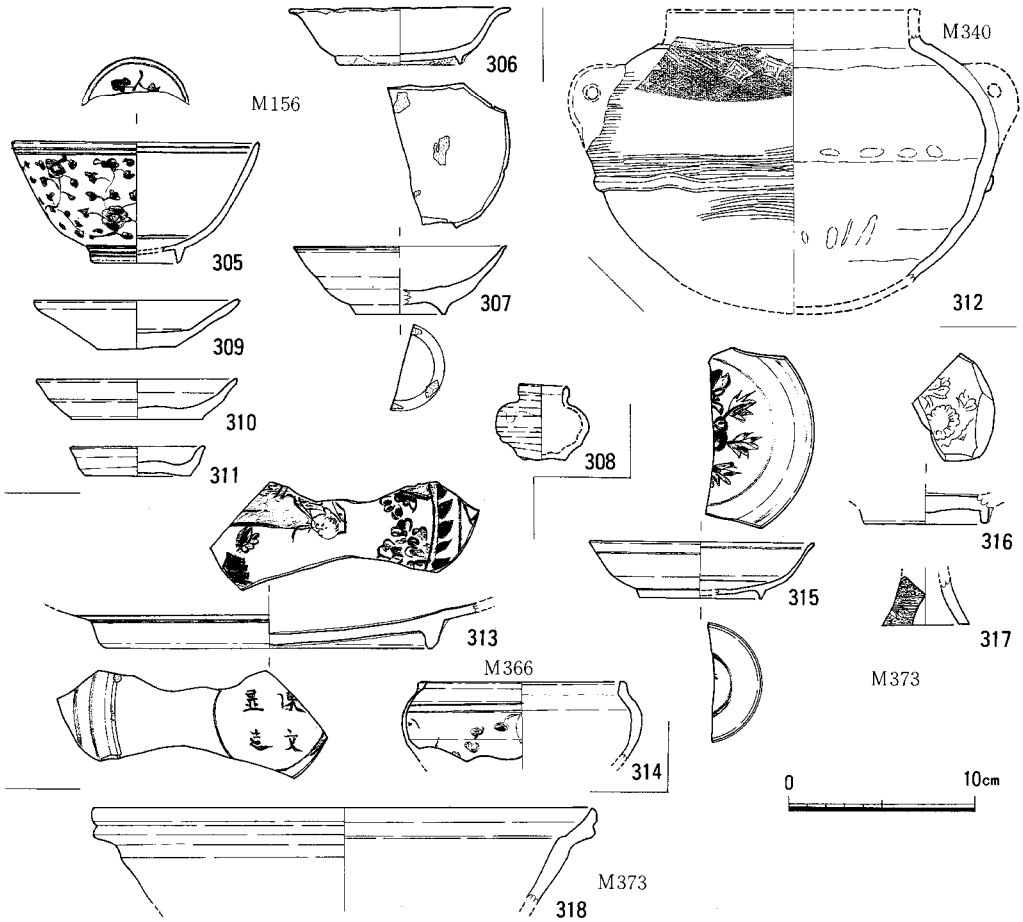


Fig. 53　156・340・366・373号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

絵の具で樹石とその下に仙人を描いている。外底には赤で円圏線内に「陳文显造」の銘を書く。

373号土壙

Ⅱ面のA・B－15・16区で検出した長さ2.0m、幅1.6m、深さ0.3mの楕円形の土壙である。焼土を含む茶褐色土がレンズ状に堆積しており、整地層の一部であろうか。

出土遺物（Fig. 53. 315～318）　315は青花のE群の皿である。内面に団花状唐草文、外底に銘を描く。316は青磁の碗で、見込に花のスタンプがある。317は李朝の粉青沙器の瓶であろう。318は土師質の擂鉢である。

368号墓（Fig. 52，図版8－54・55、9－56）

Ⅱ面のE－17・18区で検出した、長方形の墓である。半分を攪乱により破壊されていた。墓内の埋め土は焼けた壁土を含む暗赤褐色の土で、焼土B層の上面では明確なプランは摑めなかった。このため遺構の掘り込み面が焼土B層の上か下かは、不明である。しかし、覆土の状態から

みても、B層と一緒にならされ、埋められた可能性が高い。調査当初、焼土壙と思い込み精査を怠ったため、棺の高さやプランは把握できなった。床面近くなって青花皿と白磁皿が並んで出土するに至って墓と認識した。釘や副葬品と思われる分銅、銅製飾り金具、鉄斧や土師皿の位置も荒れた状態で、原位置を保っているかは不明である。土師皿の枚数にしても、精査を始めた時点からのもので、坏二枚、皿六枚ほどと確証は得ていない。

出土遺物（Fig. 54. 319～334）　319は「五匁」、320は「壱両」、321は「参両」、322は「肆両」の銅製の分銅である。319と320は出土位置不明。319は太鼓形で、他は繭形である。いずれも、中空の型の中に重り（鉛）を詰めており、詰め穴を塞いだ痕がある。320の上には径1mmほど

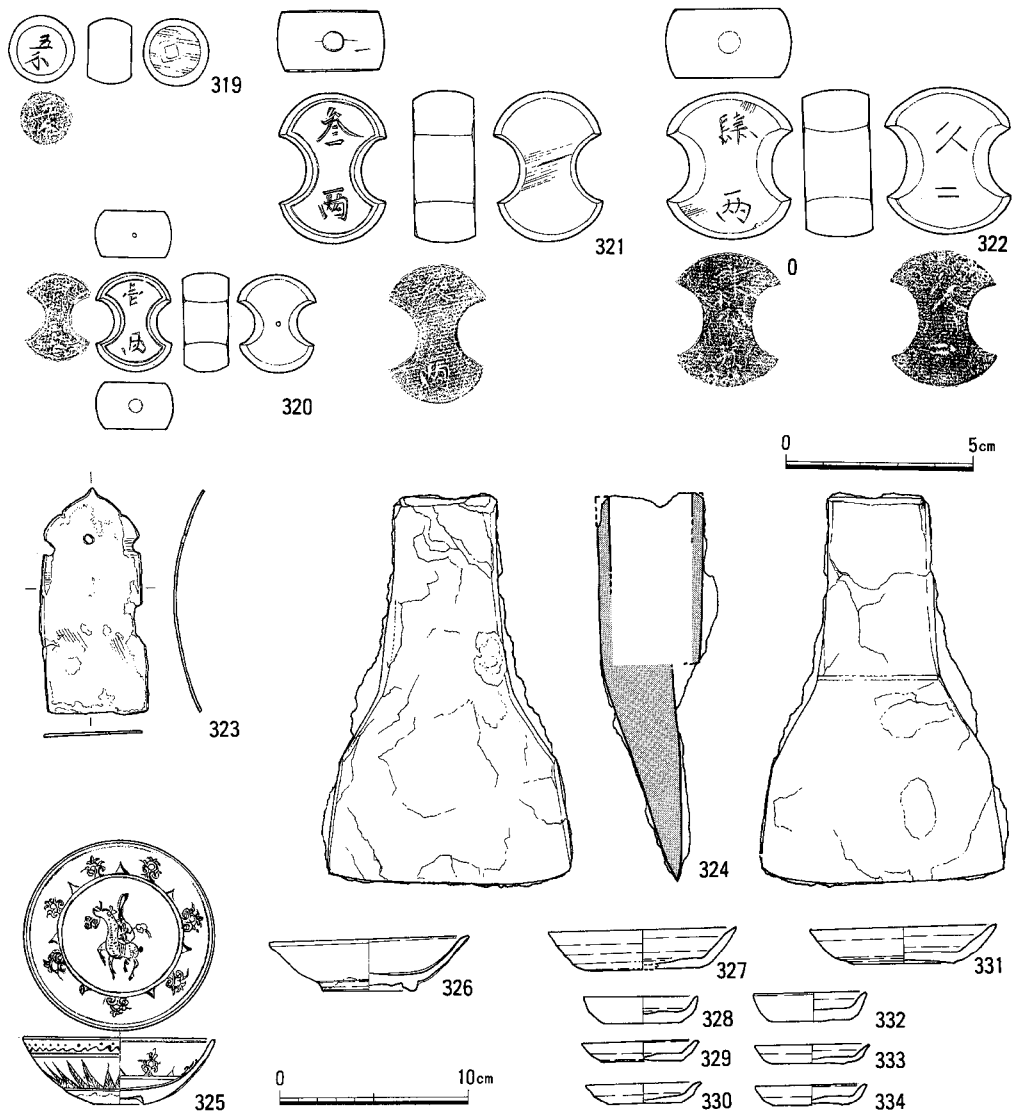


Fig. 54　368号墓副葬品実測図（1/2・1/4）

の穴があいている。320と321には圏線を巡らす。字の彫刻は楔一本で楷書を表現しているが、321のみ複線である。322はプロポーションがややずんどうで、他の繭形分銅と異なる。また、裏面に「久二」と刻んでいる。質量は、それぞれ、18.560 05g、22.965 395g、110.838 74g、147.676 38gである。一両換算で、約37gであるが、320のみ約23gと軽い。上部の穴につまみでも付けて、天秤の重りとして使用されていた可能性もある。323は銅製の飾り金具で、薄く湾曲している。先端は宝珠形をしており、その中央に穴がある。外面に金が見える。324は鉄製の手斧である。柄を挿入するための方形の袋部を作る。重量は313gである。325は青花の皿で、碁笥底のC群に属するものである。外面に波濤文と芭蕉葉文、内面にアラベスク文と鹿に乗った人物を描いている。326は端反りの白磁皿である。高台が台形に作り出される。外底は橙色に発色している。327と331は土師器の坏、328～330・332～334は皿である。

この墓の時期であるが、副葬された青花や白磁の年代観からすれば、15世紀末から16世紀の初め頃と考えられる。しかし、埋め土内に他の新しい時期の遺構と同一個体が存在することや、分銅の年代観からしても、やや古すぎるきらいがある。銘々器の伝世も考えて、16世紀の中頃に比定しておきたい。

52号井戸（Fig. 55，図版9－57）

Ⅱ面のA・B－14区にある井戸である。当初土壙と考えたが、後に120号井戸となる。掘り方は長さ2.7m、幅2.8m、深さ3.8mである。六段ほどの桶が確認できた。

出土遺物（Fig. 56. 335～343）　335はベトナムの鉄絵の碗である。内面に草花文を描く。336は青花B－Ⅲ類の皿で、軟質の黄白色の胎土に太い線で界線のみを描く。見込には釉がかかっていない。337は青花B－Ⅲ類の碗であろうか。外面に松葉状の線文、見込に字の文様を描く。338は内弯する口縁部をもつ白磁の皿である。339は備前と思われる陶器の鉢である。340は土師器の坏である。341は焼締の陶器で、口縁部に雲に似た文様のスタンプを押す。342は瓦質の擂鉢であるが、胎土には砂粒を多く含んでいる。343は瓦質の火鉢である。外面に二連の菱文のスタンプを押す。

119号井戸（図版9－58）

Ⅱ面のE・F－11・12区にある円形土壙で、108号と同じく井戸の掘り方と考えられる。直径は2.4mほどである。覆土は、壁土、焼土、炭などがレンズ状に堆積していた。井戸枠は検出していない。

出土遺物（Fig. 57. 344～386・Fig. 58. 387・388）　344～351は青花、352・353は白磁、354・355は青磁、356・357は李朝、358・361・362・387は備前、359・360は中国陶器、363～384は土師坏・皿、385・386は瓦質土器である。344・345は青花のD群の碗である。外面・見込とも梅月文を描く。同一個体であろう。346はC群の碗で、見込に法螺貝、外面に芭蕉葉文を描く。347～349はB群の皿である。外面に牡丹唐草文を配し、見込には玉取獅子、十字花文などを描

く。352・353は端反りの皿である。354は香炉、355は大皿である。火を受けて変形している。356は白磁の皿で、軟質な黄白色の胎土をもつ。357は緑褐釉の徳利の口である。359・360は壺である。358は壺、387は大甕、361・362は擂鉢で、Ⅳ期に属する。363～366は胎土が洗練され、薄く仕上げられた外来系の土師器の坏である。384のような身の深い器形もある。385は器形が不明で、内面に刷毛目を残し、外面に凸帯と円文のスタンプがある。逆に肩に相当する部分の可能性もある。386は火鉢の胴部である。その胎土の質からみてFig. 43. 205と同一個体である。388は瓦質の甕である。胴部外面に四本の沈線のヘラ描き文がある。

138号井戸

Ⅲ面のC－2区で検出した井戸である。井戸枠は検出できなかった。四つの井戸が切り合っている。139号井戸を切る。

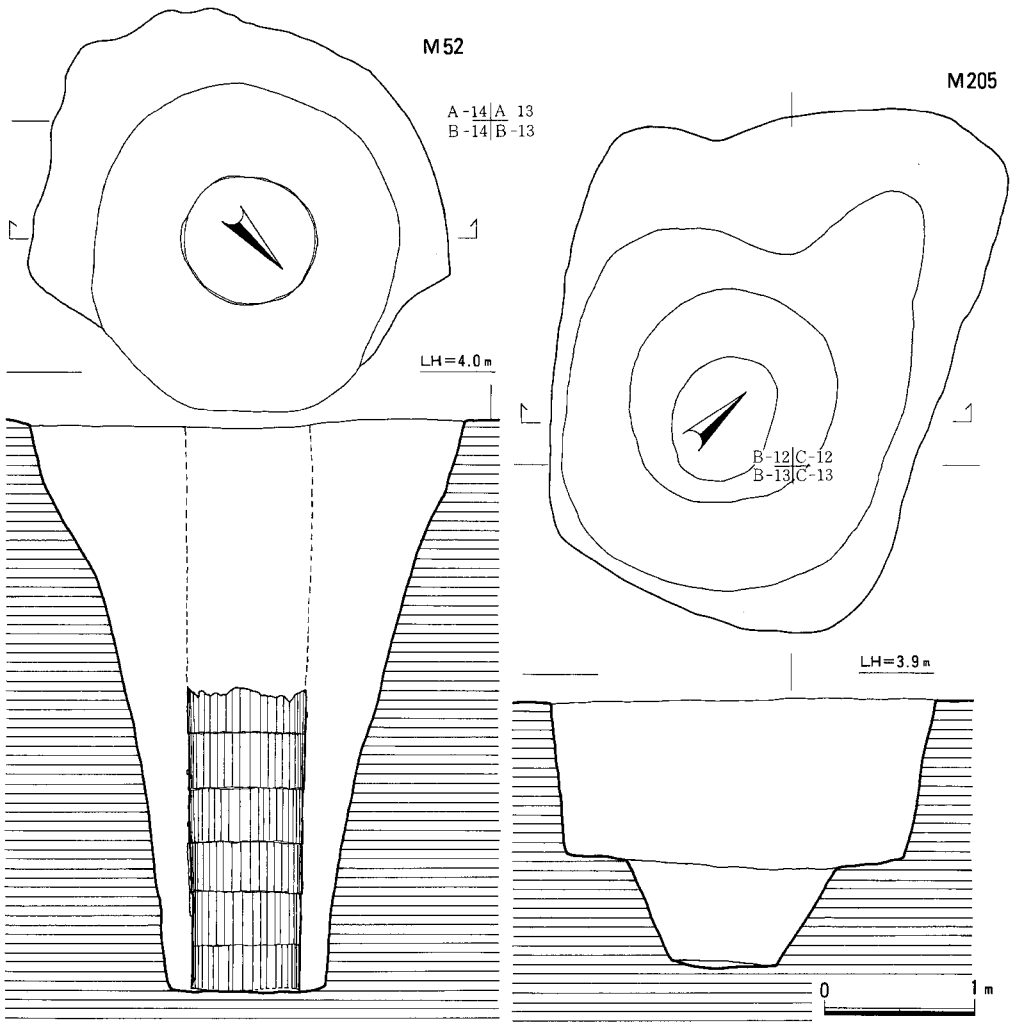


Fig. 55　52・205号井戸実測図（1/50）

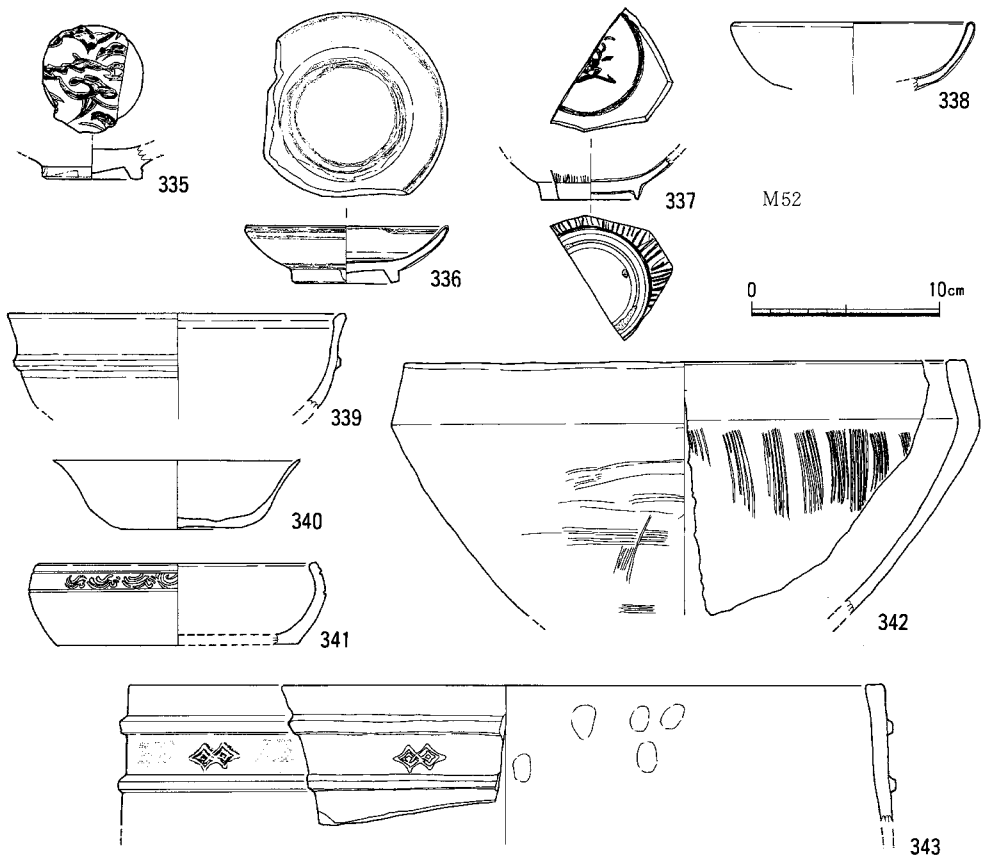


Fig. 56　52号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

出土遺物（Fig. 58. 389～391）図示した資料はすべて瓦質土器である。389・391は火鉢の破片で、S字文や梅花文のスタンプがある。390は長方形になると思われる香炉の破片である。口縁外面に三重の亀甲文のスタンプを押している。この他、李朝陶器、青花、備前のV期およびⅣ期末の擂鉢が出土している。

205号井戸（Fig. 55，図版9－59）

Ⅲ面のB・C－12・13区で検出した井戸である。掘り方の規模は長さ3.9m、幅2.6m、深さ1.8mである。井戸枠は検出できなかった。Ⅱ面で確認した113号土壙は瓦や壁土、礫、焼土などがぎっしり詰まっており、この井戸の掘り方の遺物と接合することから、同じ遺構と思われる。113号土壙からは、青花E群の碗、灰白磁菊皿、白磁や青磁の端反り皿、ベトナム鉄絵盤？、備前のV期の擂鉢などが出土した。205号井戸からは、青花のC群碗（Fig. 58. 392）やE群碗（393）、色絵皿、青磁細蓮弁碗（394）、灰白磁碁笥底皿、李朝碗、瓦質茶釜などがある。392は外面に唐草文を描く。393は見込に童子と風景、外底に「求保長春」の銘を書く。

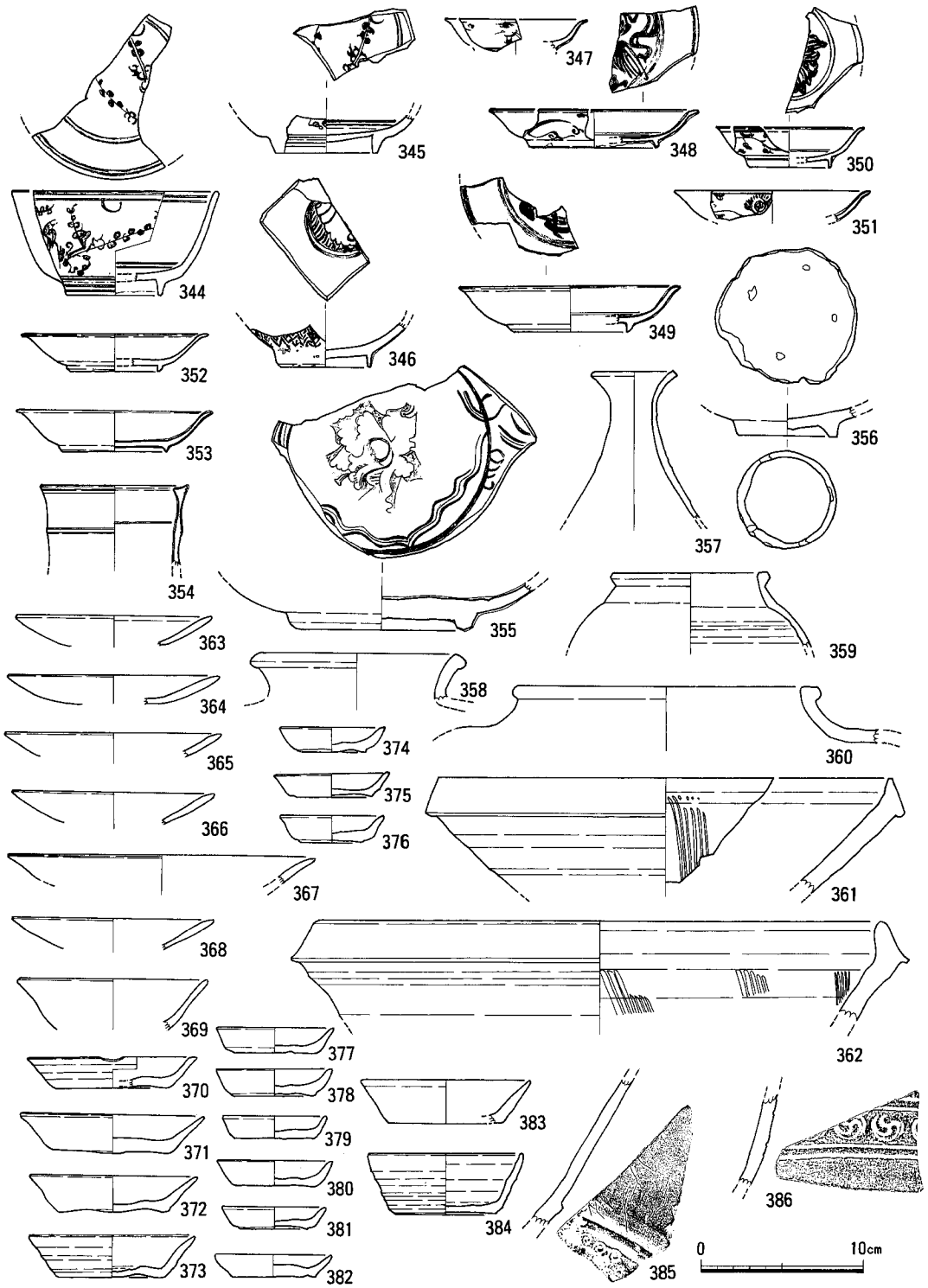


Fig. 57　119号井戸出土陶磁器実測図（1/4）

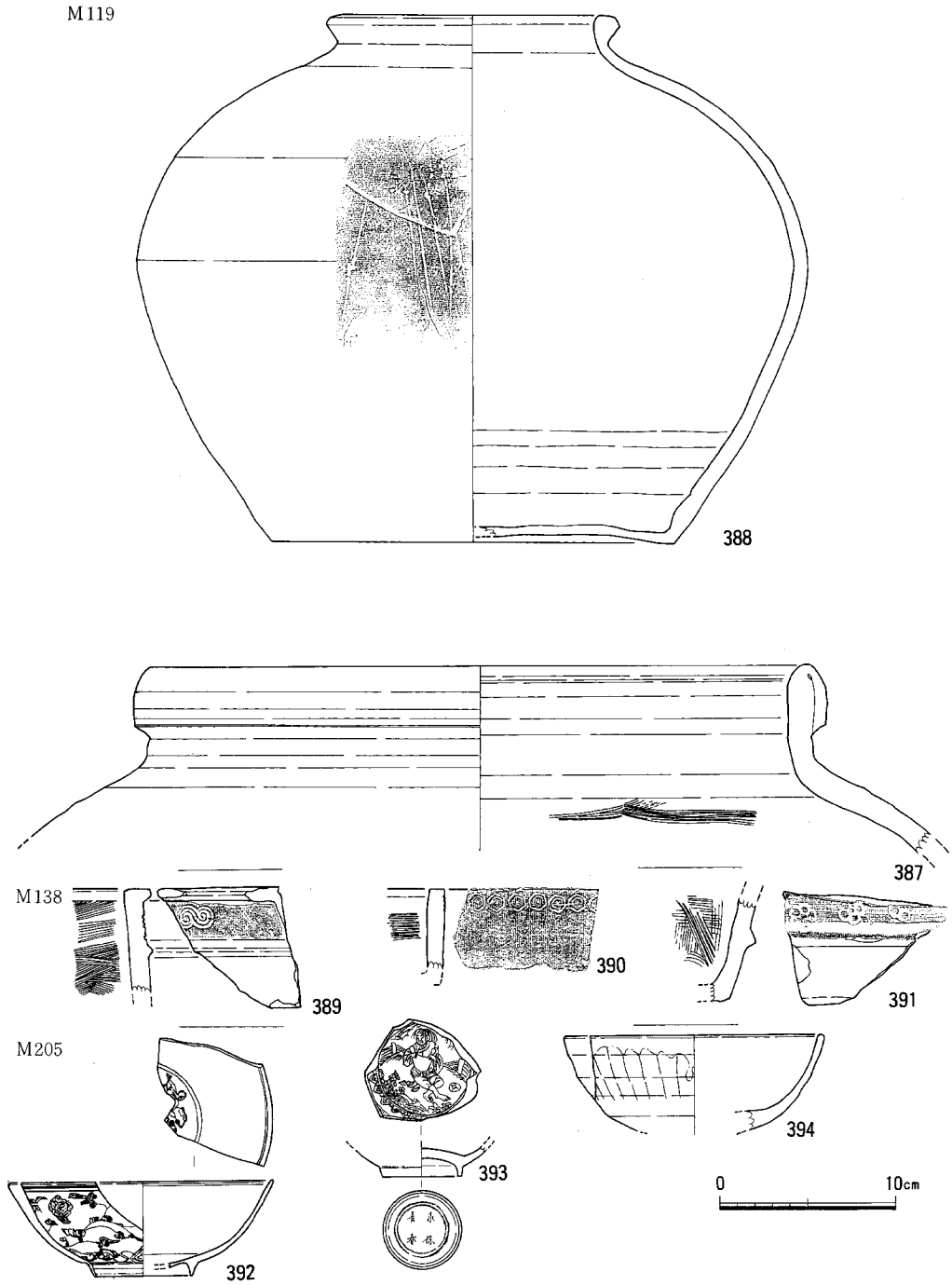


Fig. 58　119・138・205号井戸出土陶磁器実測図（1/4）

この他、この時期に属する遺構は以下のとおりである。

〈Ⅰ面検出〉

65・70・363号石基礎（集石）、22・30・37・48・52・58・64・68・344・345・347・352・354・356号土壙

〈Ⅱ面検出〉

367・369号石組遺構、76・87・91・92・121・128・371・373・374・375・376・379・381・382号土壙

〈Ⅲ面検出〉

224号石組遺構、143・144・147・173・202・393号土壙、119号井戸、209号柱穴

(4)　4期の遺構と遺物

この時期に属する遺構は、溝1基、石積土壙4基、石組土壙1基、土壙17基、井戸4基、柱穴4個である。

122号石組土壙（Fig. 62）

Ⅱ面のC－14区で検出した底に石列をもつ長方形の土壙である。土壙の落ち込みは114号石積土壙の西側に先に確認していたが、これを掘り下げると長方形の土壙と内部に礫が一段配列してあった。石列の規模は長さ1.4m、幅1.12mである。北東角には石の上に乗せた長さ30cm、径5cmの木杭が残っており、このような木は土壙の四隅にあった可能性がある。おそらく石の上は板を貼っていたと考えられる。主軸の方位はN－46°－Eである。

出土遺物（Fig. 60. 395～397）　395は青花C群の碗ある。見込に蓮華、外面に芭焦葉文を描く。396は李朝の白磁の皿である。397は瓦質の擂鉢である。これらは、上部の埋土中から出土したものである。この他に備前のV期の擂鉢、赤絵、端反りの白磁皿、灰白磁碁笥底皿などが出土している。このため、遺構の切り合いからみて114号石積土壙より古いものとして、この時期に入れているが、若干新しくなる可能性もある。

175・176号石積土壙（Fig. 59，図版9－60，10－61）

Ⅲ面のD・E－12・13区で検出した石積土壙である。175号・176号ともに方位は、座標軸より、東に振れ、N－31°42′－Eである。175号は最下の腰石部分しか残っていなかった。80×50×60cmほどの大きな石を「コ」の字形に並べている。南半分はおそらく176号石積土壙を作る際に破壊されたと考えられる。土師皿が二枚廃棄してあった。現存部分で長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.54mを測る。床は堅くしまる。176号は北辺が腰石の上一段まで残存している。他は腰石のみが残っている。腰石は大きいもので60×50×50cmほどである。南辺は石が無く、抜き取られたのであろうか。長さ2.0m、幅0.92m、深さ0.68mである。

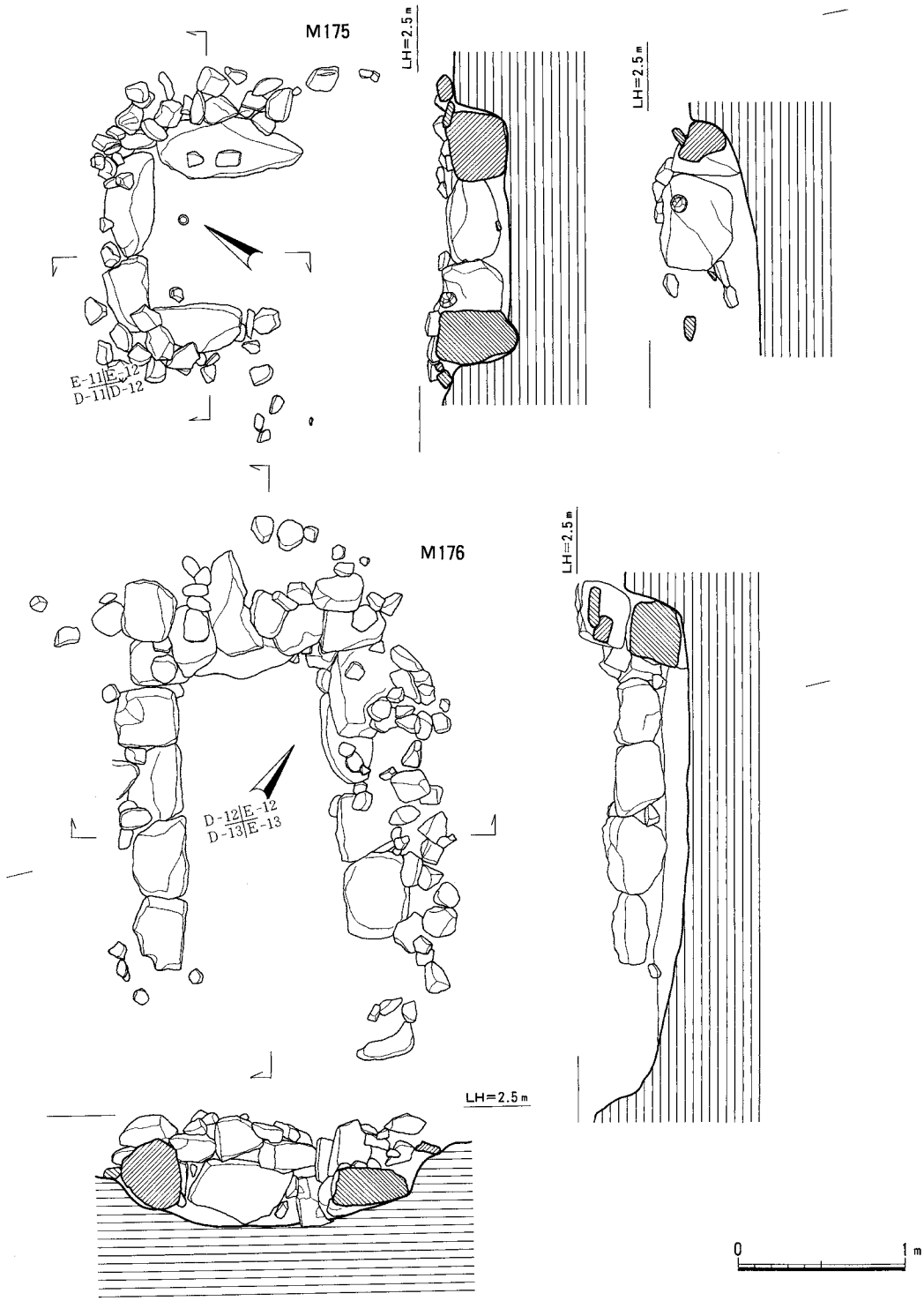


Fig. 59　175・176号石積土壙実測図（1/40）

176号出土遺物（Fig. 60. 398～401）　398は青磁の碗である。片切彫りの蓮弁文があり、15世紀初め頃の年代のものである。399は土師皿、400は耳皿である。401は備前のⅣ期の後半の擂鉢で、おおよそ15世紀後半のものである。175号の出土遺物に明染付の小片があることから、この時期に入れているが、５期まで遡る可能性もある。

365号石積土壙（Fig. 61，図版10－62）

Ⅱ面のＤ－15・16区にある石積土壙で、長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.8mを測る。腰石は50×60×40cmほどの大きな石を用い、その上は次第に小さな礫を積み上げている。覆土は、上から茶褐色の締まりの悪いフカフカの土、薄い黒色の炭層、最下部が灰茶褐色の粘質土である。下の二枚の層はこの遺構が活用されていた時の堆積土で、最上部の層は埋められ、廃絶される時の整地層の一部であると考えられる。主軸の方位はＮ－62°－Ｅである。

出土遺物（Fig. 60. 402・403）　402は李朝の緑褐釉の陶器の鉢である。内面に同心円の、外面に平行（一部に格子）の叩き痕が認められる。403は華南三彩陶器の鴨形水注の頭の部分の破片である。型合わせの部分から割れている。402は下部の粘質土、403は上部の埋め土から出土した。この他、青花、青磁、瓦質火鉢、土鍋がある。

370号石積土壙（Fig. 61，図版10－63）

Ⅱ面のＥ－15・16区にある長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.8mの石積土壙である。東西辺は最下段に40cm角の大きな石を三個並べ、その上に板石状の礫を積み上げている。南西の角は350号石積土壙の構築の時に破壊されている。主軸の方位はＮ－40°－Ｗである。

出土遺物（Fig. 60. 404～408）　404・405は土師皿である。404は覆土下部、405は掘り方から出土した。406は瓦質の擂鉢で、掘り方の出土である。407は直口の土鍋で、内面には調整の刷毛目が残る。408は瓦質の火鉢である。胴部の上半部が残っている。外面の口縁下と胴下部に二本の凸帯を貼り付け、その間に三重の亀甲文のスタンプを押している。407・408は覆土の下部から出土した。この他、覆土上部からは、備前のⅣ期後半の擂鉢、青花、美濃の平鉢、李朝緑褐釉陶器などが出土しており、使用の時期については365号と同じ様相である。

55号土壙

Ⅰ面のＣ・Ｄ－１区で検出した不整形な土壙で、30号土壙に切られる。この下のⅡ面には同時期の77号井戸があり、この掘り方の一部かもしれない。出土遺物には、青花Ｂ群の皿（Fig. 63. 409）の他は、細蓮弁青磁や白磁の小片があるにすぎない。409は外面に牡丹唐草、内面に花文を描いている。

152号方形竪穴遺構（Fig. 62，図版10－64）

Ⅲ面のＣ・Ｄ－11・12区にある隅丸の長方形を呈する土壙である。長さ2.4m、幅2.06m、深さ1.1mを測る。床面の四隅に杭の痕があり、これを柱に横木を巡らして竪穴状の地下室を作っていたと考えられる。主軸の方向はＮ－49°－Ｅである。

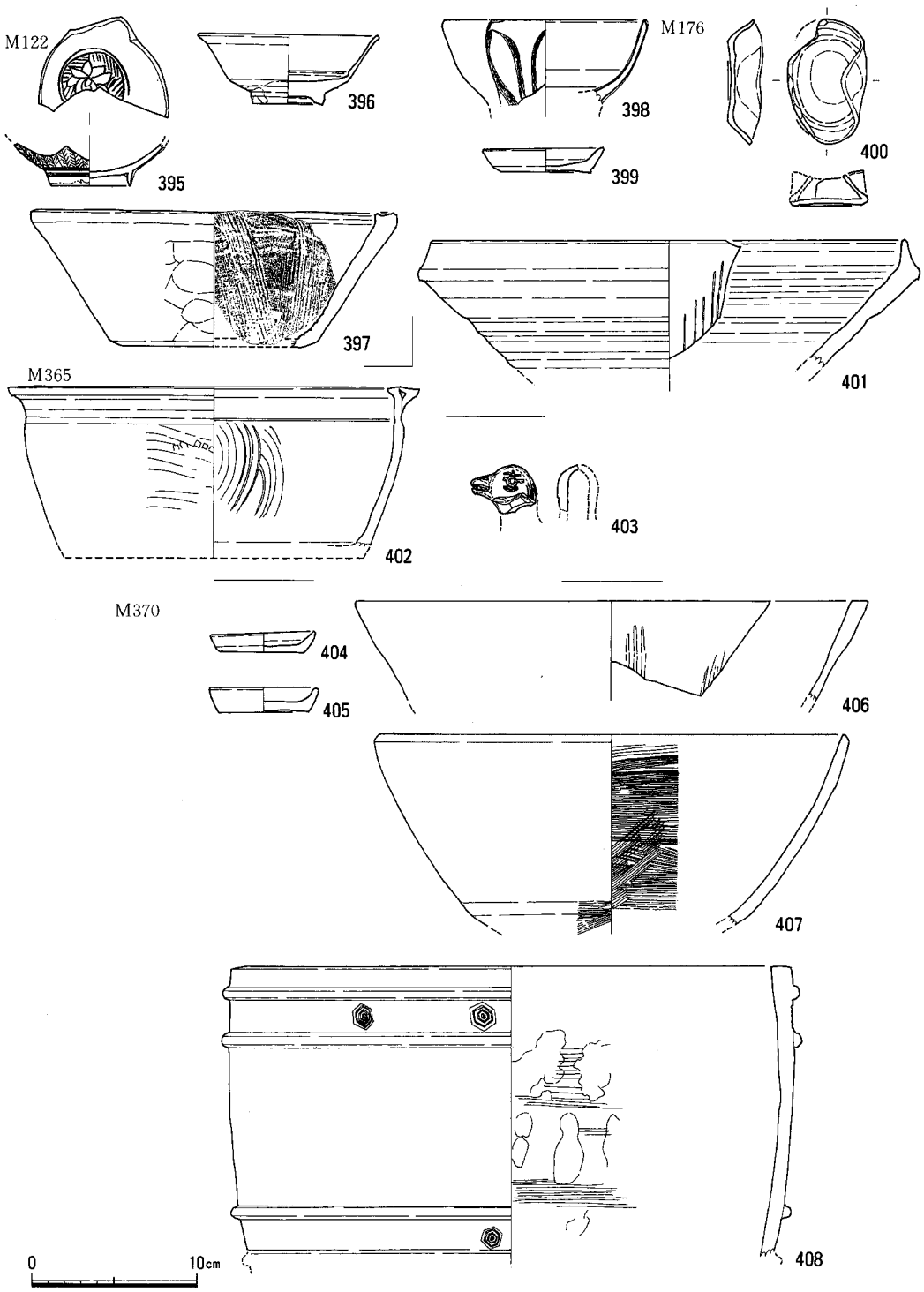


Fig. 60　122・176・365・370号石積土壙出土陶磁器実測図（1/4）

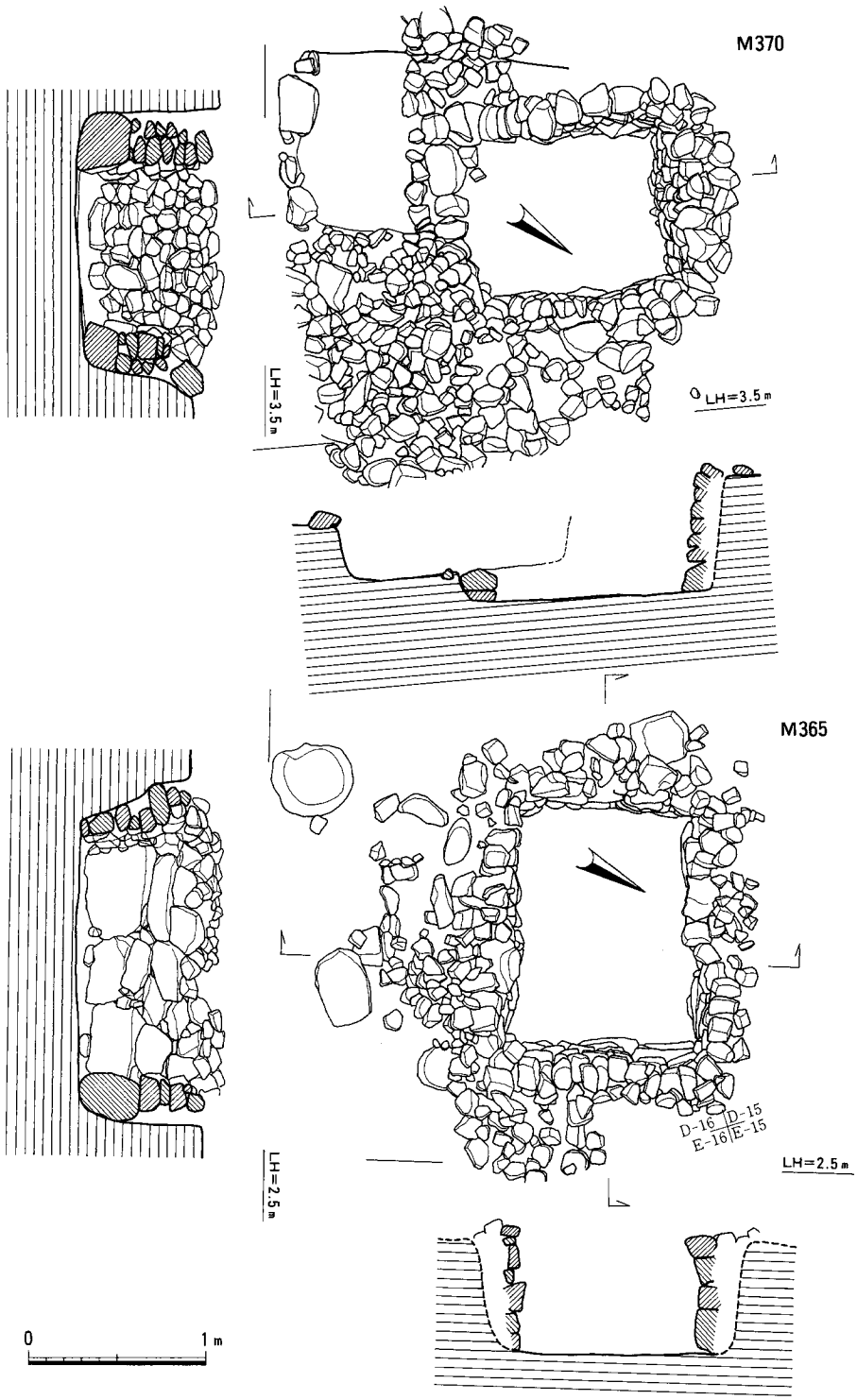


Fig. 61　365・370号石積土壙実測図（1/40）

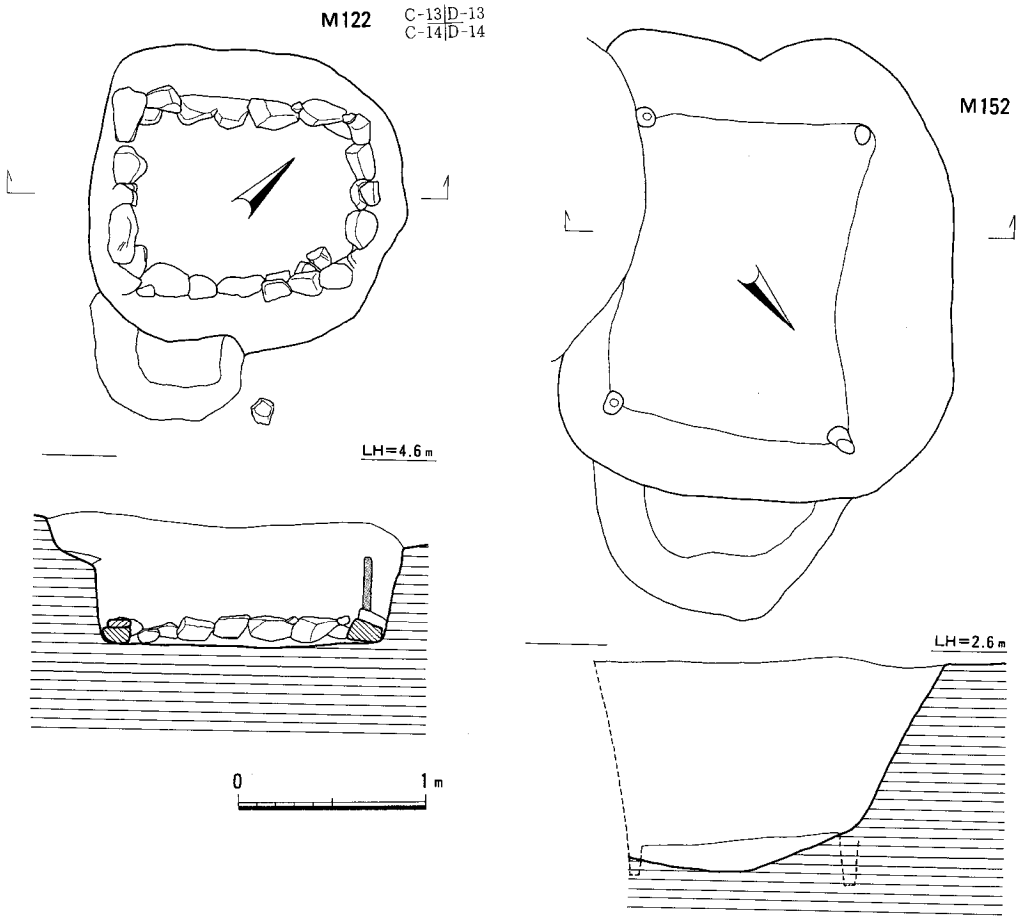


Fig. 62　122号石積土壙・152号方形竪穴実測図（1/40）

出土遺物（Fig. 63. 410～417）　410は李朝の粉青沙器の皿である。411は李朝の緑褐釉陶器の徳利である。412～414は青磁の碗である。412と414は外面に線彫りの細蓮弁文を描く。413は見込に蓮花のスタンプを押す。415は土師器の坏、416・417は皿である。この他、青花の小片、李朝の緑褐釉の陶器の甕（把手）、粉青沙器（刷毛目）、外来系の薄手の土師器坏、備前の擂鉢（Ⅳ期前半）などが出土している。

177号土壙（図版９－60）

Ⅲ面のD－12区にある多数の礫が詰まった長方形の土壙である。長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.24mを測る。下部のⅣ面に271号木室があり、この落ち込みを埋めた整地の可能性がある。この土壙の南端から短刀（Fig. 95. 811）が出土した。

出土遺物（Fig. 63. 418～422）　418は青花B群の皿である。内外面に宝相華を描く。419も同じくB群の皿である。420は青磁の輪花の皿である。花弁を削り出している。421は土師器の坏である。422は備前のⅤ期の擂鉢である。この他、黒褐釉・黄褐釉陶器、李朝の緑褐釉陶器、備前の壺などがある。

203号土壙

Ⅲ面のB－11・12区で検出した不整形の浅い土壙である。202号土壙に切られている。出土遺物には、青花C群碗、B群皿、瓦質鉢、土師皿、李朝の碗（Fig. 63. 423）などがある。423は堅手の白色の胎土をもつ白磁の碗である。淡い灰紫色に発色している。

223号土壙（図版10－65）

Ⅲ面のD－4区にある長楕円形の土壙である。長さ2.0m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。出土遺

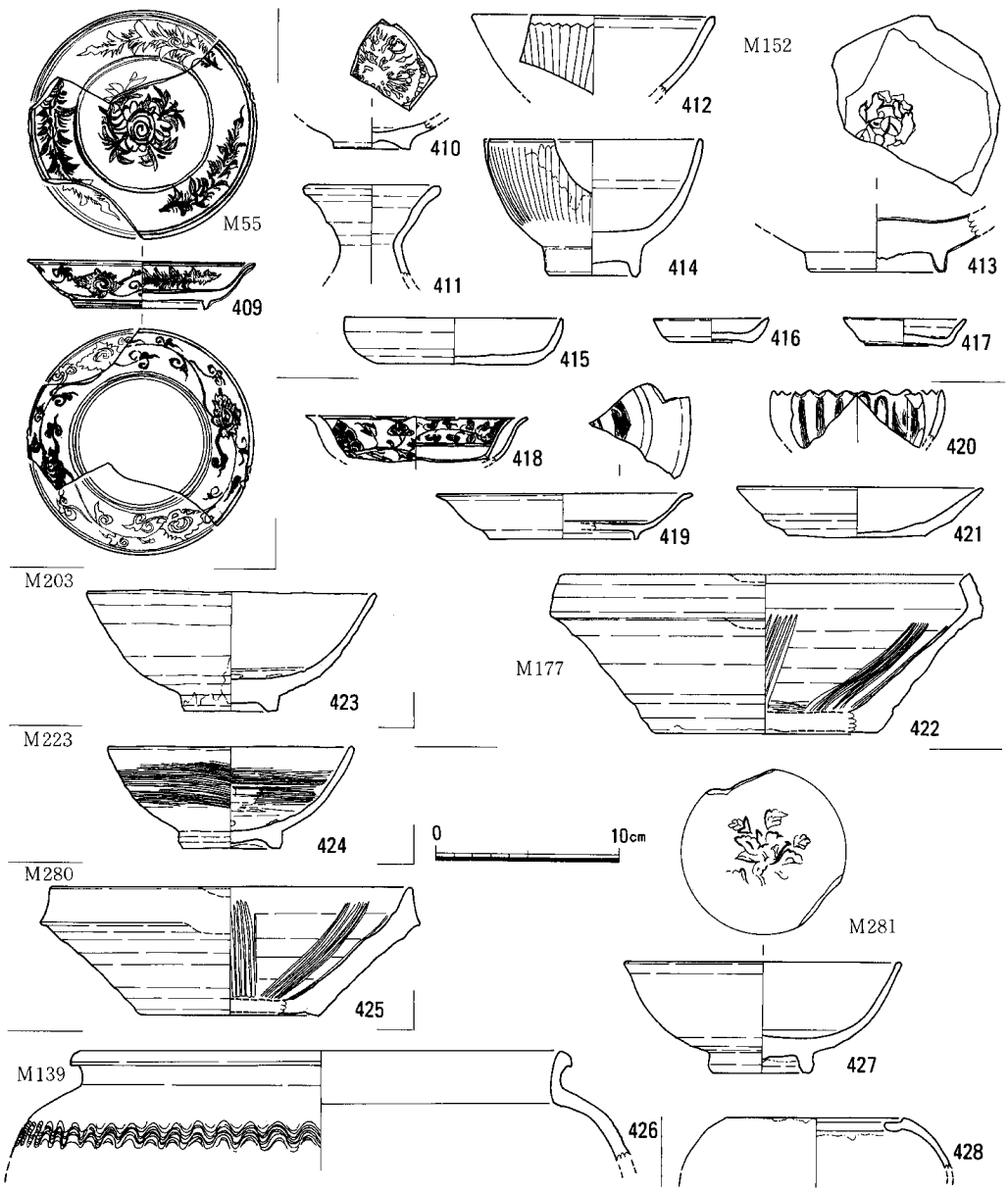


Fig. 63　55・139・152・203・223・280・281号土壙・177号石基礎出土陶磁器実測図（1/4）

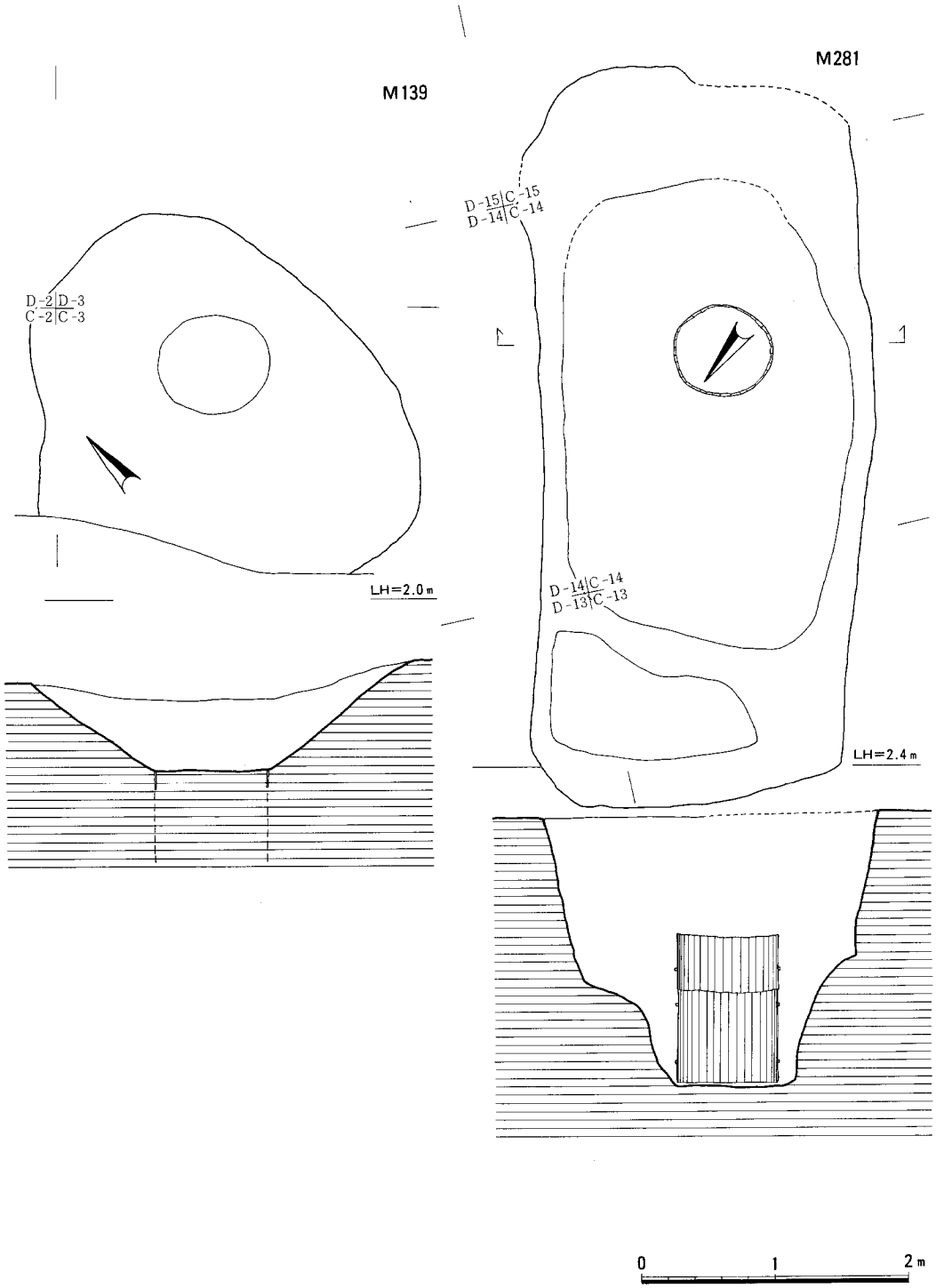


Fig. 64 139・281号井戸実測図（1/50）

物には青磁碗、瓦質火鉢、備前のⅣ期後半の擂鉢、李朝粉青沙器の碗（Fig. 63. 424）などがある。424は黒色の鉱物を含む灰色の磁質の胎土に白色の刷毛目を内外面に入れる。釉はやや緑がかった色調である。

280号土壙

Ⅳ面のC－13区にある円形の土壙である。長さ0.9m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。多くの小礫や陶磁器のかけらが入っていた。出土遺物には、印花文青磁、黄褐釉陶器、備前のⅣ期前半の擂鉢（Fig. 63. 425）が出土した。

139号井戸（Fig. 64，図版10－66）

Ⅲ面のC－3区で確認した井戸である。138号に切られ、140号井戸を切る。井戸が密集しているため、掘り方のプランが最後まで不明であり、確認した時点での規模は長さ3.2m、幅2.4m、深さ0.8mである。実際の直径は3mほどで、井戸枠までの深さは2.7mである。湧水のため井戸枠の深さは不明であった。出土遺物はほとんどが掘り方のもので、直接時期を示すものは少ない。Fig. 63. 426は備前の甕である。この他、備前のⅤ期の擂鉢が出土している。

140号井戸（図版10－67）

Ⅲ面のC－3・4区で確認した井戸である。規模は確認時点で直径3.6m、深さ2.4mである。

281号井戸（Fig. 64，図版10－68）

Ⅳ面のⅢ面C・D－13・14区にある井戸である。掘り方は長さ5.6m、幅2.5m、深さ2.1mの規模をもつ。井戸枠は南よりに作られており、井戸枠に比べかなり大きな掘り方である。これはこの井戸が切る282号井戸も同じ構造上の特徴をもつ。出土遺物には、花文のスタンプを押す青磁の碗（Fig. 63. 427）、李朝の緑褐釉の蓋付の無頸壺（428）の他に、備前のⅤ期の擂鉢などがある。

この他、この時期に属する遺構は以下のとおりである。

〈Ⅱ面検出〉

95・124・135・364号土壙、77号井戸

〈Ⅲ面検出〉

146・154・162・148・182・399号土壙

〈Ⅳ面検出〉

280号土壙

(5)　5期の遺構と遺物

この時期に属する遺構は、溝1基、石基礎1基、石積土壙1基、土壙10基、木室4基、柱穴1個、その他1基である。

136号石基礎（Fig. 65，図版11－69・70）

Ⅱ面のD～F－14～16区で検出した建築物の基礎である。幅1m、深さ80cmほどのU字形の掘り方に10～15cm大の礫を詰めたもので、構築法は、355・360号や430号と同じである。東西方向は調査区外に続く。確認できる範囲で東西の長さ4.5m、南北の長さ7.6mである。主軸の方向はN－22°－Wである。2～4期に属する104・117・115号土壙に破壊されている。3・4期の111・365・370号石積土壙が基礎の溝に取り込まれるように作られているが、その方向や位置がまちまちで規則性がない。また、掘り方の出土遺物は青花を含まず、ラマ式蓮花と雷文をもつ青磁碗や備前のⅣ期後半の擂鉢などが出土しており、その下限が15世紀の後半を示している。以上の諸点を考慮して別の時期の所産であると考えた。

出土遺物（Fig. 67. 445～449）　これは、断面観察のため設定したトレンチ出土の遺物である。445は備前の擂鉢である。446～449は瓦質の火鉢である。447は方形で、口縁外面に方形のスタンプ文を押す。446・449は三重の同心円文、448は雷文のスタンプを押す。

285号溝（Fig. 66，図版11－72・73・74）

Ⅳ面のB～F－11～17区にあるL字形の溝である。F－12区から西に延び、C－1区で南に折れてB－17区へと続く。東西方向、南北方向ともに調査区外へ出ており、全体の規模は不明である。現存部分で、東西8.5m、南北19mの長さである。溝の幅は90cm、深さは80cmで、溝の断面はほぼU字形を呈している。溝中には直径20cm大の偏平な礫がはいっており、B－15～17区にかけてはその石上に杭（柱）の痕跡を確認した。この礫石は多いものでは五個積み上げたもの（d）もあるし、石を置かずにそのまま木を据えたもの（b）もある。杭の間隔は0.6～1.0mと一定していない。杭は太さ5cmほどの細いものである。構造からみて、この溝は木塀もしくは土塀の地下地業と考えられる。南北方向の方位はN－42°－Wである。

出土遺物（Fig. 67. 430～440）　430は森田分類D群の白磁皿である。高台に抉り込みがある。431～433は青磁の碗である。431には蓮弁と花の文様がある。434は美濃の折縁皿である。435は内弯する口縁をもつ李朝の白磁の皿である。436は李朝の印花の皿、437は徳利である。440は李朝の陶器の擂鉢である。折重ねの口縁部をもち、口縁部の上の釉をふき取っている。内面に擦り目が認められる。やや紫色がかった暗茶褐色の釉をかけている。438と439は瓦質の火鉢である。四方襷文と花菱のスタンプを押している。出土遺物の様相からみて、15世紀前半の時期のものが多いが、美濃皿や備前Ⅳ期後半の擂鉢も出土しており、この時期のものとした。

134号石積土壙（Fig. 66，図版11－71）

Ⅱ面のC・D－11区、28号石積土壙の南東角に接して検出した石積土壙である。西壁は三段の

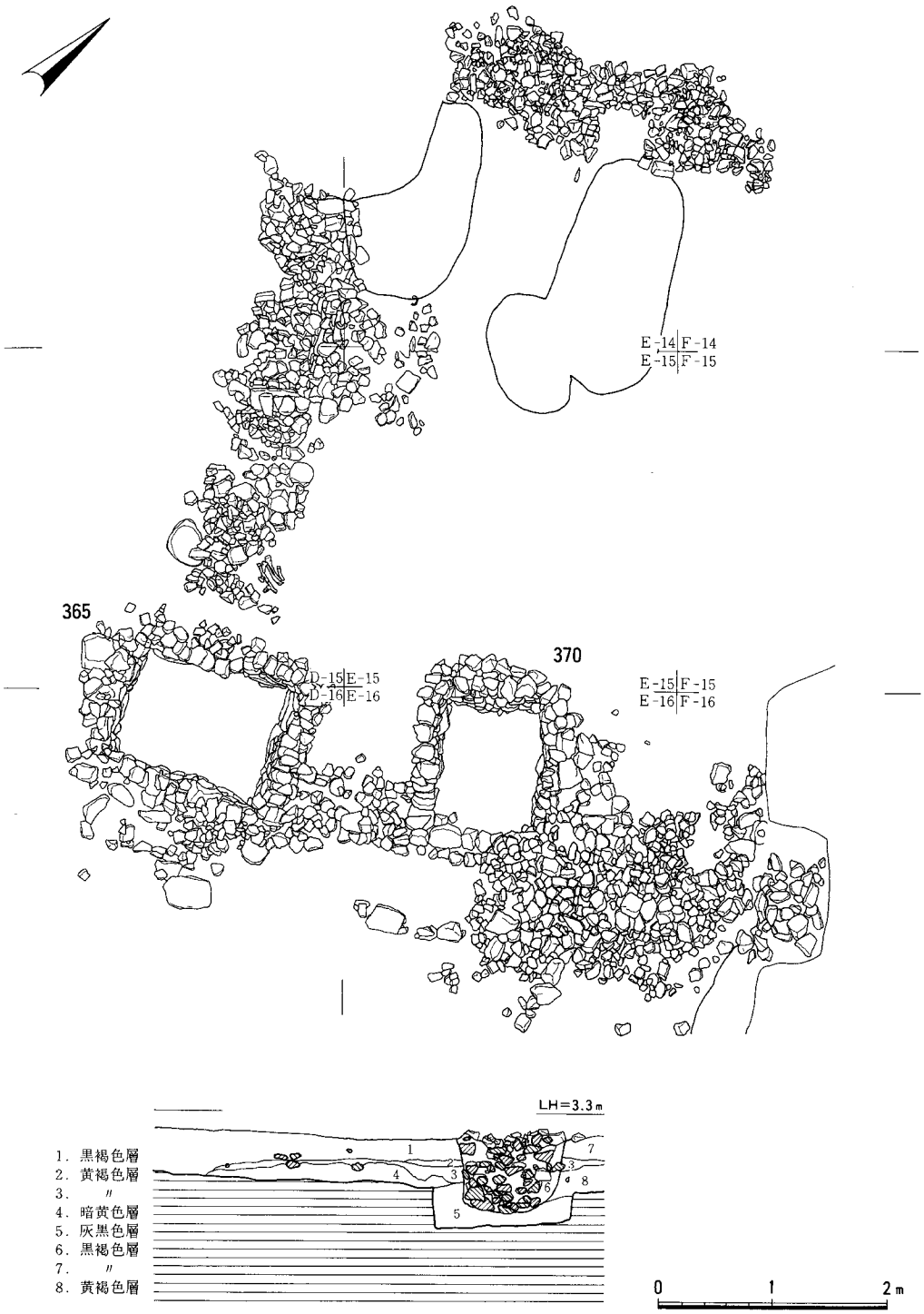


Fig. 65　136号石基礎実測図（1/60）

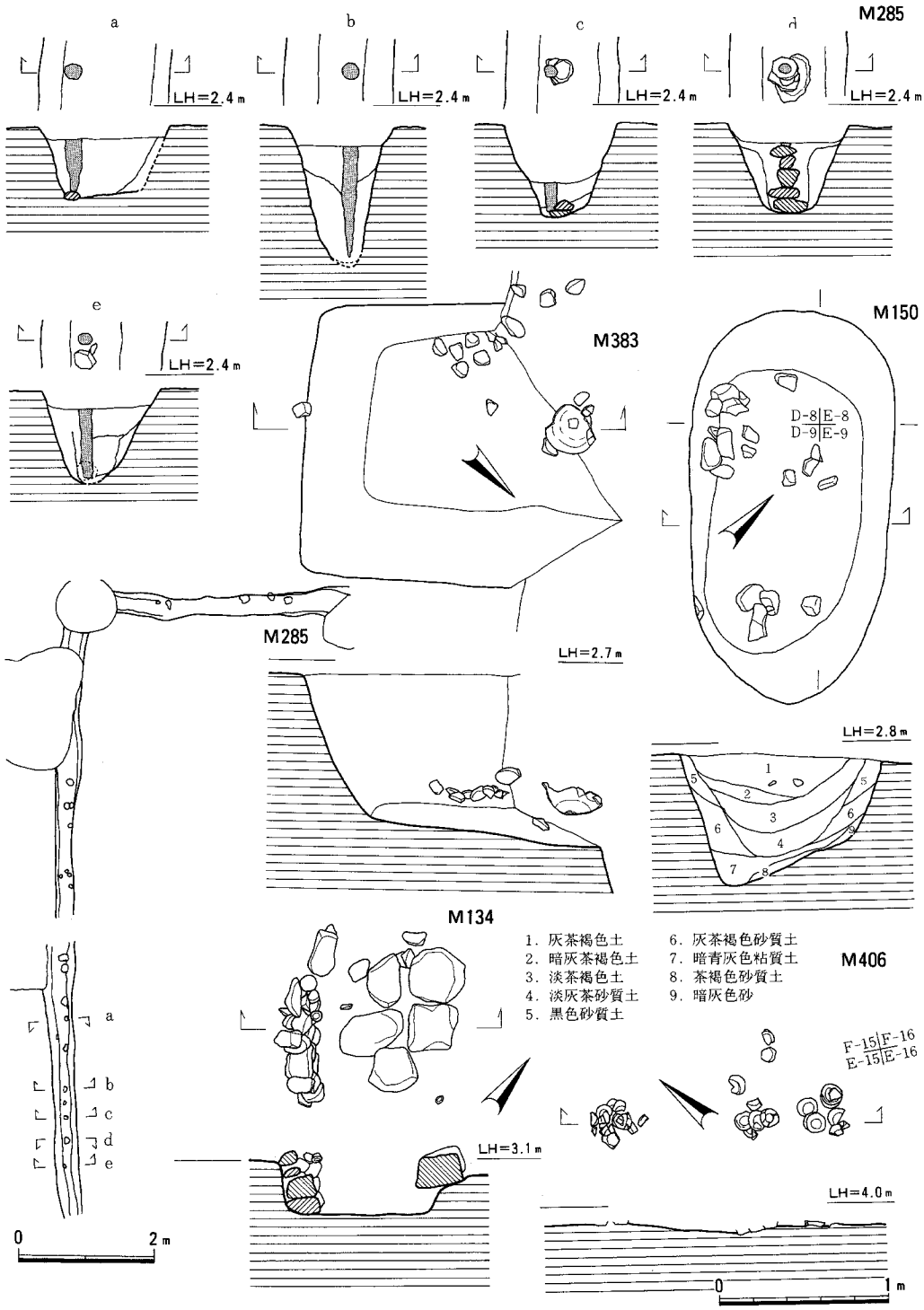


Fig. 66　285号溝・150・383号土壙・134号石積土壙・406号遺構実測図（1/40・1/100）

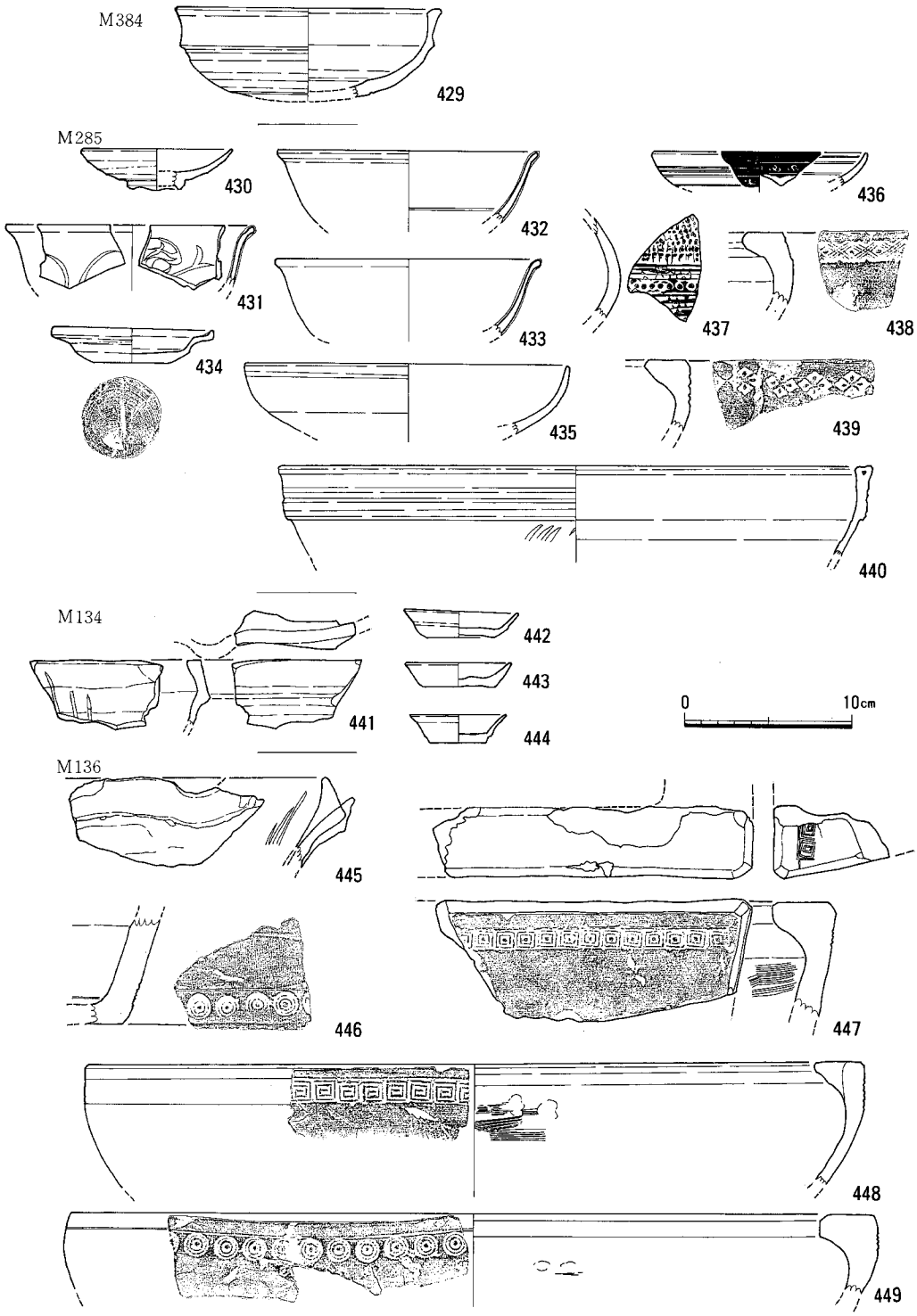


Fig. 67　384号土壙・285号溝・134号石積土壙・136号石基礎出土陶磁器実測図（1/4）

石積みがあるが、東辺は大きな礫が五個あるだけで、石積みの痕跡は認められない。北と南側も破壊されている。主軸の方位はN－52°50″－Eである。検出レベルで覆土の上部に黒色炭化物の薄い層があり、その下は暗灰色の粘質土が認められた。西壁に接して床から30cmほどの高さに土師皿が一枚廃棄してあった。土師皿はこの他に二枚出土している（Fig. 67. 442～444）。この他、暗紫褐色の李朝の陶器擂鉢（441）や青磁の皿・碗などがある。

269号木室（Fig. 68，図版11－75）

Ⅳ面のF－12区で検出した木板で囲まれた長方形の地下遺構である。内のりで長さ1.74m、幅1.12m、深さ0.3mを測る。杭は15本ほどが壁に沿って打たれているが、その間隔に規則性はない。壁の板木は厚さ1cmほど、幅5～10cmでる。東壁は板がUの字形に下へ湾曲している。この部分のみ板が深くまで入れられており、東からの溝状の流れ込みがあり、これを板で塞いだのであろう。内部は、黄褐色土や炭化物を含む黒褐色土で充たされており、それに木片や骨、礫、土師皿などが混じっていた。床は堅く砂が締まった黄褐色の沈殿層が薄く堆積しており、水溜めの桝として使用された可能性が高い。主軸の方位はN－43°－Wである。出土遺物には、青磁、土鍋、土師皿、李朝陶器、備前擂鉢（Ⅲ期）などがある。

271号木室（Fig. 68，図版11－76）

Ⅳ面のD－12区で、269号木室に隣接して検出した同様の地下遺構である。構造は269号とほぼ同じである。内のりで長さ2.6m、幅1.26m、深さ0.45mを測る。杭は狭いところで6cmの間隔で打ち込まれており、深いもので床から60cmほどまで達している。主軸の方位はN－33°－Wである。内部には同じように礫や土師皿が多数出土した。

出土遺物（Fig. 69. 450～489）　450・451はD群の白磁の多角坏と皿である。452は青磁の碗である。453は李朝の粉青沙器の印花文皿である。454は中国製と思われる茶入れである。灰色の胎土に濃い茶褐色の釉をかける。455は備前のⅣ期後半の擂鉢である。456～481は土師器の坏である。外来系の456～464と在地系の465～481に分けられる。482～488は土師皿である。489は瓦質の風炉である。

321号木室（Fig. 68，図版12－77）

Ⅳ面のD－12区にある271号木室に切られる遺構である。その形を復元すると、271号大きさのいっぱいでも方形になり、おそらく271号とおなじような南北に長い長方形になると考えられる。その長さは1.25mである。

410号木室（Fig. 68，図版12－78）

Ⅳ面のB－15区にある遺構である。板の痕跡はわずか5cmほどしか確認できなった。383号土壙に破壊されており、現存部分で長さ0.9m、幅0.9m、深さ0.38mを測る。杭は隅に確認しており、その長さは床から34cmである。主軸の方位はN－31°－Wである。李朝の粉青沙器、陶器、備前のⅣ期後半の擂鉢、土鍋、土師器坏などが出土した。

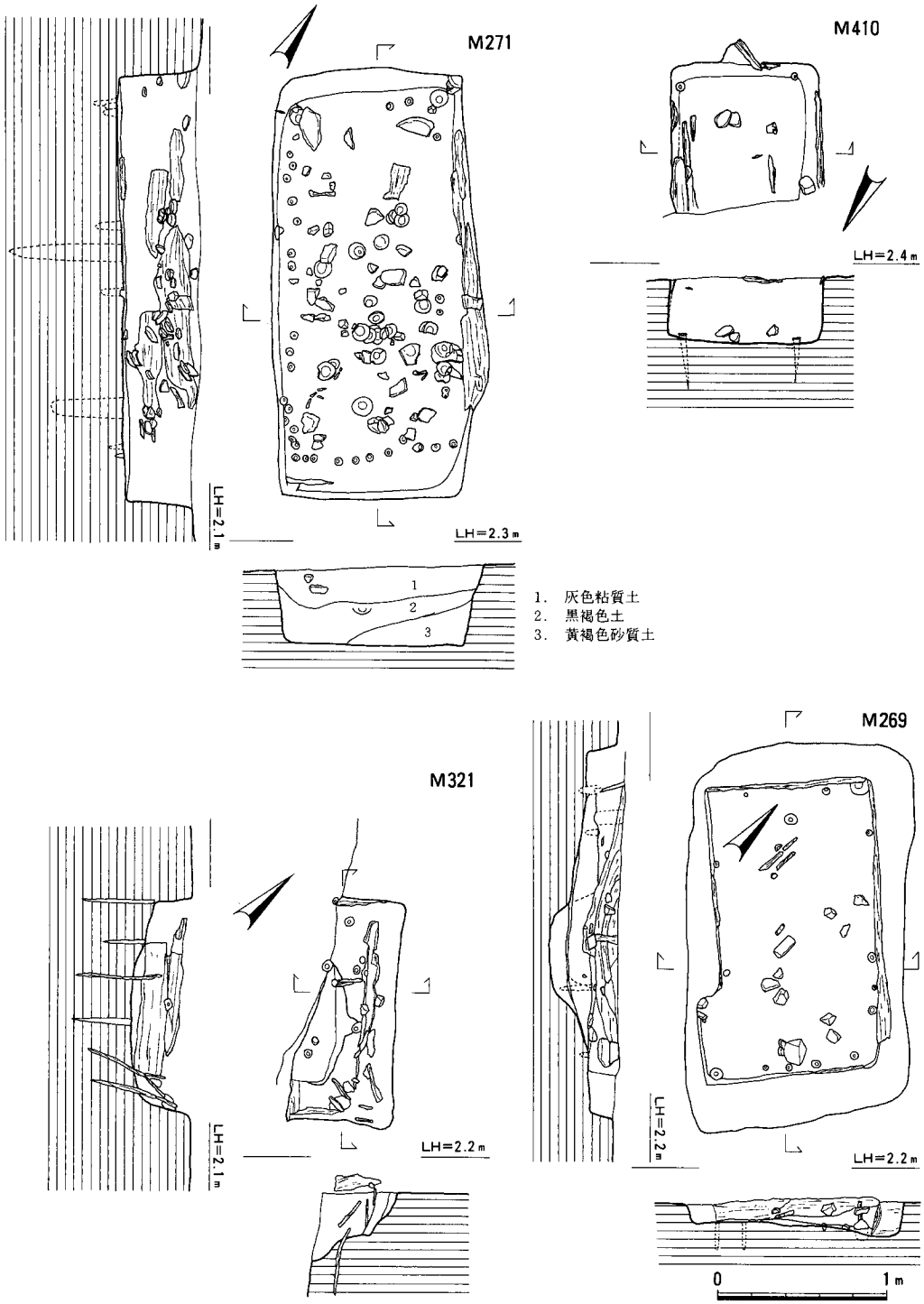


Fig.68　269・271・321・410号木室実測図（1/40）

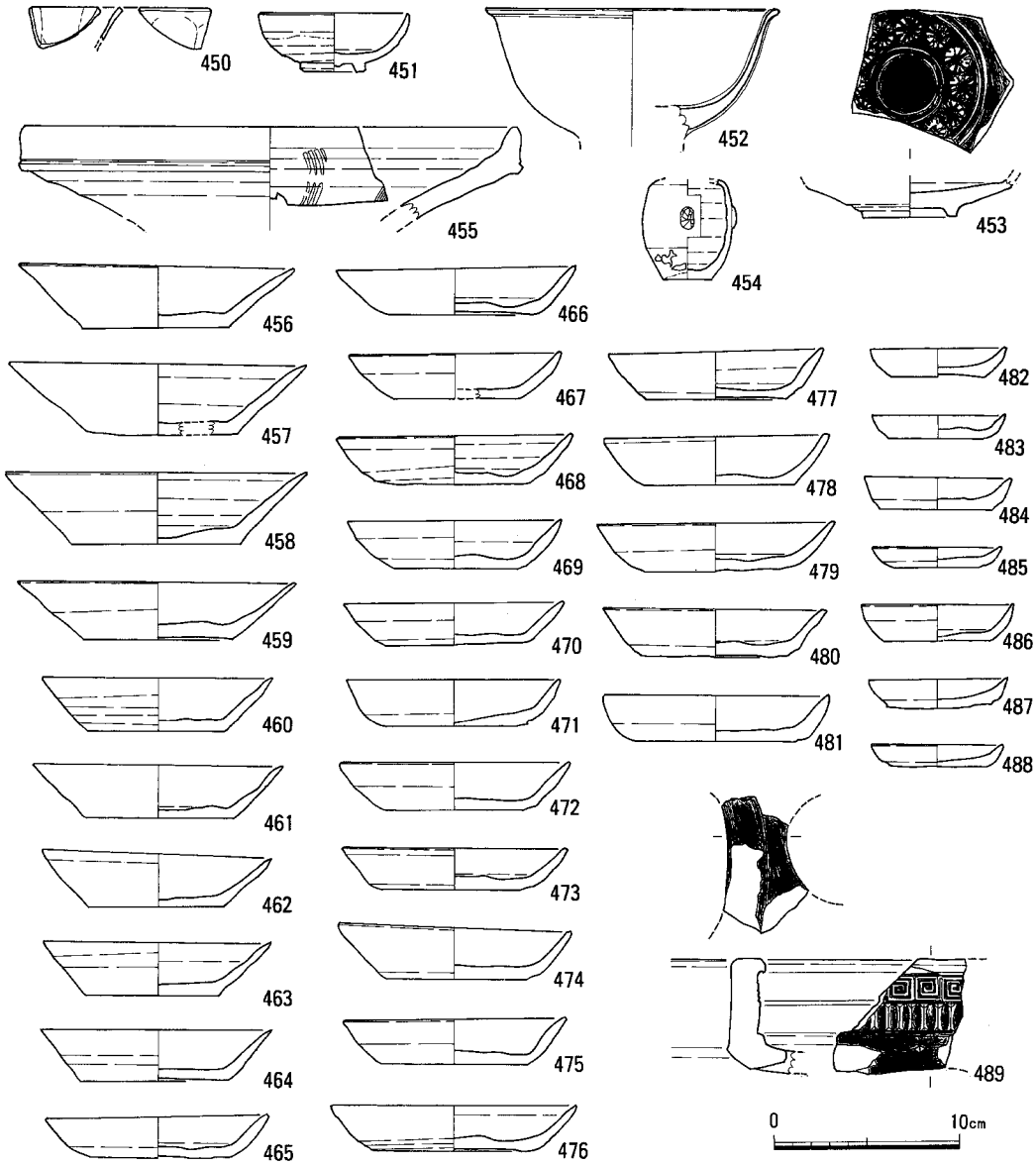


Fig. 69　271号木室出土陶磁器実測図（1/4）

150号土壙（Fig. 66，図版12－79）

Ⅲ面のD－8・9区にある長楕円形の土壙である。長さ2.36m、幅1.20m、深さ0.78mを測る。出土遺物には、白磁多角坏、青磁大皿、黄褐釉陶器、李朝陶器、備前Ⅳ期擂鉢などがある。

383号土壙（Fig. 66，図版12－80）

Ⅳ面のB－15区で検出した土壙である。Ⅰ区とⅡ区の境にあるため、Ⅰ区側では確認しておらず、北側の掘り方は不明である。残存部で長さ1.84m、幅1.64m、深さ0.92mを測る。中央から

壊れた土鍋（Fig. 70. 493）が出土した。

出土遺物（Fig. 70. 490～498）　490は青磁の皿、491は李朝の粉青沙器の碗である。492は美濃の大平鉢である。493はほぼ完形に近い土鍋である。494・495は土師器の坏、496～498は皿である。

384号土壙

Ⅳ面のC－15区で検出した楕円形の土壙で、長さ1.06m、幅0.9m、深さ0.25mを測る。出土遺物には、青磁碗や土師皿の小片がある。Fig. 67. 429は備前の鉢である。灰紫色の胎土をもち、堅緻である。自然釉のかかる部分は茶褐色に発色している。

406号遺構（Fig. 66, 図版12－81）

Ⅲ面のE－15区で検出した土師器の坏の集中廃棄である。焼土C中を中心として坏が二十枚ほど廃棄してあった。地鎮祭祀であろう。

この他、この時期に属すると思われる遺構は以下のとおりである。

〈Ⅱ面検出〉

74・78号土壙

〈Ⅲ面検出〉

165・386・387・394号土壙

〈Ⅳ面検出〉

286号土壙

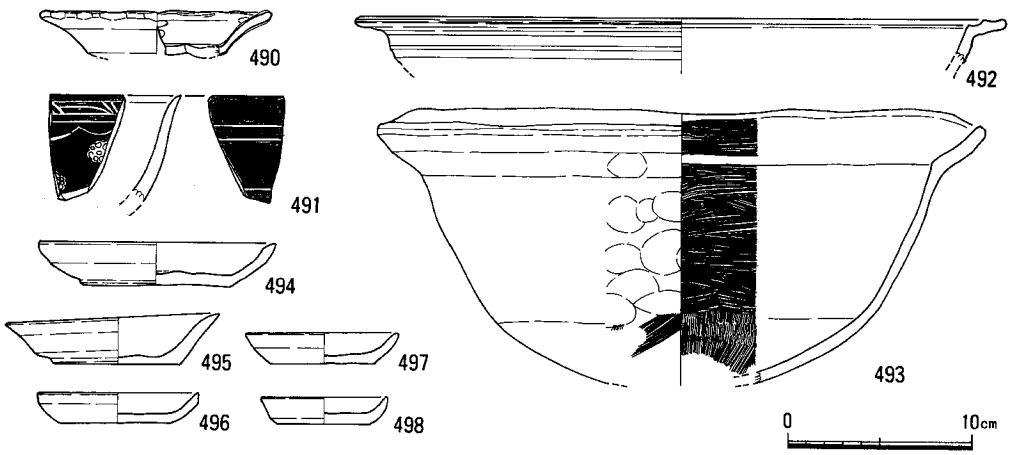


Fig. 70　383号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

(6) 6期の遺構と遺物

この時期に属する遺構は、石基礎1基、土壙18基、井戸3基、柱穴2個である。

430号石基礎（Fig. 71，図版12－82・83）

Ⅳ面のE・F－16～18区で検出した建物の基礎である。一部を136号石基礎に切られている。焼土Cを除去した状態で検出しており、この建物が焼失後、整地されたことが窺える。その大半は調査区外へ続いており、規模は不明である。南北の長さは6.5mである。構造は、他の石基礎と同じで、断面U字形の溝を掘り、その中に10～15cm大の礫を詰めている。溝は幅0.76m、深さ0.5mである。ほかの石基礎との違いは、南の東西辺で確認したように礫の上に40×50cmほどの偏平な礫を敷き詰めている点である。同様な構造をもつ石基礎は他の調査地点でも検出されている。南北方向の辺の外に1.6mの間隔で、柱の礎石のような20×30cmほどの礫が配置されているが、このような構造は他の石基礎には認められない。基礎の内側の南西隅に、土師器の坏七枚と溶解して変形した銅の板があり、地鎮祭祀の一つと考えられる。坏は重なった状態で出土した。この他、釉の厚くかかる白い胎土の青磁皿の破片などが検出時に出土している。

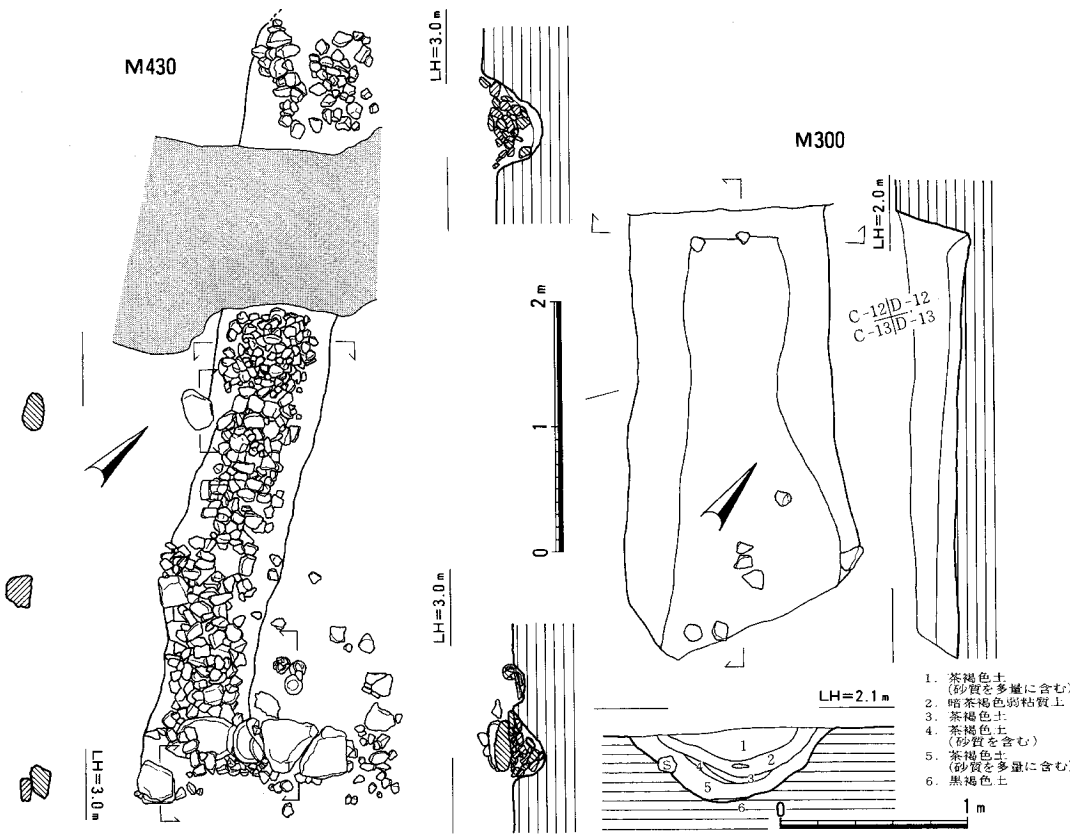


Fig. 71　430号石基礎・300号土壙実測図（1/60・1/40）

137号土壙（Fig. 72，図版12－84）

Ⅲ面のＣ－６区で検出した円形の土壙である。長さ1.32m、幅1.20m、深さ1.48mを測る。内部の底付近には礫やイルカ（ハクジラ）の脊椎骨などが廃棄してあった。

出土遺物（Fig. 73. 499～508）　499は菊花状の輪花の白磁碗である。500は片切彫りの蓮弁文をもつ青磁の碗である。501は青磁碗の底部であるが、見込に砂目痕がある。502は李朝の粉沙器の猪口である。雨滴状の象嵌を施す。504は土師器の坏、505・508が瓦質擂鉢、506・507が土鍋である。

149号土壙

Ⅲ面のＣ・Ｄ－７区にある長方形の土壙である。長さ2.2m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。143号土壙に西半分を破壊されている。覆土は、三層に分かれ、上から茶褐色土、暗茶褐色土、茶褐色砂質土である。小礫が散乱した状態で出土している。床面は北から南へ傾斜している。

出土遺物（Fig. 73. 509～511）　509は中国製の白磁の碗である。510・511は青磁碗である。510は外面に片切彫りによる蓮弁を描き、見込には蓮花のスタンプ文を押している。

178号土壙（Fig. 72）

Ⅲ面のＤ－３区にある不整楕円の土壙である。139・140号井戸に切られる。現存部分で長さ1.36m、幅1.37m、深さ0.3mである。中央付近に礫と遺物が廃棄してあった。

出土遺物（Fig. 73. 512～516）　512は端反りの口縁部をもつ青磁の碗である。513は土師器の坏である。514・515は瓦質の風炉と火鉢である。それぞれ菊花、花菱のスタンプ文を押す。516は備前Ⅳ期の擂鉢である。

180号土壙（Fig. 72，図版13－85・86）

Ⅲ面のＤ・Ｅ－７・８区で検出した楕円形の土壙である。長さ1.64m、幅1.44m、深さ0.52mを測る。中には環椎を含むイルカの脊椎骨や肋骨（図版30－298）が廃棄してあった。この骨には刃物傷がついてり、解体後廃棄されたものである。陶磁器には、端反りの青磁の碗や備前Ⅳ期の擂鉢などがある。

258号土壙

Ⅲ面のＦ－８区にある隅丸の長方形の土壙である。南側と東半分を他の遺構に切られており、全体の規模は不明である。内部より、見込に「積」の字のスタンプのある青磁碗（Fig. 74. 517）や瓦質の擂鉢（518）・火鉢（519）などが出土した。

300号土壙（Fig. 71，図版13－88・89）

Ⅳ面のＣ－12・13区で検出した長方形の溝状の土壙である。南北端を他の遺構に切られる。現存部分で長さ2.4m、幅1.36m、深さ0.4mを測る。南西端で懸仏（Fig. 94. 806）が出土した。Ｄ群の白磁、印花の青磁碗、口禿白磁碗などが出土している。

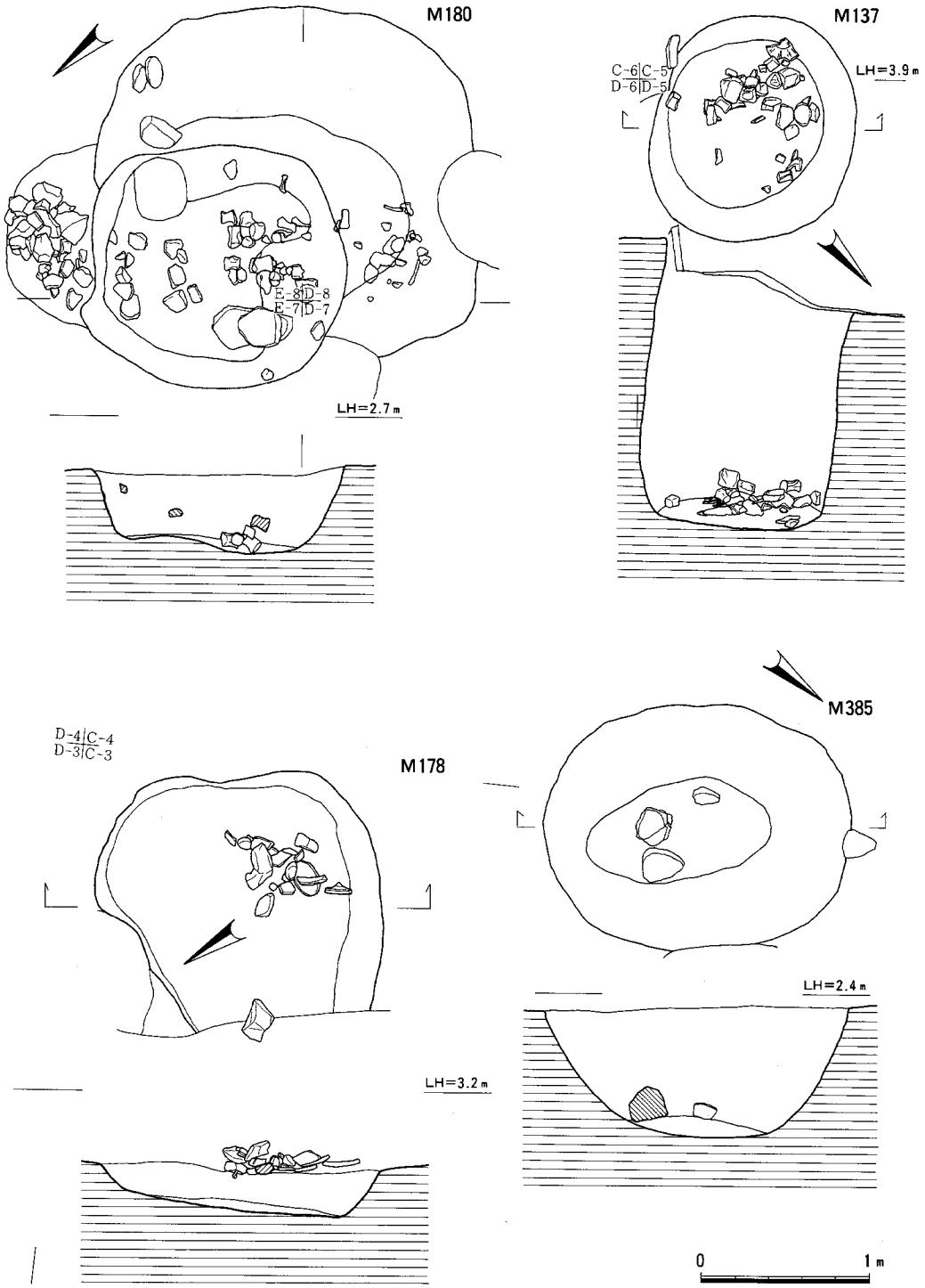


Fig. 72　137・178・180・385号土壙実測図（1/40）

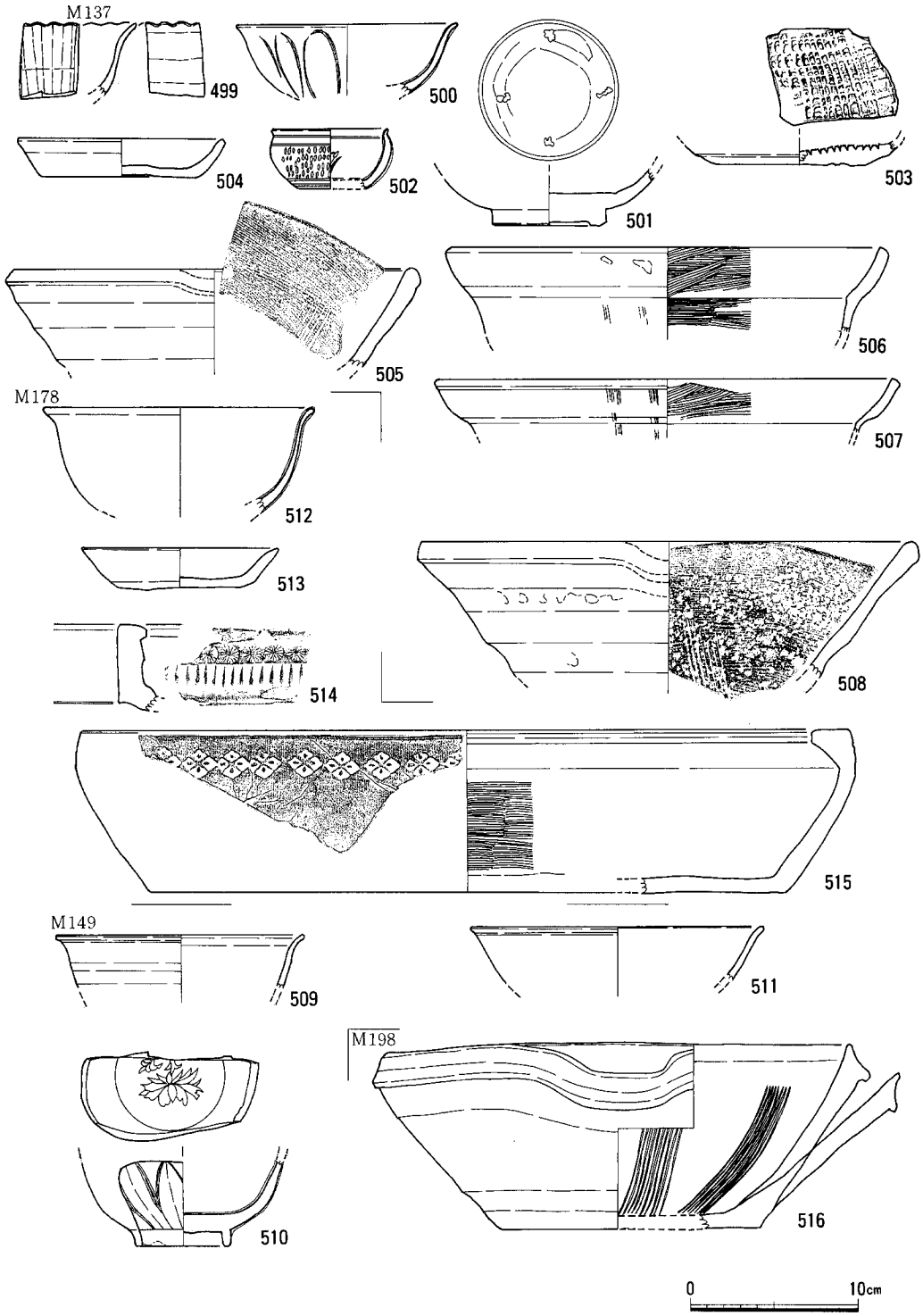


Fig. 73　137・149・178・198号土壙出土陶磁器実測図（1/4）

309号土壙

Ⅳ面のC・D－12区にある楕円形の土壙である。長さ1.14m、幅0.84m、深さ0.45mである。上部には礫が多く含まれていた。308号土壙に切られており、308号からは森田D群の白磁が出土している。309号からはFig. 74. 520の青磁碗が出土している。この碗は、やや赤みを帯びた灰色の胎土に厚めの濁った釉がかかっており、内側面に花のスタンプ文がある。時期的に若干遡る可能性もある。

385号土壙（Fig. 72）

Ⅳ面のB－15・16区で検出した楕円形の土壙である。長さ1.84m、幅1.44m、深さ0.8mを測る、断面形はロート状である。内部に三個の大型の礫が廃棄してあった。

出土遺物（Fig. 74. 521～529）　521はD群の白磁皿で、外底に「十一」の墨書がある。522は李朝の陶器の皿である。灰色の堅い胎土に深緑色の釉がかかる。外面は無釉。523は蓮弁文の青磁碗で、内面にスタンプ文がある。524は縁折れの青磁の大皿である。オリーブ色の釉を厚くかける。525は天目茶碗である。526は李朝の緑褐釉の陶器の甕である。527～529は土師皿であるが、下部の遺構のものの可能性もある。このほか備前Ⅳ期の擂鉢も出土しており、5期まで下る可能性ある。

431号土壙

Ⅴ面のB－17区にある円形の土壙で、長さ1.16m、幅1.18m、深さ0.72mを測る。李朝の粉青沙器の印花の皿（Fig. 74. 531）が出土した。

282号井戸（Fig. 75，図版13－90）

Ⅳ面のD・E－13・14区で検出した井戸である。長さ5.6m、幅3.6mの長方形に近いプランの掘り方をもち、西に片寄って井戸枠を据えている。深さは2.2mである。井戸枠は桶を使用しており、最下段の桶しか残存していなかった。井戸枠からの出土遺物に時期の決め手はない。掘り方からD群白磁、青磁皿、備前Ⅲ・Ⅳ期の擂鉢（Fig. 74. 530）、李朝陶器などがある。

530号井戸（Fig. 75，図版13－91）

Ⅴ面のD－14・15区で検出した長さ2.4m、幅2.8m、深さ1.6mの井戸である。531号井戸をきる。井戸枠は桶を重ねたもので、二段確認した。口禿の白磁、備前Ⅳ期の擂鉢などが出土した。

この他、この時期に属する遺構は以下のとおりである。

〈Ⅲ面検出〉

201号土壙、266号ピット

〈Ⅳ面検出〉

270・276・388・402・408・411・424号土壙

〈Ⅴ面検出〉

308号土壙

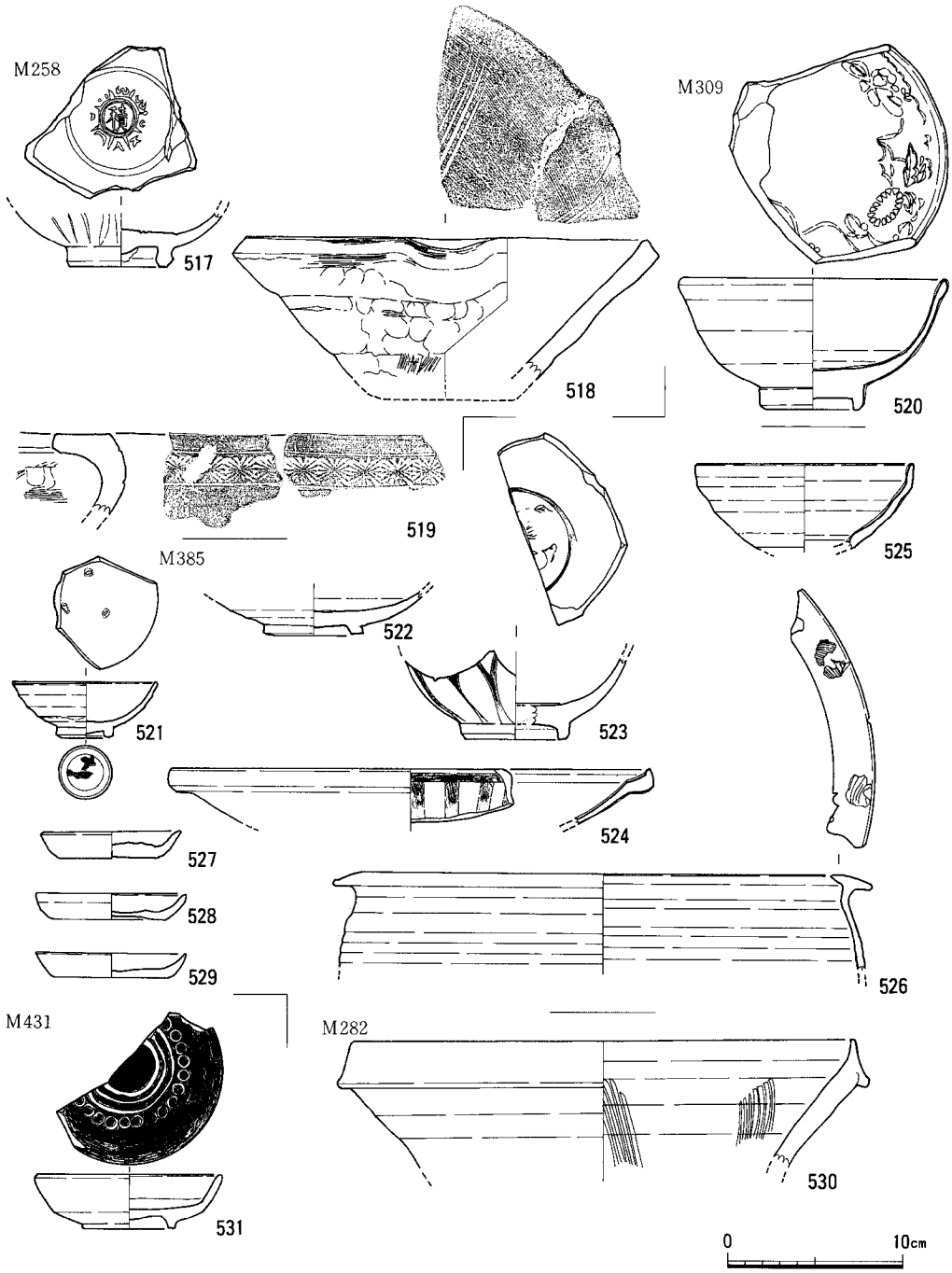


Fig. 74　258・309・385・431号土壙・282号井戸出土陶磁器実測図（1/4）

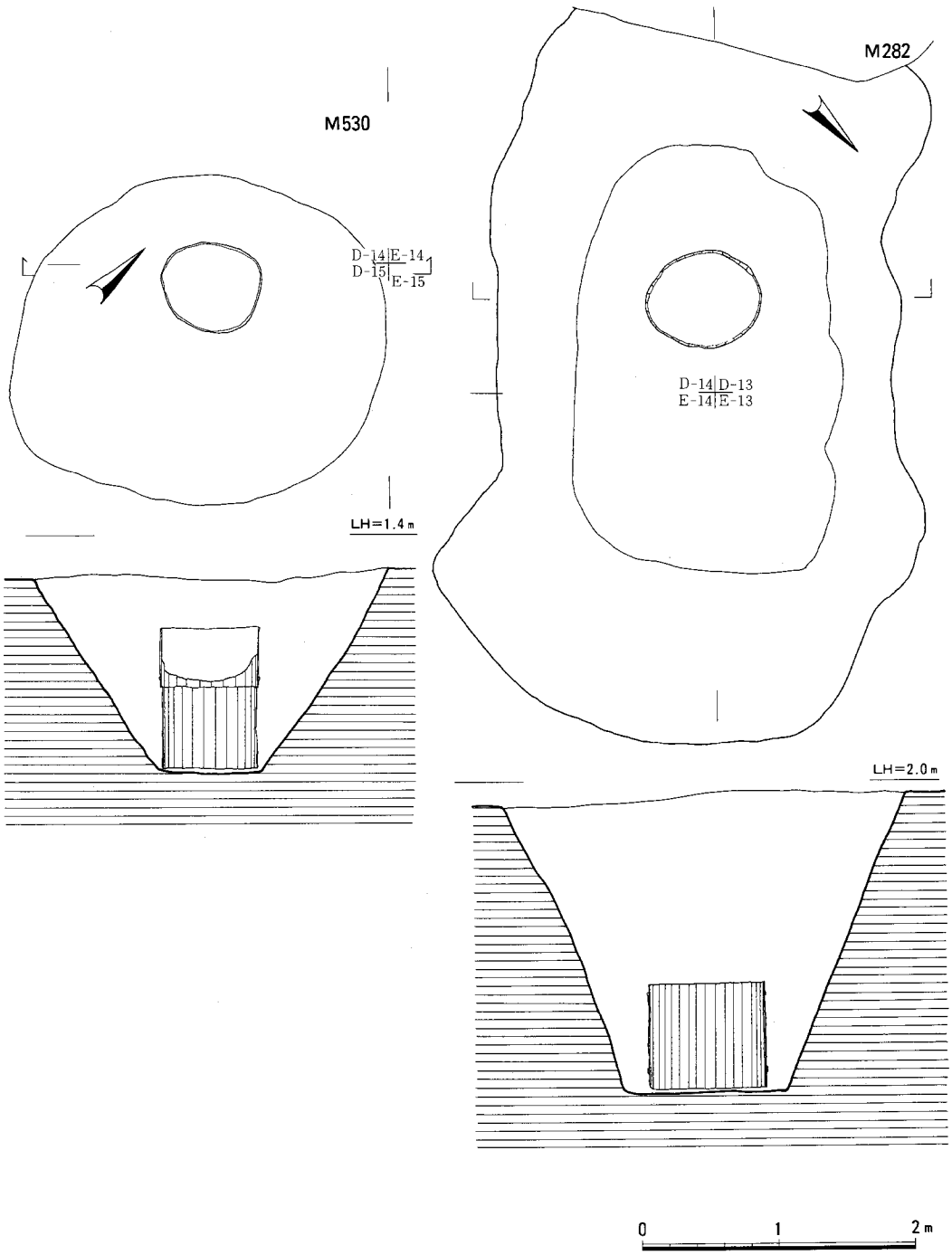


Fig. 75 282・530号井戸実測図（1/50）

(7) 7・8期の遺構と遺物

7期に属する遺構は、土壙10基、井戸1基、柱穴1個である。

200号土壙（Fig. 76）

Ⅲ面のE－12・13区で検出した長方形の土壙で、119号井戸に切られる。調査区外へ出るため全体の形は不明である。残存部分で長さ2.04m、幅2.4m、深さ0.56mを測る。出土遺物には青磁皿、瓦質擂鉢、土鍋、土師皿などがある。

289号土壙（Fig. 76）

Ⅳ面のE－13区で検出した土壙である。現存部分で長さ0.8m、幅1.04m、深さ0.64mを測る。石臼、土師器の坏などが出土した。

215号井戸

Ⅲ面のD・E－1区にある井戸の掘り方である。完掘はできなかった。

出土遺物（Fig. 79. 535・536）　535は青白磁の合子の蓋である。536は枢府系の白磁皿である。

434号ピット

Ⅴ面のB－16区にある柱穴である。Fig. 79. 537は大内タイプの土師器の坏である。538は在地系の坏、539・540は土師皿である。

8期に属する遺構は、土壙26基、井戸5基、柱穴7個である。

187号土壙（Fig. 76，図版13－92）

Ⅲ面のE－7区で検出した楕円形の土壙である。長さ1.22m、幅0.86m、深さ0.44mを測る。内部には15～20cm角の礫や、土師皿多数、銅銭などが廃棄してあった。この他、鎬蓮弁文青磁碗、東播系擂鉢などが出土している。

184号土壙（図版14－93）

Ⅲ面のD－9・10区で検出した楕円形を呈する土壙で、長さ1.4m、幅1.3m、深さ0.9mを測る。出土遺物には、鎬蓮弁文青磁碗、白磁碗（Fig. 79. 532・533）、擂鉢（534）、土鍋、土師皿などがある。

256・257・268号土壙（Fig. 76）

Ⅲ面のE・F－7・8区で検出した不整土壙で、切り合いがある。256は長さ2.24m、幅1.46m、深さ0.54mである。内部には鉄滓、礫、陶磁器片などが廃棄してあった。陶磁器の種類としては、口禿白磁皿、土鍋、土師皿などがある。257からは鎬蓮弁文青磁碗の破片が出土している。

277号土壙（Fig. 77）

Ⅳ面のE－12区で検出した楕円形を呈する土壙である。長さ1.90m、幅1.26m、深さ0.56mを測る。内部には礫、骨、陶磁器などが廃棄してあった。鎬蓮弁文青磁碗などがある。

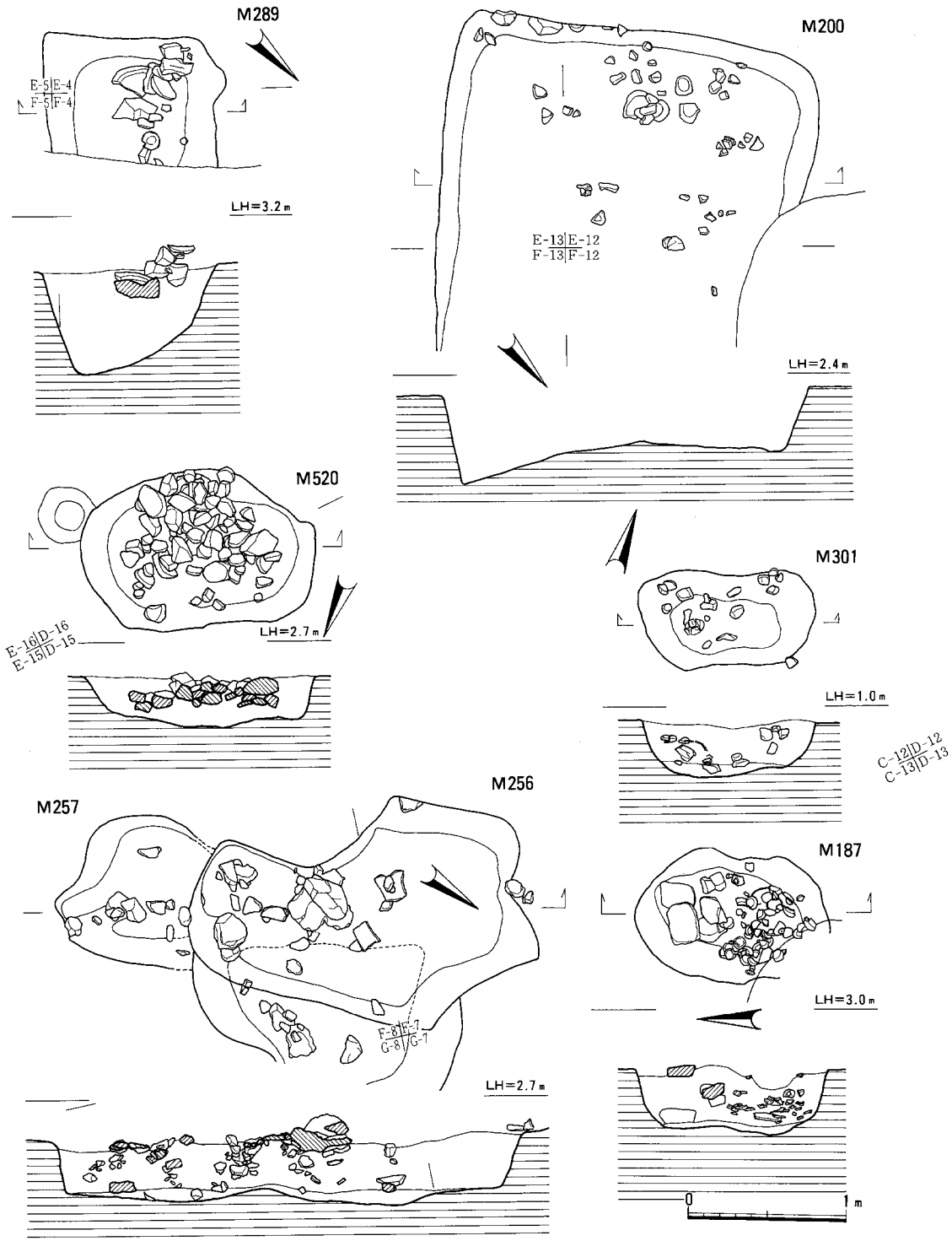


Fig. 76　187・200・256・257・289・301・529号土壙実測図（1/40）

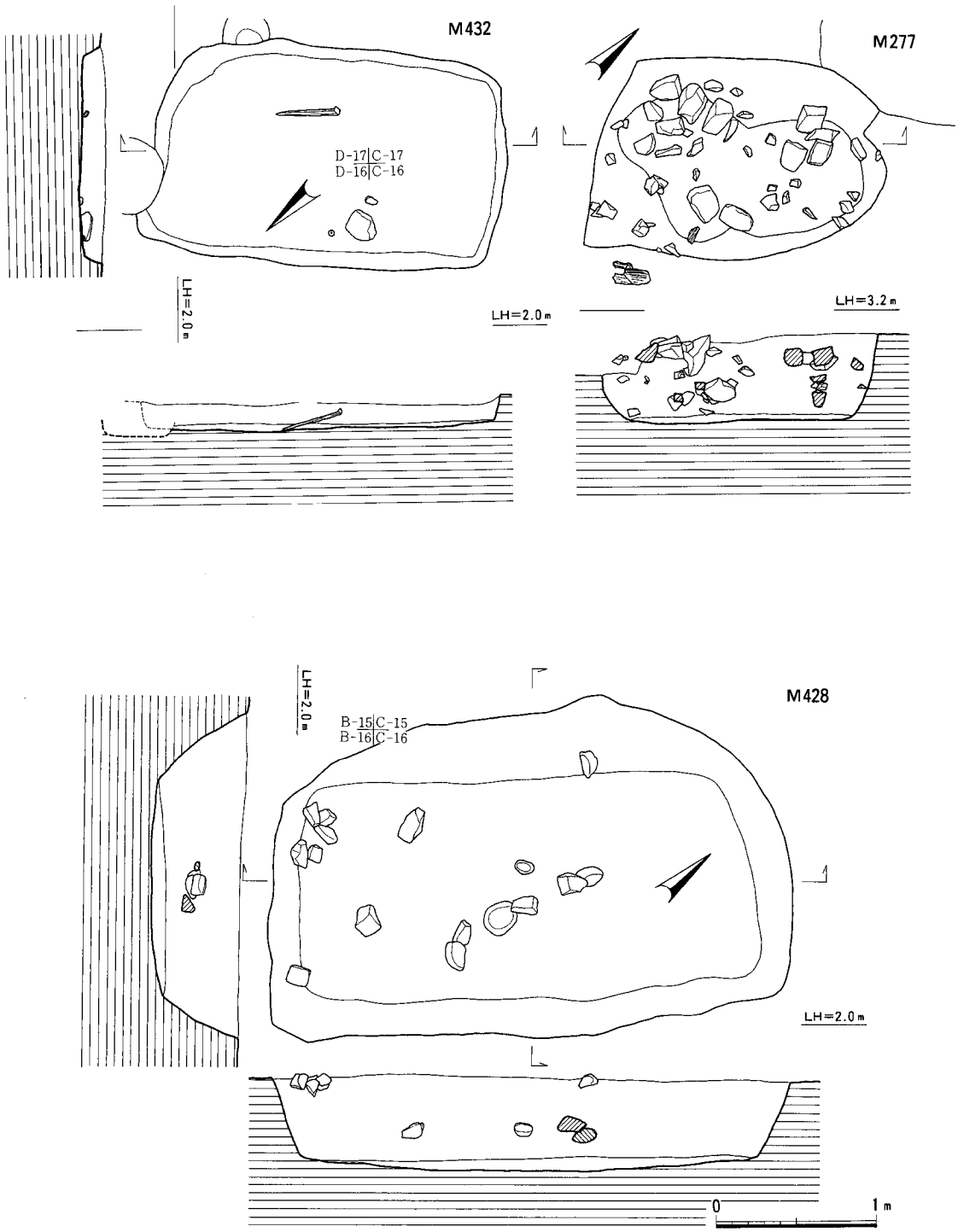


Fig. 77　277・428・432号土壙実測図（1/40）

301号土壙（Fig．76）

Ⅴ面のＣ－12区で検出した不整楕円形の土壙である。長さ1.12m、幅0.64m、深さ0.36mを測る。300号土壙に切られる。

428号土壙（Fig．77，図版14－94）

Ⅳ面のＢ・Ｃ－16区で検出した長方形の土壙である。長さ3.24m、幅2.04m、深さ0.6mを測る。上記の一連の土壙と異なり、整然とした形を呈しており、木室などであった可能性が高い。

内部からは、口禿白磁皿、鎬蓮弁文青磁碗、中国製陶器、東播系擂鉢などが出土した。

432号土壙（Fig．77，図版14－95）

Ⅴ面のＣ・Ｄ－16・17区で検出した長方形の土壙である。長さ2.30m、幅1.34m、深さ0.16mを測る。内部からは口禿白磁、鎬蓮弁文青磁碗、東播系擂鉢、銅銭などが出土した。また、南側の中程に鉄製の火箸と思われる（Fig．95．810）製品が横たわって出土している。

520号土壙

Ⅴ面のＣ・Ｄ－15・16区にある不整楕円形の土壙である。長さ1.6m、幅1.0m、深さ0.7mを測る。

出土遺物（Fig．79．541～546）　541は口禿の白磁の碗である。完形に近い。542は白磁の合子の身である。543は白磁Ⅷ類の碗である。544は青白磁の合子の蓋である。546は鎬蓮弁文青磁碗、545は同安青磁の皿である。

302号井戸（Fig．78，図版14－97）

Ⅴ面のＢ・Ｃ－13・14区で検出した井戸である。直径3.8m、深さ1.92mを測る。304号井戸を切る。井戸枠は桶で、最下段の下半分ほどを確認した。出土遺物には口禿白磁皿、鎬蓮弁文青磁碗などがある。

304号井戸（Fig．78，図版14－98）

Ⅴ面のＢ－13・14区で検出した井戸である。直径3.0m、深さ1.32mを測る。井戸枠は桶で、最下段の一つを確認した。出土遺物には口禿白磁皿、鎬蓮弁文青磁碗などがある。

531号井戸

Ⅴ面のＥ－15区にある井戸で、直径4.5mの規模がある。掘り方のみで、井戸枠は確認できなかった。出土遺物には、鎬蓮弁文青磁碗、口禿白磁皿、土鍋、中国製陶器、東播系擂鉢、土師質の擂鉢、土師皿などがある。Fig．79．548の青磁碗の外底には、「人」字の墨書がある。

532号井戸（Fig．78，図版14－99）

Ⅴ面のＥ－14区で検出した井戸である。掘り方の大きさは不明である。井戸枠は桶と考えられるが痕跡しかなく、直径も40cmと小さいことから曲物の可能性もある。出土遺物には鎬蓮弁文青磁碗（Fig．79．547）、口禿白磁皿などがある。

533号井戸（Fig．78，図版14－100）

Ⅴ面のＢ・Ｃ－14・15区で検出した井戸である。直径3.6m、深さ1.8mを測る。井戸枠は桶で、

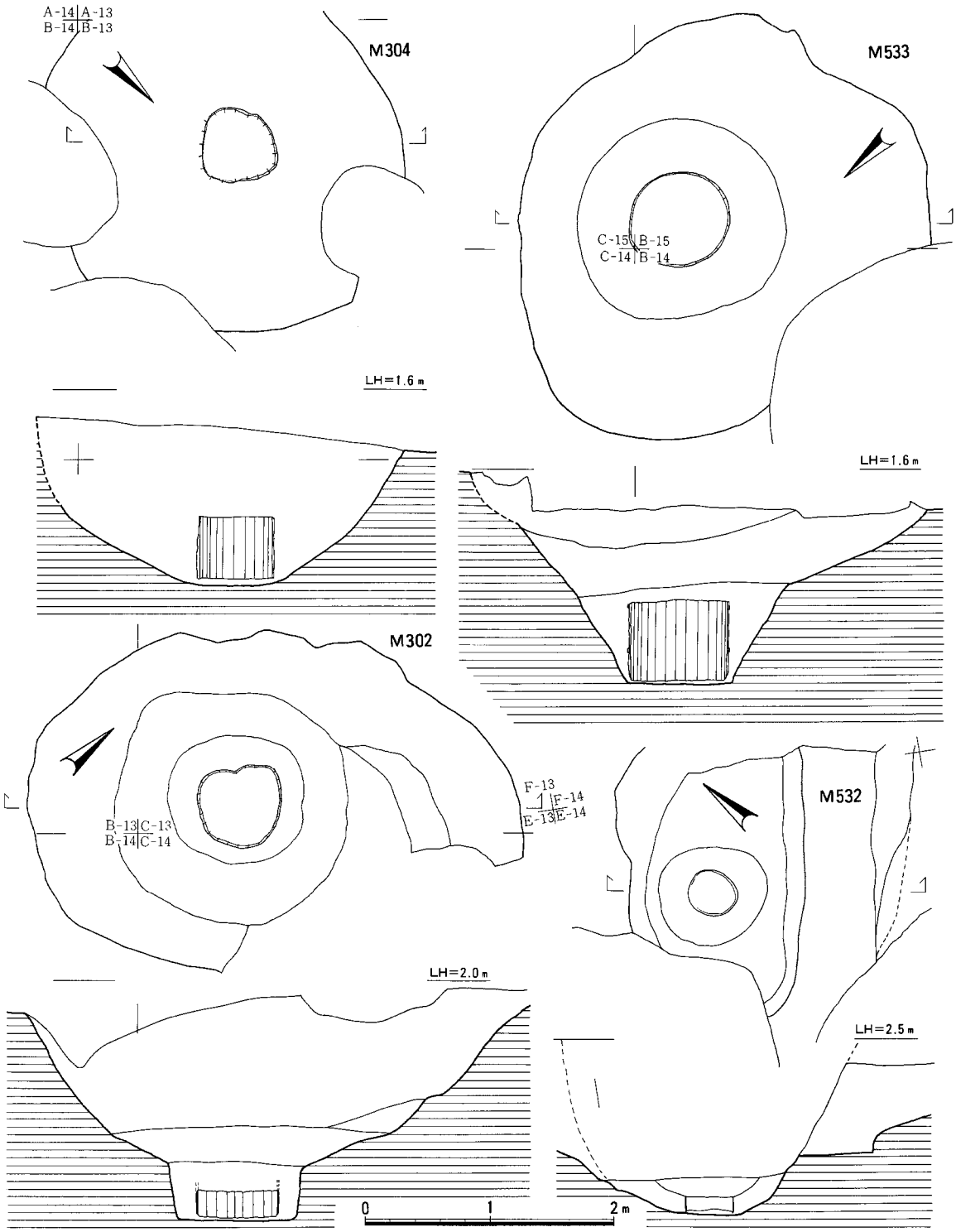


Fig. 78　302・304・532・533号井戸実測図（1/50）

最下段の一つを確認した。出土遺物には、灰色の胎土をもつ無釉甕（Fig，79．549）などがある。

この他、この時期に属する遺構は以下のとおりである。

〈Ⅱ面検出〉

8期…96号土壙

〈Ⅲ面検出〉

7期…168・178・215号土壙　8期…196・197・227号土壙、216・244・248号ピット

〈Ⅳ面検出〉

7期…427号土壙　8期…273・400・418号土壙

〈Ⅴ面検出〉

7期…319・434号土壙　8期…298・305・440・505・522号土壙、499号ピット

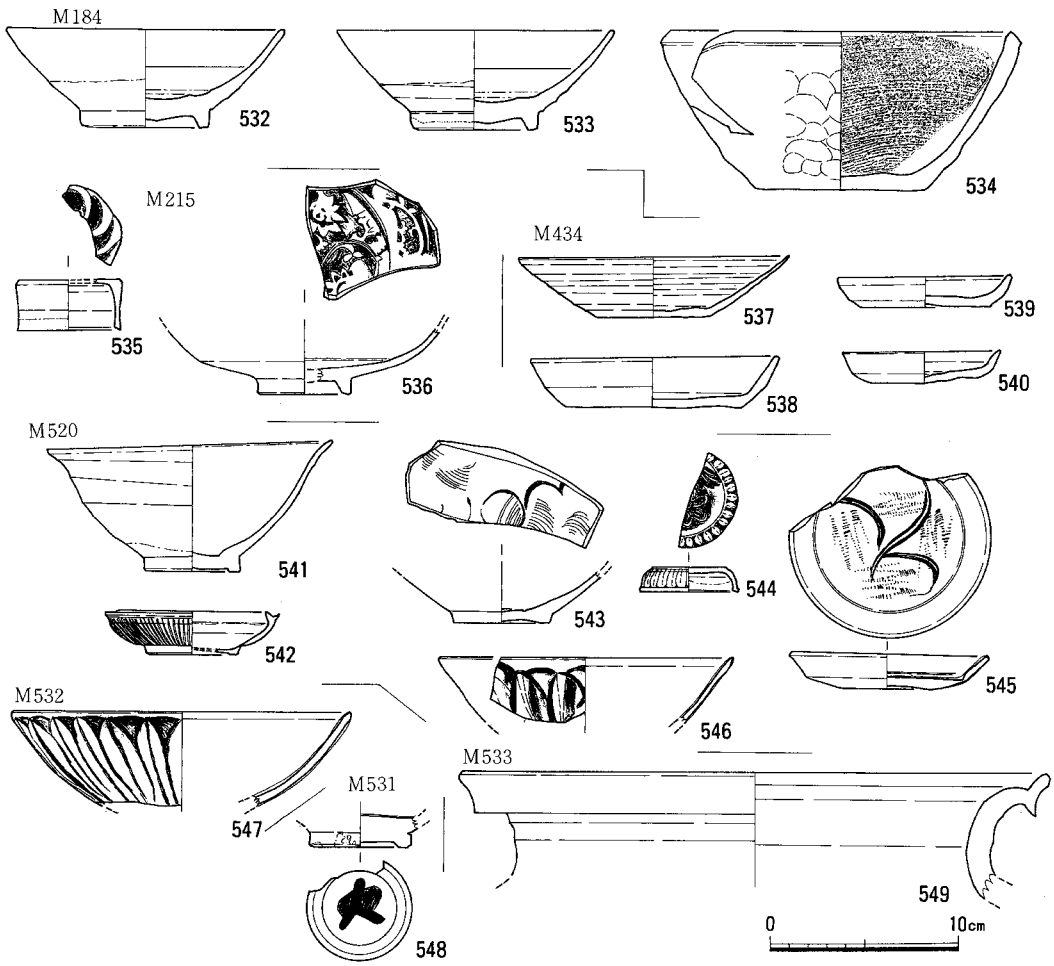


Fig. 79　434号ピット・184・520号土壙・215・531・532・533号井戸出土陶磁器実測図（1/4）

(8)　9・10・11期の遺構と遺物

9期に属する遺構としては、土壙21基、柱穴29個である。

160号土壙（Fig. 80，図版15－101）

Ⅲ面のC・D－8区で検出した方形に近い形の土壙である。長さ1.36m、幅1.10m、深さ0.26mを測る。中には礫が数個入っていた。覆土は木炭を含む淡茶褐色砂質土である。

169号土壙（Fig. 80，図版15－102）

Ⅲ面のE－5・6区で検出した楕円形の土壙である。北半分は調査区外へ出る。深さは60cmほどである。土師皿や坏を多数廃棄してあった。覆土は暗茶褐色砂質土である。土師皿の他、同安青磁の小片が出土している。

186号土壙（Fig. 80，図版15－103）

Ⅲ面のE－7区で検出した土壙である。154号土壙に切られる。数個の小礫が入っていた。
出土遺物には、龍泉青磁碗、東播系擂鉢、土鍋、土師皿などがある。

188号土壙（Fig. 80）

Ⅲ面のE－6区で検出した不整土壙である。171号土壙に切られる。浅いレンズ状を呈し、暗茶褐色の砂質土が覆土である。中には礫、土師皿などが廃棄されていた。この他、龍泉青磁碗片などが出土した。

267号土壙（Fig. 80）

Ⅲ面のC－10・11区で検出した不整形の土壙である。大半は調査区外へ出る。内部には大小の礫が入っていた。出土遺物には、同安青磁碗、土鍋、土師皿などがある。

10期に属する遺構としては、土壙7基、柱穴25個、その他1基である。

313号土壙（Fig. 80，図版15－104）

Ⅴ面のE－12区で検出した土師皿の集中する遺構で、床面まで下げた状態で遺物を確認したため、掘り方のプランや深さなどは不明である。ヘラ切りの土師皿を中心に遺物がまとまって廃棄された状態であった。

出土遺物（Fig. 81. 550～564）　550は白磁の輪花の皿である。釉は半がけにする。551・552は黒色土器の碗である。553は須恵器の碗、554は土師器の坏、555～562は土師皿である。ヘラ切りである。562は手の字状口縁の土師皿である。563・564は土師器の甕形土器である。

493号ピット（Fig. 80，図版15－105）

Ⅴ面のE－16区で検出した柱穴であるが、白磁Ⅵ類の碗（Fig. 81. 565・566）を二枚重ねて埋納してあった。この他の出土遺物には、白磁小碗（567）、土師皿（568）などがある。

498号ピット

Ⅴ面のD－17区にあるピットである。瓦器碗（Fig. 81. 569）が出土した。

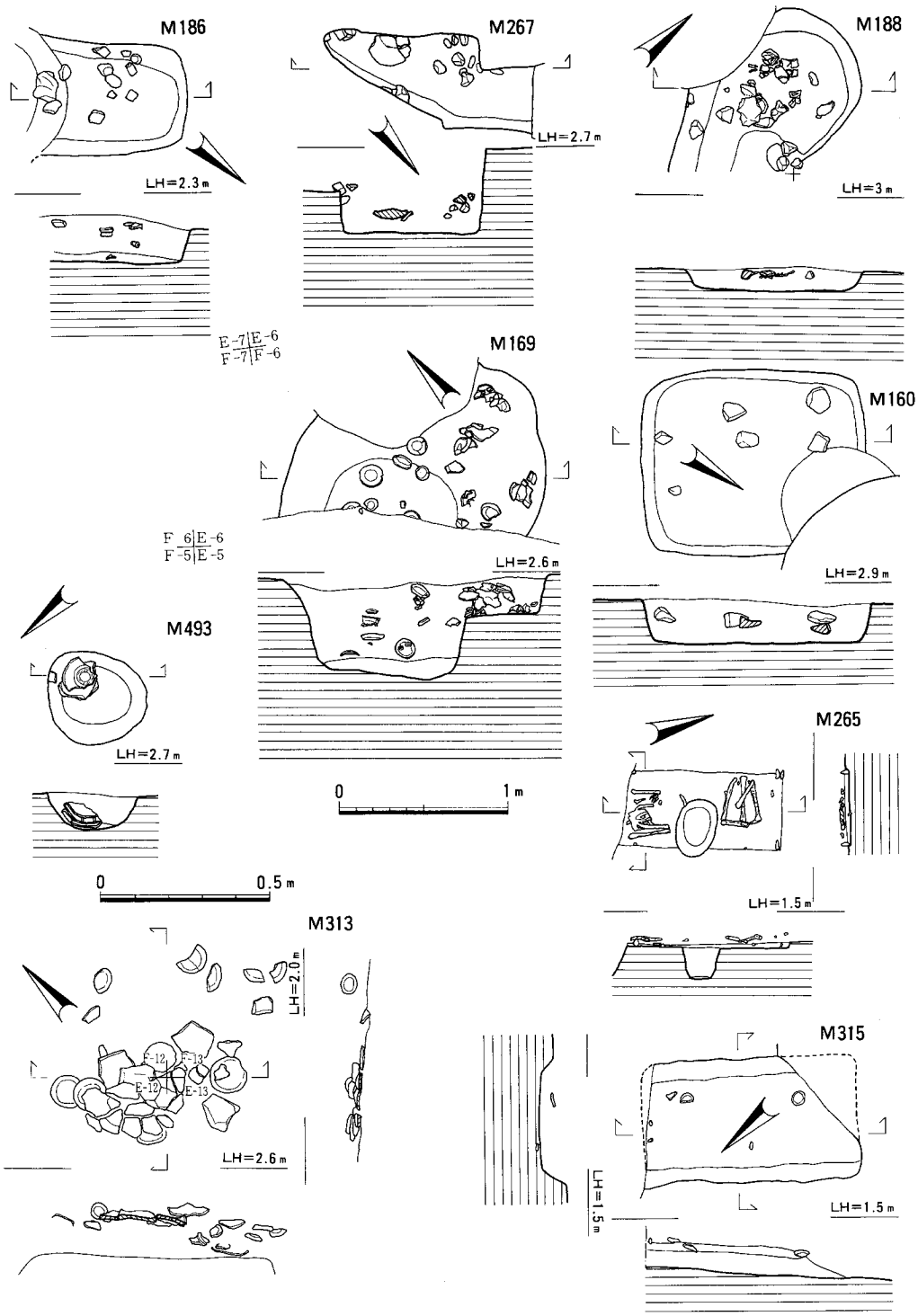


Fig. 80　160・169・186・188・267・313号土壙・493号ピット・265・315号墓実測図（1/40・1/20）

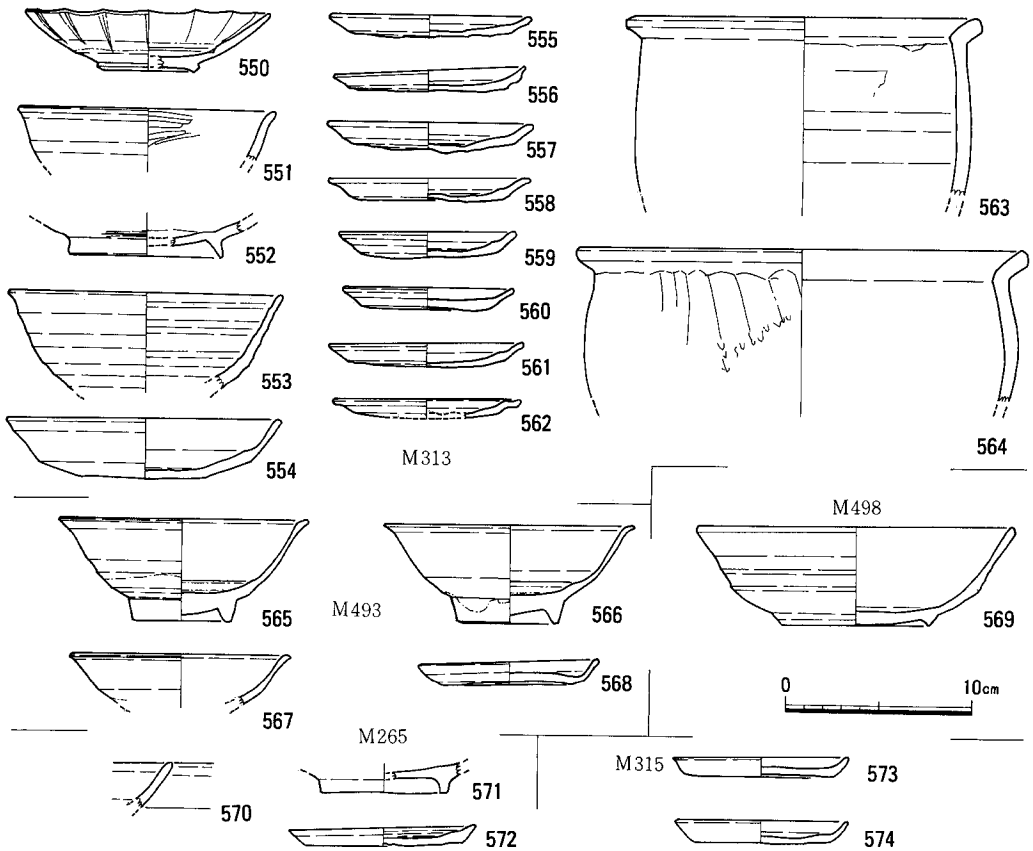


Fig. 81　313号土壙・493・498号ピット・265・315号墓出土陶磁器実測図（1/4）

265号墓（Fig. 80，図版15－106 ）

Ⅳ面のＣ－10区で検出した木棺を埋置した墓である。棺の釘とその間に、人骨が残っていた。頭は148号土壙に破壊され、副葬品も棺の北西部にヘラ切りの土師皿が一枚残るのみである。棺の幅は45cmで、長さは１ｍ以上である。遺体は仰臥で、わずかに膝を曲げ、膝は南側へ倒れている。頭の方向はほ北東に向いている。掘り方は不明。出土遺物にはFig. 81の570・571の黒色土器と572のヘラ切りの土師皿がある。土師皿は棺外から出土したが、副葬品のひとつであろう。

315号墓（Fig. 80，図版15－107）

Ⅴ面のＥ－13区で検出した墓である。釘が残るため木棺を埋置したものであろうが、その規模は復元できない。当初脚の骨二本を検出したが、雨による壁の崩落などで原位置を記録できなかった。現存部分で長さ1.30m、幅0.72m、深さ0.14mである。土師皿二枚と手の字状口縁の土師皿と白磁Ⅵ類の碗の小片が出土した。土師皿二枚（Fig. 81－573・574）は副葬品であろう。糸切り底である。

この他、この時期に属する遺構は以下のとおりである。

〈Ⅲ面検出〉

9期…163・185・208・221・226・228・229・417号土壙、234号ピット

〈Ⅳ面検出〉

9期…290・417号土壙　10期…296号土壙

〈Ⅴ面検出〉

9期…306・310・316・318・447・450・470・512号土壙、320・331・449・455・461・462・464・465・470・467・474・476・477・481・483・487・489・494・495・503・514・521・526・528号ピット

10期…297・307・314・337・442・460・480・515・518土壙、326・336・438・441・451・459・466・468・475・479・482・488・493・496・498・513・516・525号ピット

11期…517号土壙、335・519ピット

(9)　包含層・その他の遺構出土陶磁器

ここでは、包含層および遺構から出土したものの中で貴重と思われるものを選別して掲載した。国産陶器、青花、色絵、李朝陶磁器、備前焼、瓦質土器、タイ・ベトナム陶磁器、陶器壺、墨書土器、その他の順である。

国産陶器（Fig. 82. 575～583）

575は唐津の溝縁皿である。灰褐色の胎土に透明の釉をかける。砂目痕が残る。576と577はほぼ同形の古唐津の皿である。灰橙色の柔らかい胎土に透明の釉をかける。胎土目が残る。578は古高取の皿である。灰色の胎土をもち、深緑の釉を全体にかけている。上畑窯ではないかとの教示を受けた。同様の皿の例が数点出土している（図版18－155）。579は縁折皿である。灰黒色の胎土にオリーブ色の釉をかける。580は唐津の鉄絵の片口である。茶褐色に発色している。581は唐津の碗であろう。端反りで白黄色の胎土をもつ。582は唐津の碗である。内面に鉄斑が認められる。583は古高取と思われる碗である。部分的になまこ色に発色する飴色の釉をかける。胎土は暗茶褐色の粗いものである。

584・585は美濃の天目碗である。584は光沢のある茶白色の厚い釉がかかる。585は灰橙色の胎土に茶～黒色の釉がかかる。丁寧なつくりの製品である。

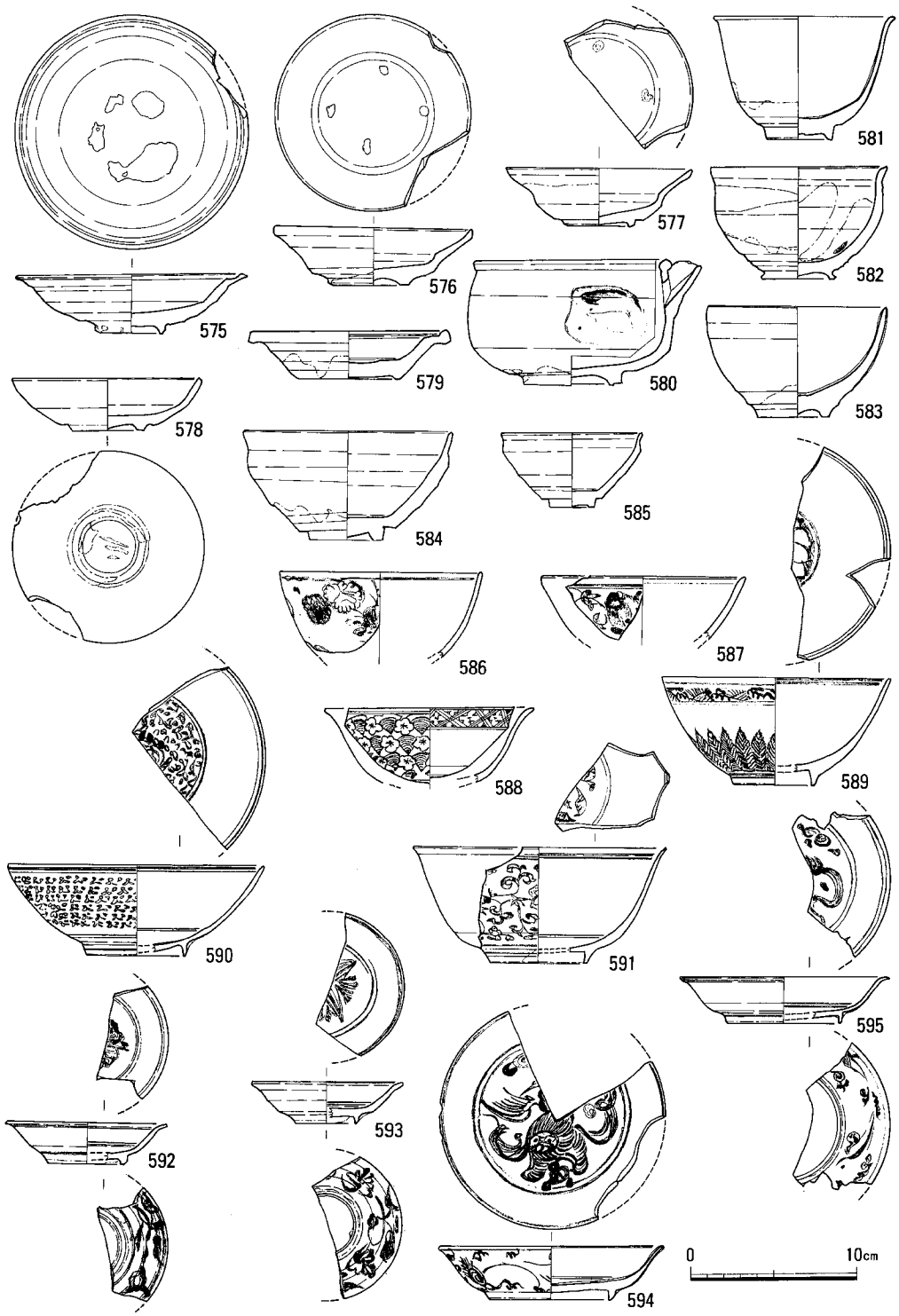


Fig. 82　国産陶器・天目・青花実測図（1/4）

青花（Fig. 82. 586～595, Fig. 83. 596～608, Fig. 84. 609・610）

586・587は小野分類E群の碗である。586は外面に草花文、587は獅子の文を描く。588はB群の碗である。外面に花と波の文、内面に四方襷文帯を描く。589はC群の碗で、外面に波濤文と芭焦葉文、見込に蓮華を描く。590はC群の碗で、外面と見込に略化した唐草文を描く。591は端反りの饅頭心型の碗である。外面と見込に唐草文を描く。

592・593・597はB群の小型の皿である。いずれも厚めの釉をかけ、呉須も水色に発色するという共通の特徴をもつ。文様は見込に十字花文、外面に唐草の退化した文を描いている。594と595はB₁群の皿で、外面牡丹唐草文、内面玉取獅子を描く。596はB群の皿で、見込に花樹文、外面に唐草文を描く。598～604はC群の皿で、601・604は黄白色の胎土をもつ上田分類B類、602は底に砂の付着するC類である。598・599は内面ねじ花、外面波濤文と芭焦葉文を描く。600～602は内面寿人形文、外面唐草文を描く。603は見込に十字花を描き、その後釉を輪状に掻き取っている。外面には波濤門の退化した列点を描く。604は胎土は灰白色で堅緻であるが、文様の退化している点や釉を輪状に掻き取る手法などは603に共通する特徴である。605はE群の皿で、外面に花樹鳥文を、内面に山水と仙人を描く。606はB類に属する軟質の胎土をもつ皿である。見込の釉を輪状に掻き取る。607は同じく軟質の胎土をもち、砂高台のC類の皿である。外面に草文を描く。608は内面の中心に三つの如意雲を中心に舞う三羽の鳳凰を描いている。外面無文。

609は小型壺である。外面に唐草文を描く。610は内面に十字花文を描く菊皿である。小型の蓋もののひとつであろうか。

白磁・線彫（Fig. 84. 611～617）

611は線彫りで牡丹唐草文を描く白磁の碗である。612～615は線彫りに呉須で界線や四方襷文帯を描く碗である。文様は牡丹唐草や波濤文などである。

616は白磁の菊皿である。外底に「天下太平」の銘を描く。617は端反りの白磁皿である。

色絵（Fig, 84. 618～628）

620～628は色絵磁器を集成した。620・621・627は遺構出土品を再録したものである。619と618を除いて、16世紀から17世紀初頭のものである。618は柔らかい胎土に透明の釉をかけ、外面に花の文様をあしらった合子の身である。地を赤に塗り、花に黄色や緑の絵の具を塗る。619は伊万里の皿である。内側面に呉須で窓を描き、その中に赤や黄色で花草文を入れる。外側面には呉須で唐草文を描く。623は壺の底部である。外面に赤で唐草文を描き、黄色や緑で彩色している。灰白色の胎土で、露胎外底面に墨を塗る。622は端反りの碗の破片である。28号石積土壙から出土した。625は大皿である。外面に宝相華、内面に四方襷文を描く。54号土壙や101・380号石積土壙などから出土した。624も同じような文様構成をもつ皿の破片である。1号石積土壙から出土し

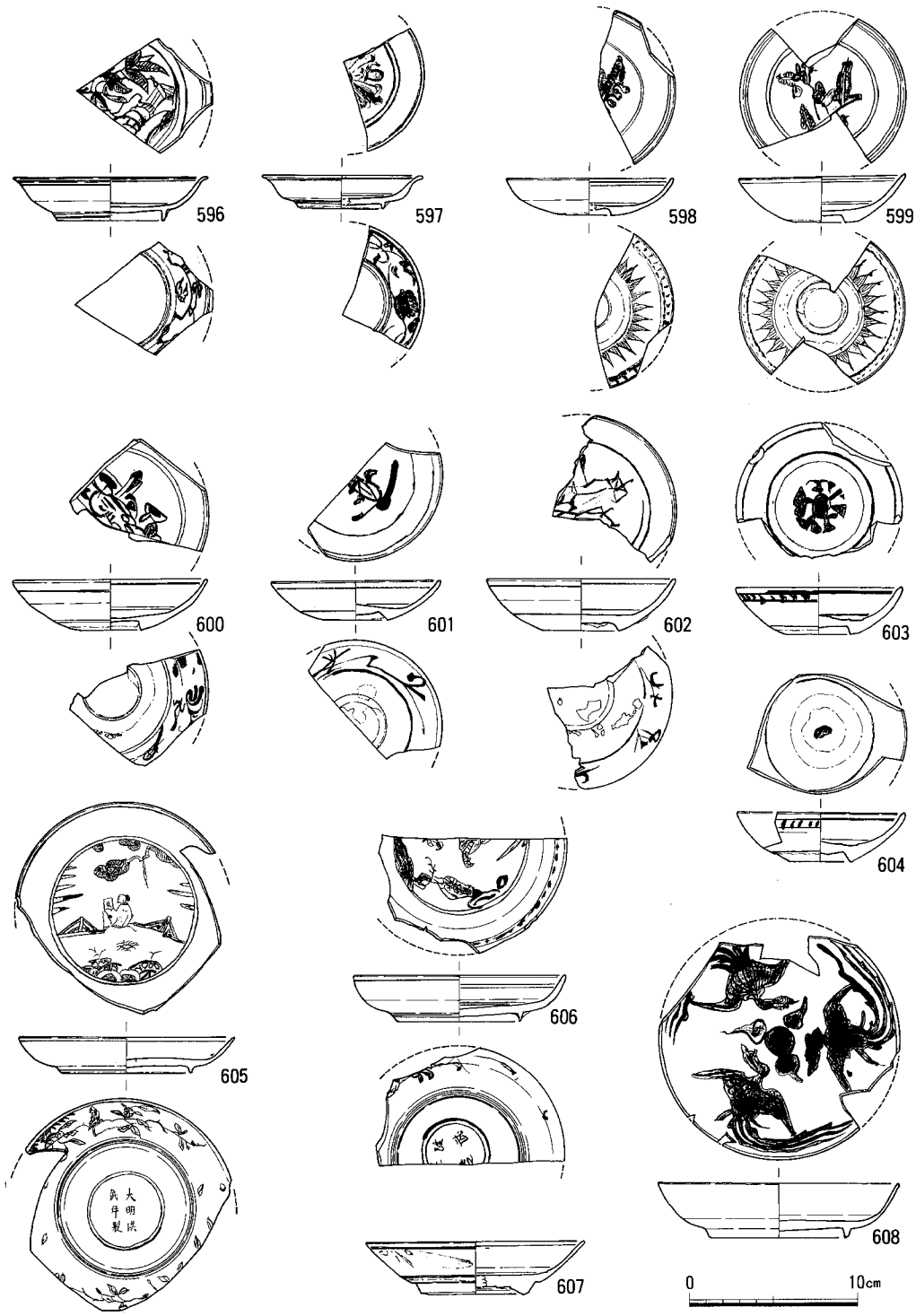


Fig. 83 青 花 実 測 図 (1/4)

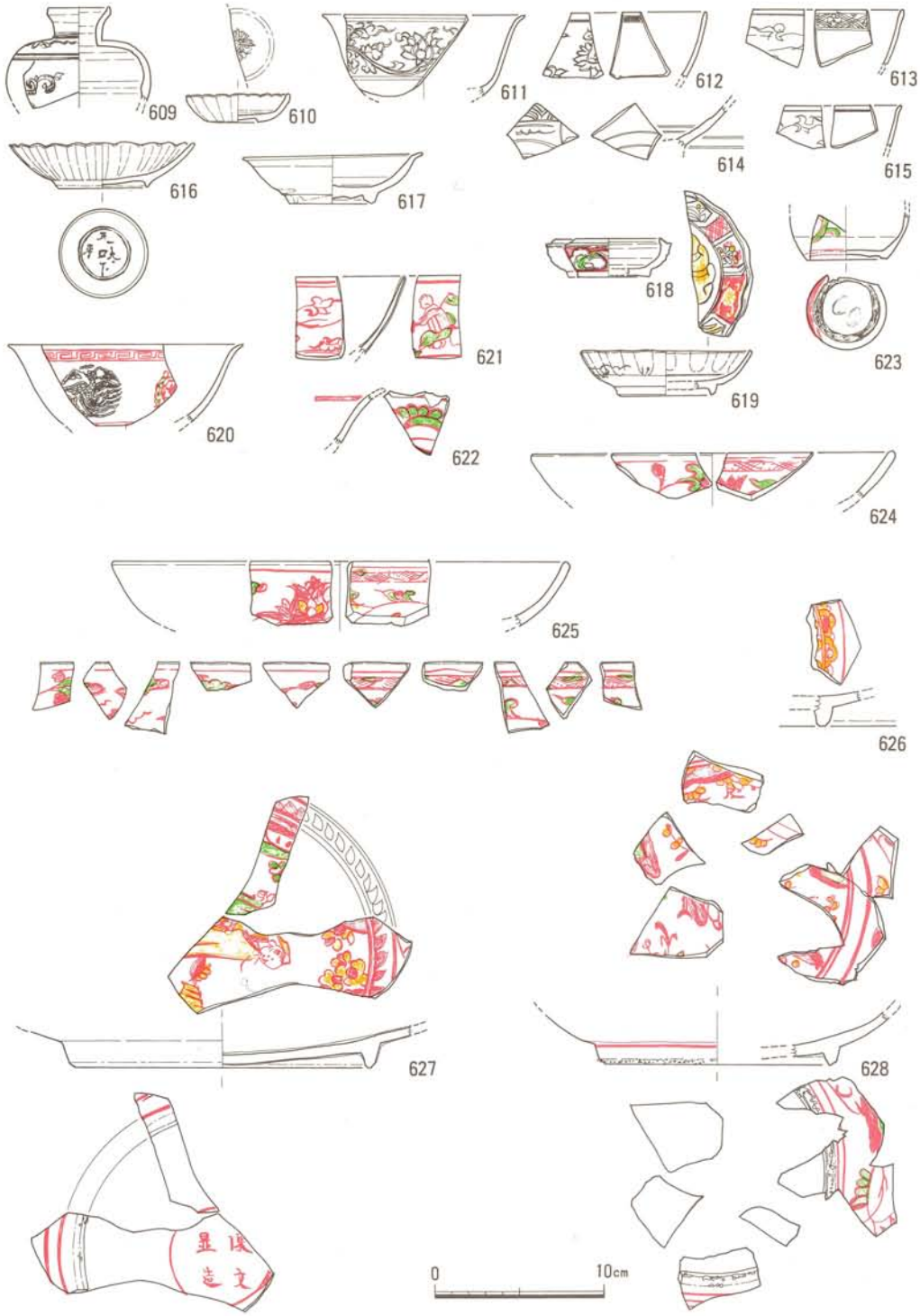


Fig. 84　青花・白磁・赤絵実測図（1/4）

た。626は大皿の高台の破片である。高台には砂が付着している。628は同一個体と思われる大皿の破片である。外面に宝相華、内面に樹石文を描く。高台にはかなり多量に砂が付着している。火を受けて変色している。

李朝（Fig. 85. 629～653, Fig. 86. 654～659）

629～644は皿や碗などの小物である。大きく白磁系と陶器（粉青沙器）系がある。

629は内弯する口縁部をもつ白磁の碗である。見込に段がある。胎土目が見られる。胎土は堅緻で、淡いオリーブ色に近い色の釉をかけている。630は軟質白磁の碗の底部である。見込にカンナの痕がある。631は軟質の胎土に透明な釉をかけた白磁の底部である。太い作りの高台をもつ。632は堅手の白磁碗である。灰白色の胎土をもち、淡い黄緑に発色している。633は刷毛目の陶器である。竹節高台から直線的に開く。胎土は灰色で透明釉をかけるが、部分的に桃色に発色している。634は軟質の白磁碗である。胴部下の削り部分はかいらぎ状になる。635は陶器碗である。わずかに口縁部が外反する。灰色の胎土に黒い鉱物が混じる。光沢のある深いオリーブ色に発色している。636・637は軟質の胎土をもつ白磁の皿である。釉のたまりは淡い黄緑になる。638は灰色の胎土をもつ刷毛目の陶器碗である。竹節高台をもつ。639も陶器碗である。灰色を呈する。640・641は陶器の小碗である。641は部分的に刷毛目装飾がある。642は薄手の軟質白磁の皿である。淡黄色を呈する。643は低い高台をもつ陶器の皿である。橙色に発色している。644は陶器の小型壺である。黄白色の胎土をもち、底部は露胎で砂目痕が残る。灰緑色に発色している。焼成（破損）後、口を削っており、無頸である。

645～659は薄手の叩き手法による陶器の一群で、徳利（広口壺）、壺、甕、鉢（片口）などがある。灰褐色ないしは赤褐色の胎土をもち、緑色の釉をかける。光沢のある深い緑に発色する場合が多いが、まれに灰紫色や灰茶褐色に発色しているものもある。仮に緑褐釉陶器と称する。

645～647は徳利の口である。645はやや肥厚する口縁をもち、丸い肩へ段をもって繋がる。646は縁折れの口をもつ。647は肩部に数本の細沈線を入れている。赤紫色の胎土である。648～653は端部をつまみあげた折り曲げ口縁壺である。幅広の口縁上面は釉をふき取り、貝目痕を残すものが多い。648は肩の張った小型の壺である。649は二段折れの口をもつ大型の壺（甕）である。肩の張りは651・652などと共通する。654・655・657～659は鉢である。657は片口になるかもしれない。叩きの痕跡を顕著にとどめている。口の形態はさまざまである。659は暗赤紫色の堅緻な胎土をもち、器壁もほかに比べて厚く、古唐津の可能性もある。656は甕であろう。

備前（Fig. 86. 660～669, Fig. 87. 670～677）

今回出土の15～16世紀の国産陶器の中でもっとも多いのが備前であり、擂鉢、甕、壺、鉢、徳利など器種も多様である。ここでは、稀有な器種および字や模様を線刻した例をあげた。

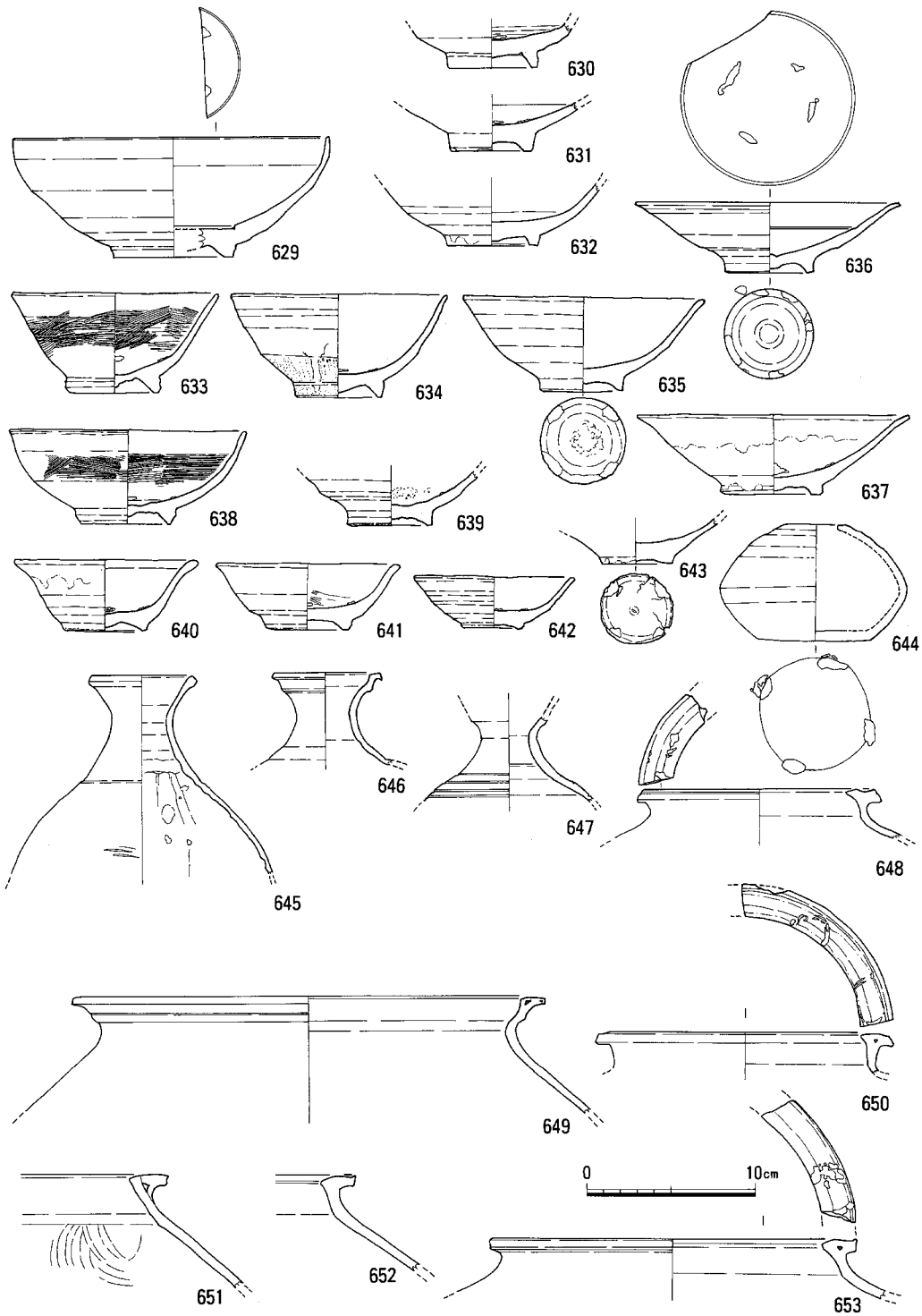


Fig. 85　李朝白磁・陶器・緑褐釉陶器実測図（1/4）

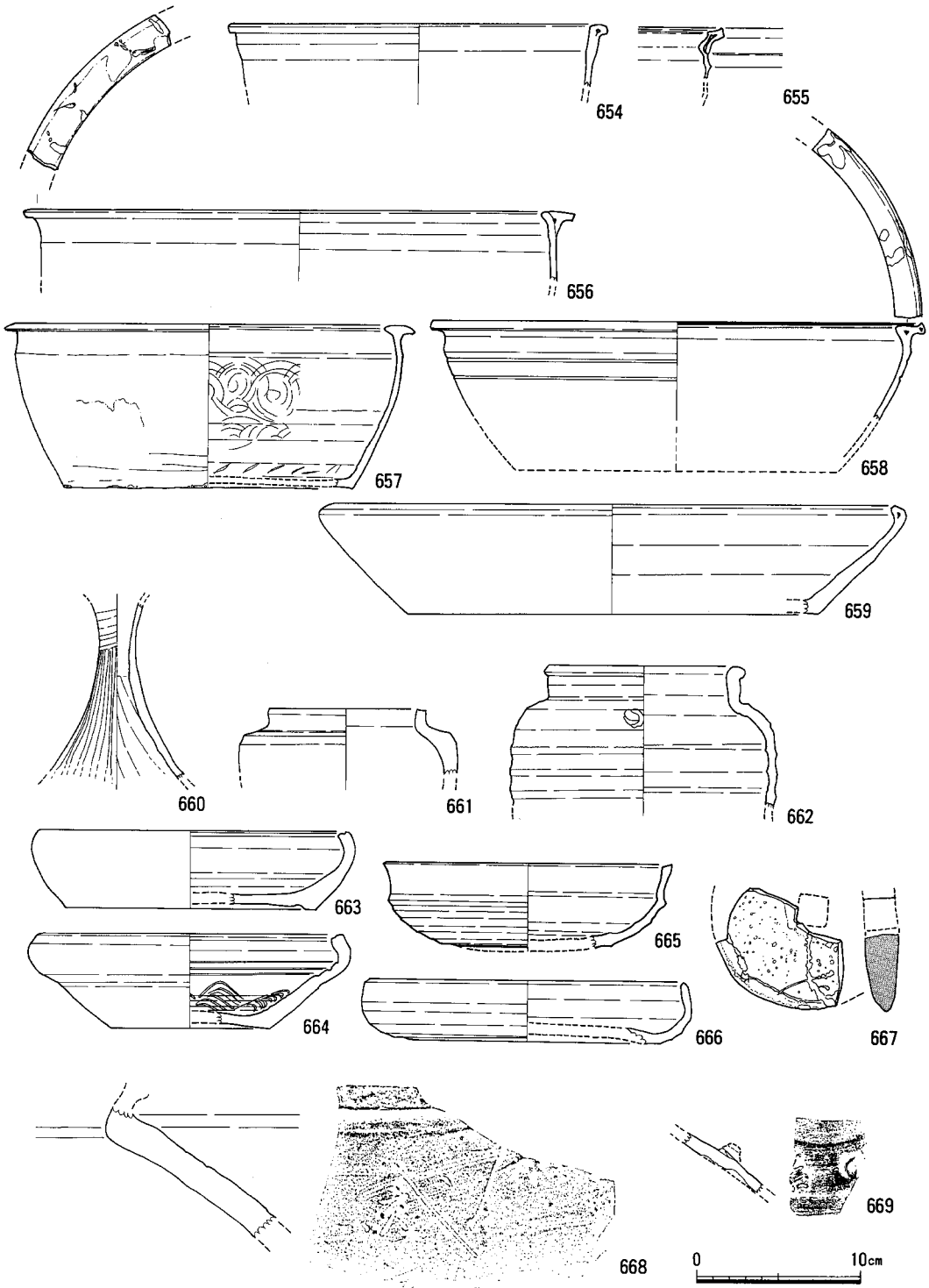


Fig. 86　李朝緑褐釉陶器・備前焼実測図（1/4）

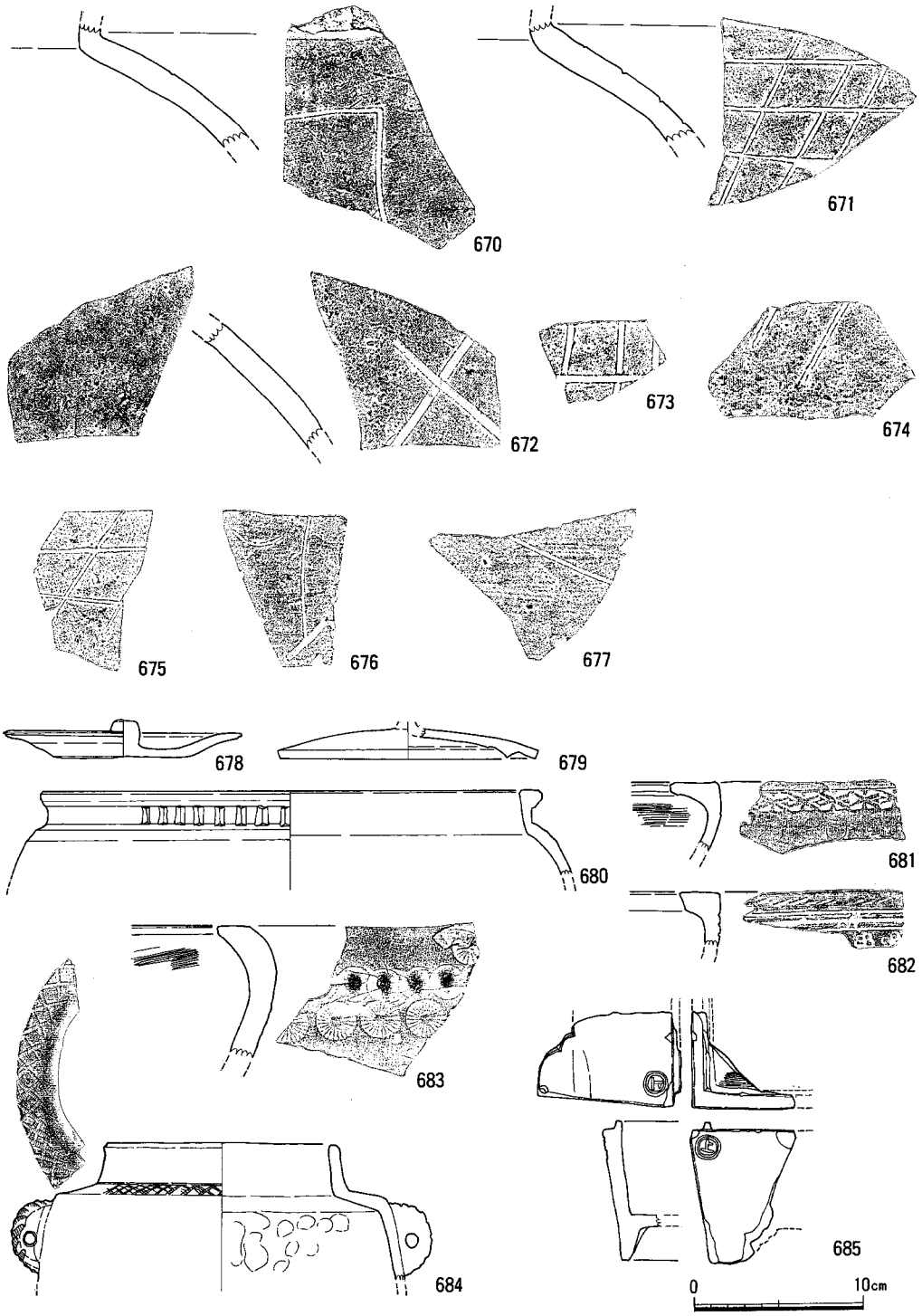


Fig. 87　備前焼・瓦質土器実測図（1/4）

660は徳利の首から肩にかけての破片である。Fig. 40. 177と合わせて二点のみの出土である。661は短頸壺である。肩には自然釉がかかっている。662も小型の壺である。663～666は鉢物である。663・666は平鉢であり、底には成型の際の敷物の圧痕がある。664は内面に波状の擦り目が付けられている。665は外反する口縁をもつ深い鉢で、同じような器形のものは、Fig. 56. 339とFig. 67. 429の二例がある。667は備前焼の薬研である。方形の穴をもち、研ぎ面はかなり使い込んだらしく磨耗している。一乗谷朝倉氏遺跡では越前焼の薬研が出土しており、この種の道具に、石でなく陶器を利用していた点や、これらが各地で生産されてたことは興味深い。

668～677は甕や壺の肩部などに刻線のあるものを集成したものである。668は「弐石」甕の肩部にある「弐石」の文字である。669は小型の壺の肩であるが、刻まれた文字の一部が残っている。内容は不明。670は鈎状の模様の一部、672は「×」、676・677は線の一部、671・673～675は格子状の文様が認められる。いずれも大型の甕の破片である。

瓦質土器（Fig. 87. 678～685）

678は落とし蓋で、つまみがつく。679は被せ蓋で、下の容器の口に入れる張り出しがある、680は風炉、681～683は火鉢である。菱形文、梅花文、菊花文のスタンプを押している。684は茶釜である。形に撚り糸状の工具で「×」字状に連続する文様を押している。把手の部分も同じ工具による装飾がある。685は蓋付の香炉の破片である。外面の角に、丸に「上」の刻印がある。

タイ・ベトナム陶磁器（Fig. 88. 686～696, Fig. 89. 700）

686～689はベトナムの陶磁器、690～696・700はタイの陶器である。

686は鉄絵の碗の底部の破片で、精錬された黄白色の軟質の胎土をもつ。見込に花文を描く。外底に鉄銹を塗っている。687は青花と思われる皿の底部破片である。表面が汚れて見分けにくいが、呉須の文様がある。暗灰色の堅緻な胎土である。外底に鉄銹を塗る。688は褐釉の印花碗である。軟質ではあるが、緻密な白色の胎土に褐色の鉄釉を半がけにする。内面に型押しの文様がある。約半分の破片である。689は鉄絵の盤の破片である。鍔の折れる部分にあたり、青紫に発色した文様が認められる。胎土はやわらかい黄白色である。同一個体と思われる小さな破片がある。113号土壙から出土した。

690はいわゆる「ハンネラ」（半練）と呼ばれる焼き締め陶器の壺である。やや下膨れの胴部、平たい底部、外反する口縁部などの器形に特徴づけられる。胎土は細砂を含む堅緻なもので、無釉で橙色から灰茶褐色に焼き上がっている。口縁内面に蓋受けのための段がある。外面上半部は鋸歯状のギザギザ文と連続するアラベスク風の装飾を叩き（型押し）手法によって付けている。下半部から底にかけては平行する叩き痕で覆われている。20点ほどの破片から成り、全体の約半

分残る。口と胴、底はそれぞれ接点がなく、全体形は図上で復元した。また歪みも著しいことから測点によって、形が多少異なることをお断りしておく。焼土C層を主体に出土している。691・692はこの種の壺とセットになる蓋の破片である。691はつまみの部分である。胎土の特徴は690によく似ていて堅緻である。692は蓋の四分の三ほどの破片である。388号土壙出土の破片と接合し、同一個体と思われる破片が焼土BとCの間の層から出土している。上の二点に比べるとやや軟質である。つまみに鉄銹を塗る。693はサワンカロークの茶入れ壺の破片である。灰色の緻密な胎土に明るい茶褐色の釉をかけている。694は無釉の壺で、胴部の上半に三段の印花文を配し、頸部と底部に赤色の顔料を塗布している。器壁は薄く、つくりも丁寧である。胎土は692に似る。695は四耳壺の把手である。赤茶褐色の粗い土を使用している。696は瓦によく似た灰色の胎土をもつ大型の壺の肩の部分の破片である。外面に型押しによるアラベスク文と撚り紐状の装飾を施している。この撚り紐状の圏線は櫛歯に似た工具を押し当てて作られている。外面が黒く、塗料を塗った可能性が高い。器壁が2cmほどあり、かなり大型の製品と考えられる。700は赤い胎土に黒色味を帯びたアメ色の釉をかけるサワンカロークの壺である。各部の接点がなく、図上で復元している。丸く膨らむ口縁部は外へ曲線的に開く。丸みを帯びた肩から大きめの底部へ移行する。肩部に円文、胴部に拠り紐と円文を貼り付けており、その部分は釉が薄く、白く浮かび上がってみえる。底部は露胎で赤灰色に発色している。

陶器壺（Fig. 89. 697～699）

697は灰色の胎土をもつ四耳壺である。黒褐色の釉をかける。698は黄白色の軟質の胎土をもち、光沢のある茶白褐色の釉をかける四耳壺である。699は同じく黒茶褐色の釉をかける六耳壺である。胎土は軟質で白黄色である。うち二個の把手は縦方向である。これらはいずれも口縁上端に重ね焼きの目痕が全周についている。また698・699は釉調のみでなく、頸がほとんど無く、強く張り出した肩部の特徴など共通点が多い。いわゆるマルタバンタイプである。

墨書土器（Fig. 90. 701～716）

701～703は土師皿に呪文を書いたものである。701は中央上部に記号を書き、その下に文字をかいているが、判読できない。いずれも糸切り底である。

704～716は陶磁器に墨書のあるものである。704～707が白磁のⅡ・Ⅳ類の碗、709～712はD類の白磁皿・多角坏の類、714は青磁皿、715・716は陶器の壺である。708は分類不明。高台に目痕が付き、白い胎土に水色がかった釉がかかる。704は「六」、705は「六綱」＋花押、706は「綱」、707は「六ヵ」、708は「東」、712は「上」である。715は「□屋」もしくは花押、714は「大三」であろう。ほかは、15世紀代の製品で、記号がほとんどである。「○」の中に「一」や「十」をかいたもの、それを組み合わせたものがある。このような記号は、この時期の墨書の特徴である。

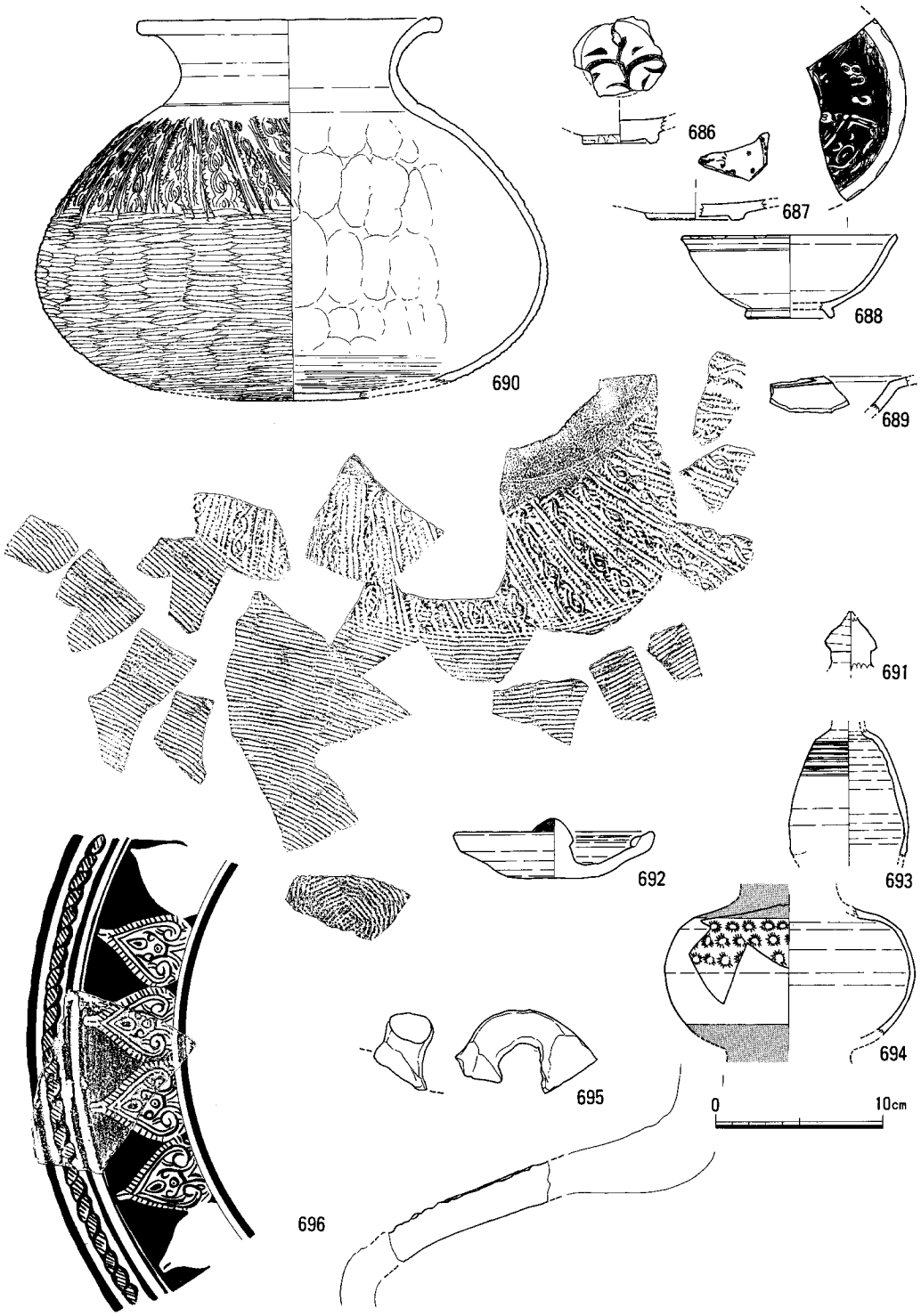
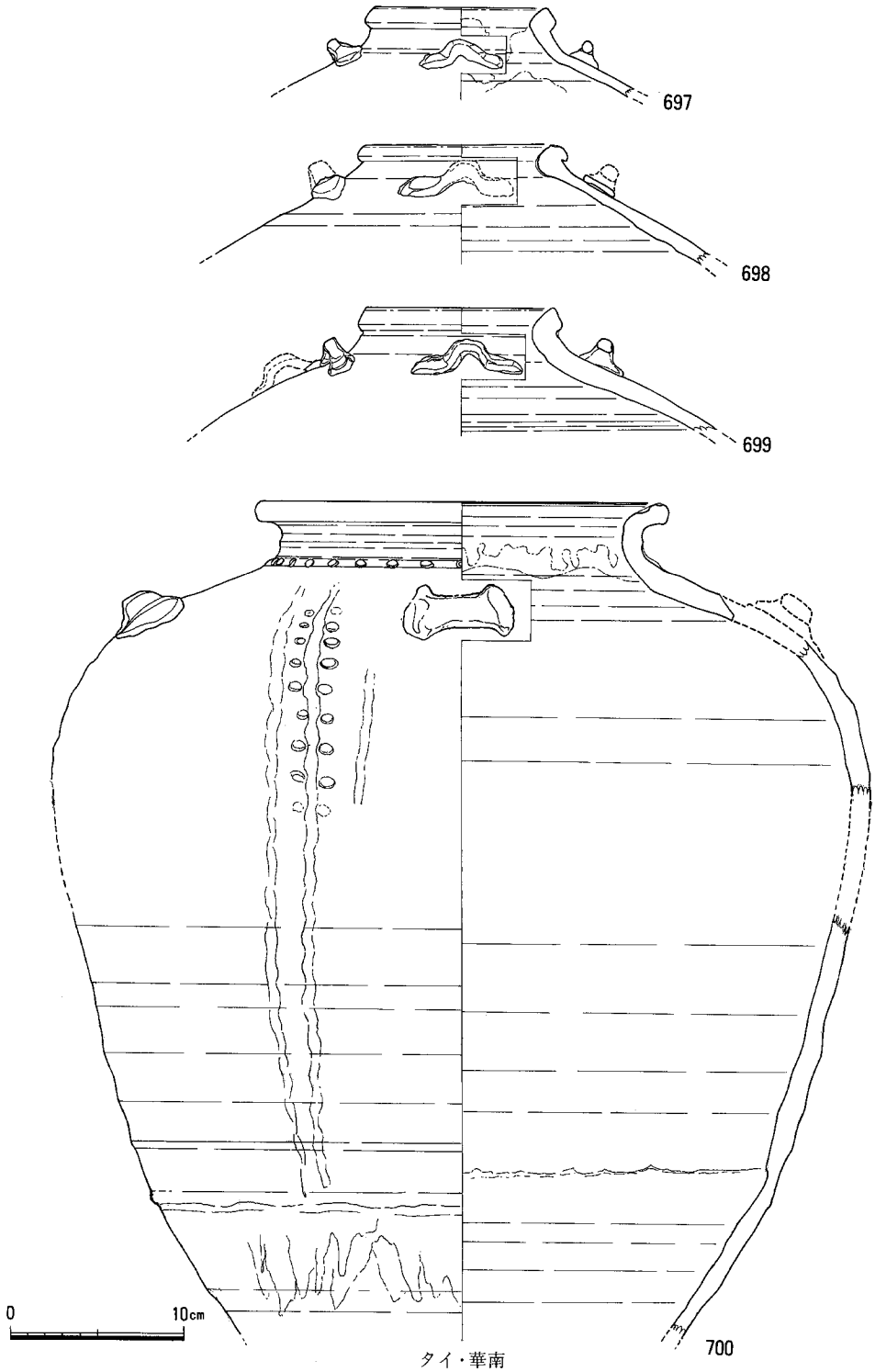


Fig. 88　タイ・ベトナム陶磁器実測図（1/4）



タイ・華南

Fig. 89　タイ・華南陶器壺実測図（1/4）

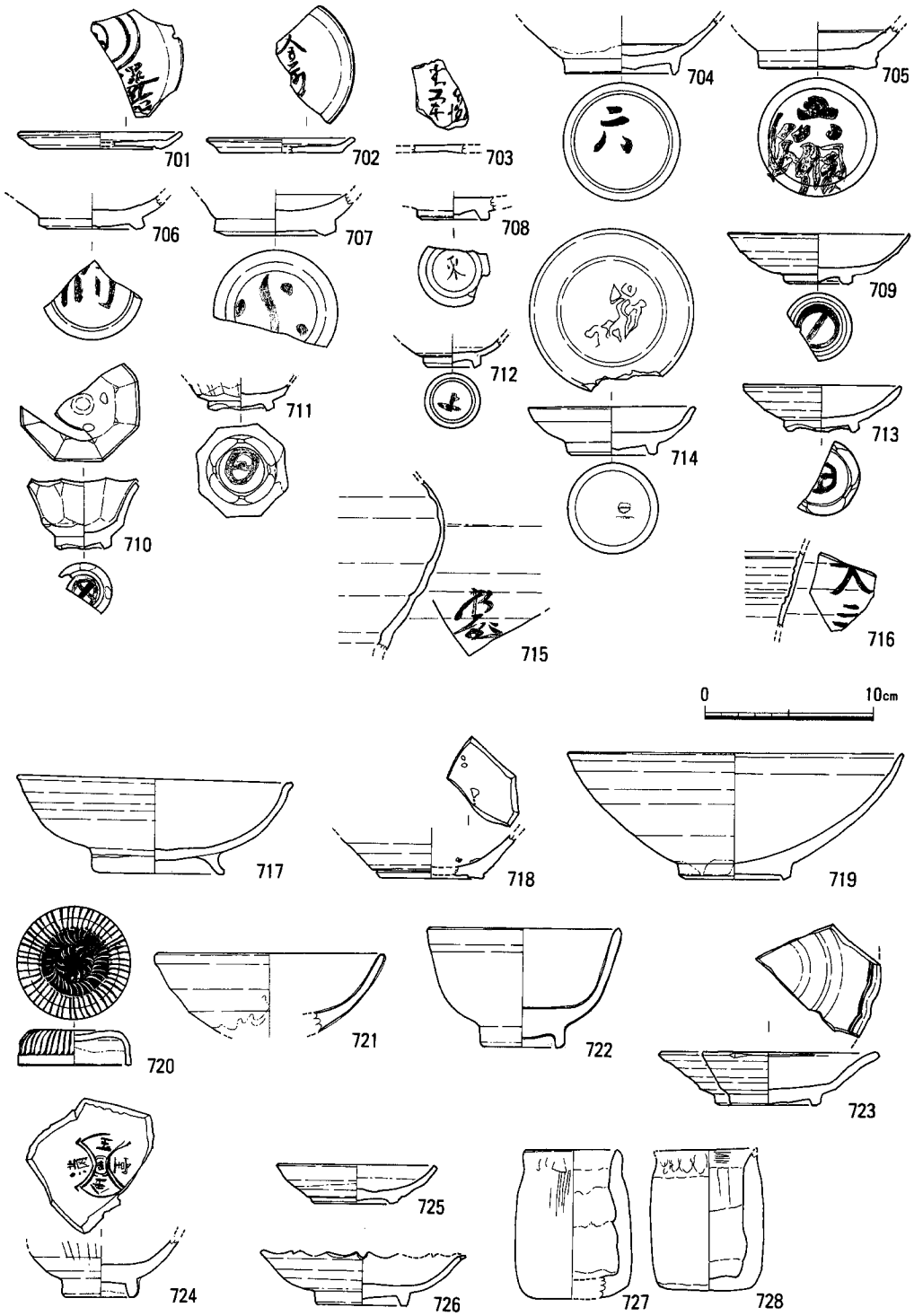


Fig. 90　墨書土器・その他の陶磁器実測図（1/4）

その他の陶磁器（Fig，90．717～725）

717は土師器の碗である。719は白磁の碗である。この二点は重なった状態で338号ピットの上から出土した。718は蛇の目高台の越州窯の青磁碗である。720は青白磁の合子の蓋である。718は青磁碗である。722はほぼ完形に近い青磁の碗である。723は高台付の皿である。724は細蓮弁文の青磁碗で、見込に分銅と周囲に「金玉満堂」の刻印がある。725は薄手の低い台形の高台をもつ白磁の皿である。釉は半がけである。726は白磁の稜花皿である。727・728は焼塩壺である。

⑽　瓦（Fig．91．729～746，Fig．92．747～764）

今回の調査では多量の瓦が出土した。特に３～２期にかけては、石積土壙の材として使用されたり、壁土や焼土、礫などとともに整地の際に埋立られていた。その量はコンテナ30箱分に相当する。瓦の種類には、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、刻袖瓦、鬼瓦などがある。最も量が多かったのは平瓦である。

鬼瓦（729～731，図版26－248）

729～731は巴文を三個配した鬼瓦である。獅子口とも考えられる。729は１期の石積土壙、730は２期の石積土壙から出土しており、16世紀末から近世初頭の所産であろう。図版26-248は鬼瓦の破片である。いずれも部位は不明。

軒丸瓦（732～749）

732～743は巴文と珠文を配する軒丸瓦である。731～741、743・744は１期の遺構から、745は２期、742・746は３期の遺構から出土した。これをみると、幅広で低縁、巴と珠文ともに大きいものは新しく、逆に幅の狭い高縁で、巴と珠文が細く、小さいものは古いという傾向が窺える。珠文の数も時期が新しくなるにつれ、少なくなる。747･748は花の文、749は菱と連点をあしらった軒丸瓦である。747・748は３期の石積土壙から出土した。

軒平瓦（750～752）

750・751ともに18世紀以降の製品で、側縁の幅が広い。唐草文である。752・755は唐草に宝珠文である。750は２期の石積土壙、755は３期の井戸から出土した。それ以外は１期の遺構出土である。

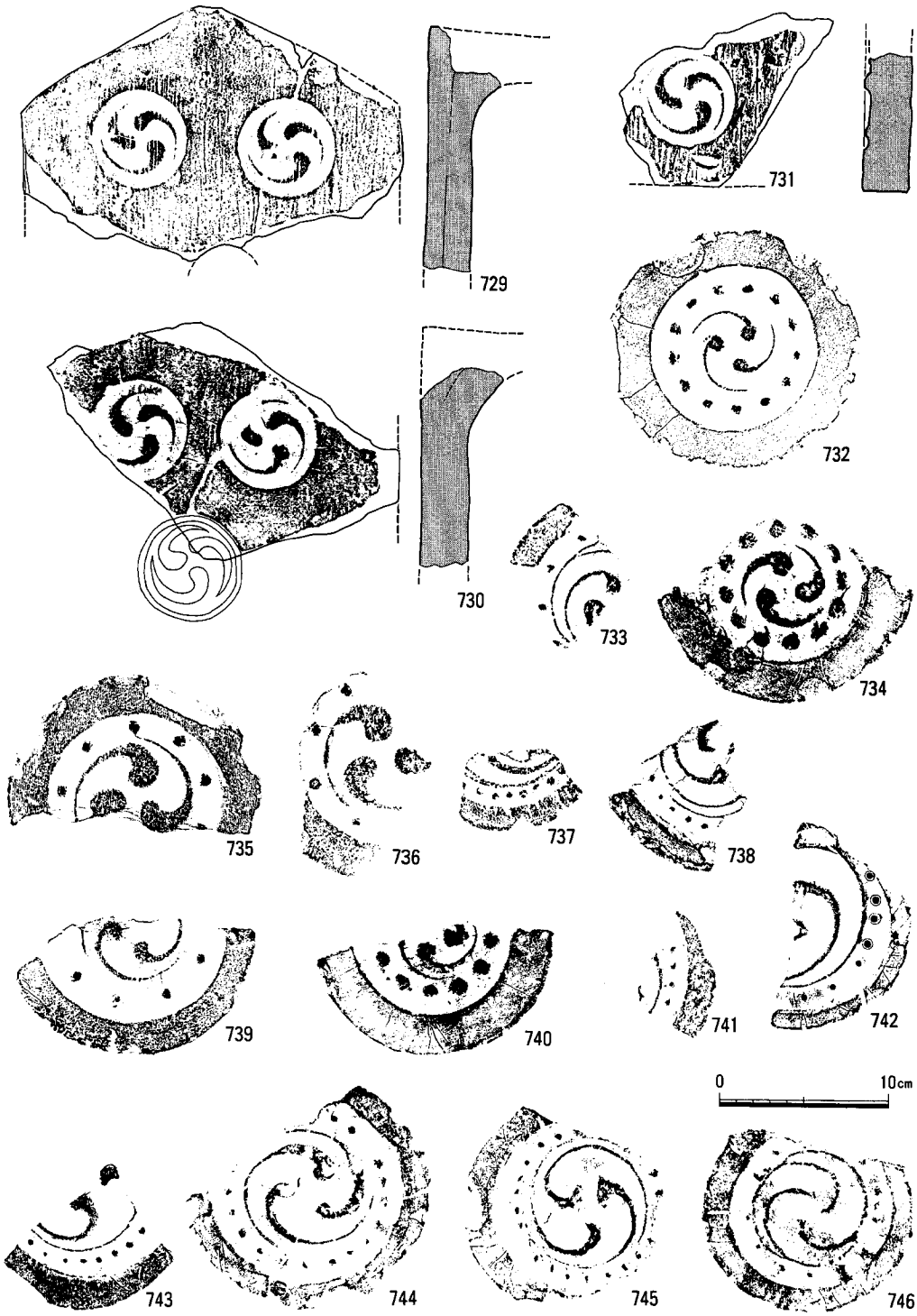


Fig. 91　瓦実測図・拓影（1）（1/4）

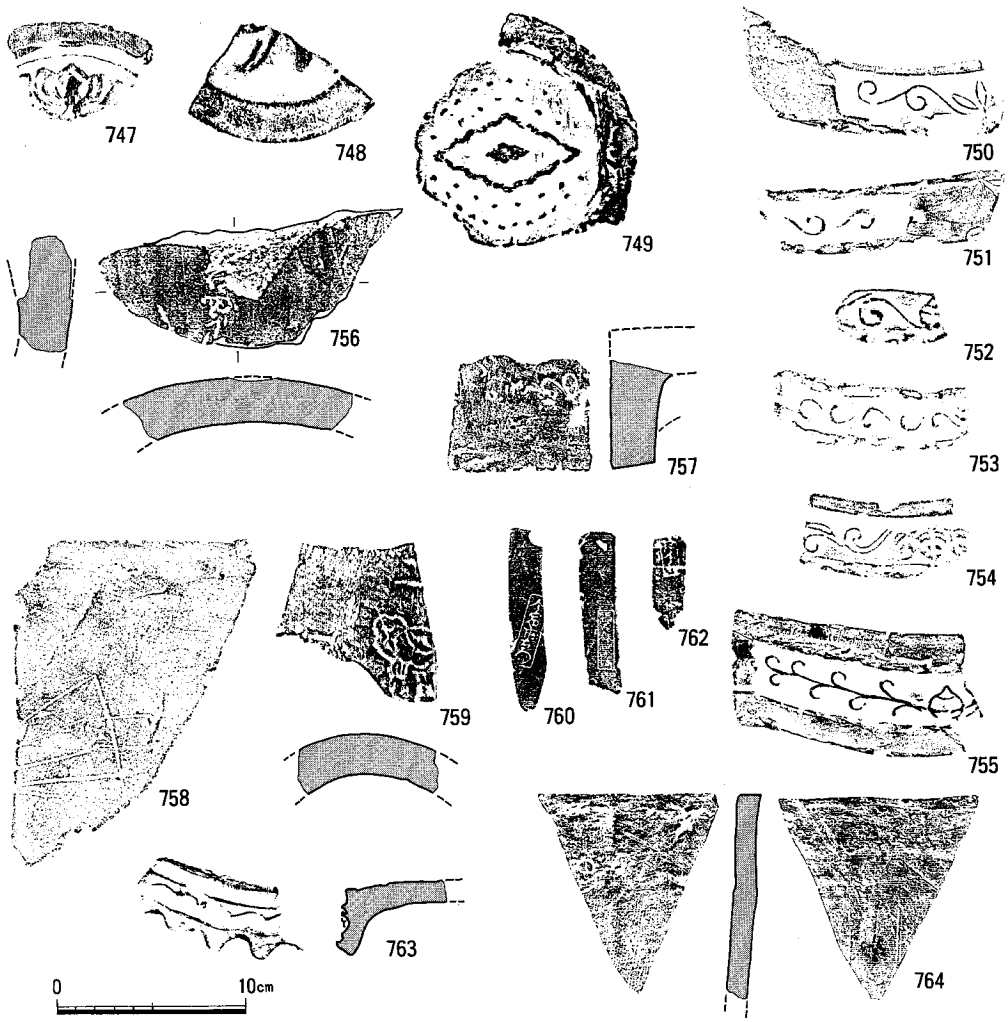


Fig. 92　瓦実測図・拓影（2）（1/4）

文字瓦（756～762）

瓦に焼成前の刻印や文字などが刻んであるものである。756は瓦の上面に文字がある。判読できない。1期の土壙出土。757は119号井戸から出土した段瓦の段の部分に相当する。「…き□や」の文字がある。758は井戸瓦で、線による文様がある。759は丸瓦の背の部分に文様があるが、内容は不明である。3期の土壙から出土した。760～762は瓦師の刻印である。いずれも平瓦である。760は「今宿市右衛門」、761は「福屋株ロノほ」、762は「株イノホ」とある。760は1号石積土壙から出土した。761はかなり銀化が進んだもので近代のものである。

763・764は12世紀頃の軒丸瓦と平瓦である。763は8期の井戸、764は9期の土壙から出土した。この時期の瓦は量的に極めて少ない。

(11) 銅　　銭 (Fig. 93)

出土した銅銭の総数は、284枚で、うち90枚を判読した。その率は約32%である。銭銘の判明したものの内訳は、表1に示したとおりであるが、唐銭7枚、北宋銭57枚、南宋銭1枚、元銭1枚、明銭16枚、寛永通宝3枚で、北宋銭が63.3%と最も多く、その比率は他の博多における渡来銭の出土傾向に比べて明銭の比率が高い。北宋銭の中では、皇宋通寶、元豊通寶が多く、これは渡来銭の出土傾向に一致している。

遺構より出土したのは98枚で、ほとんどが包含層の出土である。時期別には、1期14枚、2期8枚、3期31枚、4期17枚、5期6枚、6期2枚、7期3枚、8期12枚、9期2枚、不明2枚と、遺構の数に比例している。銭銘の判明したものをみても、明銭が多く、15世紀から16世紀を

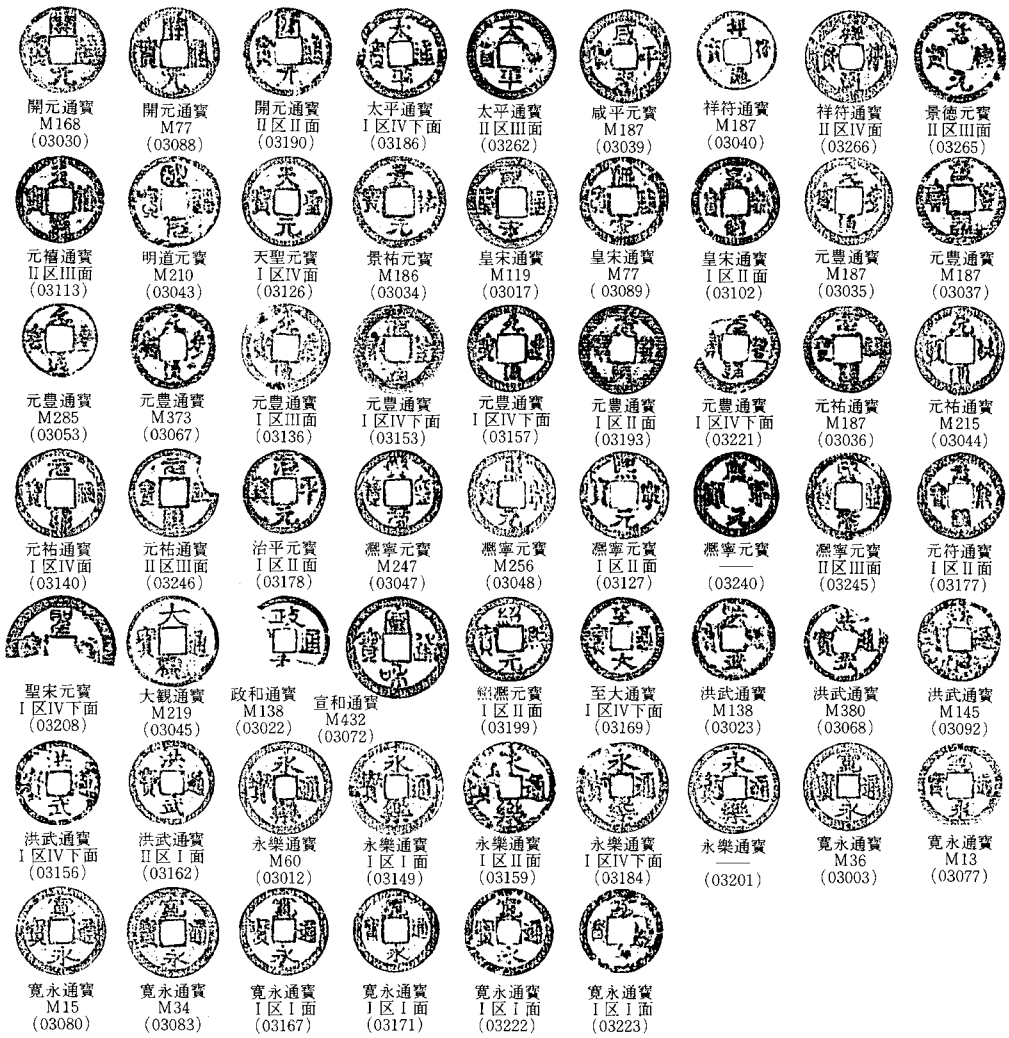


Fig. 93　銅　銭　拓　影 (1/4)

中心とした時期の遺構が多いことに起因していると考えられる。

今回出土した銭の中には、17枚の粗悪銭が混じっていた。鋳上がりが悪く、薄っぺらで銭銘も判然としない。

銭　名	時　代	初鋳年代	出土枚数			時期別枚数(%)
			遺　構	包含層	合　計	
開元通寶	唐	621	4	3	7	7 (7.8)
太平通寶	北　宋	976		2	2	
淳化元寶	北　宋	990	1		1	
咸平元寶	北　宋	998	1	1	2	
祥符通寶	北　宋	1008	2	2	4	
祥符元寶	北　宋	1008	1	1	2	
天禧通寶	北　宋	1017	1	1	2	
天聖元寶	北　宋	1023		4	4	
明道元寶	北　宋	1032	1		1	
景祐元寶	北　宋	1034	1		1	
皇宋通寶	北　宋	1039	2	3	5	57 (63.3)
治平元寶	北　宋	1064		2	2	
熙寧元寶	北　宋	1068	2	5	7	
元豊通寶	北　宋	1078	6	6	12	
元祐通寶	北　宋	1086	2	2	4	
元符通寶	北　宋	1098	1	1	2	
聖宋元寶	北　宋	1101		1	1	
大観通寶	北　宋	1107	1		1	
政和通寶	北　宋	1111	1		1	
宣和通寶	北　宋	1119	1	2	3	
紹熙元寶	南　宋	1190		1	1	1 (1.1)
至大通寶	元	1310		1	1	1 (1.1)
洪武通寶	明	1368	4	3	7	16 (17.8)
永楽通寶	明	1408		9	9	
寛永通寶	江　戸	1636	4	4	8	8 (8.9)
			36 (40)	54 (60)	90 (100)	90 (100)

表1　出土銅銭数一覧

⑿ 金 属 製 品

今回出土した金属製品は、素材別では、銅製品、鉄製品、鉛製品の三種類がある。

銅製品（Fig. 94. 766～806, Fig. 95. 807～809）

種類とその数は、煙管（21）、各種の飾り金具（刀装具も含む、94）容器、鋲（2）、笄（2）、耳掻き（9）、釣り金具（2）、容器（6）、把手（5）、分銅（5）、懸仏（1）、紅皿（1）、鍵（1）、鈴（1）、その他・不明（65）である。

766・767は煙管の雁首である。768・776は刀の柄と鞘の金具である。769・770は笄である。769は下端が折れ、装飾もはずれている。771～774は耳かき、775は鈎手金具、778～781は目貫である。782は飾り金具である。両端に孔がある。783・784は偏平な飾り金具で、花をあしらったものである。777と768は小型のやや厚手の製品である。788も飾り金具である。差し込み式の留金がある。789は円形の飾りである。中央がわずかに窪み、格子文が刻んである。表面に金が認められる。二か所に小さな孔があり、中は中空である。790は棒状の輪塔に似た製品である。下に孔があいている。791と792は用途不明の製品である。792は上部中央にこわれているが、紐通しの輪がある。793と794は鋲である。795は飾り金具であるが、内側に炭化した木部が残っている。796は断面が長方形の棒状の製品で、上端に輪があり、下端は湾曲している。用途不明。797は黄銅の蓋の形をした製品である。薄い板を二重におりまげ、それを組み合わせて作っている。中心に軸がある。798は分銅である。上部の半分を欠損している。1㎜ほどの器壁をもち、内部は空洞になっており、充填されていた鉛が溶け出したものと思われる。正面には圏線と「両」の字が刻んであるのがかすかに観察できる。大きさからみて「弐両」と思われる。799は容器の脚部分であろう。角型の円錐形の脚が菱形の板に付けてある。800は断面が蒲鉾形の外縁をもつ円形の板である。鏡としては、径が大きすぎる。801～803は容器の把手である。804と805は容器の本体である。805はかなり大きな盤状の容器である。806は懸仏である。直径8.6㎝を測る。仏像を針で二か所で固定している。807は鍵である。断面六角形の把手に上下8つの角を面取りした紐通しの部分がつく。このような鍵の出土は博多遺跡群では今回が初めてであろう。第Ⅱ面C－10区から出土した。形態的に類似する製品は、堺環濠都市遺跡200・202・230地点出土のものがある。おおよそ16世紀の第4四半世紀に属し、本例の年代とほぼ一致する。808は菊の花をモチーフにした紅皿である。底部は中空で、鋲で身の部分と接合している。全面に金が見られ、見込には格子文が刻まれている。809は鈴である。時期の判明しているものは、1期…766・773・774・789・804、2期…805、3期…769・778・780・781・809、4期…776・779・783、5期…801、6期…792・806、8期…799である。ただしこれは遺物の年代の下限を示すものである。

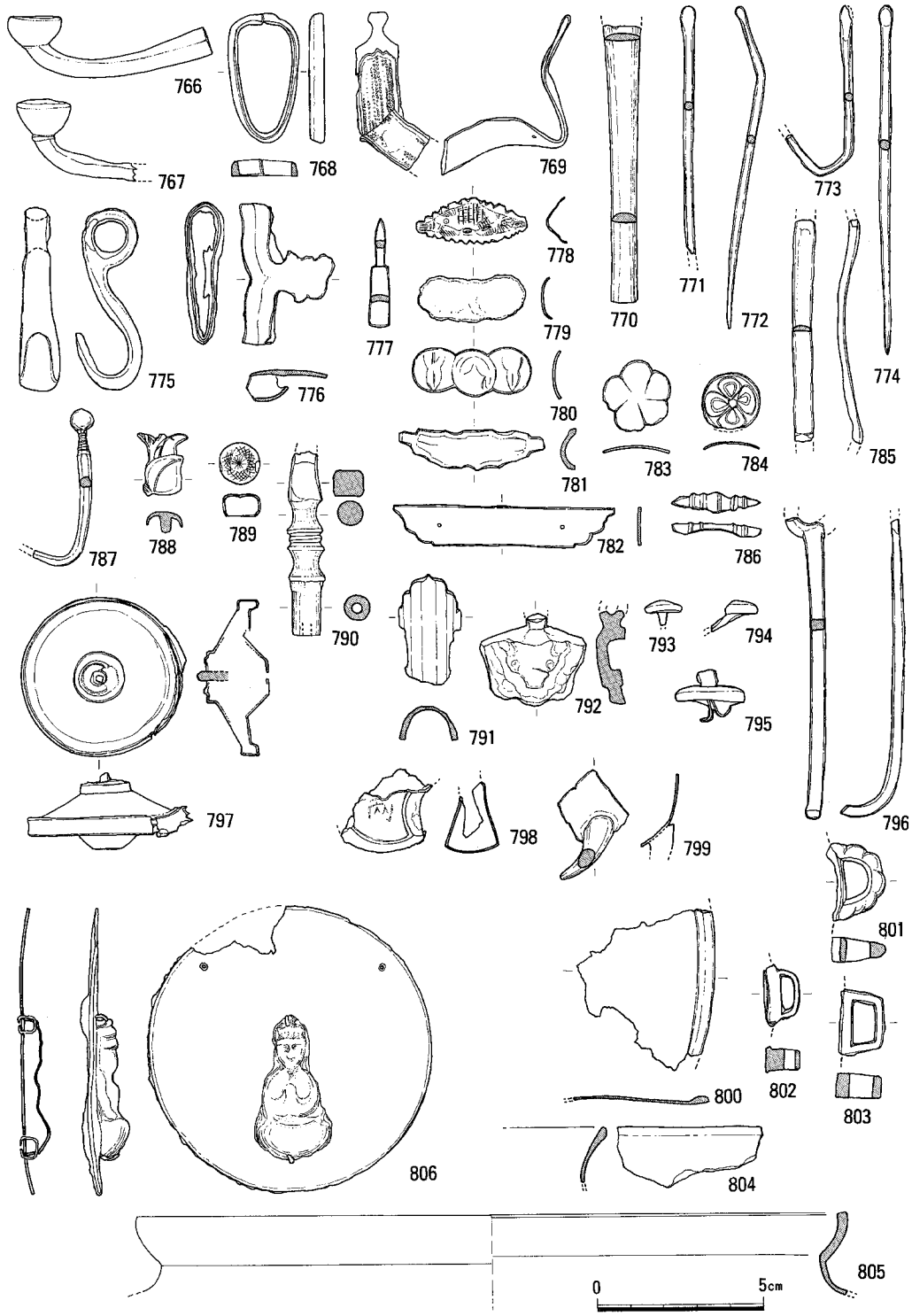


Fig. 94　金属製品実測図（1）（1/2）

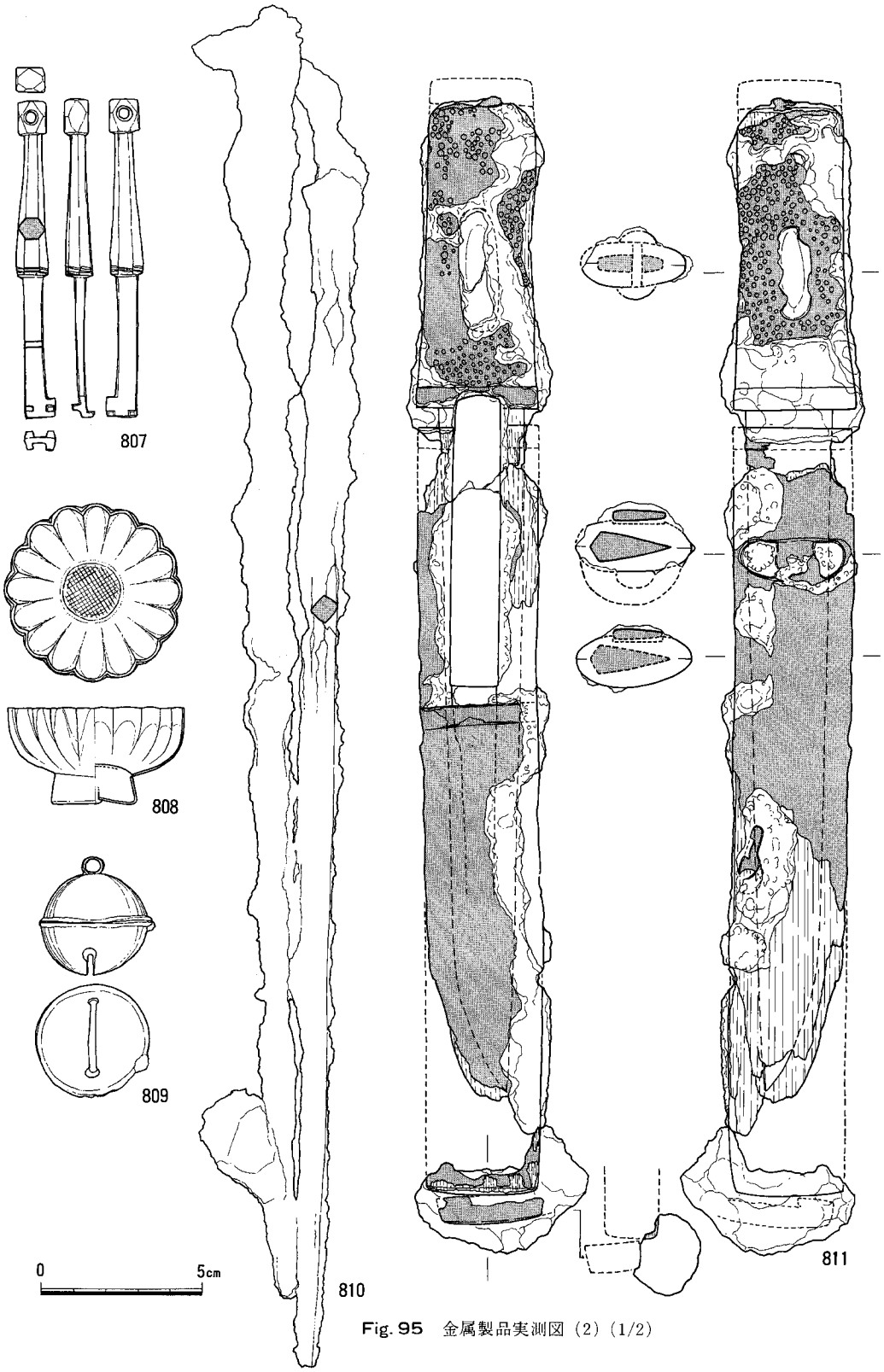


Fig. 95　金属製品実測図（2）（1/2）

鉄製品（Fig. 95－810・811）

鉄製品は釘を除いて、総計128点が出土している。ほとんどが種類が不明で、種類が判明したものは、短刀（1）、刀子（4）、紡錘車（2）、火箸（1）などである。

火箸（810）は432号土壙から出土した。銹が付着しており、形状は判然としないが、若干縦に2cmほどずれて銹付いている。箸の長さは38cm程である。

短刀（合口拵腰刀）（811）　全体に銹で覆われていたが、旧状をほぼ復元することが可能である。刀装は鍔をもたないいわゆる合口拵で、柄は鮫皮に黒漆をかけ、鞘は黒漆塗りである。鞘には櫃を設け、小柄を押入する。柄頭、柄縁、鞘口、鐺には金属は用いられず、黒漆を施した水牛角製装具があてられていたものと考えられる。なお、短刀と小柄は、若干鞘から抜けかけた形で銹ついている。

短刀は刀装が残るため、形状を知りえない。ただし、合口の間からは鎺元が、鞘尻近くの木質の亀裂からは刃先が覗いている。これから見て刀身21.3cm、区幅2.7cmをはかり、平造り内反りである。茎は柄のため不明。鎺は金属を留めず、水牛角を用いたものであろう。柄の中央には、長楕円形の銅製の目貫をあてている。銹のため細かい形状・意匠は窺えない。頭本体は残っていないが、柄頭に黒漆が付着し、本来伴っていたことを示している。欠損した頭を含めた推定長は10.3cm、柄縁の幅は3.9cmである。

鞘は黒漆塗りで、片面に栗形と返角を、他面に櫃を設ける。鞘尻は遺存せず、鉄銹に漆膜と若干の木質が付着した状態で姿を留めている。それらには、鞘尻から段差をもって幅0.9cm程の黒漆膜が残り、水牛角製の鐺が土中ではずれたものと思われる。栗形はその大半を失う。返角は鉄銹中に漆膜が付着し空洞化して観察されたもので、生地は残っていない。櫃には小柄がはまったまま銹付いており、観察することはできない。鞘口から鐺までの長さは25.7cm。小柄は鞘の櫃に装着された状態で銹付いているため、刀子部分は窺えない。小柄部分の長さは9.1cm、幅1.5cmをはかる。銹のため、意匠は見えない。

本例は、刀装を遺存する出土例としては稀有なものであるが、刀身を観察することができない。177号土壙から出土し、遺構の年代から16世紀の前半の時期が与えられている。しかし、鎺元と切先から想定された細身・内反りの短刀は鎌倉時代中期以前の短刀に一般的な姿であり、本例の刀身も年代的に遡る可能性が考えられる。（以上、刀の説明は大庭による。）

鉛（図版27－266）

短冊状の鉛板が49号土壙から出土した。表面は粗く、鋳造されたままのもの状態であろう。錘（沈子）の素材と考えられる。この他、鉛の塊が3号石積土壙、57号土壙および包含層から出土している。

⒀ 鍛造・鋳造関係遺物

鋳造・鍛造に関連すると遺物として、坩堝、鞴羽口、鉄滓、銅滓、炉壁片がある。炉壁片は砕片で形状は不明なものが、二点ほど出土しているにすぎない。３号石積土壙、36号井戸中から出土した。その他の遺物の時期別の出土状況グラフにしたのがFig. 96である。

坩堝（図版30－293）は全部で234個出土しているが、包含層その他から約六割の148個が出土している。時期別の出土状況は、２・３期がそれぞれ37個と38個と最も多く、近世の14個もあるが、この坩堝が使用された時期ピークはおおよそ16世紀後半から17世紀前半にかけてと考えられる。これは銅滓の出土傾向とほぼ一致している。銅滓は、包含層その他から61点、１期12点、２期９点、３期18点、４期６点、６期２点、８期３点、９期４点と、やはり２・３期の出土頻度が高い。坩堝自体は緑青をふいたものがあり、銅製品の鋳造に使用されている。

鞴羽口（図版30－294）は全部で189個の出土がある。大半は時期不明の包含層や遺構からの出土であるが、時期別の遺構の出土傾向からみると、きわだったピークは認められない。しかし、３期、４期、６期、８期などが若干他に比べて多いという傾向である。この傾向は鉄滓の出土傾向とほぼ一致している。鉄滓は合計で約239kgが出土している。包含層他の95kgを除いた144kgのうち、27％を８期、14％をそれぞれ３期と９期、12％を６期、９％を１期が占めている。しかし、この傾向は遺構の数を考慮にいれると、あまり際だった差とはならない。小鍛治はおそらく各時期に行われていたと考えられる。鞴羽口は小鍛治、鋳造の二者に使用されることから、鍛治に限定できない。ただし、鉄滓に限れば、８期には鉄滓の集中的な廃棄が行われた土壙が多いことから、この時期にひとつのピークを認めることもできる。

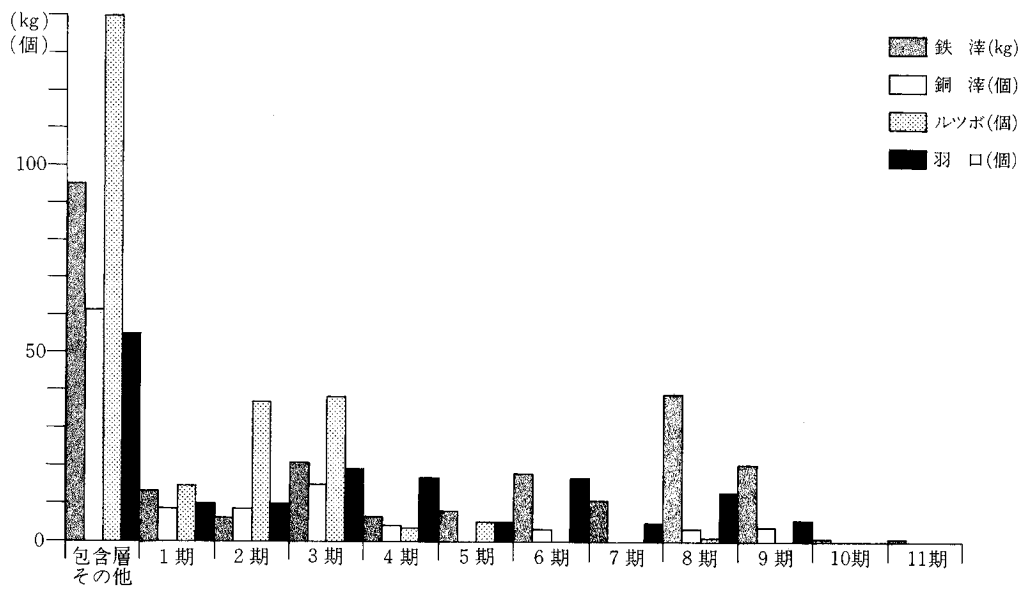


Fig. 96　鋳造関係遺物時期別出土数グラフ

⑭ 石　製　品

今回出土した石製品には、茶臼、挽臼、容器、硯、砥石、石錘、石鍋、滑石製品（石鍋再加工品）、墓標・板碑、碁石、毬球、黒曜石などがある。

茶臼（Fig. 97. 812～815）　茶臼はすべて破片であるが、5点出土している。すべて下臼である。812は下臼の破片である。復元した直径は35cm前後である。101号石積土壙の石材として使用されていた。8分画14副溝式で、擦り目は1.5mm幅で、2～3mm間隔で彫られている。芯棒孔は方形である。石材は砂岩である。813も同じく下臼の破片である。復元直径は40cm前後である。8分画9副溝式で、擦り目は幅2mm、間隔はやや幅広で、6mmである。Ⅱ面のF－5区包含層から出土した。石材は砂岩である。814は下臼の皿の部分である。直径は40cmほどである。Ⅱ面のA～F－15～18区から出土した。石材は同じく砂岩である。815も同じく皿の部分の破片である。直径35cmほどである。Ⅲ面のE－15区から出土した。この他、19号石積土壙から出土した下臼の破片があり、おおむね16世紀代に属するものがほとんどである。

挽臼（Fig. 98. 816・817, Fig. 99. 818・819）　挽臼は全部で4点出土した。上臼3点、下臼1点である。818は大型で偏平な上臼である。直径42cmを測る。円形のこぼれ目がある。擦り目は放射状でなく、幅広く不規則である。石材は砂岩である。外縁に二か所紐通しの孔がある。289号土壙から出土した。819は下臼である。凝灰石のような気泡の多い石である。直径26cmである。擦り目は幅6mmで、間隔は1.2cmと広い。6分画か。29号土壙より出土した。816は直径30cmの上臼である。円形の孔がある。把手用の孔が側面に認められる。擦り目は6mmと幅が広い。1号石積土壙から出土した。817は上臼である。方形のこぼれ目がある。皿受けは浅い。擦り目は5mmと幅広である。石材は819と同じである。この他、薬臼と思われる下臼が、18世紀後半の土壙から出土している。軸孔には鉄銹が付着していた。

容器（Fig. 100. 820～822）

820は厚さ4.8cmの底部付近の破片である。復元した底部の直径は23cmである。29号土壙から出土した。821は厚さ4.5cmの耳付の容器である。直径32cm、高さ18cmほどの製品に復元できる。内面と口縁部外面が黒変している。366号土壙出土。822は臼の817・819と同じ気泡の多い石でできた大型の容器である。底部の厚さは6cmである。直径46cm、高さ20cmに復元できる。内面はかなり擦れて滑らかである。51号土壙から出土した。812は火を受けた痕があり、火入れ（火鉢）などとして使用された可能性がある。これに対して822は臼もしくは手水鉢としての用途が考えられる。822は1期、他は16世紀代の後半に属する。

硯（Fig. 101. 823～830）　硯は総てで25個が出土している。うち16点は遺構外の出土であ

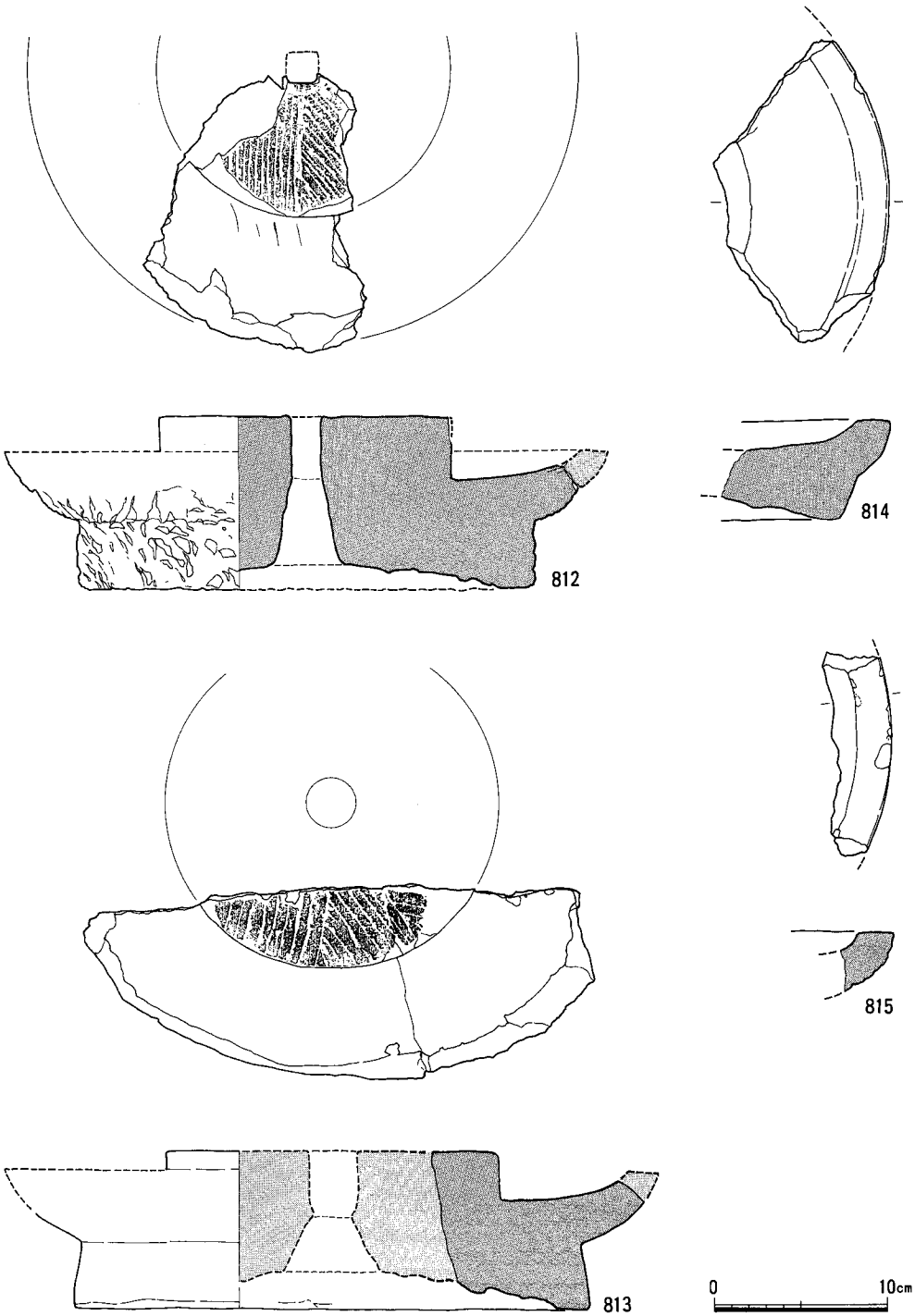


Fig. 97 茶 臼 実 測 図 (1/4)

る。時期ごとの出土状況は、３期２点、４期２点、６期２点、７・９期がそれぞれ１点である。石材はすべて輝緑凝灰岩（通称赤間石）で、１点を除いて小豆色の材を使用している。823は丸い海部をもつほぼ完全な形の製品である。長さ15.5cm、幅7.2cm、厚さ２cmを測る。Ｅ－14区の焼土Ｂ層より出土した。824も同じタイプの硯である。上下端を欠損している。Ⅱ面のＤ・Ｅ－６区から出土した。825は方形の海をもつ。下半分を欠損している。Ⅱ面のＤ－２区から出土した。826は硯の裏の装飾の部分と考えられる破片である。116号土壙より出土した。827は方形の海をも

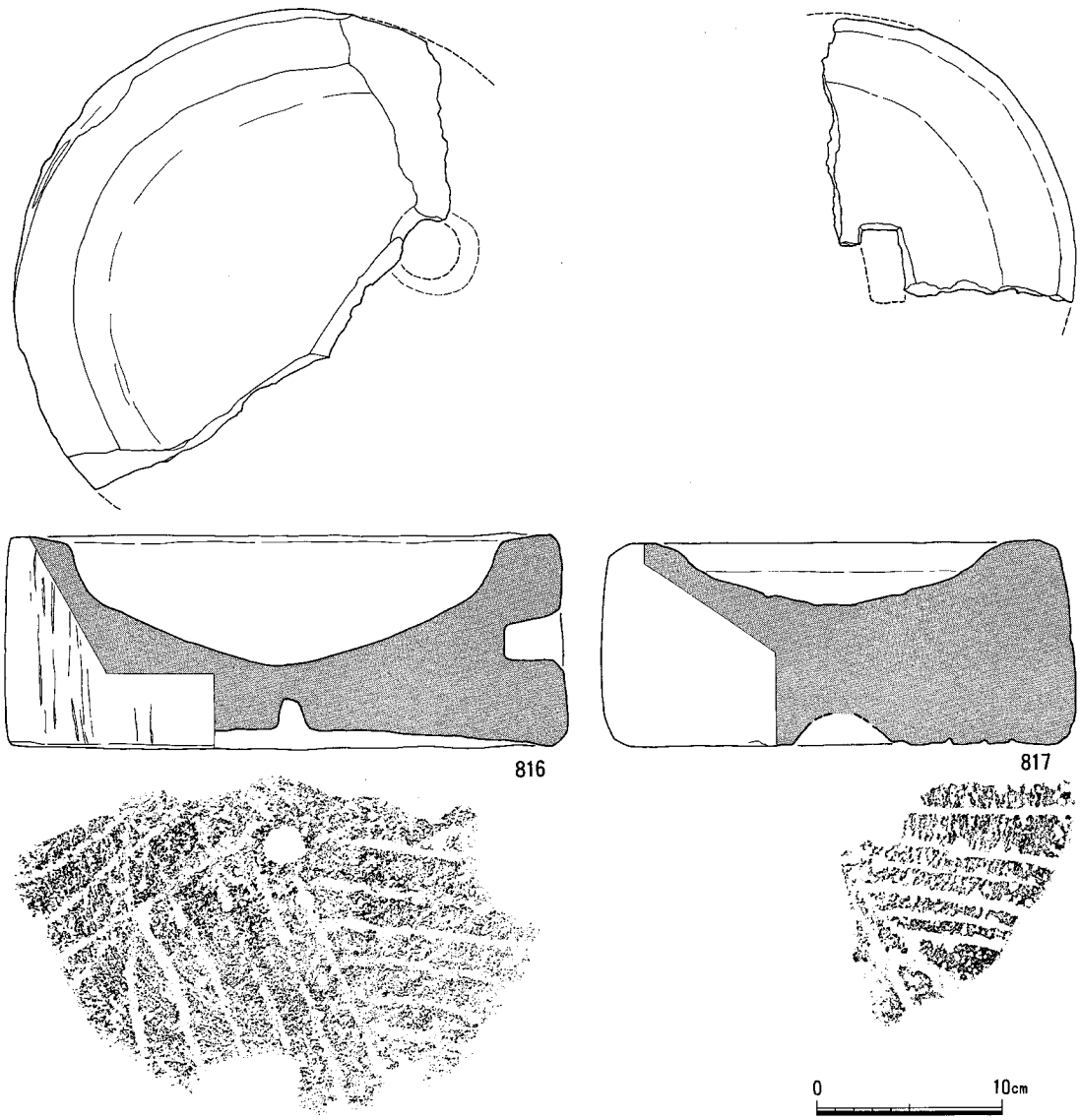


Fig. 98　挽臼実測図（1）（1/4）

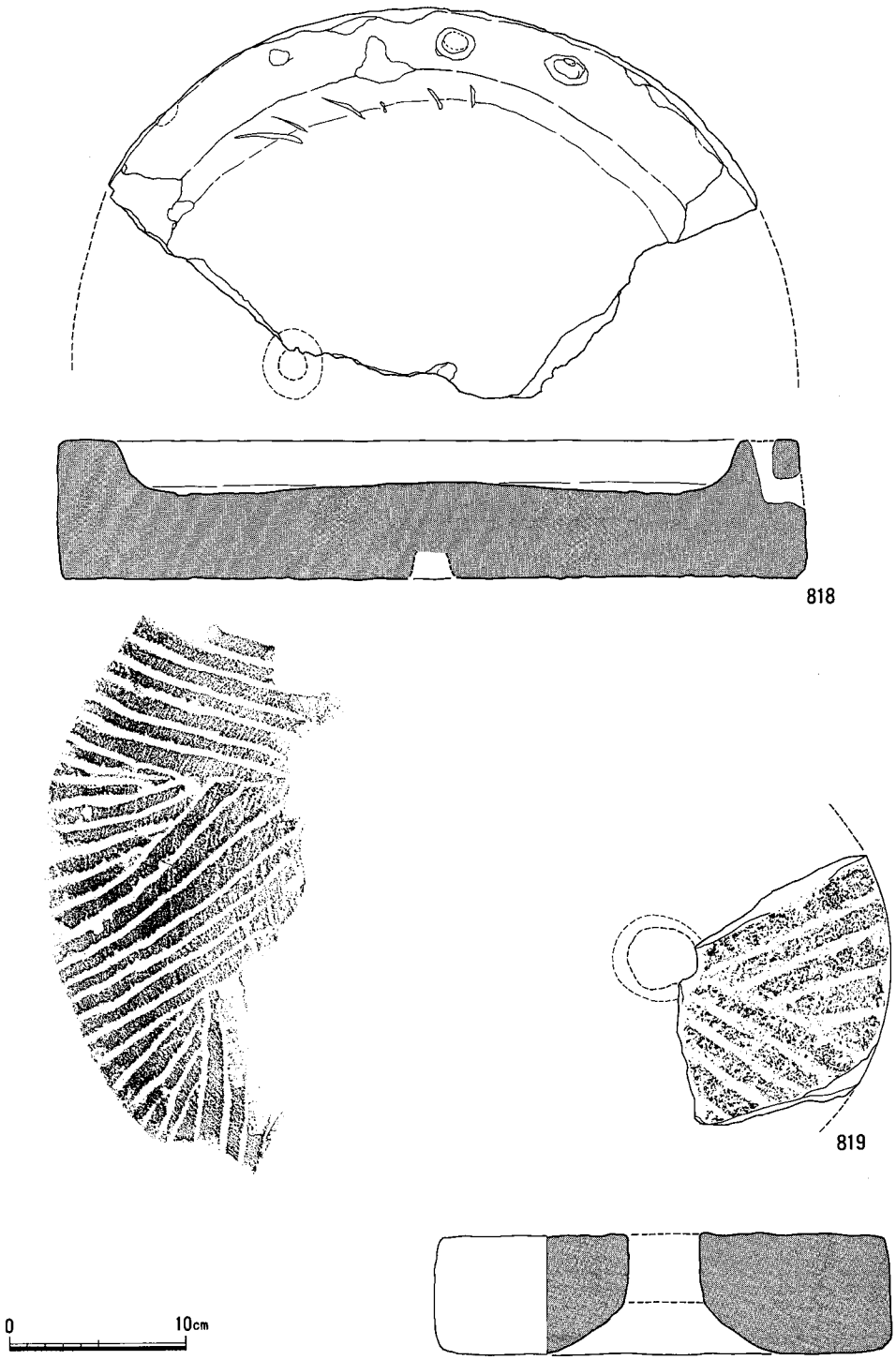


Fig. 99 挽臼実測図 (2) (1/4)

つ。Ⅰ面のE－2区から出土した。828・829は陸の部分の破片である。Ⅲ面のA・B－13～15区およびⅠ面のD～F－15～18区から出土した。828は緑色の石材である。830は円形の上端部をもち、側面に突起状の装飾が作り出されている。裏面には線彫の装飾がある。脚は傾斜している。Ⅱ面のC－10区から出土した。

砥石（Fig. 102. 831～842）　砥石は全部で107点の出土がある。うち厚さ5㎜以下で、幅3㎝

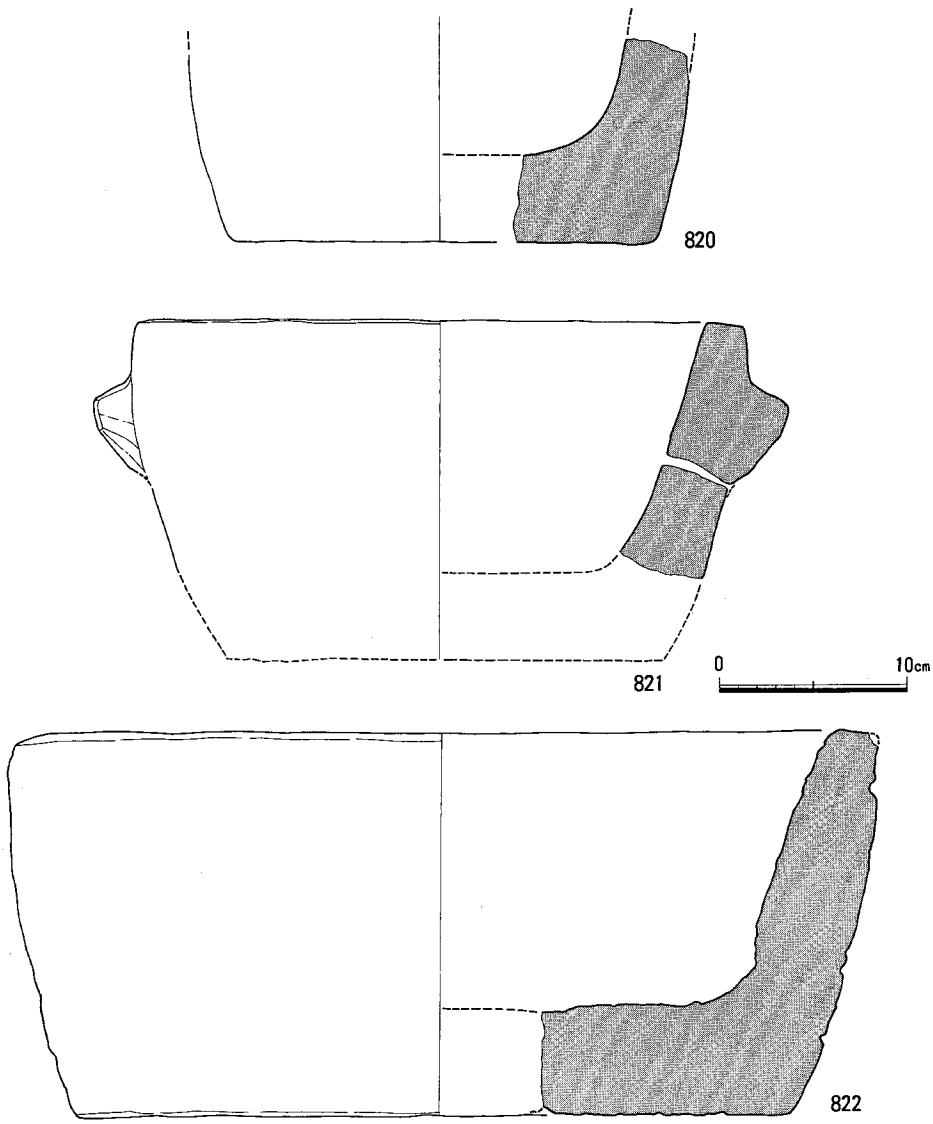


Fig. 100　石製容器実測図（1/4）

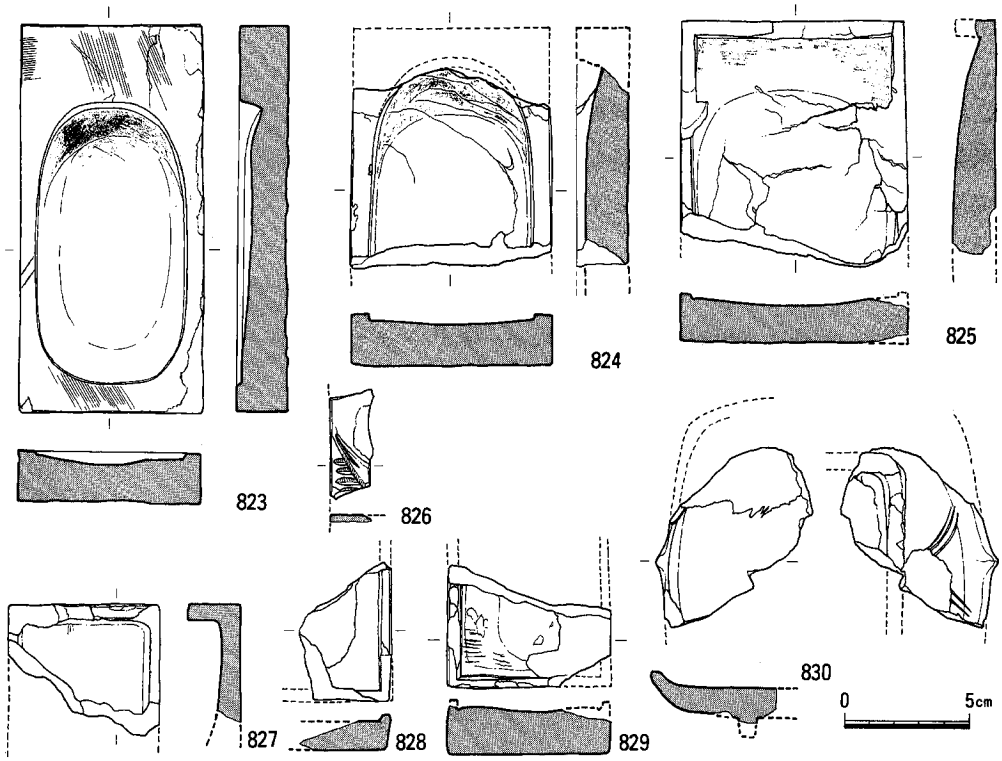


Fig. 101 硯 実 測 図 (1/3)

前後の薄い板状の砥石が53点である。この板状の砥石（板砥石）は粘板岩で作られ、刀子用の手持ちの砥石として使用されたものであろう。時期がわかるものは25点あるが、6期以降にその数が多い。置砥についても各時期にまんべんなく出土している。とくに際だった特徴は認められないが、時期が新しくなるにつれ、砂岩から節理のある堆積岩の材へと変化しているようすが窺える。831～834・836は板砥石である。中央部が使用によって凹み、薄くなっている。835・841・842は置砥である。ほぼ全面を使用し、その結果中央部が窪み、撥状の形態になっている。839・840は赤色の砂岩を使用した砥石である。同一の個体であろう。

石錘（Fig. 103. 843～862） 滑石もしくは砂岩を使用した錘である。47点出土しているが、うち1点のみが砂岩製（850）で、他はすべて滑石製である。形態は、方形のもの、短冊状のもの、紡錘型のものなどさまざまである。紐かけ用の溝は一本のもの、二本の溝を十字に配するもの、溝はなく、角に簡単なえぐりを入れるものなどさまざまである。またこれに孔が加わるものもある。843・844は方形の板の両面に縦方向の溝を入れたものである。857・858・860などとともに石鍋の胴の部分の破片を再利用したもので、片方の外面に鑿痕と煤痕が認められる。このような石鍋再利用の方形もしくは短冊形の錘は他にも数点出土しており、量的に最も多いタイプで

ある。862は両端に水平方向に全周を巡る溝があり、二面にこれに繋がる垂直方向に短い溝がある。両端に紐を結んだと考えられる。854・855は断面が「工」の字形になる溝の深いタイプである。土製ものに共通した形態のものがある。

時期別の出土状況は1期1点、3期4点、4期4点、5期1点、6期4点、8期5点で、他は包含層・その他の出土である。包含層は、Ⅱ面以下に出土が多い。重量は10g～90gで、平均で67gである。

石鍋（図版29－287）　石鍋は図示していない。総計で112点出土している。時期別では、1期4点、2期3点、3期11点、4期4点、5期3点、6期12点、7期9点、8期11点、9期6点、

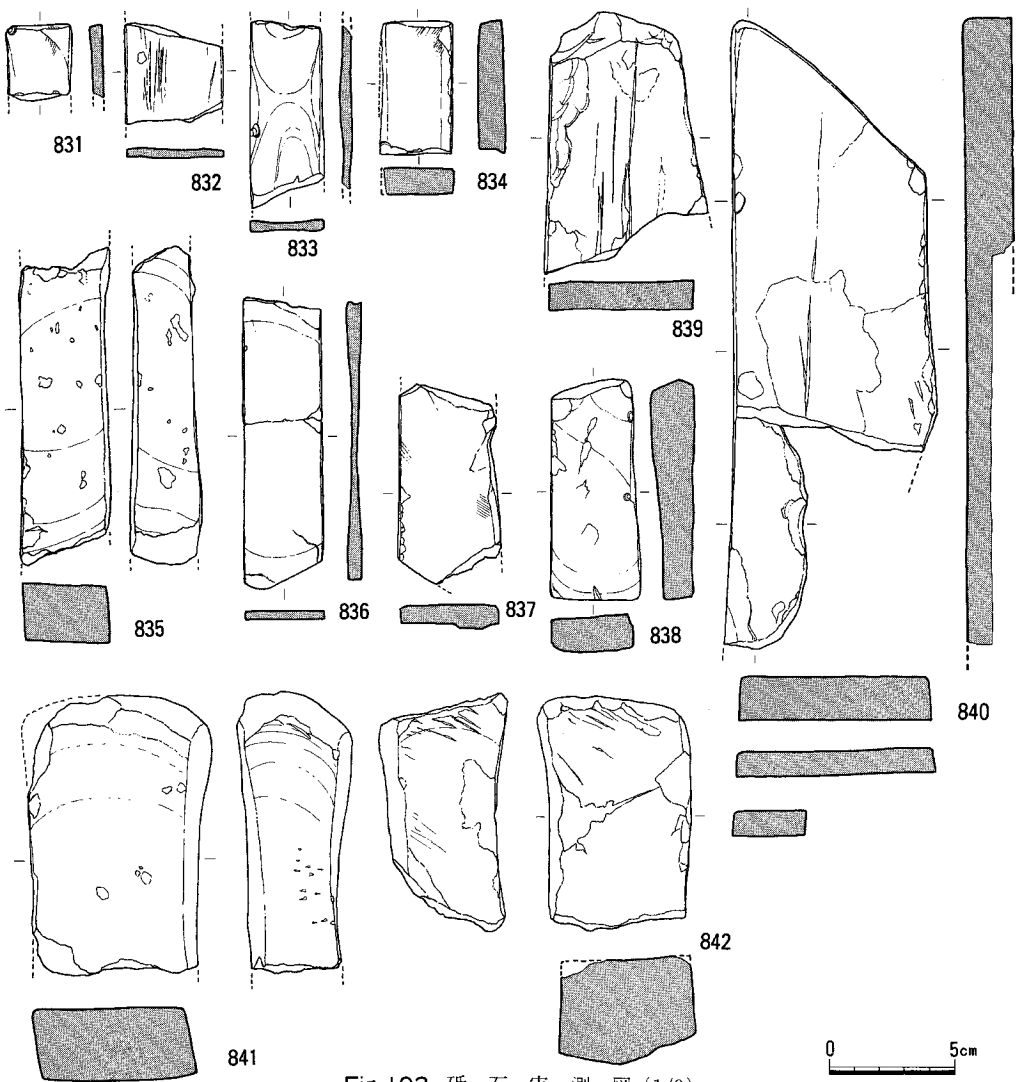


Fig. 102 砥石実測図（1/3）

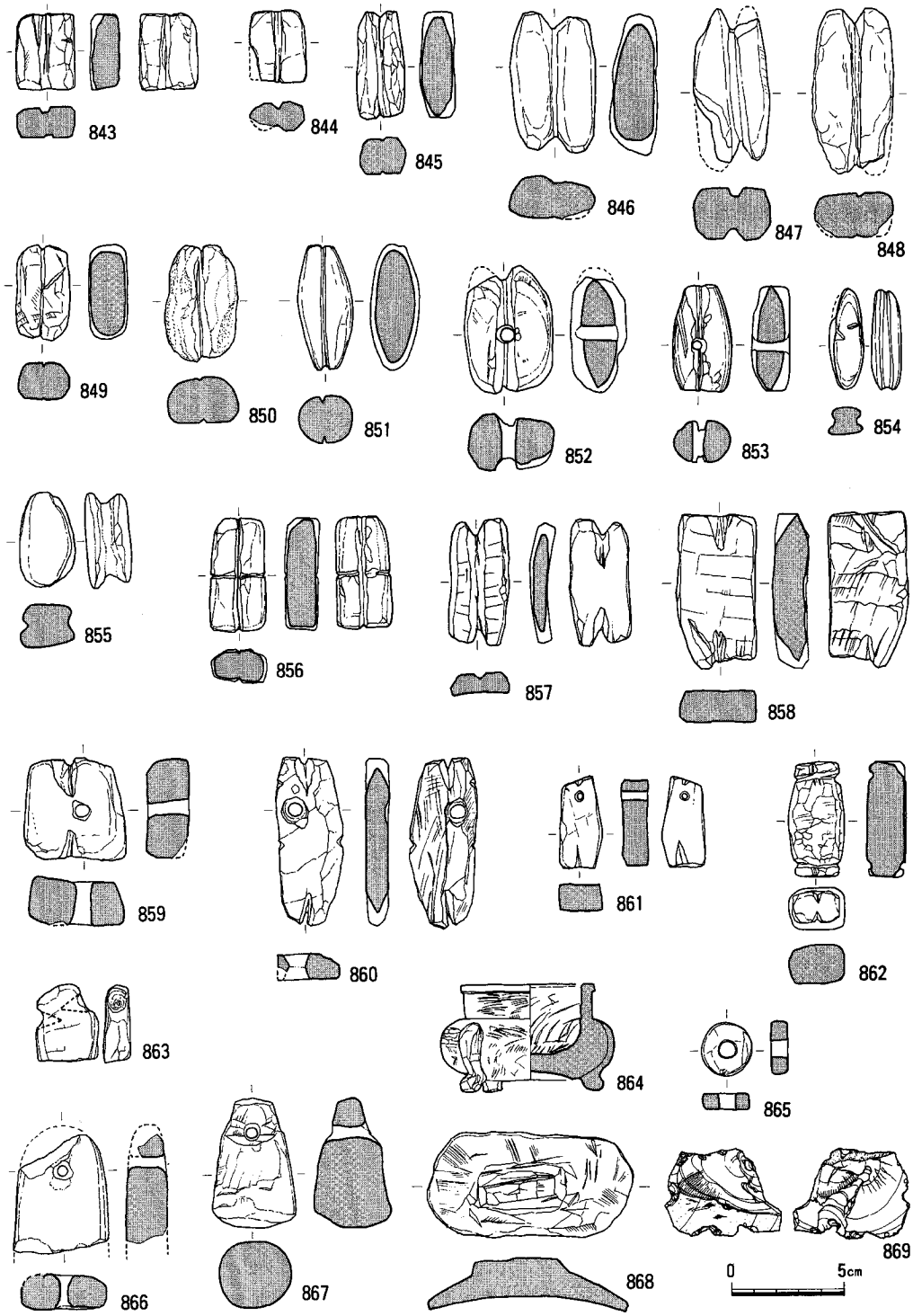


Fig. 103　石錘・その他の石製品実測図（1/3）

10期２点である。包含層はⅠ面が３点、Ⅱ面が４点、Ⅲ面が５点、Ⅳ・Ⅴ面21点である。出土状況からみて15世紀以前とくに12世紀後半から14世紀初めにかけての出土が多い。製品はほとんどが鍔のあるタイプであるが、縦方向の耳をもつものも１点ではあるが出土している。

滑石製品・石鍋再利用品（Fig. 103. 863～868）　石鍋の破片を再利用して加工したり、滑石で作られた製品は、27点出土した。その種類には、温石、権、香炉、コテ状製品などがあり、加工途上のもの、用途不明の棒状のものなども含まれている。

864は三脚をもつ香炉である。約半分を欠損している。195号土壙から出土している。おそらく13世紀くらいの製品と考えられる。865は輪形の製品である。権の一種か。重量は7gである。866は偏平な錘で、上部に孔がある。867は吊り鐘形の権である。重量は105ｇである。Ⅳ面へ掘り下げる時点で出土した。もう１点破損品であるが、同じタイプの権の破片が152号土壙から出土している。868は石鍋を再利用したコテ状の製品である。290号土壙から出土した。

墓標・板碑（Fig. 104. 870～872）　870は一石五輪塔であろう。上下および側面を欠損している。871は長さ21.2cm、幅15cm、厚さ7.5cmの板碑である。下半分を欠損する。この二点は111号溝の石材として再利用されていたものである。872は板碑の表面が剝離したものである。梵字の一部が残る。93号石積土壙から出土した。もう１点同一個体と思われる剝離した破片が出土してい

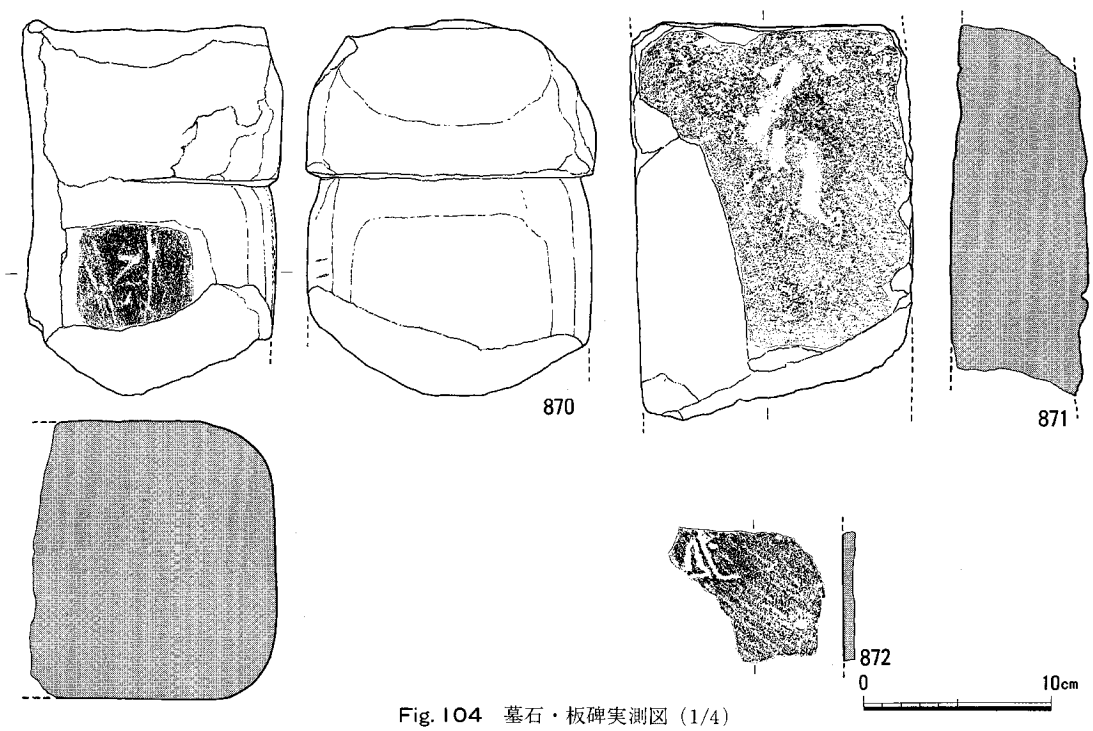


Fig. 104　墓石・板碑実測図（1/4）

る。すべて3期に属する。

碁石　17点の出土がある。河原石を利用したもので、時期は1～3期に多い。

毬杖球（図版29－291）　13点出土した。1期1点、2期1点、3期2点、6期2点、7期2点、8期1点の出土である。直径6㎝前後の大型のものと2㎝前後の小型のものがある。石材は砂岩である。

黒曜石　2点の剝片の出土がある。1点（Fig. 103. 869）は打面が自然面の幅広のもので、側辺に使用の痕跡がる。428号土壙の覆土から出土している。もう1点は1㎝ほどの小片で、17号溝から出土した。土と一緒に他所から持ち込まれたと考えられる。

この他、製品とは判別できないが、軽石や滑石の礫や破片などが出土しており、材料として持ち込まれた可能性がある。

⒂　土　製　品

今回出土した土製品の種類には、焼塩壺、瓦玉、人形、人形型、泥めんこ、土錘、鈴などがある。

焼塩壺は破片も含めて7点出土した（Fig. 90. 727・728）。いずれも包含層からの出土で、Ⅰ面とⅡ面に属する。うち蓋が1点で、身は湯呑形のものである。刻印のあるものはない。17世紀に属する。

瓦玉は6点出土している。材料は瓦、備前焼、中国製陶器などを使用している。すべて遺構から出土している。その内訳は、1期2点、3期1点、4期2点、不明1点である。

人形・人形型（図版18－157・26－246）　人形は、博多人形、型押しの小型人形、伊万里産と考えられる施釉磁器の色絵の大型人形、小型人形などがある。色絵の大型人形は破片が5点出土しており、赤、金、青、茶などの色絵の具で彩色している。1号石積土壙2点、2号土壙1点、7号井戸1点、36号井戸1点の内訳である。磁器の小型人形は、高麗聖人の脚部が1号石積土壙から、唐人の頭が包含層から出土している。施釉陶器の型押し人形は、見（ざる）猿、犬を抱いた童子がある。後者は9号石積土壙から出土した。型押しの仏像の光背像が2号土壙と包含層か

ら出土した。土製の手づくねの人形は、言わ（ざる）猿、人形がある。猿は手足を欠損している。赤い顔料を塗っている。17号溝から出土した。人形は目と口を箆で描いただけの簡単な作りで、下部が曲がっている。Ⅱ面のD・E－6区から出土した。同様の製品が地下鉄関係の調査で出土している。

土錘（Fig. 105. 873～893）　土錘は破片も含めて131点である。これらは以下の3つのタイプに分けることができる。

土錘a（877～891）…環状の土錘で細身で円筒形を呈する。3.5～5.5cmで、重量は10g以下である。最も量が多く、114点の出土がある。包含層出土が約半数を占めるが、時期別では3期14点、6期11点の順に多い。各時期に通有の形態と考えられる。

土錘b（892･893）…環状の土錘で、太い紡錘形を呈する。長さ6cm前後で、重量は60～70gである。5点の出土があるが、うち3点が包含層よりの出土である。他は1期と6期に各一点である。

土錘c（873～876）…ラクビーボール形の中実の土錘で、紐用の溝が二面に縦方向に一条巡らされている。断面が「工」の字形を呈する。長さは4～6.5cm、重量25～130gと変化に富む。12点のうち6点が包含層と時期不明である。6期1点、8期3点、9期2点の出土である。

包含層の出土状況を加味すると、①土錘aはほぼ各時期に存在するが、1期以降は少ない、②土錘bは15世紀以前に属する可能性が高い、③土錘cは13世紀後半以前に属するタイプと考えら

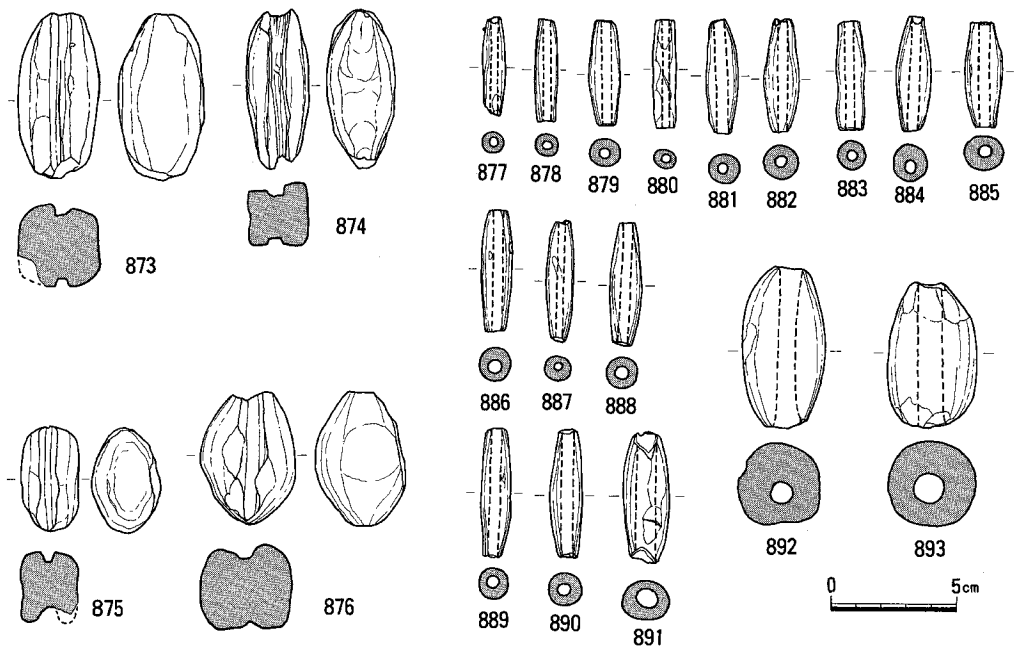


Fig. 105　土　錘　実　測　図（1/3）

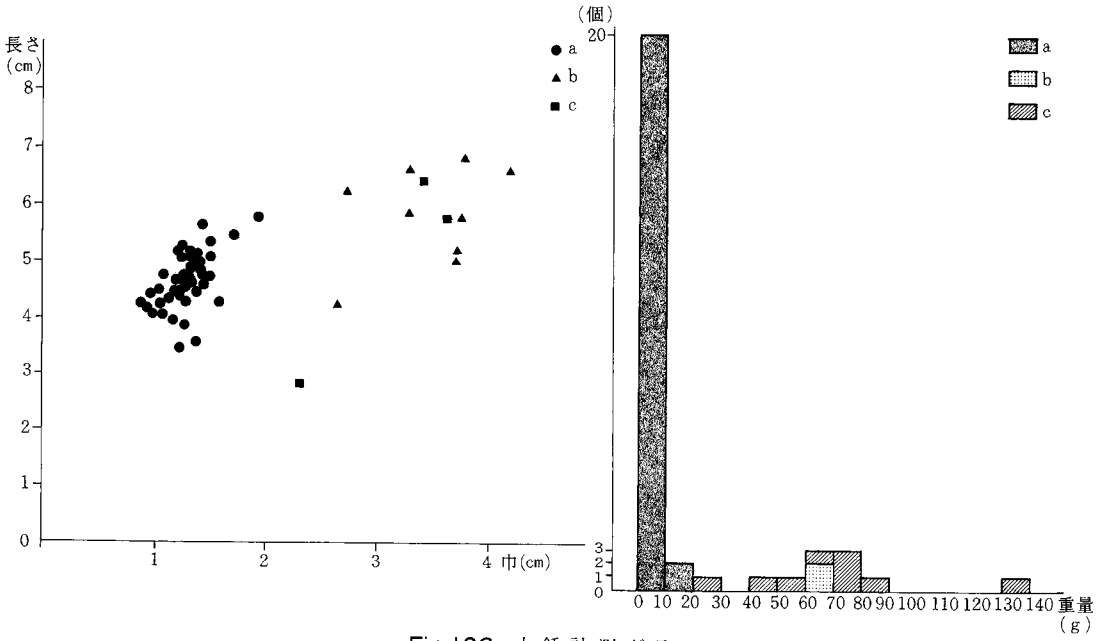


Fig. 106 土錘計測グラフ

れる、という以上の結論に達する。

土鈴は57個出土しているが、時期の判る遺構からの出土状況をみると、33個が2号土壙をはじめとする1期の遺構から出土している。この他、3期2点、6期1点の出土がある。

⑯ 角製品・ガラス製品・布・木製品

上記の遺物以外に、骨製の遺物が3点ほど出土している。Fig, 107. 894・895は角製の板状製品である。断面形が蒲鉾形を呈し、角を半裁したものを磨いて成形している。上部に小さな孔があいている。両方とも下部を欠損しており、現存部分の長さは6.1cmと5.9cmである。Ⅲ面のE－15区から出土した。本来同じ遺構に埋まっていたものであろう。

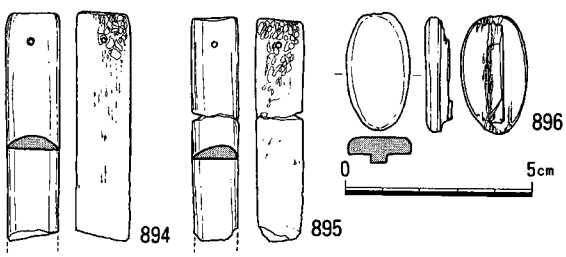


Fig. 107 骨製品実測図 (1/2)

896は同じく角製と思われる楕円形の製品である。裏面中央に幅4㎜、長さ2.6cmの突起がある。この部分をはめ込んで固定したと考えられる。当初鞘尻か柄頭とも考えたが、これらは凹基で本品とは逆であるため、その可能性は少ない。385土壙（6

期）から出土した。

ガラス製品は玉のみである（図版28－282）。11点の出土がある。その内訳は、26号土壙４点、84号土壙１点、349号石基礎１点、包含層５点である。この他解けたガラスの塊などがあるが、すべて近世もしくは近代以降に属するものである。

麻布と思われる布片が109号土壙より出土した（図版30－295）。二枚ほどに折り重なる部分があるが、ひろげると15cm四方の大きさになる。平織りである。

木製品としては炭化した木碗の破片がある。焼土Ｃ層から出土しており、漆塗りの碗であった可能性が高い。

⒄ 自 然 遺 物

おにぎり状の焼けた米のかたまりが94号土壙と119号井戸から出土している（図版29－292）。この他、炭化した木材、桃の種などが焼土やそれを含む遺構などから出土している。

貝は121号土壙の鮑の集中（図版８－48）をはじめとして各種の巻き貝などが出土しているが、同定は行っていない。

骨・角は、馬、鹿、猪、イルカなどの大型獣類、カツオ・マグロなどの大型魚、マダイやイワシなどの小型魚などがある。とくにイルカは34基の遺構から出土しており、とくに８期から６期にかけての土壙から多量に出土している。その中でも180号土壙は環椎２個を含む40個以上の脊椎骨を中心とした骨が出土した。刃物傷が多数ついており、解体後一括して廃棄したものと考えられる。イルカは顎や頭の骨、肋骨などもわずかに出土している（図版30－297・298）。

もっとも多く出土したのは、タイなどの魚の頭の骨である。遺構の埋土のサンプリングなどを行わずに検出したため、偶然に支配されてはいるが、かなりの量の魚が消費されたのは疑いない（図版30－297）。

刃物傷は獣骨を中心に付いている。解体の際の傷であるが、シカの尺骨は中途で折り、意図的に尖らせたものが見受けられ、刺突具として利用されたのであろう。また、シカの角は横方向に切断したり縦割にしたものがあり、細工物の材料として使用されていたことが窺える（図版30－296）。

第三章　分　析　報　告

福岡市博多区綱場町博多遺跡群第60次調査出土の彩色土器破片の花文・材質・産地などについて

山　崎　一　雄※

本遺跡で出土した4片の陶片のうち赤色の彩色を有する1片（番号R－776）について、できるだけ非破壊法で行った分析結果を報告する。[註1]

(1)　化学分析による材質調査

破片の表面にある黄金色の結晶粒子1個を取り出し、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏がX線回折を行った。それにより、この結晶は雲母類であることが明らかとなったが、雲母の種類は確定できなかった。それは土器の焼成により結晶構造が破壊されていて、X線の回折線が少なく、判定が困難なためである。

X線回折の結果によれば雲母類のほかに石英も存在しているが、粘土鉱物ははっきりとは検出できなかった。

破片の表面、すなわち水瓶と見られる容器の内面は黒色を呈しているが、その微量をとり、白金板上でガスバーナーで加熱すると黒色は消失する。すなわちこの黒色は容器の内面が焼成中に酸素不足のため還元状態になって生成した炭素である。破片の裏面の土からはX線回折で石英は検出できたが、雲母類は存在しないようであり、また粘土鉱物の存否も判定できなかった。

破片の表面の赤色は酸化鉄 Fe_2O_3 であることがX線回折と化学分析で確定された。

(2)　花文・年代・産地など

この破片（R－776）と同様な花文と彩色をもつ土器についてはバンコクにあるSiam Societyが発行したNewsletter Vol. 1，№4（1985）にV.M.Di CroccoとDoris Schulz両女史が執筆した“ターク遺物中のビルマモン族の錫釉陶器と中東の影響”という論文中に小型の水瓶があげられている。[註2] 筆者の質問に対しDi Crocco女史は次のように教示された。この水瓶（タイ語でNam tonという）と博多で出土した破片とは同じ花文が刻されているが、この花はタイ語でpikun、学名を*Mimusops elengi* Roxb、英語ではstar flower、ビルマ語でkhayapinまたはkhayepin、モン語ではsot keenと呼ばれ、タイ北部とビルマに多い樹である。この土器は最初ビルマ産かと思われたが、現在では北部タイの窯のもので、年代は17世紀の中葉から同世紀末までというのがDi Crocco女史の見解である。

※　名古屋大学名誉教授

本報告執筆中の1992年2月 Di Crocco 女史の“ハリプンジャヤ地域の陶器”という論文を入手した。[註3] それによれば、この破片はタイ北部のハリプンジャヤ王国（西暦621/622年建国－同1292年滅亡）のあった地域に同国滅亡後も数世紀にわたって19世紀まで存続していた窯の製品である。これらを同女史は‘後期ハリプンジャヤ陶器’と呼んでいるが、[註4] これは同王国のあった地域で後年つくられたものとの意味で、同王国そのものの末期の陶器では決してない。

この水瓶 Nam ton は17世紀中葉になると中国の影響を受けた形式になるが、前記の pikun の花文など地方色の濃い点は変わらない。また雲母を含んだ細かい土を泥漿として表面に塗るのも特徴であるという。同女史は1650－1700年シャムの商船が貿易のため多数日本に来航したとの石井米雄の論文[註5] により、この博多出土のナムトンは17世紀中葉から同世紀末までの間のアユタヤと日本との間の貿易でもたらされたものと想像している。

陶片のX線回折を行われた奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏と種々教示を与えられたバンコク、Siam Society の Honorary Secretary V.M.Di Crocco 女史にあつく謝意を表する（1992．2）。

註1．森本朝子，有島美江，1990年9月　第11回日本貿易陶磁器研究集会発表．有島美江，貿易陶磁研究，№11，111（1991）．

註2．Virginia M.Di Crocco, Doris Schulz, The Siam Society's Newsletter, Vol.1，№4（1985）pp.6－13.

註3．Virginia M.Di Crocco, Journal of The Siam Society, Vol.79, Part 1（1991），pp.84－95.

註4．タイ陶器の研究者 J.C.Shaw はこれらを陶片の主な出土地に因んで Lamphun ランプン土器とよんでいる。J.C.Shaw 著，Northern Thai Ceramics, Chiang Mai, Thailand，1989，第2版，pp.103－105.

註5．Yoneo Ishii, 'Thai－Japanese relations in the pre－modern period', The Siam Society Newsletter, Vol.4，№2（1988），pp.7－12．誌名が1987年から少し変更された。

博多遺跡群第60次調査出土の金属器の保存処理

本　田　光　子※

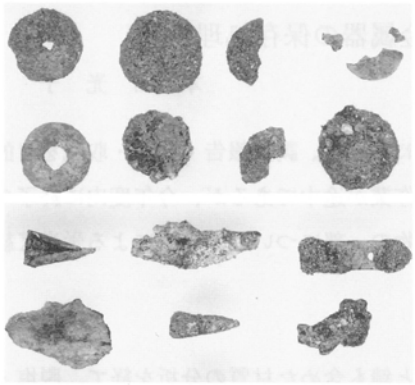
鉄製品396点、銅製品557点（内銭331枚）等の金属器類について、調査報告・展示・収蔵を目的とした保存処理を行った。一部の遺物については、処理作業が途中であるが、今年度内に終了の予定である。なお肉眼観察で真鍮製、鉛製と認められた物の一部について非破壊による蛍光X線分析により材質を調べた。

処理作業の方針

出土金属器は、表面からの観察の他にX線による透視と錆も含めた材質の分析を経て、脱塩・錆取り・樹脂含浸の処理作業を行うのが理想であるが、実際には様々な条件により限られた処理しかできない。今回は短期間にできるだけ多数の遺物の形状を明らかにすること、一部は展示・貸出に耐えること、長期間の密閉容器内収納が続けられることを当面の目的として、材質別に以下のような方針を立てた。

鉄製品　博多遺跡群出土の鉄製品の大半は写真に示すような状態である。砂や石を噛みこみ膨れ上がった硬い表層、主に赤金鉱に起因すると思われる表層剝離・層状剝離の進行・内部からの亀裂等である。このため、現状のままで表面の土・錆だけを落とすことはまず不可能なので、全点について合成樹脂を含浸させ遺物の強化後錆取り作業を行うことにした。土・錆取り作業中にナフサ蒸気を吸うことを避けるため樹脂含浸後の乾燥期間は長く置く。また、今回処理を行う鉄製品の他に多量の鉄釘がある。博多遺跡群出土の膨大な鉄釘を特別な処理を行わずに長期間保存管理するために、恒温乾燥器を使った効率の良い乾燥条件についてのおおまかな目安を求めることにした。乾燥時間・温度と重量変化を２ヶ月間測定する実験を行った。

※　福岡市埋蔵文化財センター



銅製品　現状のままで形状の推定できるものとまったく判らないものに分けその中から細かい刻線文様、金鍍金等遺物の状態によって処理工程を選ぶ。今の所塩基性塩化銅は表面的には認められないが、原則としてベンゾトリアゾールを用いた防錆処理を行い樹脂含浸をする。

処　理　方　法

鉄製品　洗浄（温湯あるいはアルコール）→乾燥→パラロイドNAD10の20％ナフサ溶液を70㎜Hg２～３時間→一昼夜浸漬→乾燥の工程を１～２回行った後グラインダー、エアーブレイシブ等を用いて土・錆取りを行った。さらにもう一度前記の工程を繰り返し、アラルダイトラピッドで接合・復元した。補塡にはアラルダイトラピッドにフェノール樹脂のマイクロバルーンを混ぜた物を用いた。

刀は漆塗の鞘が残り、栗形の痕跡もあり、柄には鮫皮が認められ銅製の目貫・小柄があることが錆から推定された。鉄錆の部分は砂を噛み硬いが鞘の木質や漆膜は脆く剝落が目立つので乾燥は行わず、樹脂含浸は35㎜Hgで３時間、その後は他と同様に錆取りを行った。目貫と小柄部分は形を出した後パラロイドB72（ベンゾトリアゾール）の塗布含浸を繰り返した。今回は笄はなかったが普通これらの三所物あるいは二所物は赤銅製であることが多い。目貫については表面処理による装飾面をとばしてしまった。処理作業は継続中であり、漆膜表面の清掃と固定を行う。

鉄釘は60℃で２週間～３週間乾燥後、シリカゲル入りの容器内で室温になるまで置き、ポリエチレン製の袋に空気を抜きながらシールしたものを密閉容器に収納した。その際保管中に破片の離散が予想されるもの（赤金鉱の発生、成長の顕著なもの）は原位置を保ために紙箱に納めたものをシールした。※

銅製品　遺物の残り具合いにより（　）内の方法を選び処置を行った。

洗浄（温湯による筆洗い、超音波洗浄）→エタノールによる脱水→ベンゾトリアゾール２％エタノール溶液の含浸（減圧、塗布、点滴）２～３回→パラロイドB72アセトン・トルエン混合溶

液の含浸（減圧、塗布、点滴）→カッター・メス・グラインダー・エアーブレイシブを用い土・銹取り後パラロイドB72の含浸（減圧、塗布、点滴）1～2回。樹脂濃度は遺物の状態に合わせ、3～20%を用いた。超音波洗浄は約15分、減圧は30mmHg以下で2時間。銭と文様のある遺物は拓本を取るので、表面にやや濃いめのパラロイドB72（含BTA）アセトン・トルエン混合溶液を塗布した。接合はセメダインCを用い、懸仏等の補塡にはセメダインCにフェノール樹脂のマイクロバルーンを混ぜて用いた。補彩はリキテックスを使用した。

表面に細かい線刻文様があるものと鍍金が認められるものの一部（2050，2073，3108，2118，2131，2145，2175，2248）については、蟻酸の2%水溶液を高分子吸収体スミカゲルを用い塗布（約15分）→洗浄（流水15分）→脱水（エタノール）→実体顕微鏡下でスミカゲルの除去を数回繰り返した。スミカゲルの除去が完全でないものがあるかもしれないので今後も継続して観察・作業を続けたい。

材質の調査

宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に蛍光X線分析を依頼した。分析は非破壊で行い、※※測定結果を表に示す。2267は真鍮製と考えられるが、内面からは鉛が検出された。2296は鉛の素材か？。2327は真鍮製と考えられるが、銅に対して亜鉛が少ない。分銅のツメモノ部分からの検出元素は本体部分と変わらないが、銅・亜鉛に対しての鉛の強度が本体とは逆転しているので、ツメモノ自体の主成分は鉛と考えられる。今回、分銅は5例出土しているが、状態の良いものは4点である。この4点もそれぞれ錆の状態が異なり、材質に興味がもたれる。なお、全試料から鉄が検出されているが、これらは出土試料であるための土の影響を考えなければならないので、本体に由来するものかどうかは不明である。

表2　蛍光X線分析の結果

遺物No.	器　種	検出元素	挿図
2267	容器蓋？外面	銅、亜鉛、鉄、ﾆｯｹﾙ (微)　(微)	Fig.103 －864
2267	容器蓋？内面	銅、亜鉛、鉛、ﾆｯｹﾙ、鉄 (微)　(微)	同
2296	？	鉛、鉄、銅 (微)　(微)	図版27 226
2327	分銅	銅、亜鉛、鉛、鉄、錫 (微)　(微)	Fig.54 320
2327	分銅ツメモノ	銅、亜鉛、鉛、鉄、錫 (微)　(微)	同

博多遺跡群出土の金属製品は、日本で金工技術が確立、発展した時代の遺品がほとんどである。伝世品の材質・技法の解明は金工史の分野で明らかにされつつあるが、出土遺物についての調査・研究が望まれる。材質・埋蔵環境・錆の関わりは保存という観点からも重要なことなのである。

※　紙は吸湿性が高いので金属器の保管には適切ではないが、触ると崩れそうな遺物をそのままの状態で、乾燥→収納→取り出し→脱塩→樹脂含浸の工程に容器を替えることなく作業ができるので取り敢えず使用している。遺物の銹化が進んでも原位置さえ保たれていれば復元が充分できるためである。

※※　測定条件　装置；理学電機工業㈱製蛍光X線装置、X線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーションカウンター、印加電圧－印加電流；35kV－15mA、走査速度；2θ8°/分、時定数；0.5秒

第四章　ま　と　め

ここでは、今回の調査で確認された成果の中から、二三の点について述べてまとめとしたい。

(1)　東南アジア産の陶磁器について

本調査地点から出土した東南アジア産と思われる陶磁器は、タイ、ベトナム、華南のものである。この成果の一部はすでに概要が報告されているが、発表時点からの整理の進行によってその数も増加した。その内訳は、ベトナム５点、タイ12点となった。

ベトナムの陶磁器は、鉄絵碗２点、褐釉印花文碗１点、青花皿１点、白磁鉄絵盤１点の出土がある。ベトナムの鉄絵は太宰府などの出土例から14世紀初頭から中頃の年代が考えられている。本調査例は、335が52号土壙（３期）、686がⅡ区のⅢ面から出土しており、15世紀から16世紀にかけての時期であり、若干の時期差がある。褐釉印花文碗（688）はⅡ区のⅣ面から出土しており、同じ14世紀から15世紀代の遺構が検出されている。青花皿（687）はⅠ区のⅣ面から出土した。この面は13世紀後半から14世紀前半の遺構が多い。白磁鉄絵盤（689）は、113号土壙から出土しており、上記の種の製品とは若干時期が下るものである。

タイの陶磁器は最も量が多いものである。焼締陶器の四耳壺３点、サワンカロークの黒褐釉瓶２点、半練の陶器壺１点、蓋３点、丹塗印花文壺１点、無釉印文陶器１点、黒褐色釉四耳壺１点がある。焼締陶器壺（150）は、24号土壙から黒褐釉瓶（151）とともに、青花皿Ｂ群、李朝白磁碗などとともに出土しており、おおむね16世紀後半代の時期に属する。これは肩の部分に白濁した釉のたまりがある点などこの時期のこの種の壺の特徴と合致するものである。このことは35号土壙から出土した234の例にも当てはまる。把手（695）はⅡ区のⅡ面から出土している。サワンカロークの瓶は茶入れである。693は焼土Ｃの上部から出土しており、15世紀の後半代の時期が与えられる。ハンネラの壺はＥ－15区を中心として出土しており、そのうち14点の破片が焼土Ｃ層に含まれていた。焼土の年代からいえば焼土Ｃは15世紀中頃～後半に比定できる。沖縄県の出土傾向からみれば、その隆盛期は15世紀とされており、本例の年代にも矛盾しない。蓋（692）の一部も焼土ＢとＣの間から出土しており、15世紀におさまる。このタイプの壺は沖縄以外に福井県朝倉氏遺跡から出土しており、茶器として使用されたと推定されている。丹塗印花文壺（694）はおそらく初の出土例であろう。山崎一雄先生の報告によると、タイ北部の窯で焼かれたもので、17世紀の中葉もしくは後半のものとされている。１点はⅠ面の焼土Ａ、他はⅣ面から出土しており、遺構検出面の時期からみると14～17世紀の年代幅が考えられる。VirginiaM.Di Crocco氏の論文“Burmese Mon Tin－glazed wares in the Tak Finds and inflences from Middle East”中には14世紀とあるが、後の論文では17世紀中頃の後期ハリプンジャヤ陶器とされている。696

の無釉壺は119号土壙から出土しており、16世紀の後半に属する。この種の壺は、博多遺跡群では築港線関係のⅡ次調査で出土した例がある。タイ南部のアユタヤ西部 Suphanburi 川の Ban Poonにある窯の産と考えられている。この肩部の葉形のスタンプが特徴で、その時代は14～15世紀とされている。700の黒褐釉壺は、60号石積土壙から出土したもので、16世紀末から17世紀の初めころのものである。この種の壺は1613年に沈没したビッテ・レウ号からも出土している。これはサワンカロークの窯産で、16世紀から17世紀にかけて焼かれたものである。おそらく我国でははじめての出土であろう。

華南系の陶磁器には、交趾三彩、ソーダ釉型押紅皿、褐釉陶器、華南系青花、カラック、スワトウ、灰白磁などがある。これらはいずれも16世紀後半から17世紀初頭にかけての遺構から出土している。交趾三彩には水注のほかに、型押の破片が包含層からもう１点出土している（図版23－212)。ソーダ釉紅皿は８点の出土があるが、出土遺構は２・３期のものである。灰白磁としたものは、灰色の磁質の胎土に透明の釉をかけたもので、器面全体に貫入が著しい。器形は皿に限られているが、菊皿、輪花皿、平皿がほとんどで、高台はこの時期の端反りの白磁皿や青花皿、青磁皿と同じく、細く削り釉をふき取っている。碁笥底の皿もある。他の調査地点では方形や木の葉形の皿が出土している。高台からそのまま外反するタイプなどもあり、この時期の白磁や青磁と器形上の共通点が多い。他の遺跡では白磁とされている。窯・産地などはいまのところ特定されていない。

以上のように、三彩を除いた華南系の陶磁器は、日常の雑器の一部として使用されている。これは、皿・碗・壺などの器種に限られるという特徴以外に量的にも安定した地位を占めるという特徴をもつ。これは、堺環濠都市や大阪城などの該期の遺跡とよく似た現象である。これに対し、量が少なく、貴重品としての取り扱いを受けていたのが、タイ産の陶器であろう。陶磁器全体に占める割合は1%にも充たないもので、おそらく、茶入れのほかに、水差し、花生、建水などの茶器として、数寄者の商人たちに愛用されたと考えられる。博多遺跡群においてタイ・ベトナムの陶器を出土した地点は12地点におよぶが、そのほとんどが博多浜北部と本調査地点を含む息浜南部に位置する。とくにこの60次と隣接する42次調査地点が出土量が多く、45個体中20個体を占めている。これは、蔵の基礎と思われる石基礎などが数多く検出されたことも合わせて、このような珍奇な品を保有しうる富裕な商人層がこの一帯に居を構えていたことを推定させる。

(2) 焼土層について

今回はⅡ区、とくに調査区の南東部において焼土層を三枚確認した。焼土Ａからは明の青花、端反り白磁皿、備前大甕、美濃天目、李朝緑褐釉徳利、白磁皿、黄褐釉壺、瓦質土器火鉢・蓋などが出土している。青花は、小野分類碗Ｃ群７点、Ｄ群３点、Ｅ群６点、皿Ｂ群１点、Ｃ群３点、Ｆ群１点、坏１点、不明12点である。焼土Ｂからは、青花、美濃灰釉皿、李朝白磁碗、細蓮

弁文青磁碗、備前擂鉢（Ⅳ期後半）、美濃灰釉平鉢、李朝緑褐釉陶器、瓦質土器火鉢・擂鉢、土鍋などが出土している。青花は碗Ｃ群１点、Ｄ群３点、Ｅ群１点、皿Ｂ群１点、焼土Ｃからは、青花Ｂ群皿、李朝粉青沙器、白磁Ｄ類多角坏、青磁盤、瓦質土器茶釜、土鍋などが出土している。

遺物の様相からみて、焼土Ａは16世紀後半から末、焼土Ｂは15世紀末から16世紀前半、焼土Ｃは15世紀中頃から15世紀後半に比定できる。

遺構との切り合い関係からみると、焼土Ａは102・350・380号石積土壙や366号土壙の上に堆積している。石積土壙の埋土にはこの焼土層が入り込んでおり、整地の際埋められたものである。これらの遺構は３期に属する。焼土Ｂは382号土壙や102・380号石積土壙に切られ、136号石基礎を覆う。136号石基礎と同レベルで検出した３期の365・370・390号石積土壙との切り合いは不明である。焼土Ｃは６期の430号基礎を覆っている。

博多息浜における15世紀から16世紀にかけての戦禍の歴史は、以下のとおりである。

康正元年	1455.7	世祖実録…室町中期　大内氏×少弐氏×宗氏－大友氏
永禄二年	1559.2	国衆筑紫門－大友氏
		イエズス会　パードレ　フランシスコ・カブラル
		（イエズス会日本通信）　フロイス（日本史）
永禄六年	1563	永禄亥年の乱劇or永禄乱
永禄十二年	1569	立花城をめぐる大友氏対毛利氏…博多表でも合戦
		1570頃より復興
天正八年	1580	肥前龍造氏筑前侵入
天正十四年	1586	島津氏焼き討ち
天正十五年	1587	太閤町割実施

これをみると、焼土Ａは1580・1586年、焼土Ｂは1559・1563・1569年、焼土Ｃは1455年の戦禍による火災の焼土層とみなすことが可能である。しかし、この焼土層は狭い限られた調査地点のしかも南部に片寄って検出された焼土であるため、これを特定の歴史事象と対比するには慎重さが要求される。しかし、隣接する42次調査地点でも本地点と同様に三枚の焼土が確認されており、これは検出面のレベルと対比すると、上層が16世紀代の遺構を覆い、下層が15世紀の遺構面とほぼ一致する。この焼土Ａに相当する層は、これまでも息浜から博多浜北部一帯に断続的ではあるが確認されており、天正14年の島津の博多焼き討ちの火災によるものと想定されてきた。今回の調査はこれを追認するものである。ただし、漠然と16世紀後半から末の時期の焼土層といえるだけで、龍造寺の博多侵入とは区別できない。また、15世紀後半の焼土Ｃはその厚さが安定しており、大友と大内の戦いの焼土層に比定することが可能になるかもしれない。今後はより南の土層の安定した地域の調査に期待して、この仮説が検証されるよう問題提起としたい。

(3) 石積土壙・石基礎について

今回の調査では、25基の石積土壙と8基の石基礎を検出した。石積土壙の規模や構造には様々のものがあるが、最も多いのは1.2×1×0.8mほどの規模のものである。これらは隅を共有して作り変えられたり、大型のものを二分して作られたものもある。内容物は、観察できたものに限れば、灰黄色の土が厚く基底に堆積し、その上を黒色の炭化物の層が覆っている。この層が堆積した時点で土師皿を数枚投棄している。遺構を廃絶するときの祭祀であろうか。土師皿は75・81号石積土壙のように、作り替えに際しても石の間に据えられている。このような石積土壙は便所として使用された可能性が高い。これに対し、17号溝に取り付く60号石積土壙などは排水用の溜め桝として使用されている。また、底に石を敷き詰めた79号や114号石積土壙などは、洗い桝とも考えられる。博多遺跡群では、石積土壙はかなりの調査地点で検出されているが、そのほとんどが近世のものである。その分布は息浜南部と谷を隔てて対面する博多浜の北部に限られている。これは石基礎の分布域とも一致する。16世紀に遡る例になるとその数はますます少なくなり、42次地点と本調査地点で検出されているにすぎない。博多遺跡群における石積土壙の出現は15世紀後半まで遡ることができよう。

石基礎は江戸などの蔵の基礎の台地工法として採用されているものと同じで、溝を掘り、その中に礫を詰めたものである。中にはその上に偏平な大きな石を並べたものもある。2期に属する19・60号石積土壙の材として瓦が使用されていたり、土壙の覆土には多量の瓦や壁土が含まれていることなどを考えあわせると、土壁塗りの瓦葺きの蔵がこの基礎の上に立てられていたと考えられる。他の調査地点の検出例には方形に巡らず、「コ」の字形のものもある。これは地下の基礎であるため、上部が削平されたためかもしれない。本調査地点で最も古いものは、15世紀前半のものであるが、他の調査地点では14世紀代に遡る例も検出されている。

石積土壙は京都などの西日本の調査例からすると、武家屋敷や寺社に限られており、16世紀代には富裕な庶民層まで普及したことが指摘されている。しかし、零細な庶民の家に作られることはなかった。この石積土壙や石基礎の存在する息浜南部から博多浜北部一帯は、豊富な遺構や遺物からみて15～16世紀にかけて博多の町の中心をなしたところであり、瓦葺きの土蔵をもつ商家が立ち並んでいたのであろう。

(4) 息浜の町割とその変遷

息浜の町割については、宮本氏の論功に詳しい。氏は絵図に描かれた近世町割をもとに中世後期から太閤町割にいたる息浜の町割の変遷について述べている。これによると、①太閤町割は、天正14年12月から翌15年6月までの半年に及んで実施された。このうち天正14年12月に黒田官兵衛・久野四兵衛によって実施された町割こそが、息浜を対象としたものであった。②太閤町割の範囲は、北側を妙楽寺町・古渓町・奥小路町・廿家町・金屋横町の通りとそこから浜側に派生す

る通り、南側を櫛田前町・奥堂町の通り、西側を洲崎町から土居町流、東側を竪町から東町流で限られた領域であった。③街区の類型には４つあり、うち２つが息浜南部と博多浜北部の間を区画した東西60間、南北120間の巨大街区と南北に厨子（辻子）を通した東西30間、南北120間の街区であった。④そして、この2つの街区の違いは、息浜がすでに町屋敷を巡る諸関係が社会的・空間的に動かしがたいほどに確定していたのに対し、博多浜においてはその諸関係が廃絶するほどに衰退していたかあるいは全くの空閑地であったことに起因することなどの諸点が述べられている。また、この天正14年に実施された息浜の町割は、市小路町を中軸として実施されたもので、この街区に中世後期の町割りが継承された可能性が高いことを指摘している。

この説が発表された時点では、息浜における考古学的調査はほとんど実施されておらず、直接に町割を示す遺構はまだ発見されていなかった。今回の調査では、Ｉ面の調査区中央に現在の町割方向とほぼ同じ方向の石組の溝とそれに付設された石桝を検出した。この溝と桝は昭和になって作られた下水用の溝と溜め桝と位置関係が類似している。若干西にずれてはいるが、この溝は屋敷の境を示すものである可能性が高い。この溝は17世紀の初め頃埋められており、16世紀末に作られた溝である。これに対し、16世紀後半には方向の異なる溝や蔵の石基礎、石積土壙などが作られている。この方位は現在の町割より10度ほど東へ振れている。この16世紀後半の遺構は、調査区南東部では焼土Ａの下部より検出されており、これらは中世後期の町割の方位を示している。そして、近世から現代の町割が太閤町割を踏襲したものであれば、この17号溝は太閤町割によって作られた屋敷地の境を示す溝ということができる。この太閤町割は、中世後期の町割の方位より実際は若干西に振れて作られているという知見を得ることができた。

この中世後期における町割の方位は、15世紀後半にもほぼ同じであったことが、285号溝の存在が示している。この方位は息浜の立地する砂丘の方向に一致しており、当時の町割が地形に規制された町割であったことを示している。この調査地点の北部では13世紀に遡る護岸用の石列が発見されており、この方位は汀線（砂丘帯）に沿ったもので、今回の調査で確認した溝の方向とほぼ直交する位置関係にある。これは42次の調査結果からも指摘されたことであるが、息浜においては町の成立時点からほぼ自然地形に沿った町割が自然発生的に起こった可能性が高い。博多浜には13世紀後半から16世紀末まで存在し続けた街路が南北に貫いている。この方位は現在の町割より西に振れており、この道路を通って息浜に入ると、また道は東へ方位転換する。この中世後期における二方向の町割は、息浜と博多浜が当時それぞれ独立した町として存在していたことを立証するものである。この二極的な町の再編成および統一こそ太閤町割が担った重大な意義であり、近世博多の幕開けといえよう。

図　　版

(1)　Ⅰ区Ⅰ面全景（北から）

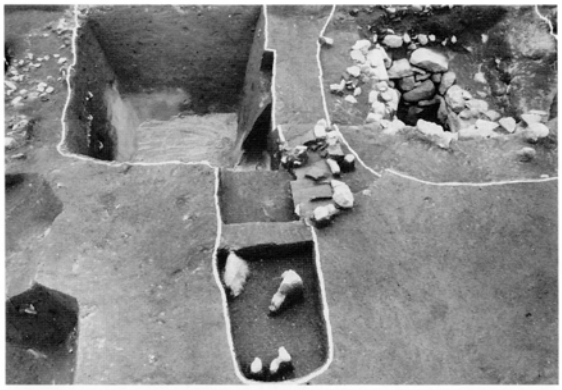
(2)　13号遺構（東から）

(3)12号遺構（南から）

(4)　9号石組遺構（東から）

(5)　1号石積土壙（北から）

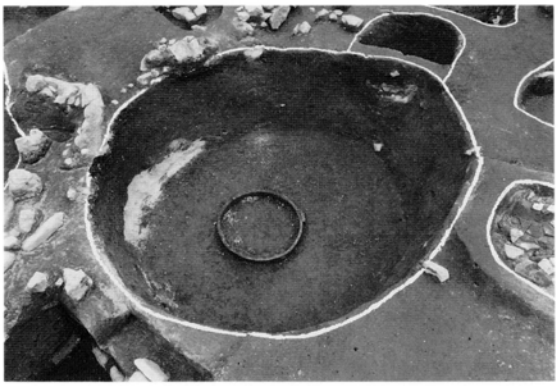
(6)　5号石積土壙（北から）



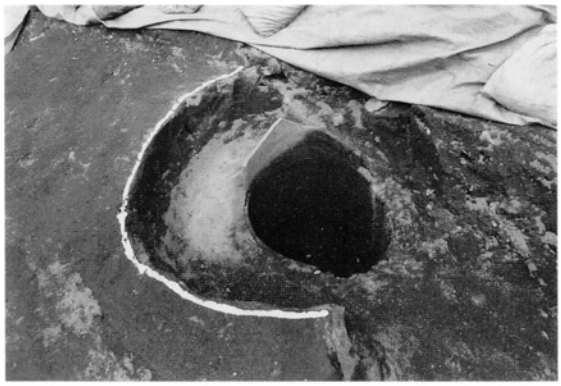
(7)　2・43号土壙（東から）

(8)　6号土壙（西から）

(9)　18号集石土壙（北から）



(10)　15号井戸（北西から）

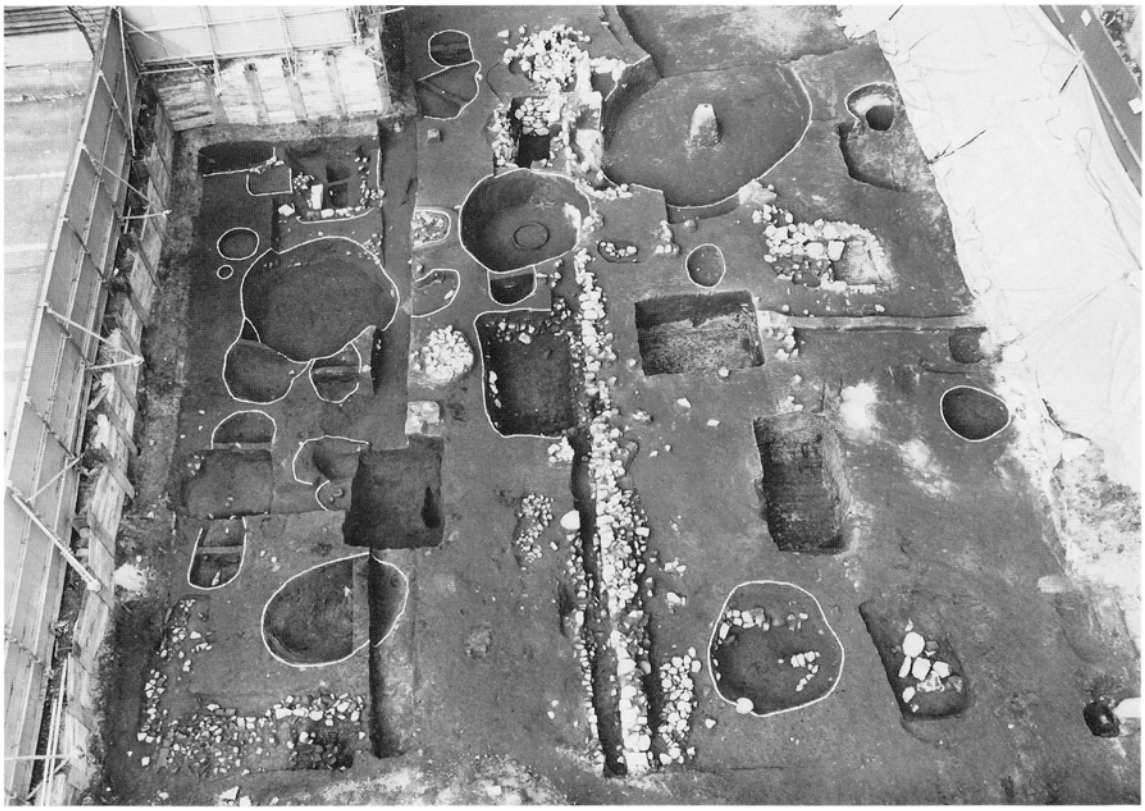


(11)　16号井戸（南西から）

(12)　7号井戸（西から）

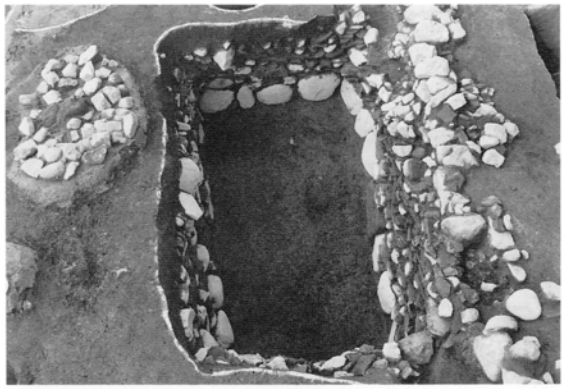
(13)　36号井戸（北から）

(14)　Ⅰ区Ⅱ面全景（南から）

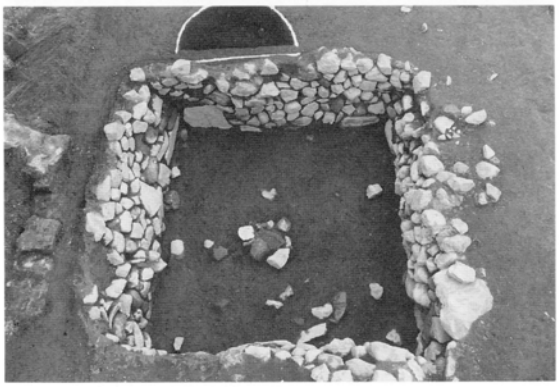


(15)　Ⅰ面全景南半分（南から）

(16) 17号溝（南から）



(17) 60号石積土壙（南から）

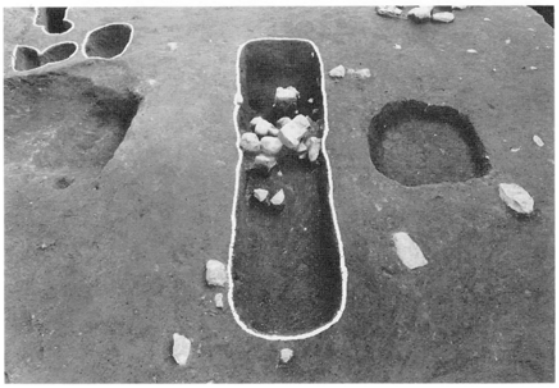


(18) 3号石積土壙（南から）

(19) 19号石積土壙（東から）

(20) 28号石積土壙（西から）

(21) 103号石組遺構（西から）

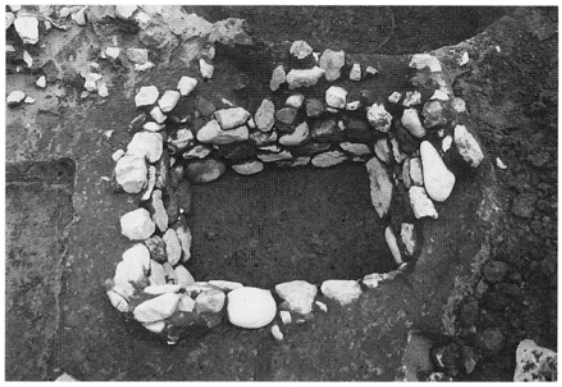


(22) 24号土壙（北から）

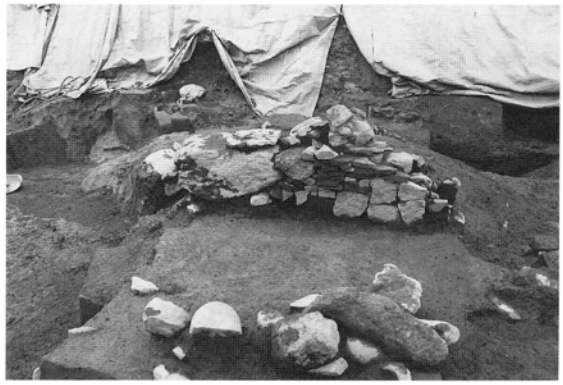
(23) 104号土壙（西から）

(24)　355・360号石基礎（北から）

(25)　355号石基礎土層断面（北東から）



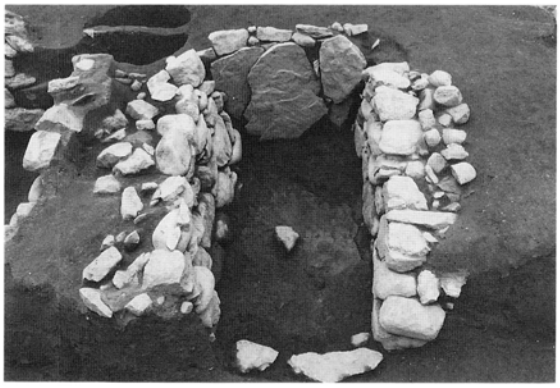
(26)　71号石積土壙（東から）



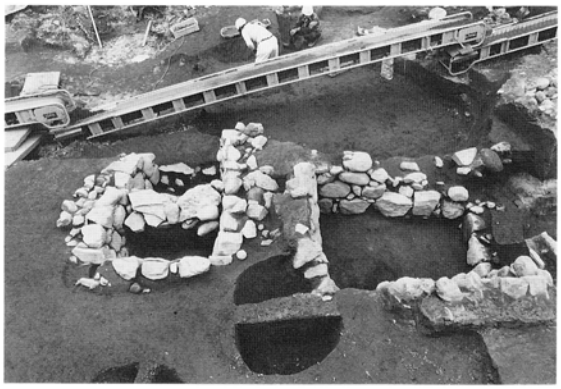
(27)　72号石積土壙（西から）

(28)　73号石積土壙（南から）

(29)　79号石積土壙（北から）



(30)　75・81号石積土壙（東から）



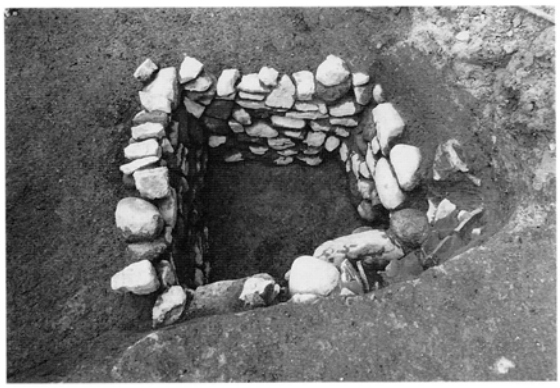
(31)　28・75・81号石積土壙（西から）

(32)　75・81号石積土壙（北から）

(33)　83号石組遺構（北から）

(34)　93号石積土壙（北から）

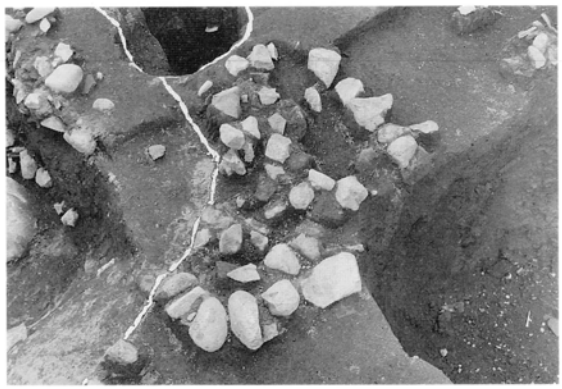
(35)　101号石積土壙（西から）



(36)　102号石積土壙（南から）

(37)　114号石積土壙（南から）

(38)　133号石積土壙（南から）

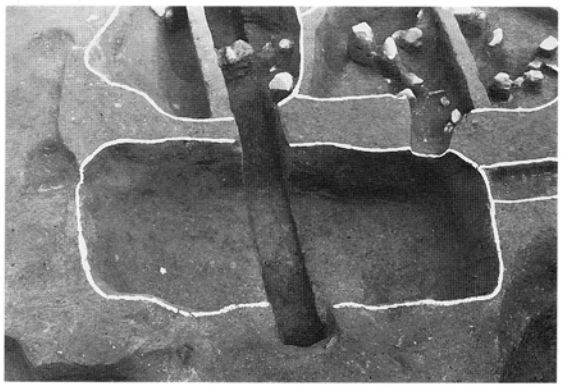


(39)　141号石組遺構（北東から）

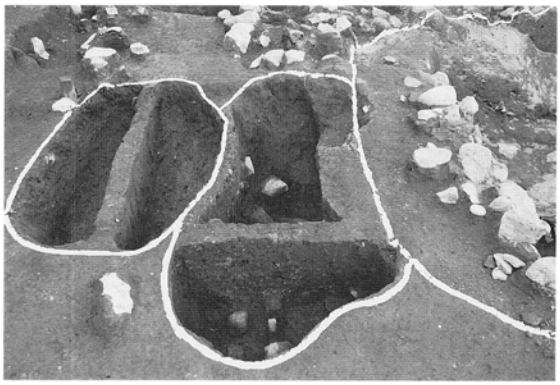
(40)　350号石積土壙（東から）

(41)　380・390号石積土壙（西から）

(42)　390号石積土壙（南から）



(43)　23号土壙（西から）

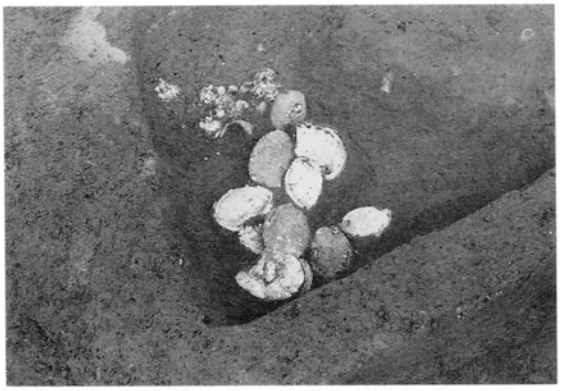


(44)　33号土壙（南から）

(45)　26号土壙（西から）

(46)　35号土壙（北西から）

(47)　84号土壙（南東から）



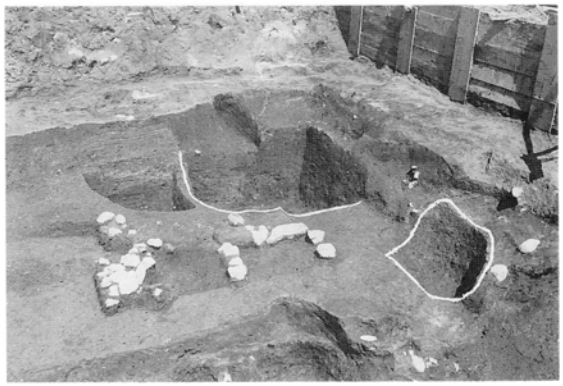
(48)　121号土壙鮑貝出土状況（北から）

(49)　115号土壙（西から）

(50)　117・118号土壙（北から）

(51)　145号土壙（南から）

(52)　156・157号土壙（南東から）

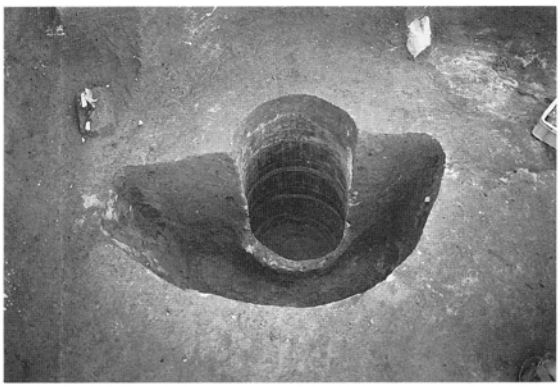


(53)　364・366号土壙・367号石組遺構（北西から）

(54)　368号墓青花・白磁皿出土状況（北から）

(55)　368号墓鉄斧・分銅出土状況（北から）

(56) 368号墓（西から）

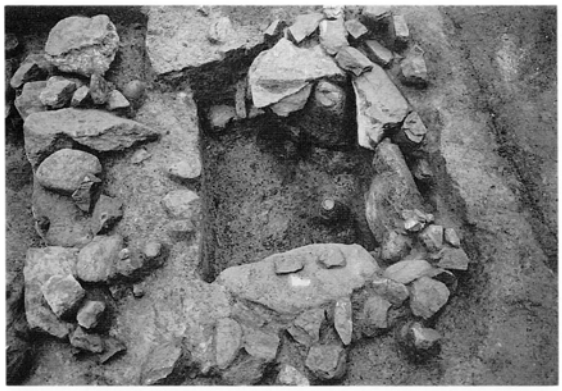


(57) 52号井戸（東から）

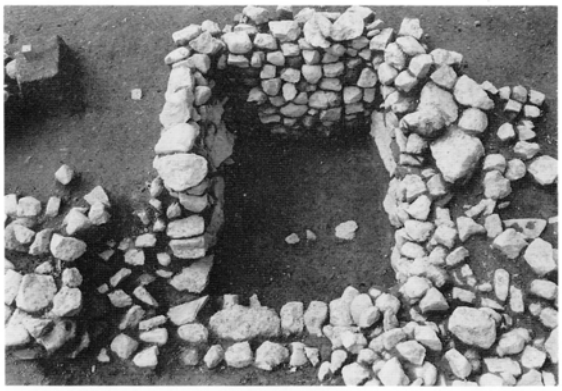
(58) 119号井戸（西から）

(59) 205号井戸（北から）

(60) 175・176号石積土壙・177号土壙（南から）



(61) 175号石積土壙（東から）

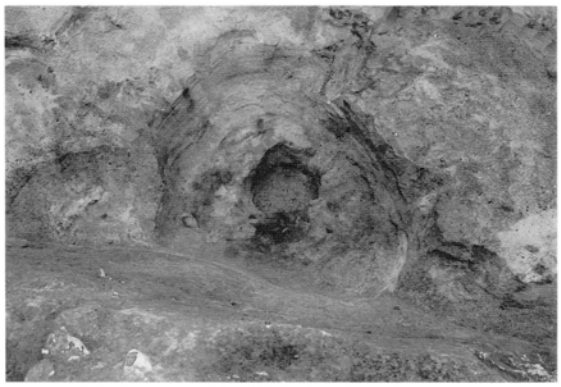


(62) 365号石積土壙（南から）

(63) 370号石積土壙（北から）

(64) 152号方形竪穴（西から）

(65) 223号土壙（西から）



(66) 139号井戸（西から）

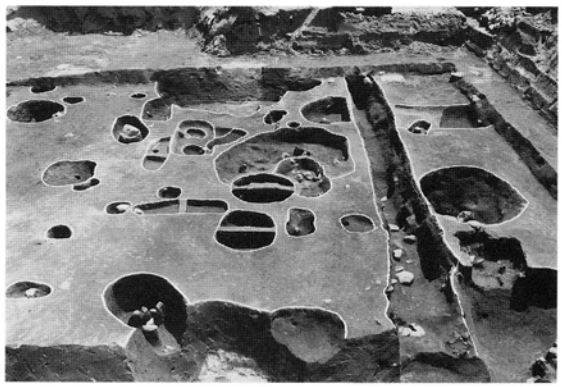
(67) 140号井戸（西から）

(68) 281号井戸（北から）

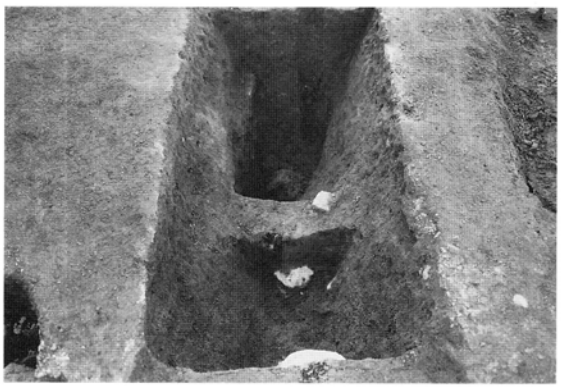
(69)　136号石基礎（西から）

(70)　136号石基礎断面（北から）

(71)　134号石積土壙（南から）

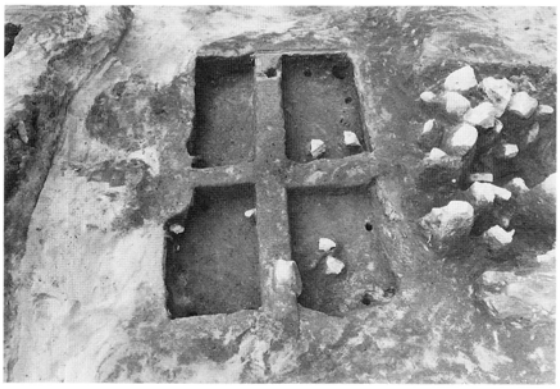


(72)　285号溝（北から）



(73)　285号溝礎石・柱痕検出状況b・c（北から）

(74)　285号溝礎石・柱痕検出状況d（北から）



(75)　269号木室（南から）

(76)　271号木室（南から）

(77) 321号木室（西から）

(78) 410号木室（西から）

(79) 150号土壙（東から）

(80) 383号土壙（北から）

(81) 406号土師皿集中（南西から）

(82) 430号石基礎（南から）

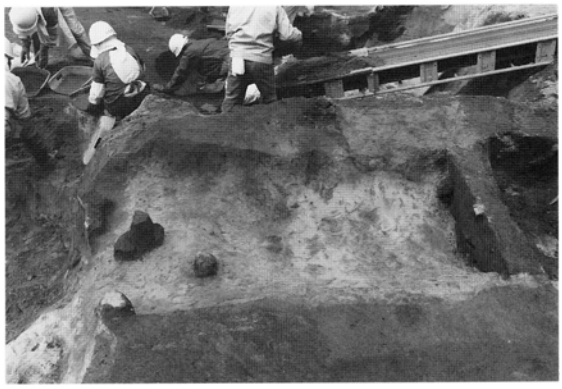
(83) 430号石基礎断面（北から）

(84) 137号土壙（北から）

(85)　180・226号土壙（東南から）

(86)　180号土壙（東から）

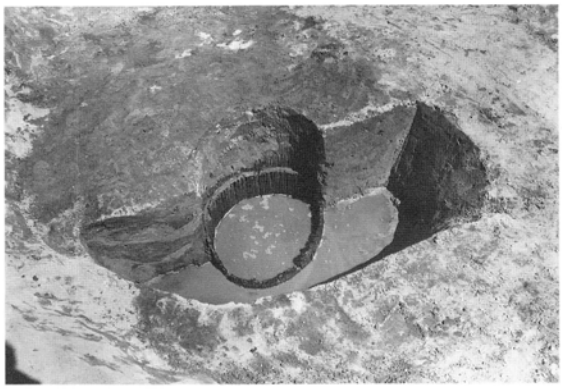
(87)　270号土壙（南から）



(88)　300号土壙（東から）

(89)　300号土壙懸仏出土状況（北東から）

(90)　282号井戸（北から）



(91)　530号井戸（南から）

(92)　187号土壙（南東から）

(93)　184号土壙（北から）

(94)　428号土壙（東から）

(95)　432号土壙（南から）

(96)　529号土壙（北から）

(97)　302号井戸（北東から）

(98)　304号井戸（北東から）

(99)　532号井戸（西から）

(100)　533号井戸（北から）

(101)　160号土壙（東から）

(102)　169号土壙（南から）

(103)　186号土壙（東から）

(104)　313号土壙（南から）

(105)　493号ピット（北西から）

(106)　265号墓（東から）

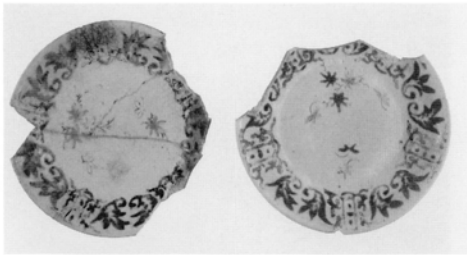
(107)　315号墓（北から）

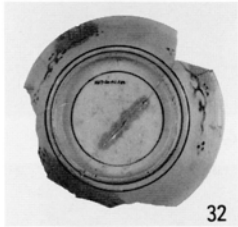
(108)　井戸と井戸掘り職人達（東から）

(109) 伊万里青磁

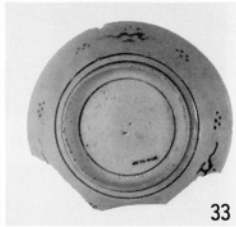
(110) 肥前系陶器甕

(111) 伊万里色絵油壺





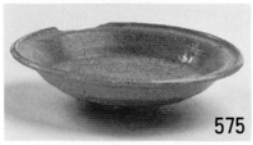
(112) 伊万里色絵皿



(113) 伊万里色絵皿

(114) 唐津皿

(120) 唐津碗



(115) 唐津皿

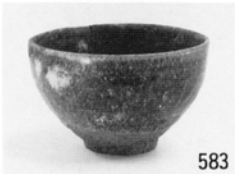
(121) 唐津碗

(116) 唐津皿

(122) 絵唐津碗

(117) 古高取皿

(123) 絵唐津片口

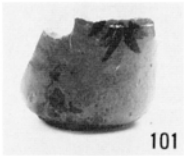


(118) 古高取碗

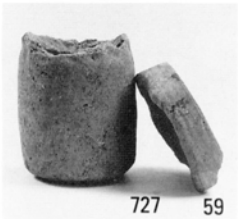
(124) 焼塩壺

(125) 唐津徳利

(126) 刷毛目唐津大皿

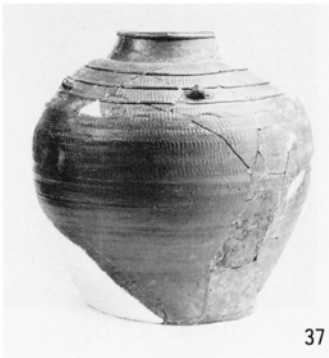


(119) 絵唐津香炉



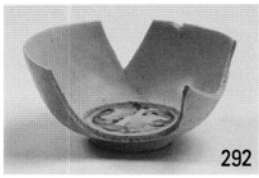
(127) 焼塩壺

(128) 唐津擂鉢

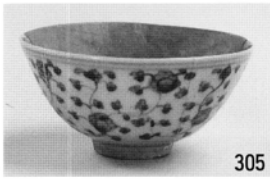


(129) 産地不明陶器壺

(130) 青花碗



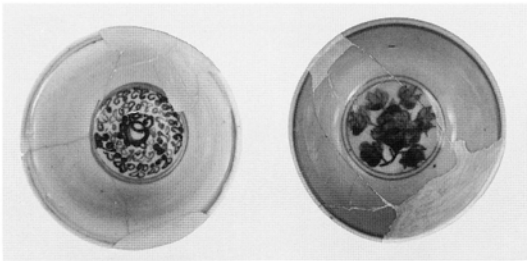
(131) 青花碗

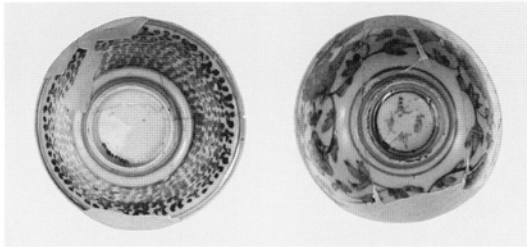


(132) 青花碗

(133) 青花高坏

(134) 青花碗




(135) 青花碗　(136) 青花碗

(137) 青花皿

(138) 青花皿

(139) 青花皿

(140) 青花皿

(141) 青花皿

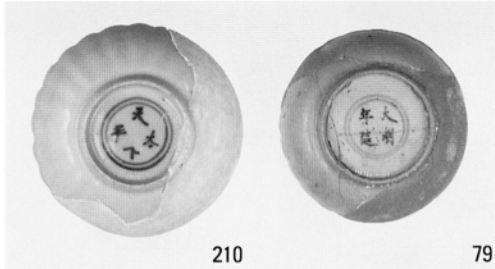
(142) 青花皿

(143) 青花皿

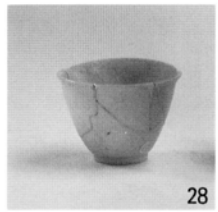
(144) 青磁碗

(145) 青磁碗

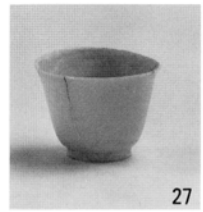
(146) 青磁碗



(147) 白磁皿　(148) 白磁皿



(149) 白磁坏



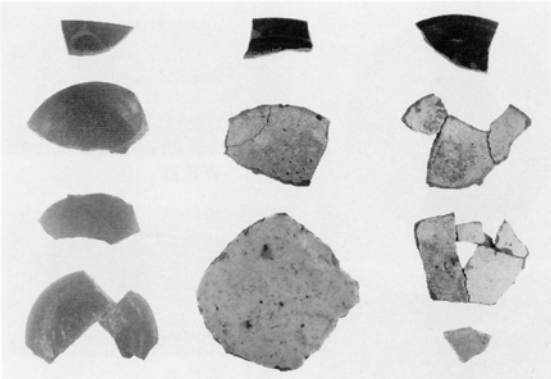
(150) 白磁坏

(151) 白磁皿

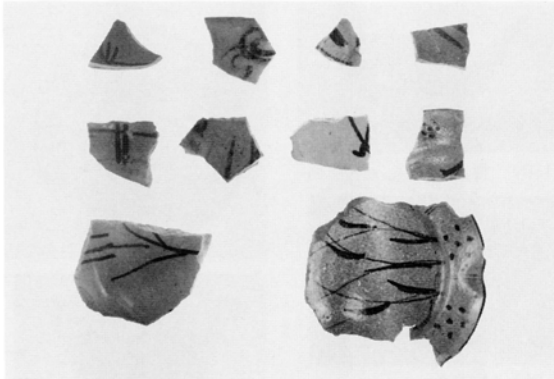
(152) 白磁皿

(153) 青磁皿

(154) 青磁皿



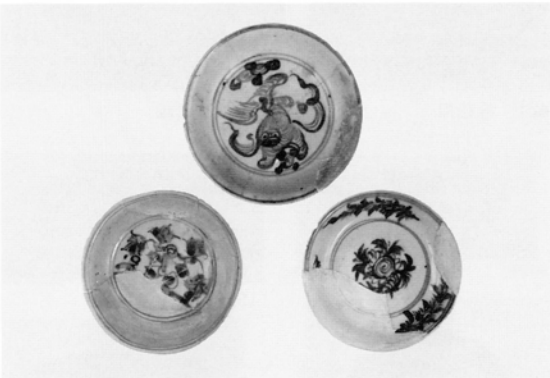
(155)　古高取・志野陶片



(156)　絵唐津陶片

(157)　伊万里色絵・錦絵碗・皿・人形

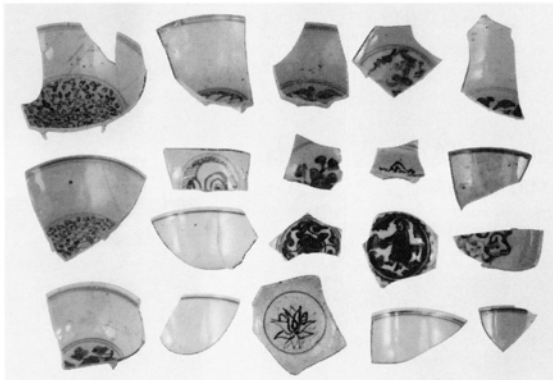
(158)　青花皿E群



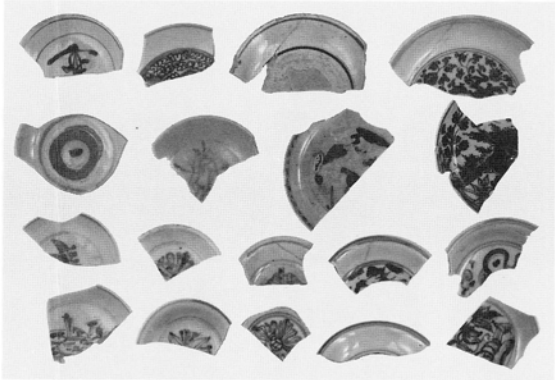
(159)　青花皿B群

(160)　青花皿C群

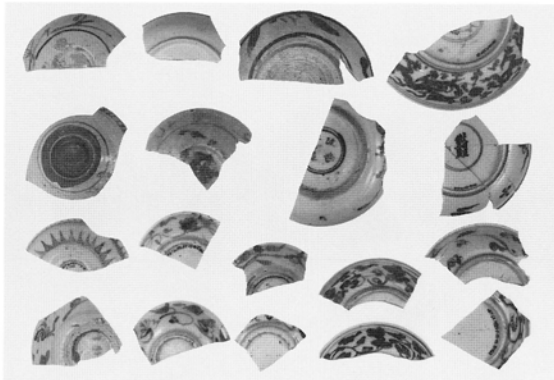
(161)　青花碗



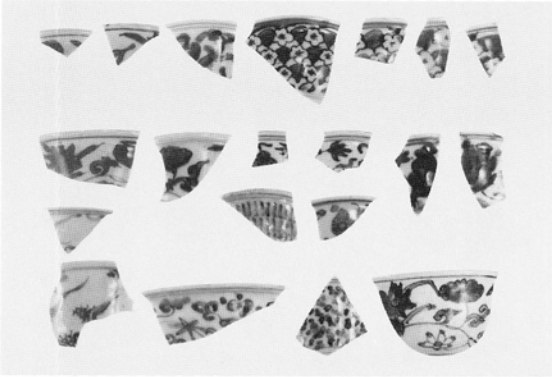
(162)　同裏面



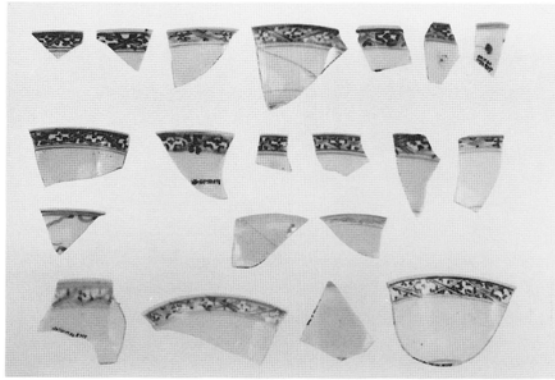
(163) 青花皿



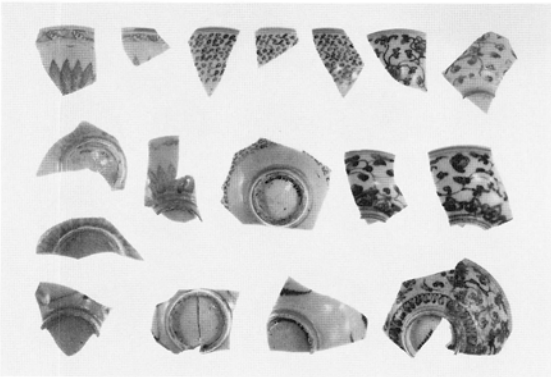
(164) 同裏面



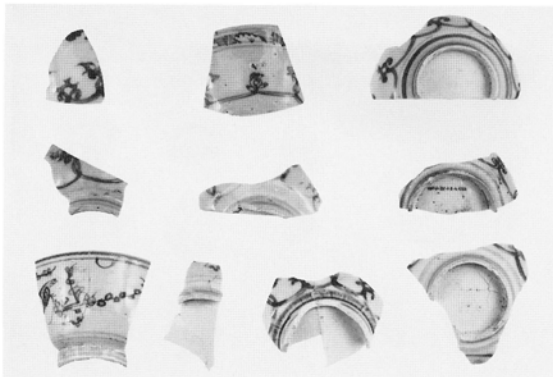
(165) 青花碗B群



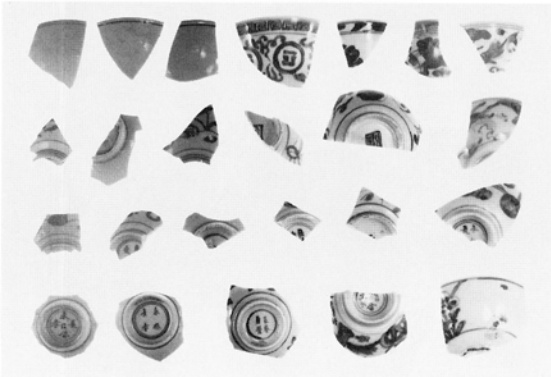
(166) 同裏面



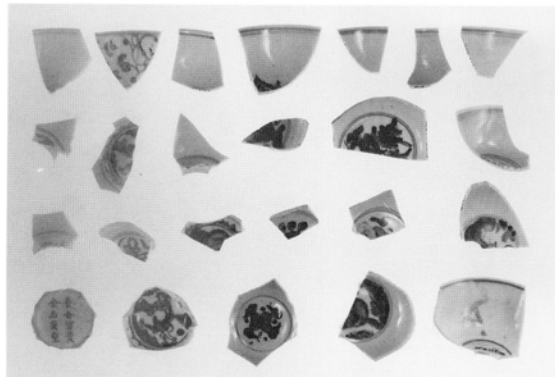
(167) 青花碗C群



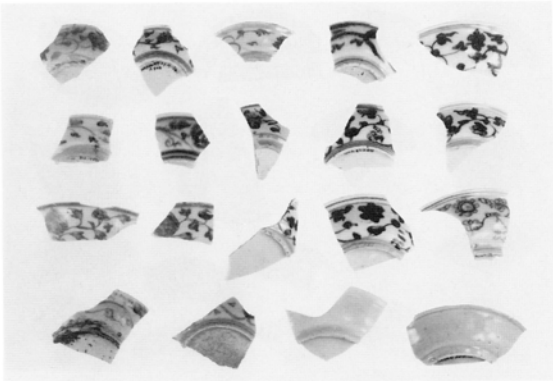
(168) 青花碗D群



(169) 青花碗E群



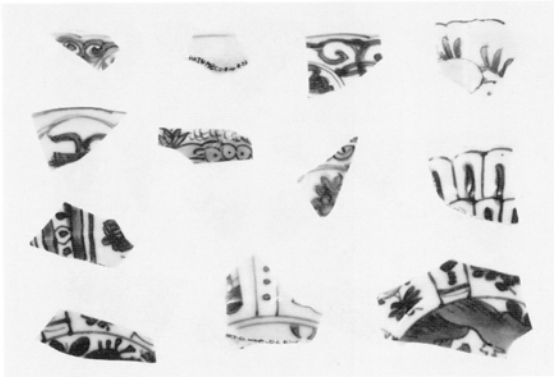
(170) 同裏面



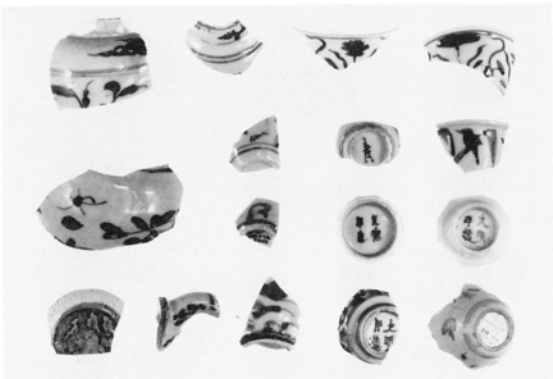
(171) 青花皿B群

(172) 青花皿C群

(173) 青花皿E群



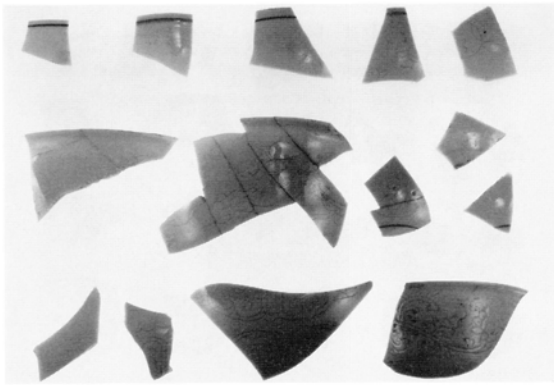
(174) 青花芙蓉手兜碗



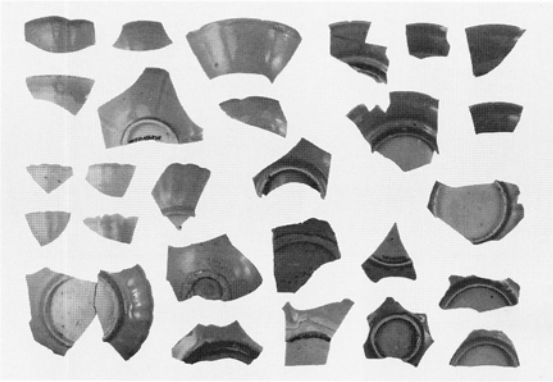
(175) 青花瓶・水注・坏・合子

(176) 華南系青花

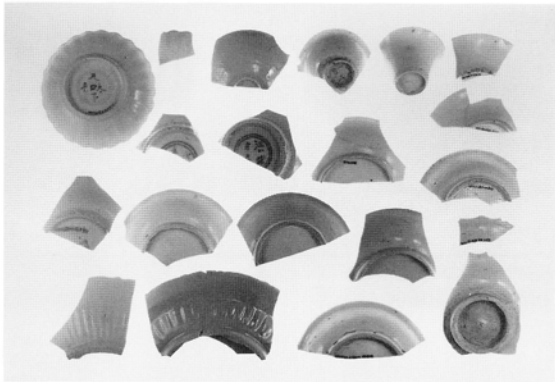
(177) 赤絵碗・皿



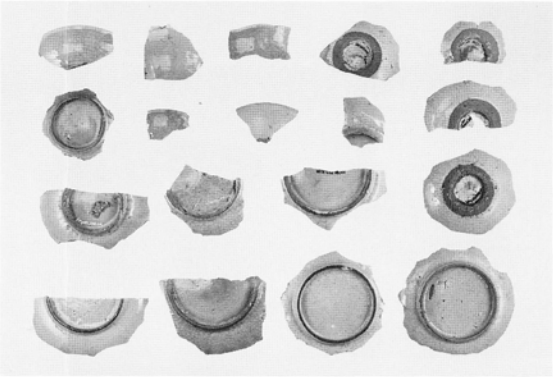
(178) 線彫白磁碗



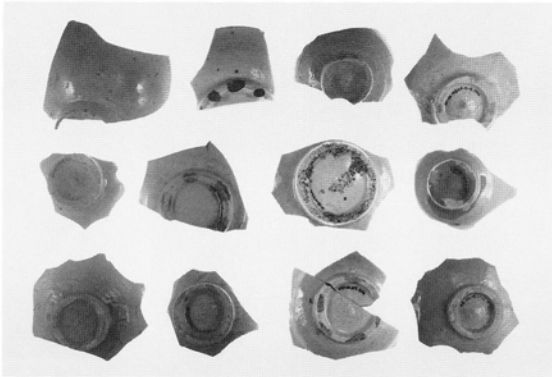
(179) 青磁皿



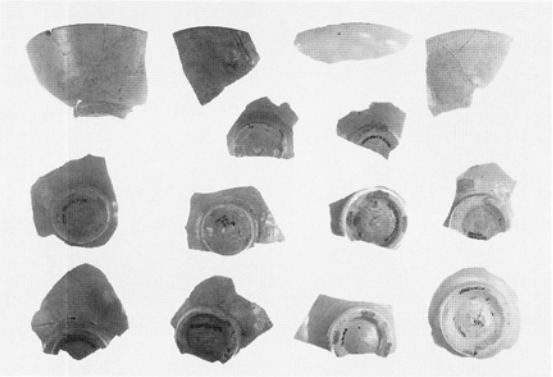
(180) 白磁皿



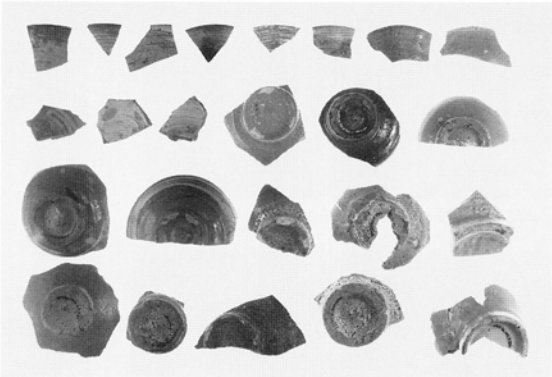
(181) 灰白磁皿



(182) 李朝白磁碗



(183) 李朝白磁碗・皿



(184) 李朝陶器碗・皿

(185) 高麗青磁・李朝粉青沙器

(186) 李朝緑褐釉陶器徳利・壺

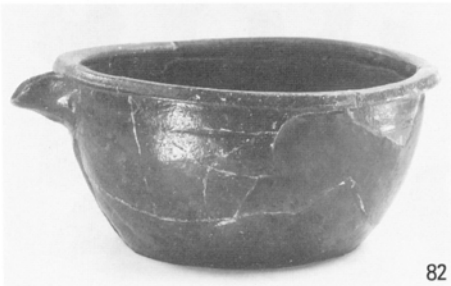
(187) 李朝白磁碗

(188) 李朝白磁碗

(189) 李朝白磁皿

(190) 李朝白磁皿

(191) 李朝白磁皿



(201) 李朝緑褐釉陶器片口

(192) 李朝陶器壺

(193) 李朝白磁碗

(194) 李朝白磁碗

(195) 李朝陶器碗

(202) 李朝緑褐釉陶器徳利

(196) 李朝刷毛目碗

(197) 李朝刷毛目碗

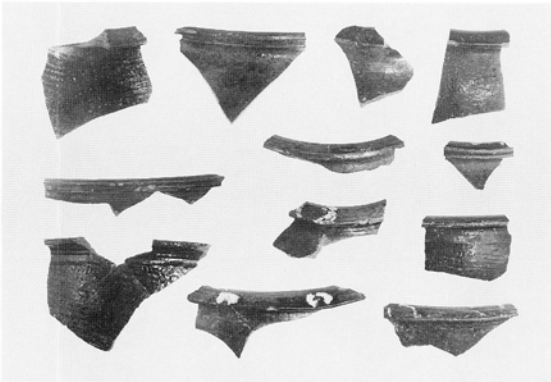
(198) 李朝陶器碗

(199) 李朝刷毛目皿

(200) 李朝印花皿

(203) 美濃天目茶碗

(204) 美濃天目茶碗

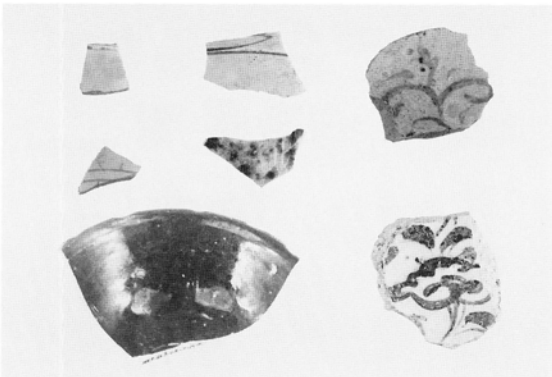


(205)　李朝緑褐釉陶器壺・甕

(206)　李朝緑褐釉陶器鉢

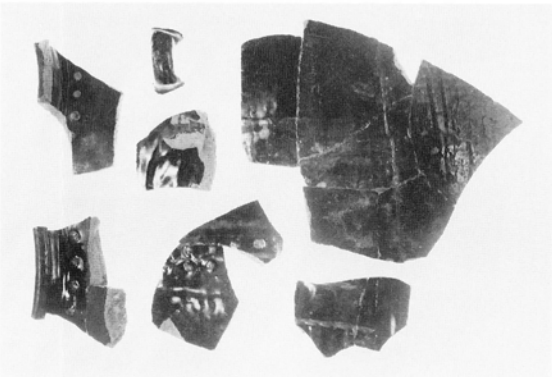
(207)　タイ焼締陶器壺（破片）

(208)　タイ焼締陶器壺（復元後）

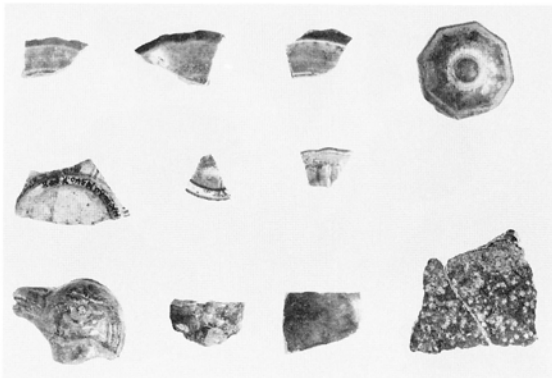


(209)　ベトナム陶磁器

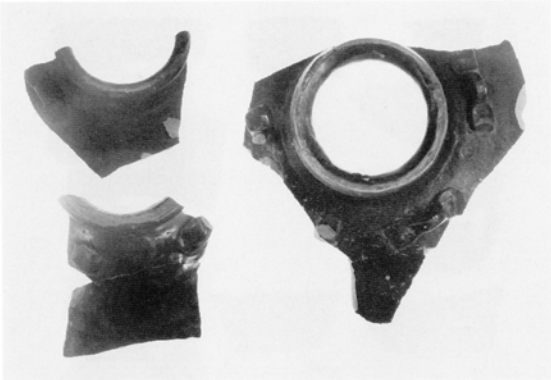
(210)　タイ陶器



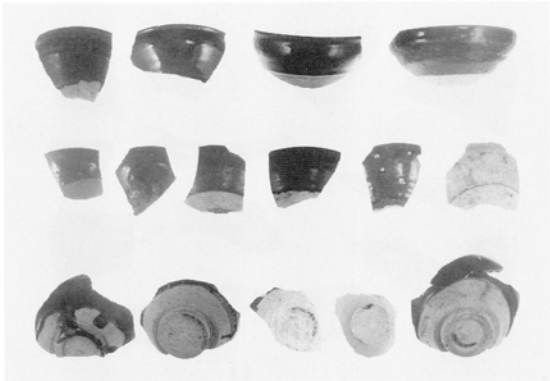
(211)　タイ陶器壺



(212)　華南三彩・ソーダ釉皿

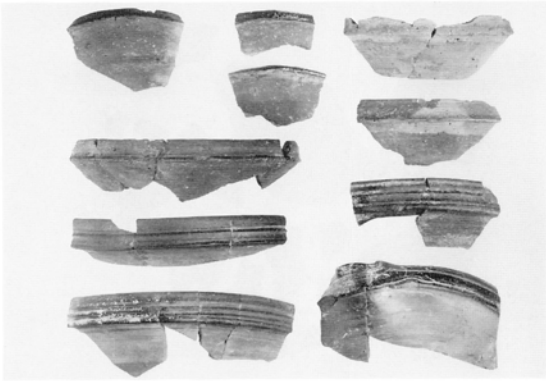


(213) 華南系陶器壺

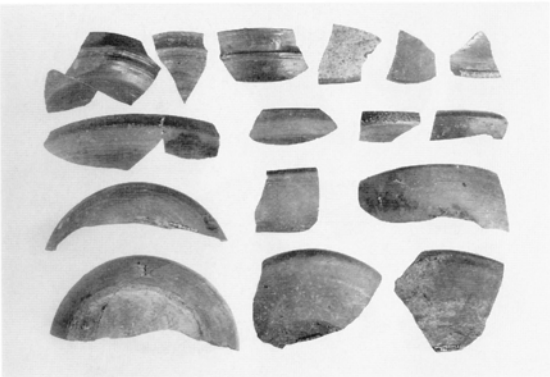


(214) 天目茶碗

(215) 瀬戸・美濃陶器

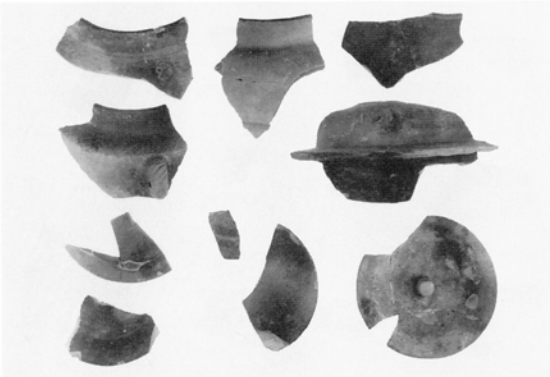


(216) 備前擂鉢

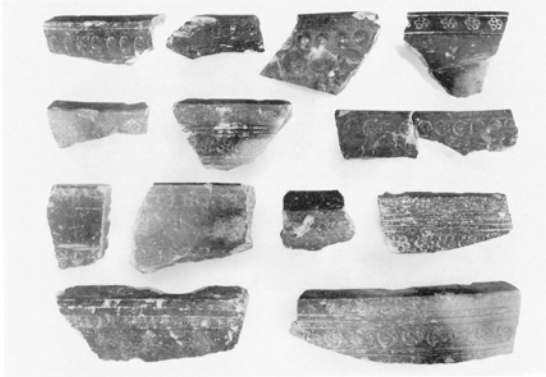


(217) 備前鉢・蓋

(218) 備前徳利・壺



(219) 瓦質蓋・茶釜



(220) 瓦質火鉢

(221) 美濃皿

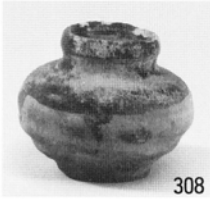
(224) 白磁多角坏

(227) 口禿白磁碗

(229) 白磁碗

(222) 美濃皿

(225) 白磁皿



(228) 褐釉小壺

(223) 美濃皿

(226) 美濃皿

(230) 土師器碗

(231) 三耳壺

(234) 瓦質香炉

(238) 備前擂鉢

(235) 瓦質香炉

(239) 備前擂鉢

(232) 瓦質甕

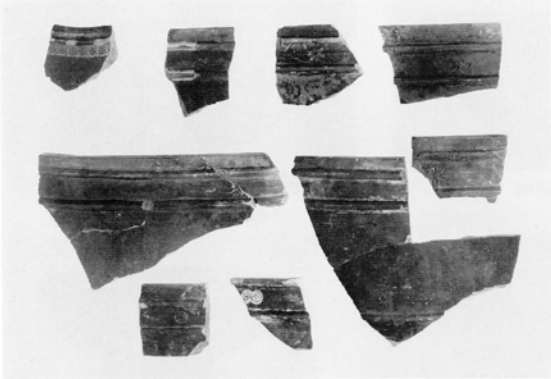
(236) 瓦質火鉢

(240) 備前擂鉢

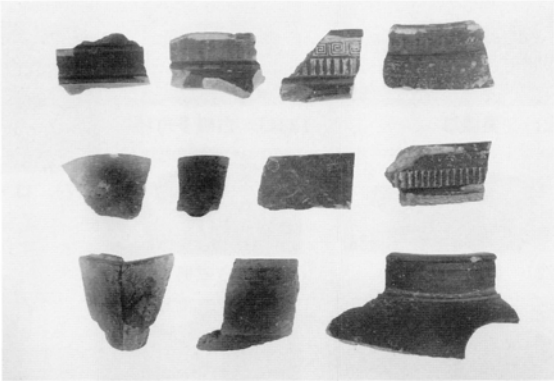
(233) 備前壺

(237) 土　鍋

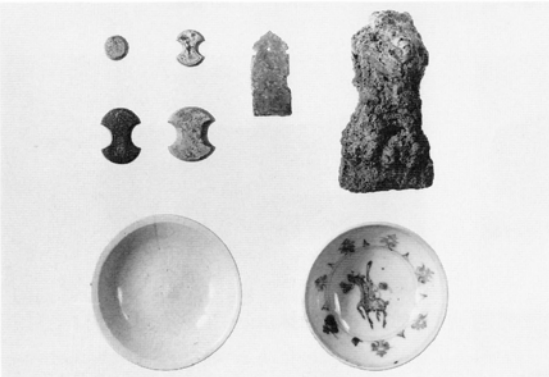
(241) 備前擂鉢



(242) 瓦質火鉢



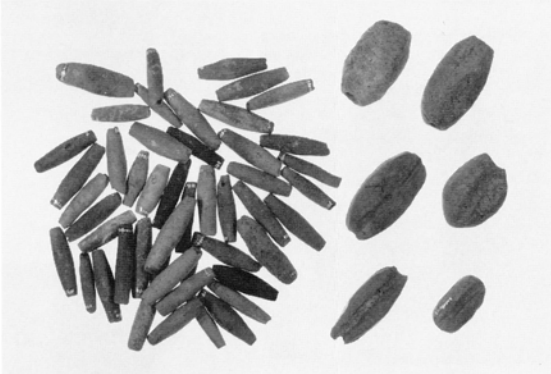
(243) 瓦質風炉・香炉



(244) 368号墓副葬品

(245) 銅製品

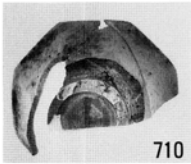
(246) 陶磁製人形



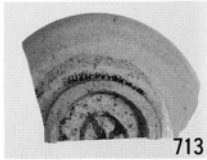
(247) 土　錘

(248) 鬼　瓦

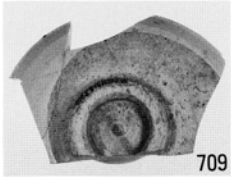
(249) 焼け落ちた壁土



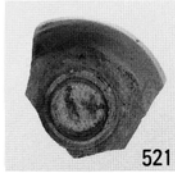
(250) 墨書白磁坏



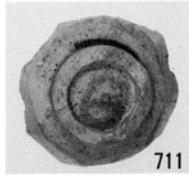
(251) 墨書白磁皿



(252) 墨書白磁皿

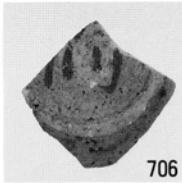


(253) 墨書白磁皿

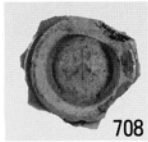


(254) 墨書白磁坏

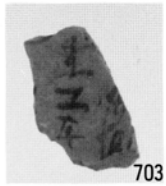
(255) 墨書白磁皿



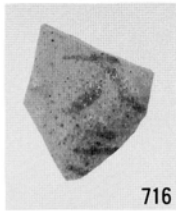
(256) 墨書白磁碗



(257) 墨書白磁碗

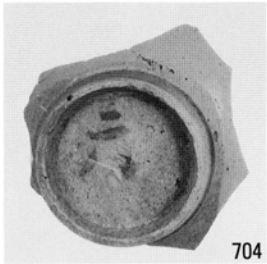


(258) 墨書皿



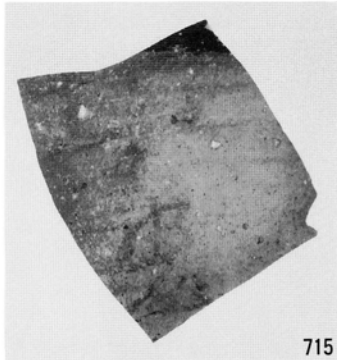
(259) 墨書陶器

(260) 墨書白磁碗



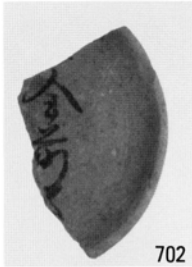
(261) 墨書白磁碗

(262) 墨書白磁碗



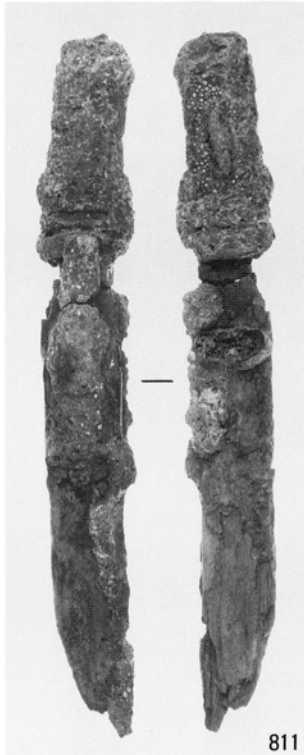
(263) 墨書陶器

(264) 墨書皿



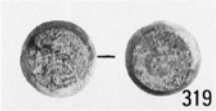
(265) 墨書皿

(266) 鉛棒

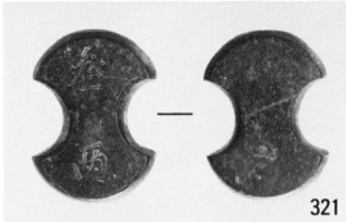


(271) 短　刀

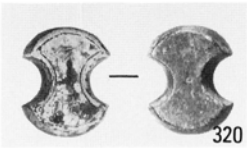
(272) 火　箸



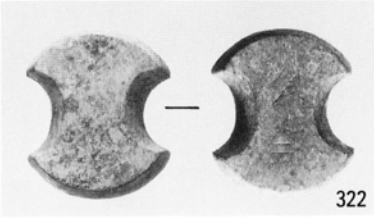
(267) 分銅「五匁」



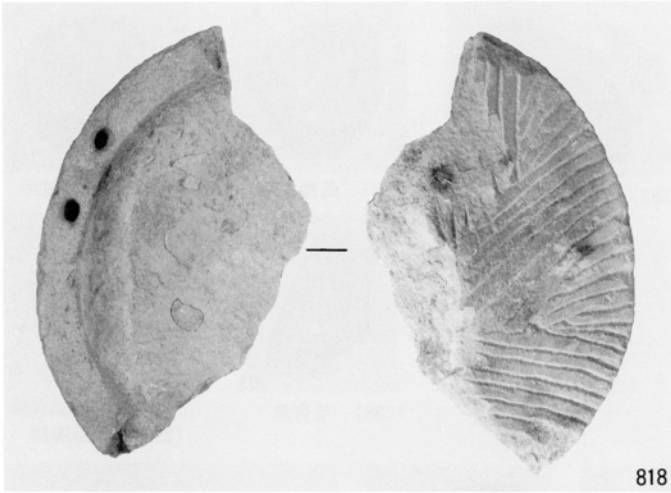
(269) 分銅「参両」



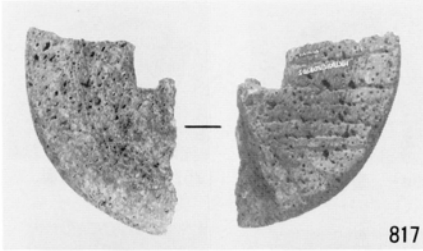
(268) 分銅「壱両」



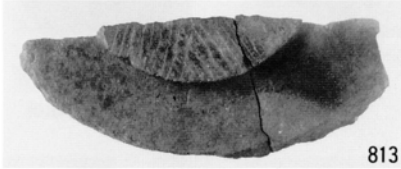
(270) 分銅「肆両」



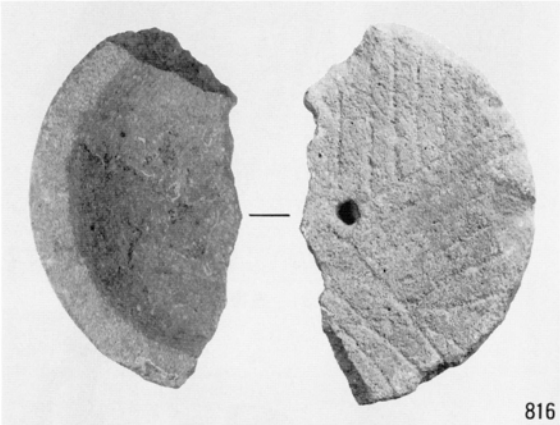
(273) 挽臼上



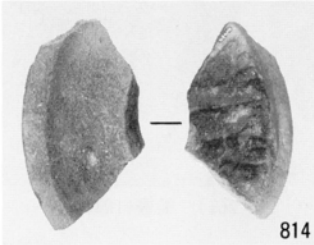
(275) 挽臼上



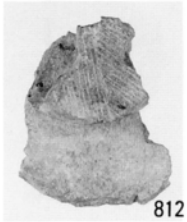
(276) 茶臼下



(274) 挽臼上

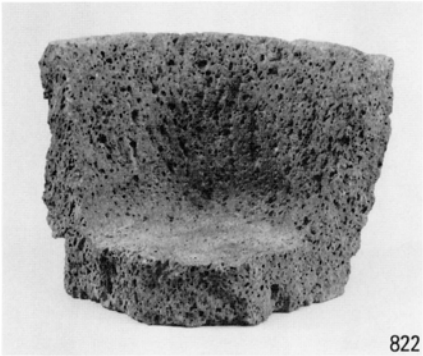


(277) 茶臼下



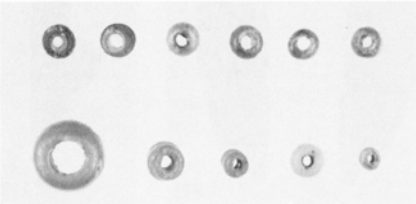
(278) 茶臼下

(281) 懸　仏



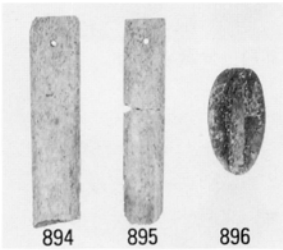
(279) 石製容器

(280) 備前焼薬研



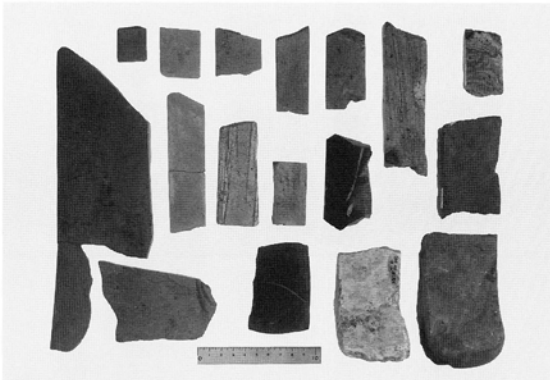
(282) ガラス玉

(283) 滑石製香炉



(284) 骨製品

(285) 硯



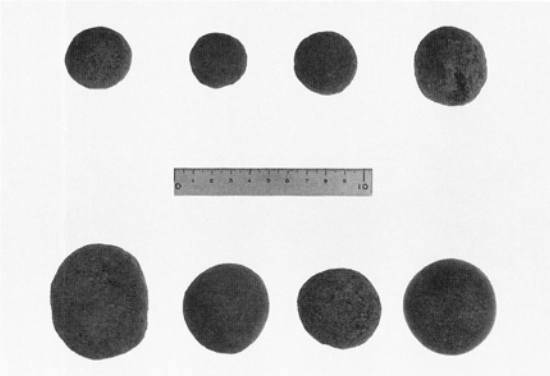
(286) 砥 石

(287) 石 鍋

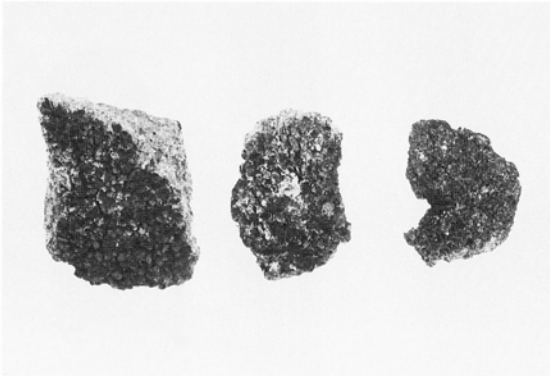
(288) 石 碑

(289) 滑石製品

(290) 石 錘

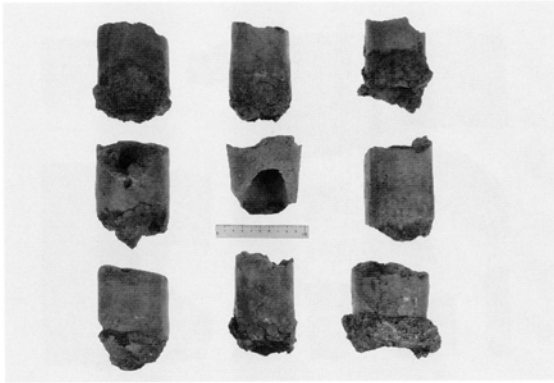


(291) 毬杖球

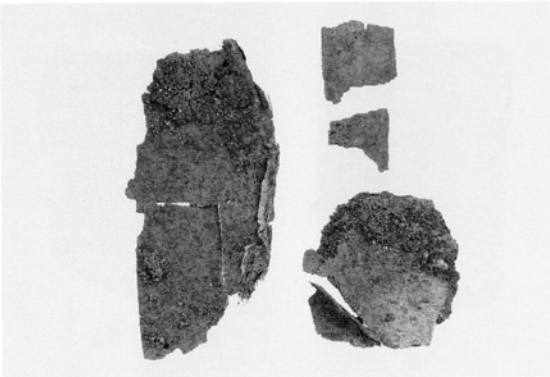


(292) 焼け焦げた米

(293) 坩　堝

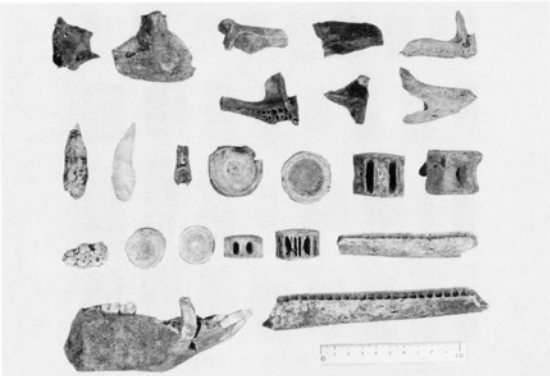


(294) 鞴羽口

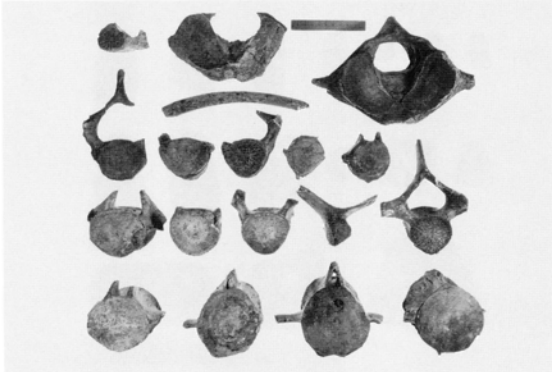


(295) 麻布片

(296) 刃物傷のある骨・角



(297) 魚・獣骨



(298) イルカの骨(180号土壙出土)

(299) 16世紀代の各種容器

福　岡　市

博多30

福岡市埋蔵文化財報告書第285集

1992年３月13日発行

発 行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８－１